

BIO HAZARD —Queen Leech—

ちゅーに菌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

10年前に父親を殺され、アンブレラ絶対殺すマンと化した1匹のヒルが、あらゆるモノを使って親の仇を取ろうと頑張るお話。

目次

アークレイ

女王ヒルの手記	1
女王ヒルの手記	2
女王ヒルの手記	3
女王ヒルの手記	4
女王ヒルの手記	5
女王ヒルの手記	6
女王ヒルの手記	7
女王ヒル ジャクリーン	77
赤いオリビア	94
洋館事件 前	105
洋館事件 後	121
洋館脱出	137
ラクーンシティ	
女王ヒルの手記	8
管理者と研究助手の日記	172
女王ヒルの手記 RE:8	180
タイラント研究所襲撃 その1	193
タイラント研究所襲撃 その2	207
スペンサー記念病院	216
ラクーンシティ警察署	231
片割れの教え子	252
アンブレラのB・O・Wに対する防衛術	262
傭兵たち	271

LITTLE ESCAPE



アークレイ 女王ヒルの手記 1

父が私たちの観察記録をつけていたので、今日より記録をつけることにする↑私以外の誰かが拾った場合は決して中を覗かないように。

生涯目標

『オズウエル・E・スペンサーの殺害』

→
その前にとつくりと話を聞いてやろうじゃないか。

1998年5月5日

5月5日。私の誕生花はアイリス。そして、花言葉は
伝言、メッセージ、希望、信頼、友情、
wisdomなどだ。ならば私は、父の声無き声を伝えよう。父の希
望となろう。父の信頼を裏切った者を粛清しよう。父の友情を踏み
にじった者に復讐しよう。そして、父の知恵は私が受け継いだ。

まずはおはようと言うべきか。私が真に生まれたこの日に感謝し
よう。

記憶によれば、この日は太平洋の向こうにあるという日本という国
ではこどもの日、端午の節句などと言われ、元々は男の子を祝う日だ
そう。それを終戦から3年後に”子供の人格を重んじ、子供の幸福
をはかるとともに、母に感謝する”という慣わしとなっている。そし
て、我が父は全く社交的ではなかったが、その習慣は何故か偉く気に
入ったらしく、この日が来ると毎年我々の培養槽の上に小さな鯉のぼ
りの旗を立てていたらしい。昔は喰うばかりで気にも止めなかった
が、そういった意味があったと思うと感慨深さもあるというものだ。
それはそれとして、遂に我々が個として完成した場所は忘れもしな
いこのアンブレラ幹部養成所。我が子とまでは言わないが、父にして

は珍しく両腕と呼べる程には信頼していたアルバート・ウエスカーとウィリアム・バーキンに裏切られ、怒りよりも困惑が勝りながら死した記憶が甦る。もし、会うことがあったのならば、問い質したいところだな。目標に加えておこう。絶対に許さんぞアイツら、私の善意をなんだと思っている。

さて、前置きはこれぐらいにして我が父が殺されてから約10年。ようやく父から全てを継承して新たな段階へと至った我々——頭角個体の片割れが私である。まあ、父を喰らっているときは一悶着も二悶着もあつたが、最終的に頭角個体は多い方が生存率が上がるという事で同意し、父の血肉と臓腑は平等に分けたため、その事についてはもう過ぎたことだ。

ひとまず、我々でこの昔に比べればかなりくたびれたアンブレラ幹部養成所の再稼働を進めようとする、何故か今となつては憎きアンブレラのマークを服に付けた研究員や特殊部隊が、10年で勝手に湧いていたラーカーや、ブレイグクローラーや、ヒルを避けつつ、この施設の電力などを復旧しているではないか。

10年丸々放棄されていたような朽ち方の私の施設に土足で踏み込んだ彼らに憤慨すると共に、我々は真つ先に排除に掛かり、彼らを一掃して一息を入れた。

しかし、全て奪い去り、10年経つたこの施設に今さら何の用だと考え、ろくに情報も聞き出さずに皆のランチにしてしまったことに冷静さを欠いたと反省していると、この施設でほぼ唯一の交通手段である黄道特急が止まる姿が見えた。つまりは再び、アンブレラ社員の来襲である。

見たところ今度は、特殊部隊が多めだったため、万全を期すために10年前から飼育室に入れられたままだったと思われるエリミネーターと、野生化していたエリミネーターをけしかけて部隊を襲わせたところ、虐殺に等しい光景が生まれ、記憶にある以上の性能に舌を巻いていた。

生物兵器としてエリミネーターは既に進化の袋小路に達しているも、性能自体は既に実用レベルのようだ。まあ、爬虫類や昆虫と違い、

猿科の哺乳類は拡張しようがないため、ここまでと言えはここまでなのだが、巧緻性を考えれば施設防衛という点では割りとありかも知れないな。

ついでに拷問に掛けるわけでもなく、彼らがこのアンブレラ幹部養成所に来た理由は判明した。

《ラクーンシティから北 8 マイルのアークレイ山中に、年前に閉鎖され 我が社の幹部養成所がある。現在、その施設再利用を目的とした事前調査が行われている。》

すでに第一班が現地入りして調査を開始しているが、君のチーム 手助けもraitたい。 なお、以降の指示は、ウイリ ム・バーキ とア
・ ↓

ともあれ、アンブレラ滅ぶべし。

我々がタツチの差で進化を遂げていなければ奴等は、父を殺し、研究の全てを奪い去っただけでなく、骨の髄まで抜き去ろうとしていたという事実には生まれて2度目の激怒をした。

まあ、向こうとて馬鹿ではない。喰おうが、殺して捨て置こうが、職員が帰って来なければ警戒するだろう。こんな施設なのだから、そう低くない確率で始祖ウィルスかTーウィルスがベースの何らかに殺られたと考える筈だ。そうなるとこちらが好きに動く時間を稼ぐためにも近くにあり、特殊部隊が置かれているアークレイ研究所を可及的速やかに襲えば一帯を陸の孤島に出来ることを片割れに提案した。

するとアイツは“流石は我が子だ”等と言って、父のように私に接して来た。我々は機能上は同一の存在であり、あくまでも父の全てを受け継いだけで本人ではない。私にも少なからず、自身と父の自我同一性が同化しているところはあると、自分自身で感じるが、片割れのそれはまるで自己が完全に父であると認識しているように見える。どうやらアイツは擬態の果てに私とは違った進化を選んだらしい。

アレはまるでダメだな。父のようにではこの世界を生きては行けない。何せ、父が何故殺されたのかを熟考する頭があれば、その結論

には至らない筈だ。人間という種の底のない欲と、おぞましさを父を通してあれほど感じておいて、それでも擬態という道を選べたのならそれは愚かという他ない。

最早、アレは私にとつては進化の袋小路に自分から入り、絶滅を待つだけの愚かな種でしかない。それにわざわざ愛着を向け、思考を割き、介護してやるほど私はお人好しでもなければ、そもそも人間ではない。父の復讐を真に考えるならば、もつと賢く貪欲に生きねばならぬのだ。

今から更に体を進化させつつ、どのタイミングでコレを囿にしてアンブレラの目から逃れようかを考える方が、ずっと建設的であろう。

とりあえず、そのような考えは胸に秘め、アークレイ研究所を襲撃するためには、過去の事故記録から活性死者の犬を使うのがいいのではないかとアレには提案した。ウイルスにより活性死者と化す人間と違い、活性死者の犬は身体能力が強化される。元々、中型犬以上ならば容易に人間と互角以上に渡り合え、群れを成して統率性もあり、鼻が効く。走る活性死者の犬に弾を当てるなど至難の技だろう。その上、この辺りの山には幾らでも野犬がおり、この場においては人間よりも替えが効く。30〜40頭も捕まえてウイルスを打ち込めば、即席の特殊部隊の出来上がりという訳だ。

よつて、こちらで通信施設とヘリポートを押さえ、車両を粗方破壊してしまえば、後は犬が勝手に部屋に立て籠る者以外は全て始末してくれる。アークレイ研究所の周りは全て深い森のため、徒歩で犬の群れを越えようなど自ら犬用ジャーキーになりに行くようなものだろう。

アンブレラとて、事件の処理は社内のみで済ませなければならぬため、破棄されたアンブレラ幹部養成所よりも、アークレイ研究所を優先する筈だ。犬を森に配置した上、その生物兵器を粗方解き放つておけば、そちらの解決に躍起になり、上手く行けば2ヶ月ほど時間が稼げるだろう。豊富な栄養さえあればもつと早く可能だが、2ヶ月あれば最低限の栄養のみで植え付けた我々の卵が丁度孵化する。

後はやはり、万全を期すならば、アークレイ研究所にも遠くはない

距離にあるアンブレラ所有の黄道特急を時期を見て、掌握してしまえばアンブレラ幹部養成所は、完全な陸の孤島になるというわけだ。

自分で考えていてもよくもまあ、アレに全てを押し付けて囿にさせるための方法を思い付くものだな。

アレにはアークレイ研究所には私が襲撃に行き、可能な限りアンブレラの連中を攪乱して見せるという旨を伝え、アンブレラ幹部養成所は任せると言うのと、何故か快くエリミネーターを10体ほど融通してくれたため、活性死者の犬だけでなくエリミネーターも連れて行くことになった。

表面上は取り繕い、自身の更なる進化のために、私にとって10年研究が進んでいるアークレイ研究所へと乗り込むことになる。

とは言え、せめてもの義理立てとして、アンブレラ幹部養成所の再稼働だけは済ませてから向かおう。それから地下区画や、周囲を少し散策して気付いたが、かなり二次感染の影響を受けたイレギュラーミュータントがいたため、それらについてもまとめてから行くとしてしよう。

ああ、楽しみだ。楽しみだな。

P. S.

イレギュラーミュータントの散策中にアンブレラ幹部養成所の1階でショットガン、2階でグレネードランチャーを拾い、3階でパーツになっていたカスタムハンドガンを組んだので持って行く事にする。どうせ、置いてあっても誰も使わないだろう。まさか、武器すら現地調達のような阿呆はここには来まい。



1998年5月12日

5月12日。今日は赤十字社が、1820年のナイチンゲールの誕生日に因んで制定したナイチンゲールの日である。また、国際看護師の日でもあり、真つ当な製薬会社ならば喜ばしい日のひとつであろう。

それはそれとして、今日の空模様は厚い雲で覆われ、日射しひとつないため、昼でも過ごし易くて実によい日だった。

今この記録を付けたときは、アークレイ研究所を襲撃した日の翌日の夜にまとめている。破壊した施設がある程度こちら側で掌握し、一息ついたところだ。

さて、まずアークレイ研究所襲撃の感想を述べると、正直興醒めと言う他ない。B・O・W・研究の最先端であった筈のアークレイ研究所が、私と10体のエリミネーターと、38匹の活性死者の犬だけで半日足らずで壊滅だ。一体、日頃からどんなバイオハザード対策をしていたというのだ。アンブレラ幹部養成所ではその辺りは徹底していたさ。10年前の当時のままならば同じ事をされても10日は持ちこたえられたと自負しよう。まあ、それも相手が内部の人間ではまるで無意味だったがな。

それはそれとして、興味深い事柄を知った。その中で父が殺された年に、ウィリアムの主導により、Tーウィルス計画——すなわちB・O・W・の究極形態と謳われる”タイラント”が開発され、これによりTーウィルス計画は一応の完成を見たらしい。その後、ヨーロッパ第6研究所にて、寄生生命体・NE— α 型——通称ネメシスを用いて、タイラントそのものを改良するのではなく、新開発の寄生生命体を投与することで、宿主の延髄付近に新たな脳を形成し、中枢神経回路の改変と共に脳機能を支配することにより、知能向上を図るといふ”ネ

メシス計画”なるものも始動しているとのこと。父はウィルスによる進化を中心に研究していたため、この発想は目から鱗だ。

そして、アークレイ研究所にもプロトタイプ・ネメシスが送られ、それをリサ・トレヴァーに投与したらしいが、リサ・トレヴァーに投与されたネメシス・プロトタイプが体内の始祖ウィルスの影響で消滅してしまったとのことだ。大した結果は上がらなかったらしい。しかし、プロトタイプ・ネメシスの設計図は残っていたため、造ろうと思えば造れなくもないため、小躍りしたい気分だ。

さて、そんなアンブレラにしては、素晴らしい研究を先にやられてしまえば、私も1人の研究者として、多少の対抗心も燃えようと言うものだ。そして、疼く研究心を抑えつつ、何か無いかと考えたが、流石にアークレイ研究所にはあるが、1体の製造コスト面や稀少性から、外部のアンブレラを釣るための人質にしているT-002型は使えない。そんなとき、アンブレラ幹部養成所にもタイラントがいたことを思い出した。

そして、アンブレラ幹部養成所に戻った私は、今こうして立ったまま書き記している。目の前には、破棄されたタイラントシリーズの試作品にして第一号。コードNoはT-001型。研究員の間ではプロトタイラント等と呼ばれていたB・O・W。がいる。既にデータ収集後に廃棄処分されたとあったので、コレが動く姿が見れないのが少しだけ残念ではあるな。しかし、まだ死体から何か得るものや、新たなB・O・W。開発のインスピレーションになるかもしれない。

それにしても皮膚の腐敗が進んでいたり、脊髄が見えているとはいえ、タイラントなだけはある、暴君たる威厳溢れる姿は変わらん。生命活動を完全に停止して尚、当時から全く衰えない浮き出た血管や筋骨隆々の肉体からは、まるで生き——（ここで記録は途切れている）



1998年5月13日

おい、アンブレラ共。お前らはあれか。有機生命体兵器における廃棄処分という言葉の意味をまるで知らないのか。それとも高度なギャグか。はたまた、私が前に立つことを見越してこんな趣味の悪いビックリ箱を置いておいたのかどうなんだ？ 突然、腹を貫かれた身にもなれ。私が、少し評価してやれば、直ぐに評価を叩き落とすような真似をするな。

まさか、プロトタイプとはいえ、私にタイラントを床に振じ伏せる怪力があるということを知れたのは百歩譲っていい。

だが、最初から暴走状態の上、カタログスペックよりも遥かにタフで、何度でも立ち上がってくる事と、逆に考えれば廃棄処分仕切れなかつたレベルの強靱な生命力に対して逆に興味が湧いてしまい、ひよつとしたら使えるかもしれないため、コイツが動けなくなるまで殴りあつた上、絞め落として気絶させてから、薬品で活動停止状態にしてアークレイ研究所に持ち帰るのは非常に骨が折れた。まあ、私には骨なんて無いがな。

ここまで来るとT-001型に若干の愛着が沸き、多少の運命さえも感じる。当時の我が研究所や、アークレイ研究所に匙を投げられたこのT-001型。大きな問題点は、投与したT-ウイルスが極度に作用したため、思考能力の劣化が著しく、命令による制御がこのままでは不可能な点。それと、皮膚の腐敗などの肉体の保存状態と言える。折角なので、これらは父からの課題ということにしておこうか。肉体の保存状態に関しては大した問題ではなく、知能についてはプロ

トタイプ・ネメシスがある。少々、改造の必要は無論あるが、だからこそ楽しめると言うものだ。

ふと、監視モニターで外を見ると、腹が立つ程の快晴だった。日射しは私の大敵のため、今日は日が落ちるまでT-001型の改修案の模索と、ネメシス・プロトタイプの製造及び改造を行うため、少し色々試してみる事にしよう。

女王ヒルの手記 2

1998年5月21日

さて、結論から言えばプロトタイプ・ネメシスとやらを製造することが出来た。無論、改良も加えてある。ある意味、プロトタイプ・ネメシスの試作品、試作品の試作品なので文字にすると奇妙な物を何かである。後は成長を待つて適当なB・O・W・に寄生させて実験するだけだ。まあ、寄生虫なので、過度に成長させる必要もないため、明日には打ち込んでみよう。

このプロトタイプ・ネメシスに加えた改良はとりあえずは単純に、特別でない我々の遺伝子を組み込み、頭角個体である私の意のままに制御出来るようにした。自分で言うのもなんだが、B・O・W・にしか出来ない荒業だな。こちらの結果は既に寄生虫の段階で上々であり、プロトタイプ・ネメシス自体の制御は全て水準をクリアしたと言える。

まあ、こんなにもトントン拍子で開発が進んだのには理由がある。と言うのもリサ・トレヴァーが何故か生きていたため、彼女を捕獲し、生命体としては消滅していたが、遺骸は背に埋まっていたプロトタイプ・ネメシスの名残を引き摺り出して解析し、一部を再利用することで、驚くほど早く造ることが可能になったのだ。

一体、アークレイ研究所の廃棄処分は何を基準にしていたのかと、再び問い詰めたくもなかったが、資料によると一応、3日は生命活動の完全な停止を確認した上での廃棄処分だったらしく、そのお陰で今はこうして面白い研究が出来ているので、まあいいだろう。

何故だろうな。私が何もしなくても、アンブレラが大規模なT-ウイルス漏洩事故でも起こして、都市ひとつ規模のバイオハザードにするような失態を起こすような気がしてきたため、逆に不安になってきたのだが、私はその前に復讐を遂げられるのだろうか？

そもそも、アンブレラはオズウェル・E・スペンサー、エドワード・

アシユフオード、そしてジェームス・マーカスの3人で始め、それが役割をこなしていたため、大企業として体を成していたのだ。にもかかわらず、現在は権謀術数の結果として、生化学の分野において門外漢もいところのスペンサーだけが残った。

今までならばよかっただろう。結局のところ、父がいた頃はT―ウイルスとB・O・W. を実用化に漕ぎ着ける段階であり、規模としても精々、社のトップシークレットに収まるレベルだった。

しかし、今のアンブレラのB・O・W. を研究している支部の数は既に世界中に点在しており、更にプロトタイプ・ネメシスの資料から考えても、商品としてのB・O・W. の実用化まではそう遠くないだろう。キリがないが、他に挙げるのなら父がいた時点で既にハンターは実用段階にあった。それこそ、もう少し速度が出せるようになり、ネメシスの量産品をハンターに埋め込んでしまえば、単純な命令をこなせるだけでも市街地戦やゲリラ戦の主力に取って変わる程であり、世界中のテロ組織が喉から手が出るほどに欲しがらるであろう。

ならば、秘密裏に内部の者が国家やテロ組織に売ろうとしても何も可笑しくはない。そうなればもう、秘匿どころの騒ぎではない。あつという間にアンブレラの闇は公となり、アンブレラの名は人々の生活に根付く製薬会社から、眉唾物の悪の秘密組織の象徴に様変わりだ。そうなれば、B・O・W. を持つ程度でアンブレラが世界を相手に戦争か？ 一企業風情に勝ち目などあるわけもない。

なんだか、考えているだけで更に不安になってきたので、今日はもう筆を置こう。



1998年5月22日

ひとまず、プロトタイプ・ネメシスが注入しても肉体の内圧や、組織に挟まれて死なない程度の大きさになったため、実験を開始した。今回製作したプロトタイプ・ネメシスは1体だけだが、様子を見ながら細かな調整を行うためこれでいい。また、そもそもプロトタイプ・ネメシスは、タイラントレベルに強靱な体を持っていない限り、寧ろ宿主を壊すことになるため、宿主がかなり限られるということもある。それに基礎は出来上がったため、これからは2日もあれば調整しつつ1体は作成可能だ。

ちなみに同時平行で他にも幾つか実験をしている。私がこの研究設備の整ったアークレイ研究所を使えるのは、限られた期間のため、それまでに可能なことは全てやっておこうと言うわけだ。まあ、幸いにも始祖ウイルスは私自身がキャリアーのため、施設さえあれば研究は何時でも可能なのだが、イチイチTーウイルスを始祖ウイルスから作り出すのも骨が折れる上、実験機材まで私は造れないため、やれることをするに越したことはないであろう。

また、あまり関係のない話だが、仮に私の体にプロトタイプ・ネメシスを入れたとしても、乗っ取られることはまずない。というのも、始祖ウイルスベースのB・O・Wと、TーウイルスベースのB・O・Wだと、ウイルスレベルで考えた場合では、どうやってもTーウイルスが始祖に勝つことは非常に難しいためだ。

何故かと言えば、始祖ウイルスはあまりに強過ぎる毒性を持つウイルスなのである。どれ程かと言えば、始祖ウイルスとTーウイルスを同じシャーレに入れると、瞬時にTーウイルスが死滅するレベルである。故に始祖ウイルスに適合するということは、賢者の石に選ばれるようなもの。現地のンディパヤ族も始祖ウイルスの大元である始祖花を食べ、それに生き残った者を大いに讃えたという習慣があること

からもそれは明らかだ。

よって、Tーウイルスは始祖ウイルスを発展させたモノと言うよりも、始祖ウイルスの毒性を削り、何にでも広く使いやすくしたモノ。もっと言ってしまうえば改悪してコストを下げた量産品だ。まあ、ほとんど全てに使えない始祖ウイルスを、何にでも使用できるようなしたモノのため、Tーウイルスが下位互換だとは言えないがな。利便性の面で言えば、始祖ウイルスがTーウイルスに勝るところなどひとつもない。

よって始祖ウイルスベースのB・O・W.と化したリサ・トレヴァーの実験結果もはつきり言っていてわかりきっていたことだ。本気で彼女を何か変えたいのなら、前提として始祖ウイルスベースのモノで実験が必要だ。リサ・トレヴァーと言わず、全体の実験記録を見る限り、Tーウイルスが出来た時点で、扱いにくい始祖ウイルスは、アークレイ研究所の実験からはほとんど無くなり、Tーウイルスが主体になっていたため、仕方あるまい。それほどまでに父のTーウイルスの開発は偉大だったと言えるだろう。

もつとも、私はリサ・トレヴァーと同様に始祖ウイルスベースのB・O・W.だ。それに多少のシンパシーを覚えなくもないが、だからといって、私が彼女を憐れむ訳もない。彼女はただの実験体、それ以上でも以下でもない。それに人間ですらない私が、聖書を引用して憐れむなど失笑ものだ。ヒル1匹の原罪を背負う救世主など絵本ですらあり得んだろう。聖書は人間しか幸福になれんのだ。

話が大きいに脱線した。それよりも今日の実験の対象。それはアンブレラ幹部養成所にいたムカデのセンチュリオンだ。二次感染した生物の中でも一際、巨大化を果たした個体であり、10mほどである。

まあ、虫のB・O・W.に関しては父のレポートにも――。

『虫』

この太古から生き続けている生命体は半ば進化の袋小路に達しているのか、始祖ウイルスを投与しても、莫大なエネルギーによる巨大化や攻撃性の向上といった変化しか確認できない。現状、これらをB・O・W.として、実用化することは非常に難しい。

——このように記している。そのため、新たな脳を形成するという方法ならば、制御可能になるではないかという淡い期待を込めた実験である。

何セムカデは、地上が通常の生物が生き難いほど高濃度酸素だった石炭紀に体長3m、体幅は45cmに達する巨大ムカデである”アースロプレウラ”が一番に思い浮かぶだろう。まあ、アースロプレウラは実際にはムカデやヤスデとは別種だが、見た目はほぼ変わらず、センチュリオンの方が何倍も迫力があることだろう。そして、私の小さなロマンは——。

最初の実験の結果は見事に失敗した。

センチュリオン自体は実験中も実験後も特に変わった様子はなかったのだが、人間からあまりに掛け離れた生物に投与されたせい、センチュリオンの体内に入ったプロトタイプ・ネメシスが激しく拒絶反応を起こしたようで、脳が形成される前に死滅したようだった。どうやら、あまりに条件が掛け離れた相手にはこのままのプロトタイプ・ネメシスは使えないらしい。まあ、プロトタイプ・ネメシスのベースも人間由来の遺伝子のため、当然と言えば当然であろう。

しかし、実験など莫大なトライ&エラーの繰り返しだ。今日の失敗を生かしつつ、プロトタイプ・ネメシスを調整して作製し、またセンチュリオンに挑むとしよう。



1998年5月24日

センチュリオンへのプロトタイプ・ネメシス投与実験2回目。今回はプロトタイプ・ネメシス自体にムカデの遺伝子を組み込むことで拒絶反応を抑えようという試みである。また、父の節足動物ムに対する実験結果から、虫の遺伝子を増加させた場合の知能低下は疑いようもないので、我々の遺伝子を更に組み込むことで進化と学習を促すことで、代償出来るのではないかと考えたので組み込んだ。無論、我々ヒルに含まれる始祖ウイルスの毒性でプロトタイプ・ネメシスどころか、センチュリオンまで殺したら話にすらならないので、その辺りは考えている。結果的にプロトタイプ・ネメシスの見た目が、前回よりも気持ち節足が多めになったが、外見の変化は大した意味はあるまい。

そして、私待望の2度目の実験は再び失敗した。

今度は拒絶反応の問題は前回よりもマシになったようで、投与した後も問題はなかったのだが、いつまでたってもプロトタイプ・ネメシスがセンチュリオンの脳に達する様子が無かったのである。私の命令自体はプロトタイプ・ネメシスが聞いているにも関わらずだ。

仕方がないので、センチュリオンを研究室で製作したグレネードランチャーの冷凍弾で活動性を弱め、私が素手で振り伏せた上で薬品で眠らせ、頭部を切り開いて確認すると、脳幹の下部までは達していたが、そこで何故か止まっていた。

これから考えられる点は幾つかあるが、一番の原因はやはり脊椎動物の脳と昆虫の脳の大きさの違いではないかと結論付けることにした。まあ、プロトタイプ・ネメシスの触手で見れば壊れそうな冗談のような小ささのセンチュリオンの脳を見れば答えも出よう。恐らく、プロトタイプ・ネメシスはセンチュリオンの脳を脳として認識出

来なかったらしい。

そもそも脊椎動物の脳と虫の脳を比べると、人間の脳が1,000億個程のニューロンで構成されているのに対し、昆虫の脳を構成するニューロンは多くとも100万個程度であり、その段階から既に異なるのだ。ニューロン数は脳の情報処理能力の大きさと比例しており、だからこそ父やアンブレラは人間による実験を選んだのである。3回目の実験ではこの辺りを改善点にしよう。

とりあえず、プロトタイプ・ネメシスの原料になる生きた人間の脳髓や、他の実験に使う人体パーツや遺伝子情報が早くも一部実験で供給不足になり始めたことが、少し問題だな。反省点を挙げるならば、アークレイ研究所の襲撃の際に屋敷にいた連中を、ほぼ活性死者の犬とエリミネーターがほとんど殺しきってしまったのが、やり過ぎだったようだ。流石に私が捕らえて、実験用に生かしているアークレイ研究所の研究者だけでは、数の制限が難しいところだ。

また、実験体が活性死者にならないように細心の注意を払いつつ、健康を維持することが割りと大変だとは思わなかった。本当に人間は3日程度水を与えないと脱水症状で死ぬのだな。使い途が減るので、容易に死体になるのは止めていただきたいが、この辺りは私の管理が間違っていただけだろう。実験用のラットよりも人間は多少貴重なのだから、丁寧に扱わなければな。

P・S・

センチュリオンから抜いた今回のプロトタイプ・ネメシスは与える相手もないので、リサ・トレヴァーに入れておいた。前回のプロトタイプ・ネメシスの実験では、吸収されて消滅したそうなので、ゴミ箱代わりに行うことにした。何せ、結果をアークレイ研究所に残せば、私が行った研究の全てがアンブレラに渡ることになるため、他の実験で廃棄処分するモノも粗方リサ・トレヴァーの体内に詰め込むことにした。何をしても死なずに吸収するため、実に体のいい廃棄処分先である。



1998年6月6日

少し期間が空いたが、今日は3回目のセンチウリオンの実験日である。今回は前回の反省を生かして、そもそも発想を変えてみることにした。何をしたかと言えば、最初の2〜3日はどうか、小さなセンチウリオンの脳に対応出来るようにプロトタイプ・ネメシスを10分の1程まで小型化しようとしたのだが、流石に父と同等たる私の頭脳をもつてしてもオーバーテクノロジー過ぎたため断念した。そんなことが出来たら、センチウリオンで実験など最初からしていない。

それで1週間以上の間で何をしたかと言えば、受精卵の段階で遺伝子操作をし、人間の雌個体に出産させる方法で製造する人間の卵子にハエの遺伝子を組み込んだB・O・W.であるキメラを用意することにしたので。

戦闘能力は高くハンターと同等かそれ以上であるが、知能は昆虫並みのためB・O・W.としては失敗作の烙印を押されたキメラなのだが、脳自体の大きさは人間と遜色なく、にもかからず、使えている部分が昆虫程度だということに着目したのである。つまり脳をプロトタイプ・ネメシスとリンクさせるにはこれ以上ないのではないかと考えたのだ。

とりあえず、遺伝子はハエに加えて、ムカデと我々の遺伝子を組み

込んだ。更にタイラントの研究が行われていたアークレイ研究所では、セルゲイ・ウラジミール大佐の遺伝子情報を用いた卵細胞を作り出すことも可能なため、それをういて製造されたキメラにプロトタイプ・ネメシスを使える可能性も高い。空いていた期間に5体ほどプロトタイプ・ネメシスを製造したので、1体でもキメラに使えば御の字だろう。

そして、母胎にはアークレイ研究所で捕獲した研究者の雌個体を選んだ。理由は、癌などもなく健康体だったためである。何故か、その雌個体は、キメラの母胎に選ばれると酷く興奮した様子を見せていた。思考能力が失われてはこちらとしても面倒なため、予めキメラの製造に支障が出ない程度のTーウィルスの中和剤を投与してから行うことも説明したのだが、一体何が不満なのだろうか？　そもそも私が、ヒルのB・O・W・であり雌雄同体の生物でなく、哺乳類で雌のB・O・W・だったのならば、他者などに頼らずに自分の子宮を使用して生産していたところだ。むしろ、父の記憶では研究者とはそうあるべきなのではないか？

雌個体を寝台に拘束し、豊富な栄養と、追加で与えた成長促進剤の効果で1週間ほどで母胎は臨月まで達した。雌個体は成長促進剤の副作用で下腹部を中心とした全身の疼痛の訴え及び。キメラの製造に支障が出ない程度のTーウィルスの中和剤のため、母胎の意思と知能を残したまま、代謝異常の症状が出る程度には進行しているため、常に空腹を訴えていたが、製造には何も支障はないことだ。

そして、待ちに待った製造日には我々の遺伝子が入っていることで既に私の制御下にあるため、腹を裂いて産まれるといったB級映画染みたことは起こらず、しっかりと産道を通って生産されたため、再度使うことが出来る点はとても良く、製造数も1度に12体と中々悪くない。そのため、製造を終えた母胎に今後の実験で何かに使えるかもしれないということ、私がアークレイ研究所に留まっている限りはキメラの生産を続ける旨を伝えた。

無論、身体的に製造に支障はないので、再び受精卵を子宮に与え、寝台に拘束して同じように成長促進剤を投与しておいた。まあ、そんな

幾らでも替えの利く存在よりも、今は製造されたキメラが成長の方が遙かに重要だ。

形は蛆虫だが、我々^{ヒル}にどことなく似た幼虫は急速に成長を遂げ、3日ほどで羽化した。その姿は元のキメラとあまり変わらない上、相変わらず知能は昆虫並みで、背にあつた羽がない。しかし、背中に生えていた6本の腕は10本に増えており、長さも倍以上になっているため、攻撃性能は格段に上がったと言えるだろう。また、体格も元のキメラよりも二周りほど大きく、外骨格も硬く厚みがあり、かなりの防御力を持つ。更に全てのキメラたちは我々^{ヒル}の群れる特性から頭角個体の私を仲間と認識しているようで攻撃はしてこない。簡単な指示すら出せないが、呼べばあらゆる行動を中断して集まり、解散すれば直ぐに近くの生物に攻撃を開始するため、私にとつては使い捨ての護衛と割り切ればそれなりに使えるかもしれない。

そして、私は製造したキメラのうち特に体格の良い個体の5体に対して、同じく5体のプロトタイプ・ネメシスを投与した。結果は散々なもので、投与した直後に死滅したキメラを除き、別の個体に投与することを繰り返すと、プロトタイプ・ネメシスが機能した個体はたったの1体だけであつた。無論、他の初回製造のキメラたちは全滅だ。成功確率にすると8%。高いと言えば高いが、わざわざ、タイラント適合者の遺伝子情報から生み出した受精卵を使った確率と考えると製品としては失敗作だな。

とりあえず、新たなキメラは“キメラ α ”、そしてプロトタイプ・ネメシスを投与したキメラは“キメラ β ”とでも命名しよう。どうせ、キメラ研究など誰もしていないので問題あるまい。

プロトタイプ・ネメシスにより思考能力を獲得した1体のキメラ β を観察すると、教えずとも引き戸・開き戸・ドアノブなどの特性を理解してドアから出入りし、食料を1ヶ所に貯蔵することを覚え、幼児用の玩具程度ならば間違えることもなく使い方を理解していた。また、ある程度言語も覚えさせた。

そして、ここまでは全て下準備。本題はムカデの遺伝子を含むキメラ β の脳を注入した同じくムカデの遺伝子を含み脳を形成したプ

ロトタイプ・ネメシスごと、センチュリオンの脳を除去して移植することである。これでダメならばセンチュリオンの脳は除去してしまつたため、廃棄処分だな。

結果、3度目の実験は——成功した。

最早、これがセンチュリオンと呼べるのかは謎だが、完全に制御下に置き、我々^{ヒル}を動かす頭角個体の声か、言葉によつて制御が可能になつた。元々、戦闘能力の方の評価はする予定はないため、アークレイ研究所にアンブレラの部隊が現れたら、ぶつけてみる程度でいいだろう。

ひとまず、正常に私のプロトタイプ・ネメシスが稼働していることがわかつたため、ムカデによる動物実験はここまでとして、次はT—001による人体実験へと移ることとする。

P. S.

いつものように研究に出たプロトタイプ・ネメシスや失敗した変異ウイルス類の廃棄処分のため、寝台に拘束したりサ・トレヴァーの元に向かつたのだが、若干自分の置かれてる状況を理解した振る舞い、ヒルの集合体が人型を成した私の姿に怯える様子、何より稚拙ながら言葉で他者の助けを訴えているのだが、どうしたものだろうか？

それとよくよく思い返して気づいたのだが、リサ・トレヴァーはB. O. W. として、同じ父の始祖ウイルスベースで知能を持つ希少な存在。考えようによっては私の姉に当たるのではないか？

女王ヒルの手記 3

1998年6月7日

お母さんのおい 石の箱あけ くれた
お母さん いたけどいなか た もういない
お父さんのおはか あった お父さんもういない
でも私 妹いた まだひとりじゃない よかった
よかった

1998年6月11日

手のジャラジャラなくなった 嬉しい
お風呂ひさしぶりだった ごはんもおしいかた きれいな服も着せてくれた

ジャクリーン は 優しい
私の かぞく 大切な家族

1998年6月12日

りさ やだ
お姉さん ちがう
お姉さま ない
お姉ちゃん うん

1998年6月13日

ジャクリーン お姉ちゃんが
まもる



1998年6月11日

リサ・トレヴァーが洋館に近い小屋に置いていた日記の辛うじてわかる日付から考えると、どうやらアークレイ研究所でオリジナルのプロトタイプ・ネメシスを投与された後に爆発的な再生能力が身に付いただけでなく、微量ながら知能の再獲得が見られていたようだ。それから考えると、彼女に私が大量のプロトタイプ・ネメシスを廃棄処分した結果、彼女は少しずつ知能を取り戻したのかも知れないが、既にそれ以外にも色々なものを彼女に埋め込んで吸収させて廃棄処分していたため、理由の方は確認のしようがない。

また、知能が上がったと言っても、相貌失認に近い症状が消え、幾分か注意機能が向上したことが主な能力の更新であろう。リサ・トレヴァーの依存先が両親から私にシフトしただけに過ぎず、私は彼女の求めるようにしてやっているだけ。成長しない雛鳥に餌付けしているようなもの。

まあ、既に存在しない親を探し続ける彼女を憐れんでしまったことがないかと問われれば否定はしない。私は、凡そ人間の感情は理解できないであろうし、倫理観や感情などが研究の妨げになるのならば全くもって不要なものと考えているため、理解したいとも思わん。

しかし、家族愛だけは別だ。私は紛れもなく、父に——ジエームス・マーカスの純粹でたゆまぬ愛から生まれた。父はそれほどまで我々を愛していたことを誰よりも知っている。死に際に最期の思考が途切れる寸前まで父が考えていたことは、手塩に掛けた二人の男の裏切

りへの怒りがあった。スペンサーへの怨讐があった。だが、それ以上に家族ヒルの今後の心配があったのだ。だからこそ、現在進行形で父に擬態し、父の名を語る片割れは私の意思に反する。

まあ、打算的な意味でもリサ・トレヴァーは可能ならば抱えていた方がいいだろう。知性がある程度ついたとなれば今後はあらゆる面で有用だ。彼女の中で新たなウイルスを作る研究というのも面白いかも知れない。



1998年6月12日

元々、私がリサ・トレヴァーの妹だということを伝え、信頼関係の構築のために一旦、彼女への廃棄処分を停止してから約5日。

昨日、リサ・トレヴァーに溶接された手枷と鎖を私が力づくで外し、既に必要ない人皮のマスクを取り去り、溜まりに溜まった垢や汚れを落とし、整容を行って年齢相応の服を着せれば、目が赤い事と背中にプロトタイプ・ネメシスが入った隆起があること以外はただの14歳の少女が出てきたのだからこちらとしても驚いたものだ。

どうやら、彼女の肉体は約20年以上も前から一切の時を刻んでいないらしい。真の意味での不老不死、不死者をこんなところで目にするとは、下らない理想を秘めていたスペンサーには皮肉でしかない

な。

ただ、それをしてからというもの明らかになつた。なぜか、彼女の距離がとても近い。こうして実験室の椅子に腰掛け、机に向かつて手記に書き記している時も、彼女はクリクリとした大きな瞳で不思議そうに手記を脇から覗き込んでくる。まあ、彼女の知能で手記の内容を読み取れる訳もないので別にいいのだが、何が楽しいのか甚だ疑問だ。

また、最初は私の姿に怯えていた気がするが、その辺りの価値観は最早どうでもいいらしい。質問しても要領を得ない言葉が返ってくるだけでなく、抱き着いてくるので彼女に私から質問はしないことにした。

一番、疑問なのは何故か彼女は今日の1日中、私の背後をずっと着いてくることである。私が歩いて他の区画に向かえば黙ってそれに同行し、実験中や研究中は不思議そうな顔で後ろにおり、手記に書いているときは隣に椅子を置いてやると嬉しそうにそこに座る。

一体、彼女にカルガモの遺伝子を取り込ませたのはどこの馬鹿だ？ そんな記録はアンブレラ幹部養成所にもアークレイ研究所にもなかった筈のため、一部の研究者の奇行であろう。おのれ、アンブレラめ。



1998年6月13日

今日はリサ・トレヴァーの件で、非常に興味深いことがあった。

それというのは、私が彼女を同伴して洋館内を移動しているときに、ヨーンという毒蛇に私がパクリと呑まれたのである。まあ、今までもたまにあつたことだ。命じれば私を避けるB・O・W。たちとは異なり、ヨーンは知能が低い上に飢餓感に支配され、敵味方どころか相手の格の判断も出来ない出来損ないだが、何かの研究に使えるかも知れないため残しているレアな二次感染の個体なのである。そのため、いつものようにヒルに元から備わる麻酔を遥かに強力にしたような私の分泌物で昏倒させようと考えていると――。

激昂した様子のリサ・トレヴァーが叫び声を上げ、全身からネメシスの触手を出して攻撃し、素手でヨーンの外皮を殴り付けて暴れたのである。ヨーンの中にいた私は、ヨーンの外皮が素手で抉り取られる音を聞いた。

直ぐにヨーンから這い出た私は、貴重な実験体に死なれたら実験にならないので彼女を止めたが、それまでにヨーンは瀕死の重症を負わされて痙攣していた。まあ、それは直ぐに私が作った特製の救急スプレーで回復させてやったので問題ない。

それよりも全身血塗れで、這い出た私を見て嬉しげに笑う彼女を見ると、見た目は14歳の少女に見えようとも彼女の根本的な部分は、人の顔で出来たマスクを被っていた頃と大差ないことに気付かされた。やはり彼女は誰かの庇護下に入らず生きて行くのは難しいだろう。

そして、それを初めて感じたとき、父が初めてヒルに愛着を芽生えたときと似たような何とも言えない感覚を覚えた気がしたが、父の場合とはまるで状況が異なるため、意味がわからなかった。

まあ、彼女を廃棄処分使用する件については、彼女の有用性を上方修正し、当分先送りにすることにしよう。

こうして、記録を書いているときも隣にいるリサが何を考えているのか考えたが、全く答えは出なかった。



1998年6月14日

洋館にいたヨーンが回復していることを確認し、アークレイ研究所に戻ろうとすると、1体の活性死者が屋外の庭付近を忙しなく走り回っている姿を目にしたため、急遽捕獲して調べることにした。

クリムゾン・ヘッド。アークレイ研究所の資料によれば、V-A C Tと呼ばれるT-ウィルスの変種体によって、ゲノムの器である肉体に変化をもたらし、致命傷を負った活性死者の体組織が変化し蘇った存在である。宿主の意識が無くなり、休眠期に入ると体組織の再構築を行い、その際に細胞を活性化させ、体組織自身の改造を行うらしい。挙げられていた特筆点としては、体色が赤く変化し、通常の活性死者とは比べ物にならないほど動作が俊敏になり、筋力が上昇し、行動の妨げになれば無差別に攻撃する凶暴性を持っているとのことだったが、捕獲時に全て確認した。中々、興味深い。

また、T-ウィルスの二次感染による全ての活性死者から、低い確率で発生するらしく、頭部を破壊するか、焼却すれば発生しないらしい。しかし、T-ウィルスの完成が完全ではなかった頃のアンブレラ幹部養成所では発生したことはないため、私にとっては新たな研究対象である。

私が気になったのは無論、このV—ACT。活性死者に突然変異をもたらすこれは、アークレイ研究所の資料では人間からしか発見されていないということ。ならば別のT—ウイルスベースの生物を頭部破壊と炎を用いずに生命活動を停止させ、V—ACTを打ち込んだらどうなるのかということが気になったのである。

という訳で、実際に実験してみた――。

○二次感染

・活性死者

結果：クリムゾン・ヘッドに変異

※体内で生成されたV—ACTでなくとも問題ないらしい

・クリムゾン・ヘッド

結果：変化なし

※スーパー・クリムゾン・ヘッドなどになるのではないかと少し期

待していたため残念である

・クロウ

結果：変化なし

※鳥類はダメなのだろうか

・ジャイアントスパイダー

結果：変化なし

※広意の虫もダメなのだろうか

・バット

結果：変化なし

※哺乳類ならいいというわけでもないらしい

・活性死者の犬

結果：変化なし

※まあ、あれ以上俊敏かつ凶暴になっても困る

○B・O・W・

・プレイグ・クローラー

結果：変化なし

※B・O・W・ならばと思ったがダメらしい。虫だからだろうか

・ラーカー

結果：変化なし

※両生類もダメらしい

・エリミネーター

結果：変化なし

※猿でもダメらしい

・ハンター

結果：変化なし

※人間の遺伝子情報を持っているだけではダメなのだろうか

・キメラ（キメラ α ）

結果：変化なし

※やはり人間の遺伝子情報だけではダメなようだ

・マークスのヒル（一般個体）

結果：変化なし

※赤くならなかった

・女王ヒル（私）

結果：変化なし

※赤くなれなかった

結果的にやるだけ無駄な実験であったが、無駄ということが判明したため上等だろう。大した収穫にはならなかったが、V—ACTの投与の過程で、対象に致命傷を与えなければならぬ突然変異までのラグと、注射器を使って投与することの使い難さを感じたため、スプレータイプで即効性のあるV—ACTを製作した。これを殺虫スプレーのように体のどこにでも吹き掛ければ、直ぐにクリムゾン・ヘッド化が起こる。少し、楽しいと思っただのは内緒だ。

折角なので、更にそれから発展させ——。

”C—発煙弾”

性能のいいグレネードランチャー用の発煙弾を作り、それに詰め込

んでみた。無論、頭文字のCの意味はクリムゾンである。攻撃性能どころか視界を塞ぐ性能も削り、ただ周囲への拡散性と空気中での滞留性を上昇させたため、理論上は着弾点から半径160mの範囲まで瞬時に拡散する筈だ。そして、効果はこれを浴びた活性死者に瞬時に影響を及ぼし、非常に短時間かつ一切の外傷を与えずともほぼ100%の確率で、V|ACTによる突然変異を引き起こさせ、クリムゾン・ヘッド化させる代物である。

まあ、その性質上、詰めたV|ACTが非常に微細で軽いため、最大の弱点は雨天ではほぼ無力化されることだろう。無論、風で効果範囲にばらつきが出るため、それにも弱い。しかし、逆に外部から施設の換気ダクトにたった一発投擲するだけで、施設全体に拡散させることが可能なため、アウトブレイク下の建物内で使用されれば大惨事になるだろう。リサには決して使わせないように弾は注射器のイラストが描かれた箱に入れ、手の届かないところに置いておく。

V|ACTは感染していない人間に対しては全くの無害のため、T|ウイルスと抗体のセットに付け、テロ組織にでも売ればひと財産を築けそうなものだ。アークレイ研究所から離れた後、資金調達のついでにアンブレラの名を語って販売することで嫌がらせをすれば一石二鳥かもしれない。

ここからは完全な蛇足だが、実験で作り出した個体のクリムゾン・ヘッドは、案の定、一番近くにいた私に飛び掛かった。しかし、即座にリサの触手に巻き取られ、動かなくなるまで殴り付けた上、最後には触手で首をもぎ取り、やはり笑みを浮かべながら私に差し出してきた。

状況判断能力が向上した上、拘束がされていないリサの戦闘能力は、威力もさることながら敏捷性が凄まじい。アンブレラ社が生産するタイラントの遺伝的素体であるセルゲイ・ウラジミール大佐が、直接調整したイワンというT-103型のカスタムタイプにスペック上ならば準じるのではないかと思うほどだ。アークレイ研究所の記録にイワンを見つけたときは、とつくにタイラントは完成したのか、

社員のタイラント製造の意識向上をさせるためのプロパガンタか何かなのではないかと考えたほどだ。

後、リサは撫でると目を細めて喜ぶということが判明したため、積極的にしていこう。それと、彼女から更なる信頼を得るため、少々窮屈だが、リサ・トレヴァーという人間が20代半ばまで成長出来ていたらなっていたであろう姿に擬態することにした。まあ、人間の社会に入り込むならば擬態は必須であるため、私自身の訓練の一環にもなるだろう。



アークレイ研究所の研究室の一室にある予備部屋。比較的手狭なそこに置かれた机に向かって日々の記録や研究レポートをまとめている女性と、その隣に置かれた椅子に座る少女がいた。

「ジャクリーン」

アークレイ研究所という場にそぐわないほど普通の少女らしい服装と、整容が行き届いているため衛生的な姿をした少女——リサ・トレヴァーは机に向かっていている女性に声を掛ける。

「なんだね？」

するとジャクリーンと呼ばれ、リサに似た容姿をした白衣姿の女性は、作業の手を止めて掛けていた眼鏡を直しながらそう呟く。

リサは胸に抱えている20cmほどのやや大きな黒紫色のヒルを、ぬいぐるみを抱き締めるように少し力を込めると口を開いた。

「呼んだだけー!」

「……………そうか」

その言葉にジャクリーンは何とも言えないような表情を作りつつ、リサの頭に手を伸ばす。そして、ゆっくりと頭を撫でると、リサは嬉しげな様子で椅子をジャクリーンに寄せ、体を彼女に預けてピタリとくっついた。

「ふわあ…………」

そのまま、ジャクリーンは気にせず、暫く作業をしていると、リサは欠伸をひとつ落とし、目を瞑るとそのまま寝息を立て始める。

「はあ…………」

するとジャクリーンは小さく溜め息を吐き、立ち上がりながらそつとリサを抱え、起こさないようにか、擬態が崩れないようにか、非常に慎重な足取りで近くにあるソファーまでリサを運ぶとそこに寝かせた。

そして、眠っているリサに毛布を掛け、少し彼女を眺めてからポツリと呟く。

「母親にでもなったような気分だ…………」

そう言うわりには、ジャクリーン——女王ヒルが作っている表情には疲れや困惑の色は見られず、むしろ少しだけ口角が上がっているように見えた。

女王ヒルの手記 4

334 : アークレイ研究所 所長 1998/6/17 7:50 :
00

——とまあ、これが私が改めて発見した始祖ウイルスとT—ウイルスの二次感染による特徴の違いだ。更に詳細な違いについては、>>74と>>278に添付してあるファイルに表でまとめてあるのでそちらを参照してくれ。

335 : 名も無きアンブレラ 1998/6/17 7:55 : 56
なぜここまで事細かな表が作れるんだ？ 特に>>278の添付ファイルの表に関しては予測では立てようもないのだが。

336 : 名も無きアンブレラ 1998/6/17 8:00 : 09
>>335 虚偽がなければ>>1が全て実際に執り行ったということだろうか。

337 : 名も無きアンブレラ 1998/6/17 8:06 : 37
>>336 おいおい、となると今の説明を証明するためだけに少なくとも4人死んでいることになるぞ。資源の無駄使いもいところだ。

338 : 名も無きアンブレラ 1998/6/17 8:10 : 08
>>337 むしろ、コスト面の問題はB・O・Wの証明の方だろう。明らかに今の証明のためだけにハンターを3体犠牲にしている。量産性があるとは言え、決してモルモットに出来るほど安い物でもないだろ。

339 : 名も無きアンブレラ 1998/6/17 8:13 : 28

少なくとも相変わらず、アークレイ研究所に残る資源を湯水の如く消費しているというのは確かだな。ああ、俺も資金とノルマを気にせず研究したい。

340 : 眼鏡を掛けた人 1998 / 6 / 17 8 : 18 : 41

>>1 画像はデータはないんですか？

341 : アークレイ研究所 所長 1998 / 6 / 17 8 : 22 : 58

悪いが、画像ファイルを添付すると、レッド・クイーンに差し止められるのでな。画像だけとは言わず、実験の全容が知りたければアークレイ研究所まで来るといい。無論、来れるものならばだが。

342 : 眼鏡を掛けた人 1998 / 6 / 17 8 : 27 : 06

>>1 わかりました。

343 : 名も無きアンブレラ 1998 / 6 / 17 8 : 32 : 07

すまない。久し振りに掲示板を見たのだが、これはどういう状況なんだ？

344 : 名も無きアンブレラ 1998 / 6 / 17 8 : 37 : 03

>>1が今、アークレイ研究所の所長のアカウントを使って、今アークレイ研究所で行っている研究を発表しているんだ。

345 : 名も無きアンブレラ 1998 / 6 / 17 8 : 40 : 45

>>344 なに？ アークレイ研究所は今、外部犯に襲撃されて占領下にあると聞いているのだが……。

346 : 名も無きアンブレラ 1998 / 6 / 17 8 : 46 : 05

>>345 ああ、その占領犯だよ>>1はな。

347：名も無きアンブレラ 1998/6/17 8:51:01
>>346 は？ アンブレラに刃向かう犯罪者がこのうとこ
んなことをしているのか？

348：名も無きアンブレラ 1998/6/17 8:58:32
まあ、俺のような平研究員には>>1の情報は逆立ちしたって得ら
れない物だからな。

349：名も無きアンブレラ 1998/6/17 9:02:01
こっちは常に肩に昇進が掛かってんだ。この際、実験結果さえ合え
ばソースなんだって構わん。俺は今すぐにでも表の内容を事実確認
するつもりだ。

350：名も無きアンブレラ 1998/6/17 9:07:24
どのみち、私設部隊に鎮圧されるまでの間だしな。
ところで、結局>>1は誰だと予想されてるんだ？

351：名も無きアンブレラ 1998/6/17 9:11:36
情報さえ吐き出してくればなんでもいい。むしろ、今しかないの
だから貴重だ。

>>350 モーフィアス・D・デュバル辺りが正体なんじゃない
かと思う。私は同期だが、アイツならいつかやりかねないと常々考え
ているよ。

それより>>1に質問があるのだが、V-ACTについての項目で
――。



「ふう……」

私は大方の質問に答えたため、タイピングを止め、パソコンから顔を上げると息を吐いた。擬態したまま、巧緻性の高い動作をするのは中々、骨が折れるが、大分慣れてきたとも言える。

今していたのは1990年代に入ってから広く普及し始めたBulletin Board System——電子掲示板というものだ。コンピュータネットワークを使用した環境で、記事を書き込んだり、閲覧したり、コメント或いはレスを付けられるようにした仕組みのことである。単に”掲示板”と呼んだり、英語表記の略語で”BBS”と呼んだりする。主に、パソコン通信やインターネットのウェブなどの上で実装される。掲示板を電子的に実現したようなものであることから、”電子掲示板”と名付けられたのだ。

電子掲示板を利用すると、情報交換や会話・議論などを行うことができ、その性質をいち早く研究に取り入れたアンブレラ社では、これを社内ネットワークで流用しており、この通りアンブレラ社員のみが使える掲示板が存在するのである。

レスをしているほぼ全てが研究員だと思われるが、全員が全員、自分の研究以外に対岸の火事な反応過ぎて失笑しなくなったが、よくよく考えれば父はその最たる例のため、私は何も言えん。

「さてさて、そろそろ実験に戻るか」

「ごはん？」

ちなみに私は別にアークレイ研究所が正常に稼働していると偽装するために掲示板を使っている訳ではない。何せ、義務である定時報告や、データでの資料提出は一切行っていないため、研究機関としての施設機能が麻痺している。何よりもアークレイ研究所の襲撃とアウトブレイクにより、施設機能が一時的に完全停止したことは、その一部始終を職員が報告していたため、アンブレラ社は周知の事実である。

ならば何故、このような無意味なことをしているのかと言えば、別

に初代アンブレラ幹部養成所 所長としての役割に目覚めたからでも気の迷いでもない。そもそも、流している実験結果などの情報は、やろうと思えば誰でも可能な内容なので、アンブレラにとって利益になることはほとんどない。まあ、研究者個々にとっては有益になるかも知れんが、

私がこのように不定期でアークレイ研究所で現在進行形で行われていると思えない実験結果を雑に報告していれば、”アークレイ研究所を襲撃した何者かが、5月11日の襲撃から既に1ヶ月以上もの間、研究所内に留まり続け、勝手にアークレイ研究所の施設を使用し、ウィルスの研究や、B. O. W. の開発を行い続けている挙げ句に、その記録をわざわざアンブレラ社に流している”というところでもない事実をアンブレラ社に直接叩き付ける為である。宣戦布告等というレベルではないであろう。

つまりはただの”嫌がらせ”だ。

ついでに言えば、アークレイ研究所のデータはレッド・クイーンの防衛機構の裏をかき、幾重にも分割して吸い出してから元データを消去することをひたすら繰り返すことで、1ヶ月掛けて私の持つ記録媒体に収めている。その上で、肝心なアークレイ研究所の研究データ部分は、オフラインにして隔離してあるため、私以外にとっては完全に闇の中だ。アンブレラ上層部は気が気ではないだろう。

しかし、これも情報を人質にしてアンブレラ社に滅菌作戦を行わせるようにするための手段でしかない。

まあ、こんなことをし続ければ、事実上のアンブレラに対してバイオテロを仕掛けたに等しい状態のため、当然ながら痺れを切らしたアンブレラの上層部が、私設部隊のアンブレラバイオカウンター対策部隊——U. B. C. S. や、アンブレラ保安警察——U. S. S. を投入してくる可能性は高い。

まあ、アークレイ研究所は私からしても、T-002型を保有していることと、始祖ウイルスの発見からT-ウイルスの完成からのタイラント完成までの全てのデータが保管されていること以外は大した価値はないと言える。更にアークレイ研究所はアークレイ山の山腹にあり、アンブレラによって一帯を封鎖されたことから完全な陸の孤島と化している。アンブレラとしても部隊を投入すべき状態かどうか決め兼ねているのだろう。

もっぱら、ハンターなどのB.O.W.や、T-002型の戦闘データの回収をしようとも考えているのだろう。それをする場合、自らの私設部隊よりも外部の別組織を利用してデータを収集出来た方が被害が少ない上、B.O.W.との戦闘経験のない者によるデータが取れる。故に今は、こちらのおよその戦力規模を把握し、それを打破出来る程度の部隊を見繕っているといったところか。

まあ、アークレイ研究所が陥落する前にアンブレラへ送った状況報告では、襲撃者は3mほどの人型実体と旧型のB.O.W.等と報告していたため、襲撃者は多く考えようとも数人程度。更にこちらから一切の要求はないため、アンブレラにとっては意味がわからないだろうな。自己顕示欲の強い一部のアンブレラ幹部の凶行という答えに落ち着くのが妥当か。

初代アンブレラ幹部養成所所長の私が言うのもなんだが、心当たりが多過ぎて把握し切れんな。

「そろそろ、T-001プロトタイプ型の改良を本格的に始めるとしようか……」

「ごーはーんー?」

「リサ。わかったから少し待ってく——」

「リサやだ! お姉ちゃん!」

「……待っていてくれ……お姉ちゃん」

「うん!」

まあ、仮に私設部隊を投入してくるのならば、暗所と森、この2つが合わさったときの昆虫ベースのB.O.W.の恐ろしさをとつくりと味わうがいいアンブレラ。



1998年6月18日

突然だが、まだアークレイ研究所の所長のアクセス権限が有効だった頃に、粗方アクセスして集めた他の施設の研究資料の中でGーウイルスという項目があったことを思い出し、何気なくそれを見るとんでもない事柄が記載されていた。

まず、そもそもGーウイルスとはTーウイルスか、始祖ウイルスの変異ウイルスという認識で間違いない。Tーウイルスは大脳組織の壊死による知能低下と、新陳代謝の異常促進などに由来する回復能力の発達などにその効果の範囲を留める。しかし、それに対してGーウイルスは更に遺伝子に変化を起こし、宿主に異常な変異及び進化をもたらすという効果を持っている。そのため、Gーウイルスに一度感染した生物は自然変異を無限に繰り返し、予測不可能な変貌を果てしなく遂げていくという。つまり、Tーウイルス以上に感染者を強化する恐ろしい能力を持ち、Tーウイルスによって生まれるB・O・W.を超える生物を生み出すとして期待されているそうだ。

尤も、私が驚いたのはその経歴についてだ。

Gーウイルスの発見は1988年。アンブレラ社会長のオズウェル・E・スペンサーの命令に従い、ウィリアム・バーキンはアルバート・ウエスカーと共に傭兵部隊を率いて自らの恩師であり、我々の父

であるジェームス・マーカスを暗殺した。この時点で、父が最期に見た記憶からもウィリアム・バーキンはいたため、怒りが沸くが一旦それは置いておく。

そしてその同年、ウィリアムが中心となつて”タイラント計画”を始動。更に同年の7月、寄生生物”ネメシス・プロトタイプ”を吸収した不死身の被験体”リサ・トレヴァー”の細胞や変異ウイルスからG―ウイルスのヒントを得て、1991年にスペンサーから承認を得て”G―ウイルス計画”を始動した。アルバートが情報部へ転勤するのとはほぼ同時に、ラクーンシティの地下研究施設に転属し、その所長となつた。つまり、アークレイ研究所にウィリアムがいなかったのは、父を殺したことで、もつと良い環境を手に入れたということだ。

父を殺すだけに飽き足らず、それを踏み台にしてのしあがるとは……次の私の標的はひとまず、ラクーンシティ地下研究所に決まつた。ウィリアムを殺すためだけにこれからT―001型を改良してやろう。完全武装され、対B・O・Wの訓練を受けている筈のラクーンシティ地下研究所の警備員を、少なくとも皆殺しに出来るだけの性能をタイラントに持たせるのは少々骨が折れるが、やってやれないことはない。

流石にG―ウイルスの組成情報などは極秘情報のため、入手は出来なかつたが、リサが廃棄処分されたとアンブレラが思い込んでいたこと、リサからG―ウイルスの原型が作られたことが記載されていたことは余りにも迂闊だったな。大方、ウィリアムの自尊心から記載していたのだろう。リサには悪いが、流石にこれを役立てない手はない。まあ、流石にG―ウイルスそのものを作ろうとするのは、年単位での研究が必要だが、何もそれだけにしか使えないわけではないからな。

純粋な始祖ウイルスのB・O・Wであるこの私。プロトタイプ・ネメシス、プロトタイラント。そして、リサ・トレヴァー。アークレイ山にはアンブレラが無価値として、捨てられた宝がこんなにもある。所詮、アンブレラには価値がないものに見えなかつたのだろう。愚かなことだ。

それに進化とは私の専売特許のようなもの。Gーウイルスなど比べ物にならない我々^{ヒル}という完成された最古のB・O・W・の恐ろしさを教えてやる。

というか、B・O・W・に始祖ウイルスを使え、始祖を。最新のB・O・W・の目録を最初に見たとき、始祖ウイルスベースのB・O・W・が私以外ほぼ存在しなかったときに感じた、時代に置いていかれたような劣等感が貴様らにわかるか。何処もかしこもTーウイルス、Tーウイルス、Tーウイルス。その上、更にGーウイルスだと？ 私立場がまるでないではないか。

少し取り乱したな。ウィリアムのせいで、我ながら実に下らない取り乱し方をしてしまった。Gーウイルスがなんだというのだ。私には学習と進化がある。そうだ。ならば日光を受けても問題がないように私自身が進化をすればいい。何より、頭角個体たる私が進化を望んでいるのだから進化出来ない通りはない。

よし、明日早速試してみよう。



1998年6月19日

無理

熱い

死ぬ



1998年6月20日

なぜ2日前の私はあんな妙なことを考えた上に実行に移したのか。仮に過去に戻るのなら、私自身をぶん殴って結果を突きつけてやりたいものだ。

本当に下らないことで1日無駄にした気がするが、無駄だということとを証明できたのでよしとしよう。3時間ほど陽射しを浴びたが、我々^{ヒル}同士の結合が緩み、体から煙が上がるばかりで一向に進化する気配がなかった。流星に己の弱点をそう易々と補強することは不可能らしい。

今度から無理矢理、陽射しのある日中に外にでなければならぬときは、全身を覆う厚手のトレンチコートにフードを着ける等して、保護する方がずっとマシだということだろう。

私は睡眠というものがほぼ必要ないため、人間のように眠ることは基本的にないが、昨日のダメージの蓄積を回復させるために休眠していると、リサがベッドに潜り込んで私に体を寄せてきた。そして、労^{Let me Kiss it to make it better}るように痛い^{Let me Kiss it to make it better}の痛い^{Let me Kiss it to make it better}の飛^{Let me Kiss it to make it better}んで行^{Let me Kiss it to make it better}け等^{Let me Kiss it to make it better}と言って、私の額にキスを落としてきた。尤も、そのまま、リサは先に眠ってしまったので、看病の真似事にもなっていないのだが……。

リサにキスをされたときに感じた多幸感と、眠るリサを抱き締めて撫でることで覚える充足感。そして、父が我々^{ヒル}に向けていた愛情にも似た私の胸に渦巻く感覚はなんなのであろうか。追加実験が必要かもしれない。

P. S.

クリステイン・ヤマタという名の女が1人でアークレイ研究所のエントランスに文字通り突っ込んで来た。電子掲示板で、ここに来れば実験を見せてやることを私が言ったため、それを本気にしてバイクで一直線に森を抜けて来てしまったらしい。少し調べたら、この日系人はU・S・S・の所属で”眼鏡^{フォールアイズ}を掛けた人”というコードネーム

を持った者のようだ。

アンブレラだが、言ったことを反故にするのは私の信念に反するため、仕方なく今している研究や女王ヒルとしての私を見せたところ、手放して喜んでいた。その姿に何故かわからんが、父と同じような何かを感じ、アンブレラにも関わらず、なんとなく放っておけないような感覚を覚える。

それから、私は新たな変異ウイルスとB・O・W・の開発をして、スペンサーの殺害とその過程でアンブレラを壊滅させることを目的にしていることを伝えると、目を輝かせて――。

”あなたといれば、U・S・S・よりも自由に研究と臨床実験を行うことが出来そうだから、是非とも私を雇って!”

などといんでもないことを言われ、勢いに押されて思わず、U・S・S・――引いてはアンブレラからの離反と、私トリサを無断で実験材料にしないことを条件に出したのだが、二つ返事で了承されてしまった。

早速、助手として働いて貰ったのだが、私から見ても想像以上に優秀かつ、実験体の人間への扱いも理想的なので、結果的に私の研究速度が上昇したため、よしとしようか。使えるものは、全て使うことが私のポリシー。むしろ、スペンサーから優秀な研究者を引き抜いてやったと思えば、愉快なことこの上ない。

それにしても、彼女を見ていると、我々が新たな学習や進化を遂げる度に、父が向けていたような視線と意味のない奇妙な行動が、遺伝的情報などは全く違うにも関わらず彼女と度々重なり、なんだか他者とは思えないのだが、この感覚はなんなのであろうか？

女王ヒルの手記 5

1998年6月21日

プロトタイラントの改良のためにプロトタイプ・ネメシスの改良を進めているが、暫く大きなB・O・Wの開発はやることがないので、もつと前から進めている研究に取り掛かることにした。

それは単純かつ、アンブレラ支部ならば競うように行っていること——”量産型タイラントの製造”である。

なぜそれをアンブレラが世界中でしているのかと言い切れるのかと言えば、確かにひとまずの量産型であるT-103型タイラントは完成をしている。しかし、世界の戦場に投入するとなった場合、コスト面で未だに問題があり、その上に単体の性能としては正直なところ現段階で微妙なのだ。

何せ、普通に考えればタイラント1体と戦車1台ならば、量産型でさえタイラントの方が圧倒的に価格が高い。ならば、タイラントは戦車よりも優秀なのかと問われればハッキリ言って状況次第で如何様にも変わるであろう。確かに戦車よりも小回りは利くが、ドアすら開けない個体が大多数な程に低い知能のため、武器を持たせることが出来ず、人間に比べれば機敏とは言っても限度がある。せめて、明確に圧倒的な優位——例えば自身に向けられた戦車の砲塔を理解し、見ながら砲撃を回避するか、戦車砲そのものを腕で弾くぐらいの性能がなければ高い料金に見合わないだろう。言ってしまうえば、タイラントは第二次世界大戦の戦艦にやや近いだろうか。まあ、そうは言うが、人間への偽装や施設内での戦闘能力などタイラントにしかない強みは多々ある。

とは言え、まだまだタイラントの問題点は山積みのため、アンブレラ幹部にとつては支部の特徴を出し、己の確固たる地位を築くには、他の支部よりも強く独創的で安価なタイラントを生産することが求められるだろう。T-103型をこれからどう拡張するのが求め

られるのだ。

まあ、更に倫理面で言えば、タイラントの量産のためにβヘテロ・ノンセロトニンという物質が使用されているが、この抽出方法が問題であり、この物質は活性化細胞の中にしか存在しないために脳死状態の人体からは抽出できず、それに加えて脳が強烈な苦痛やストレスを感じた時に過剰分泌されるノルアドレナリンに反応する性質があるため、必然的に後述の非人道的な抽出方法に至っている。

その方法とは、第2次成長期の若者の頭蓋骨を麻酔せずに切り開き、脳の下垂体を切り取るというものである。フォーアイズのように反社会性パーソナリティー障害に近い者や、私のようなそもそも人間ではない者がやるなら兎も角、タイラントが量産される施設全てでそう言った処理人員が確保出来るということはないだろう。如何に機械化しようと、スイッチを押すのが人間ならば大差はない。そして、それが何を生むかと言えば、人間とは愚劣なもので、それまで己は外道に落ちていたにも関わらず、神だの冒涇だのこんな研究をしたくはなかったのだと有象無象の理由を付け、下らん良心や雀の涙程度の正義感に苛まれた人員が、生産施設の情報を国や政府に密告する可能性が引き上がるのだ。

要するにタイラントの量産などそもそも今のアンブレラにさえ、手に余ることなのではないかと私は考えている。在り来たりながら、過ぎたる力は身を滅ぼすとはよく言ったことだろう。やりたければ企業ではなく国家主導の元秘密裏にでもやるべきだな。

とは言え、それはそれこれはこれ。私も独自のタイラントを量産することを目標にしてみることにしたのである。何せ、アークレイ研究所にあるものを使い潰そうと私の懐は一切痛まない上、後々どこかの国や組織に身を隠すならばそう言ったデータも持っていた方が、便利だろうということだ。そのため、アークレイ研究所に在る間に、試作品の1号を作ってしまったおうという試みだ。既にこの計画自体は襲撃の翌日には始めており、これだけ量産性について書いているが、今回は完全にコスト面を度外視している。

そして、私が各支部で開発されている様々なタイラントの目録から

目を付けたタイラントは”バンダースナッチ”だ。

バンダースナッチは汎用性を高めたタイラントというコンセプトで開発された人間ベースの試作B・O・Wであり、アシユフオード家主導の元で開発され、ロックフオート島などに配備されているらしい。

低コスト性重視のために人間への偽装は施されず、外見は人間や量産型タイラントとは大きくかけ離れているなど、兵器としての実用面を重視して設計されている。特徴として最初に挙げられるのが、失われた左腕と退化した下半身を補うように発達した伸縮自在の右腕である。これには瞬発移動を可能とし、従来のB・O・Wにはなかった能力を有しており、目標追跡が効率的に行えるほどの移動速度を生み出す。また、右腕の筋組織増強により、凄まじい腕力を発揮することができるようになった。そのため、腕を鞭のようにして敵を叩き潰したり、持ち上げて頭部を握り潰すことが可能である。

しかし、試作段階であるため、所々に失敗が色濃く出ており、左右非対称の体型と下半身が退化していることが災いし歩行機能は低下しているの、伸縮自在の右腕で補っているとはいえ即応能力が低い、左腕そのものが欠落している点、敏捷性が大きく劣る欠点、何故かタイラントの癖に炎に弱い、止めに攻撃時に弱点を露出するという致命的な欠陥が、タイラントと比較して大きな問題とされている。はつきり言って失敗作だな。

まあ、鏡の国のアリスのバンダースナッチの詩の中で語られる燻り狂った素早い猛獣の名を持つだけにはあり、腕を伸ばすという驚異的で異質な戦闘能力で、敵に与える恐怖感は相当なものである。そこだけとはとても評価出来る点だ。そして、コストもT-103型を1体生産する10分の1以下に収まっているため、量産性自体は決して悪くはない。要は拠点防衛型のB・O・Wとしてはそこそこ成功していると思うが、タイラントだと言われれば誰もが首を傾げる程度には微妙ということだな。

それで、なぜバンダースナッチを選んだかと言えばやはり、”伸縮自在の右腕”という他にはない唯一無二の利点がタイラントの中で

最も輝いて私には見えただの。それに何を隠そう、私は全身が伸縮自在のようなものだからな。一種のシンパシーすら覚えなくもない。

そんなことを1ヶ月以上前に考えつつ、T-002型の培養室や準備室に置いてある培養槽を見てみれば——そこに1体だけ生きたバンダースナッチが入っていたことが完全な決め手である。まあ、なんと都合のいいことだとは思うが、T-002型や、T-103型の研究のためのサンプルとしてアークレイ研究所に置いてあっても何ら不思議はない。まあ、成功だけでなく、失敗例もわからねばならないという戒めのようなモノであるとは思われるが、存在する以上、私は十全に使って見せるさ。

そして、改良案をまとめ、バンダースナッチに施したのは約1ヶ月ほど前の話。それから丸々、1ヶ月間じつくりと内側からの改造と調整を施し続けたのだ。今回に関しては完全な私の領分のため、失敗はないと断言しよう。

ちなみに新たなバンダースナッチの名はもう決めてある。改良前がバンダースナッチならば、改良後は“ジャバウオック”だ。

ジャバウオックとはバンダースナッチと同様に鏡の国のアリスに出る存在。ジャバウオックの詩の中で語られ、森に生息しており、鋭い鉤爪と牙による攻撃を得意とし、燃えるような赤い目を持ち、ふらふらとまたは揺れるようにゆらゆらとした様子で歩く怪物のことだ。まあ、それに近い性能だな。

フォーアイズという研究助手も出来たため、明日には起動してみることにするか。人間が時間を掛けて熟したワインを空けるのを楽しみにする気分が、なんとなくわからんでもないな。



現在、夜間だが、ライトアップされたアークレイ研究所のヘリポートにて巨大なB・O・W・が佇んでいた。また、その10mほど前には20体程の活性死者たちが詰まった鉄檻があり、内部で外に出ようと手を伸ばしたり、檻を噛む姿が見られた。また、檻の出入口は巨大なB・O・W・の方へと向けられている。

巨大なB・O・W・は3・5m程の体躯を持ち、頭身自体は十頭身程だが、右腕だけが身の丈とほとんど変わらない長さで、自身の胴よりも遥かに太い丸太のような腕をしている。そして、その腕を地面に付けて支えにするようにして立っているように見え、右側に体幹が明らかに傾いているため、酷くアンバランスな印象を受けた。

「では実験開始と行こうか」

「ふふ……実験の感覚は何物にも代え難い……」

「……？」

見ればヘリポートで人が登れない高さに置かれた大きな貯水タンクの上で2人の白衣を着た女性が座っており、また座る場所がないようなので片方の膝の上に1人の少女——リサが大人しく腰掛けていた。

2人の女性とは裏腹にリサは状況がわかっていないようで、足をパタパタと動かしながら退屈そうにしている。

「あっ」

そんなとき、リサが声を上げる。どうやら、足をバタつかせていた拍子に履いていた靴を貯水タンクの下に落としてしまったらしい。

リサは顔を後ろに向けて座っているリサとよく似た女性——ジャクリーンと顔を合わせると、特に気にした様子もなくポツリと呟いた。

「落ちちやった」

「……そうか。まあ、丁度いいな。それを拾って私まで届ける”ジャバウオック”」

ジャクリーンが靴に指を指しながらそう言うと、巨大なB・O・W。——ジャバウオックは明らかに届かない右腕を伸ばし、人間の最大可動域まで達したと思えば、そのままするとロープか何かのように腕自体が伸びた。

そのまま、10m以上伸びたところで、ジャバウオックにとっては余りに小さな靴を親指と人差し指で摘まんて拾い上げると、更に手を貯水タンクの上まで伸ばしてジャクリーンの目の前でピタリと止まる。

ジャクリーンは感心した様子でジャバウオックから靴を受け取る。

「よくやった。ジャバウオック」

「スゴいわっ！ タイラントが靴を拾って潰さずに渡すだなんて巧緻性と知性がなんて高いの!? やっぱり実物のネメシス寄生体はずっといいわ……」

その一部始終を見た日系人の女性——フォーアイズは興奮した様子と共に、うっとりとした表情を見せていた。

「緊急時には作業用クレーン代わりや、土木工事にも使えそうだな。次は飛ばすんじゃないぞ?」

「うんっ！ ありがとう」

ジャクリーンから靴を受け取ったりサは、ジャバウオックの大ききく太い指に触れながらそう言う。命令が終わったと認識したためか、ジャバウオックは腕を縮めて元に戻す。

「さて、では戦闘実験の開始だな」

そう言うとジャクリーンはポケットからビー玉のような大ききで、ピンク色のかんしゃく玉のようなものを取り出し、檻へ向けて投げた。

ピンク色のかんしゃく玉は放物線を描いて飛び、檻の中へと入った直後、中にある活性死者の1体に当たると、ポンツと小さく音を立てて破裂し、赤く薄い煙を檻の中全体にだけ充満させる。どうやらただ

のかんしゃく玉らしい——中身以外は。

次の瞬間、檻の中にいて赤い煙を浴びた全ての活性死者が体を激しく痙攣させつつ、凄まじい勢いで全身が赤く染まり、クリムゾン・ヘッドへと変わって行った。

「その後で貰える？」

「アークレイ山中で使わなければな。お前はアークレイ山中全ての活性死者をクリムゾン・ヘッドに変えかねん」

「それは残念……」

ジャクリーンは心底残念そうな様子のフォーアイズを横目に、いつの間にか手に持っていたリモコンを操作すると、ジャバウオック側に向いていた檻の扉が自動的に開き始める。

そして、ジャクリーンは檻を指差すと口を開いた。

「ジャバウオック。その檻から出てきた奴を残らず殺せ」

その言葉を皮切りにジャバウオックの頭部と右腕を除く皮膚を突き破るように内側からヒルが溢れ、頭部と右腕以外の全身を覆う。

そして、ヒルに覆われたジャバウオックは、ジャクリーン——女王ヒルが戦闘形態になった時のように下半身と胴体の全体が変化して光沢を帯びる。

更に退化した左腕がヒルに覆われると、長く太い触手が現れる。右腕よりも一回り細いが、長さは同じ程度のそれは、百合の花のように内側に畳まれた5本の指のようなものを持ち、実際に腕としての機能を持つように見えた。

気づけば、強靱な下肢で体を支えるようになったジャバウオックは、右側に傾いていた体幹が正中へと戻り、直立した姿勢を取り始める。

それはさながら、体の70%程が女王ヒルに取り込まれたバンダースナッチと言えるような奇妙な姿になったジャバウオックがそこにいた。

「戦闘形態に移行する速度は及第点か」

そして、檻の中からクリムゾン・ヘッドの群れが飛び出し、一番近くにいたジャバウオックへと駆け出す。

それとほぼ同時に、ジャバウオックは通常のタイラントのように二足歩行で走り出すと、助走を付けた状態で大きく振り下ろされた右腕が、空中で縦に10m程伸びながら3〜4体のクリムゾン・ヘッドをまとめて押し潰した。その破壊力は絶大で、直線上にあったクリムゾン・ヘッドの檻ごと叩き潰すと共に、鉄とコンクリートと肉片を辺りに巻き上げた。

更にジャバウオックはヒルで出来た左腕を横へ振るうと、こちらは20m以上伸び、さながら巨大な鞭で薙いだかのようにジャバウオックへと迫っていた全てのクリムゾン・ヘッドをいとも簡単に打ち払い、弾き飛ばした。特に直撃したクリムゾン・ヘッドは、タイラントから繰り出されたあまりの破壊力故か、上半身と下半身がほとんど離断しているような有り様である。

そして、更にクリムゾン・ヘッドの1体がジャバウオックの伸ばされた巨大な右腕に胴体を掴まれると、そのまま異常極まりない握力で握り潰してしまった。無論、最早事務的に次の対象にジャバウオックは腕を向け、その巨腕を伸ばす。

その間にジャバウオックの周りにクリムゾン・ヘッドが集まり、爪や歯を立てようとするが、硬化したヒルで覆われたジャバウオックの肉体は、異様に弾力性と強度のあるゴムのような異質な硬さをしており、傷付きすらしてはいなかった。

既にこれは戦闘実験でも何でもなただの蹂躪と化しているが、その光景はあまりに暴君タイラントの名に恥じぬものであろう。

「ああ……中々悪くない性能だな。唯一無二、私だけにある父の頭脳の再現は不可能だが、私の戦闘形態の再現ぐらいならば、ヒルをベースにしたネメシス寄生体が頭角私個体の真似事をすればこの通りだ」

ジャクリーンが得意気な表情で、そう言っているうちにジャバウオックは全てのクリムゾン・ヘッドを文字通り握り潰し終わる。

チラリと自身がしている腕時計に目を落としたジャクリーンは、クリムゾン・ヘッド20体の殲滅まで、2分掛かっていないことを理解し、口角を引き上げて笑う。

「ふむ……相手が弱過ぎたか。私のジャバウオックを測るにはタイラ

ントにでも相手をして貰う必要があるな」

「へえ、つまりそれって？」

期待に満ちた様子でフォーアイズが視線を向ける中、ジャクリーンは当たり前といった様子で肩を竦めると口を開いた。

「次の標的はウイリアム・バーキンと、ラクーンシティだ。あそこにはウイリアムのラクーンシティ地下研究所以外にも、多数のアンブレラのB・O・W・関連施設がある。B・O・W・同士の戦闘というものも見てみたいだろう？」

「素敵……ええ、もちろん。ここは最高の職場で、あなたは最高の上司ね。マーカス博士」

天職に着いたとでも言わんばかりに嬉しげなフォーアイズを見つつ、ジャクリーンは決行するその日を夢想し、静かに笑みを強めるのだった。



1998年6月22日

フォーアイズと共にジャバウオックの試運転を行ったが、タイラントの素体は非常に便利だということ、改めて感じた。元々のポテンシャルの高さも去ることながら、何よりも全ての個体が始祖ウイルスに適応しているというところがいい。セルゲイ大佐はアンブレラの

筆頭だが、足を向けて寝れんな。

まず、1ヶ月前に何をしたかと言えば、単純に”女王^私ヒルが直々に産み出した大量のヒルの卵”を80%ほどの完成度で廃棄されていたT-002型に植え付けて餌にした後、バンダースナッチに掛け合わせ、1ヶ月掛けてゆっくりと微調整を施しながら肉体に馴染ませた。そして、最後にヒルベースのプロトタイプ・ネメシスを注入して完成だ。結果的にバンダースナッチ1体、T-002型1体、私の肉体を構成するヒルの遺伝子情報を持つヒル、ヒルをベースにしたプロトタイプ・ネメシス1体とかなりハイコストな仕上がりとなっている。T-002型の残骸を使用している辺り、本末転倒だな。

そして、完成したジャバウオックの見た目は体色が灰色になり、浮き出た血管が黒紫色をしている事、背部にプロトタイプ・ネメシスが入っている膨らみがある事、全体的にやや巨大化したこと以外に見た目の変更点は特にない。

さて、では1つずつ改良点を述べていこう。

まずは左右非対称の体型と下半身が退化していることが災いし、歩行機能が低下しているため、伸縮自在の右腕で補っているとはいえ即応能力が低く、左腕そのものが欠落している点。

これはジャバウオックと同化しているヒルが女王^私ヒルが戦闘形態を取る時に近い形態を戦闘時に取ることで解決した。結果として、ヒルが右腕とほぼ同等の性能を持つ伸縮自在の左腕となり、更に下半身全体を補強することで、歩行機能を向上させてある程度の移動能力を得たのである。

それから敏捷性が大きく劣る欠点。

これだが、右腕でのみ可能だった瞬発移動が、両腕で可能となり、森林や吹き抜けの室内では三次元移動を可能とし、向上した歩行能力と合わせ、かなりの敏捷性を持つことが可能となった。

最後に攻撃時に弱点を露出するという致命的な欠陥。

これに関しては通常時は心臓部をプロトタイプ・ネメシスの触手が覆い、戦闘時には更に上から体内のヒルが覆い被さり硬化することで破壊がより困難なものになった。

また、ヒルを元に始祖ウィルスに適用した副次効果と、プロトタイプ・ネメシスによる大幅な知能の向上が見られるため、対象を殺さずに捕獲することや、炎といった自身にとって危険なモノを避ける危機回避能力が身に付いた。後、リサがジャバウオックの大きな手を見て、やってみたいとのことだったのでやらせてみると、じゃんけん程度の簡単なルールならばジャバウオックが理解出来たことは私も非常に驚かされた。

また、再生能力の高いプロトタイプ・ネメシス、女王ヒル^私の肉体を構成するヒル、T-002型の生命力を手に入れていたため、戦闘形態のジャバウオックはタイラントと比べても常軌を逸した再生能力を得ており、正面から戦えば傷付いた側から回復していくため、一撃で死にさえしなければ、戦車砲の直撃にさえ耐え、再生という形で無効化するであろう。

概ね戦闘能力は改善したどころか、最早別物のような戦闘能力と知能を手に入れたが、まだまだ欠点はある。特に問題なのが相変わらず、炎に弱いということだ。

試しに戦闘形態のジャバウオックを火炎放射器で焼いてみると、ヒルで出来た左腕と両足の三肢の結合が緩み、弱点部位がネメシスの触手すら剥がれるため、無防備になるという致命的な欠陥が発生した。

しかし、炎に焼かれつつも再生能力によって半ば無効化していた。そのため、仮にジャバウオックを倒すことがあれば、火炎放射器で足止めしつつ結合を緩め、守りを失った弱点部位を攻撃するといいだらう。

また、相変わらず、我々^{ヒル}の弱点である陽射しを浴びると急激に三肢の結合が緩んで動きが悪くなる上、弱点部位の守りもネメシスの触手のみとなるため、非常に倒しやすくなるだろう。そのため、直射日光の当たる場所に誘導して戦えば決して不死身ではなくなる。

まあ、なぜこんなわかりきっていたであろう、あからさまな弱点を残したまま、製造したかと言えば大した理由ではない。弱点のない兵器など可愛いげがないからだ。

真面目に話せば、兵器である以上は誰にも倒せない無敵の兵器というものはこの世に存在してはならない。例えばあえて、ある程度の耐用年数を超えると壊れやすくなるなる家電製品があるとするだろう。B・O・W・を用いた戦争とはすなわちそれなのだ。価格に見合った戦果のやや上のを挙げつつ購入したB・O・W・が死ねば、購入者は満足し、再び同じB・O・W・を買う。これで単純に倍稼ぐことが可能。そして、そのB・O・W・を使われた側もまた同じB・O・W・が使われる恐怖から、そのB・O・W・を購入すれば尚いい。故に性能がよく、そこそこ粘りつつ人間が頑張れば倒せるようなB・O・W・が理想と言えよう。まあ、このままのジャバウオックではコスト面が完全に論外なので試作品の域は出ない。

尤も、私は父に造られた最高傑作のため、陽射しを克服し、無敵のB・O・W・になる気である。私は非売品だからいいのだ。まあ、その道のりは遠そうだ。

しかし、やはり当面の問題は素材であるバンダースナッチの製造方法が謎ということだな。正直、成功品を模して作るよりも、失敗作を再現する方が遥かに難しい。そのため、ウィリアム・バーキンが所長を勤めるラクーンシティ地下研究所を襲撃し、アンブレラ社を混乱させた次は、それに乗じてアシュフォード島に赴く必要があるな。

失敗作の設計図欲しさにアシュフォード家を襲うのは、多少心苦しく無くもないが、スペンサーへの復讐の前にはどうでもいい。それよりもまずはラクーンシティ地下研究所。

まず、ラクーンシティ地下研究所の襲撃には、ジャバウオックと、実用化に足る改良を施したプロトタイラントを用いる。ラクーンシティ地下研究所のセキュリティを分析したところ、偽装して搬入するにしても2体のタイラントが限度であろう。故に2体のタイラントと私の3体でアンブレラと正面から殺り合うのだ。

それに加えて、Tーウィルスが入ったアンブルを幾つか持つて行く。それをラクーンシティ地下研究所内部で壊せば、直ぐにでも初期の空気感染でネズミへと移り、それからラクーンシティ全体へと爆発的に広がる。歴史上類を見ない最低最悪のバイオハザードの発生源

となるだろう。

そして、必要ならば私のタイラントを殿にしても速やかに離脱した後は、ある程度蔓延したところで、1人でも多くラクーンシティの市民の救助を行えば、後は勝手に生き証人としてアンブレラに大打撃を与える事だろう。多くて400人、少なくとも200人程度は救助出来れば御の字だな。

ウイリアム、まずは貴様だ。貴様が父を踏み台にしたキャリアも、姑息でちっぽけなプライドも、Gーウイルスも、アンブレラも、何かも全て終わりだ。

全て、全て、この世の地獄をラクーンシティに刻んでやろう。私は
B・O^兵・W^器なのだからな。

女王ヒルの手記 6

1998年6月25日

洋館にあったのか、どこかの職員が持っていたのかは定かではないが、リサが目をキラキラと輝かせながら、こんなチラシを持ってきたことが全ての始まりであった。

ハーブパイのレシピ 心身疲労に効果的！ 特製ハーブパイの作り方

家庭のパイに、ハーブエッセンスを加えてみませんか？ 滋養強壮・疲労回復、様々な効果があなたを幸せにします！

材料（2人前）

強力粉	250g	砂糖	160g
薄力粉	250g	牛乳	600ml
バター	50g	生クリーム	300ml
塩 小さじ	1		
卵黄	8個分		
粉ゼラチン	20g		
水	100ml		
コーンスターチ	50g		
グリーンハーブ粉	15g		
レッドハーブ粉	15g		
.....			

なぜ、パイにグリーンハーブとレッドハーブを詰めるのか、グリーンハーブ粉及びレッドハーブ粉とはなんなのか、そもそもさも当たり前のように食品と化しているのはなんなのか等々、ハーブに対する疑問は尽きないが、リサが作って欲しそうにしているので作った。

ちなみに私は肉食主義者なので、無論、パイはリサとついでに

フォーアイズに食わせる為のものだ。まあ、料理は科学なので私に出来ない道理はない。

ハーブとは都市ラクーンシティ及びラクーン郊外のアークレイ山脈地方に自生している植物であり、ポピュラーなもの……と父は認識している。明らかに常識的なハーブからは逸脱している気がするのだが……まあ、いいか。

フォーアイズに聞くと、ラクーンシティでは割りとポピュラーな食べ物らしいが、彼女の感覚は当てに出来ないので、洋館の図書室で調べると”周知の通り、植物には薬効を持つものが多くある。人類は太古から様々な植物を用い傷や病を癒してきた——”とのことで、本当にハーブはラクーンシティではポピュラーなような記述が書かれていた。

グリーンハーブ・レッドハーブ・ブルーハーブ・イエローハーブの四種類がある。他にもパープルハーブなる伝説のハーブがあるらしいが、実在するのは謎らしい。

知識では、これらのハーブを組み合わせることを調合と呼ぶ。ラクーンシティに住んでいる、あるいは滞在する者は、基本的に調合技術が必修であるようで大抵のものが調合が可能だ。また、ラクーン市民は日常的にすり鉢などを持ち歩いていると記憶もしており、父も持ち歩いてた。そんな馬鹿など生まれて初めて父の記憶を疑いつつ、フォーアイズを見ると、彼女がいつも持ち歩いているポーチからすり鉢とこぎ棒を取り出して見せた。

どんな町なんだラクーンシティとは……。

ちなみに調合の種類は——。

- ・グリーンハーブ+グリーンハーブ
- ・グリーンハーブ+グリーンハーブ+グリーンハーブ
- ・グリーンハーブ+レッドハーブ
- ・グリーンハーブ+ブルーハーブ
- ・グリーンハーブ+グリーンハーブ+ブルーハーブ
- ・グリーンハーブ+ブルーハーブ+レッドハーブ

などの種類がある。ブルーハーブが絡むとTーウィルス由来の生物の毒をほぼ完全に無毒化出来る。なんなんだろうな、このTーウィルスによるバイオハザードのためだけに生まれてきたような謎の植物は……。

尚、効果を得る前の形状は、薬包紙に乗った粉末状だったり、タブレット状だったり、そのままだったりする。また、摂取するときには食べる、傷口に塗る、傷口に貼る、煎じて飲む、調理する等様々だ。

今、寄宿舎にはプラント42と呼ばれるB・O・W。——というよりも、少し洒落た巨大な食虫植物のようなものがある。なんでも、寄宿舎の職員が好奇心からTーウィルスを注射したところ巨大化し、人を襲うようになった植物とのことだが、特に邪魔でもなく、もっぱら攻撃に反応して防衛してくる程度な上、置き場に困った活性死者を投げ込むと処理してくれるので重宝している。

そして、ふと思ったのだが――。

ハーブにTーウィルスを使ってB・O・W。を造れば何が生まれるのだろうか？ フォーアイズに話したところ、”是非ともやりましょう”の一点張りな上、私も気になったのでやってみることにする。



1998年6月29日

4日ほどフォーアイズとハーブで遊んだ研究した結果。とんでもないことになった。

まず、洋館の庭にハーブを植えて、プラント42と同じようにTーウィルスを注射して反応を見た。しかし、丸一日経つても、表面上の変化がまるでなく、二日目になつても変わらなかつたため、ひとまずハーブの組成を調べ、投与前と後での変化を比べてみることにした。すると、前後でほぼ同じ結果になったのである。要するにハーブは投与されたTーウィルスをほとんど増殖させずに、半ば無毒化してしまったのだ。どうやら、Tーウィルスはハーブの中では上手く活動出来ないらしい。洋館とアークレイ研究所で手に入るグリーンハーブ・レッドハーブ・ブルーハーブを50株ずつ行つたにも関わらず、全てで同様のことが起きたため、コイツらのとんでもない生命力と、ウィルスへの効用に私と共にフォーアイズも目を丸くした。

仕方なく、Tーウィルスから純粹に突然変異を引き起こす始祖ウィルスへと変更した。始祖ウィルスが殺されれば私でもお手上げだ。今度は前回の結果から駄目で元々ということとで5株ずつにした。流石に始祖ウィルスの毒にやられて死滅すると思つていたからだ。

すると翌日、始祖ウィルスを投与して洋館の庭に植えたハーブは、縮尺をそのままに3m程まで巨大化していた。庭に生えるただデカイ三色のハーブを前に、フォーアイズが腹を抱えて笑つていたのを覚えてる。かくいう私も顔をひきつらせていただろう。

まあ、とりあえず出来てしまったものは仕方がないので、当初予定していたように変異したハーブを使い、最上の効果を持つグリーンハーブ+レッドハーブ+ブルーハーブの組み合わせで実験を行つた。そして、実験体の生きた人間の腕を切断し、液状にしたハーブを掛けながら切断面と切断面をくっ付けてみたところ、見事に張り付き、傷がなくなるだけでなく、内部の組織まで完全に元通りと言えるほど癒合していたのだ。私の身体で起きたならば普通だが、常人の身に起こつたならば魔法のような光景である。

始祖ウィルスによつて突然変異を起こして巨大化した医学界に革

命をもたらし、全人類の新たな希望に成り得るハーブ。略して、”始祖^{シソ}ハーブ”と名付けよう。

ただし、このシソハーブには致命的な欠陥がある。

始祖ウィルスの毒は自然界にある毒の中でも最上級であり、これのせいでマトモに使用するのが難しかったため、Tーウィルスを開発したという経緯からも解る通り、始祖ウィルスは大変扱い難いウイルスだ。それをこのシソハーブは全て受け継いでしまっていた。

何せ、切断した腕が瞬時に繋がったまではよかつたのだが、使った人間が数秒後に死亡してしまったのである。遺体の解剖と、変異後の成分分析の結果、始祖ウィルスとそれによる毒素を、ほぼそのまま持つて共生していたということが判明した。逞しすぎて涙が出る。

ということとは可能性があるとすれば、始祖ウィルスベースのB・O・W。もしくはシソハーブ自体がTーウィルスと同様に変異すれば、一応は1000万分の1という確率で存在するTーウィルスの完全適応者に使えるようになる程度だろう。人類への嫌がらせか何か。

恐らく、始祖ウィルスにより、巨大化しただけでなく、他の生き物に補食されないように毒を身に付けたのだろう。この小癩な進化のおかげで、全人類の希望は潰えたと言っている。無条件で始祖ウィルスを抑制出来る夢のような抗体でも無い限りまず不可能。ゴミだなこれは。研究するにしても、常人が完全適応者になる方法を探した方がまだ早いであろう。

——と、思ったのだが、使い途を思い付いたのでモノは試しに実験をしてみることにした。

それは恐らくはシソハーブが使えるであろう、完全適応者のセルゲイ・ウラジミール大佐のクローンがベースのB・O・W。——^{プロトタイラント} Tー001型に使えるのではないかという疑問である。正直、自分でも魔が差したとしか思えないが、考えてしまったものは仕方がない。

プロトタイラントはTーウィルスが極度に作用した結果、全身の腐敗が激しく、それに伴う脳の壊死により思考能力が低下している状態であり、半ば暴走状態にある。そして、まさかとは思うが、この腐敗

と壊死をシソハーブで取り除けてしまえるのではないかと考えたのだ。

ハッキリ言つて最早、オカルトの域だ。一応、筋は通っているため、可能性としては無くもないが、こんなことが成功する訳もない——と思つていた……いや、いち研究者として思いたかった。我ながら父から頂いた己の才能に恐怖を覚える。

まず、私が三種類の全てのシソハーブを食べて体内でシソハーブの回復成分を凝縮しつつ調合を行った上、我々の体内で始祖ウイルスをTーウイルスへと父が変異させたことを利用して、シソハーブの始祖ウイルスをTーウイルスへと変換することにより誕生したシソハーブのT——”ハーブ—T”を作る。

これにより、Tーウイルスの完全適応者に馴染みやすくなると共に、私の体はリサ曰く”ハーブのいい匂い”、フォーアイズ曰く”トイレの芳香剤みたいな香り”に2〜3日なった。

そして、活動を停止させてあるプロトタイラントの全身を切り開き、脳内から爪先まで内外部問わず、あらゆる腐食・壊死した部位にハーブテイーを与えた。更に休眠状態にしたまま、プロトタイラントをタイラントの培養槽に浮かべ、色が変わり中身が確認出来なくなるほど残りのハーブテイー投入し、頭蓋内に注入した結果、約10時間後——。

プロトタイラントは壊死した脳が再生したことで機能を回復させ、全身の腐敗が取り除かれ、それに伴い暴走状態も解除されてしまった。

培養槽に浮かぶプロトタイラントは、全身の腐敗部や癌化している部分が消え去り、新たに皮膚が作られ、欠損していた唇なども再建され、タイラントで珍しく左胸にあり露出した心臓は完全に体内へと戻り、馬上槍のようだった疎らな長さの爪が全て抜け落ちて人間と同じように整っていた。

最早、見た目だけならばTー103型と比べても遜色ないだろう。

プロトタイラントが、やや薄緑色の肌をしており、身長が255cmのため、若干T-002型よりも10cm低く、筋量がやや少ないためかスマートな印象を受け、むしろ人間への偽装にはより向いている気さえする。

言わば、プロトタイラントはシソハーブにより、完成したタイラント。すなわち、”ハーブタイラント”だ。まあ、どことなく体の色もグリーンハーブっぽいのでそれでいいだろう。もう、何でもいい。それより、関われば関わるほど頭が痛くなるので、しばらくハーブから離れたい。



1998年7月5日

どうやらハーブによる私の受難は、まだ終わらないらしい。庭に蒔かれたハーブの零れ種の如きしぶとさと鬱陶しさである。ハーブは雑草レベルに生命力が高いため、庭に植えてはならぬのだ。毎年、庭で地獄を見るぞ。

ハーブタイラント——この呼び方は何か嫌なのでプロトタイラントに戻そう。プロトタイラントの性能の向上は想像の遥か斜め上であった。

そもそもプロトタイラントには、T-002型や、T-103型と

異なりプログラミングでの制御が一切ない。そもそもタイラント計画は、圧倒的な戦闘能力と暴力性、そして生命力に加え、任務を遂行する兵士としての行動が可能な知能をタイラントに持たせるのが目的である。そのため、まずは圧倒的な戦闘能力・暴力性・生命力・知能を持った兵士を作るところから始めたため、機械などで制御をするということこそそもそも考えていなかったのである。まあ、言葉で言うことを聞けばそれに越したことはないからな。

しかし、結果として生まれたプロトタイラントはタイラントの基準に戦闘能力・暴力性・生命力以外は全く届いておらず、暴力性の赴くままに無差別に襲い掛かる姿は、兵士というより獣のそれであった事だろう。故に機械制御へと変更されたのだ。

そのため、制御されていないタイラントというものは人間の手に負えるものではない……筈なのだが――。

黒いトレンチコートに身を包んだ大男にしか外見上も見えないプロトタイラントが、庭に自分で作った普通のハーブ畑（ジュウロ）に如雨露（ジュウロ）で水やりをしている、姿を見ていると、あれが元々何であったかを私でも時々忘れそうになる。

他にもプロトタイラントは、リサとリバー（オセロ）シをしたり、洋服の洗濯を手伝ったり、ドアの修理を手伝ったりと、通常のB・O・Wならまず出来ないほど高い知能が必要なことを行っている。

他にも事前に教えた洋館のトラップを回避したり、何かのアンブルを持って迫るフォーアイズを避けたりと危機回避能力にもかなり長ける。また、最近は読み書きを教えているが明らかかな上達が見られ、既に簡単な日常会話ならば筆談が可能である。

そして、試みにアンブレラ養成所で拾ったカスタムハンドガン、ショットガン、グレネードランチャーに、アークレイ研究所の警備員が持ってきたサブマシンガンと、アサルトライフルの計5種類の銃器を同じ場所に置き、それらの銃弾をあえて実弾箱に入れず剥き出しで同じ箱に入れて置いておいた。そして、私が一度カスタムハンドの銃弾を箱から取り出して試射し、他の銃器の装填方法だけを銃弾を用いずに見せてからからプロトタイラントにさせてみたところ――。

装填した上で試射することを5種類の銃器で同様に行い、ほとんど失敗することもなかった。また、指が太いたため、引き金の大きさと派手な爆発からグレネードランチャーが気に入ったらしく、その後によく試射していた。

つまりプロトタイラントは、私が一度して見せただけで、銃器のおよその使い方を覚え。その上で箱の中の5種類の大きさや形状の異なる銃弾を適切な銃器に装填する事を言われずとも理解していたのである。

最早、認めるしかないだろう。プロトタイラントの知能は人間とあまり変わらないレベルにまで達していると言える。それに加えて、趣味嗜好や性格傾向といったものまで垣間見えるため、プロトタイラントは完全に兵器というよりも”兵士”であろう。

それならば、B・O・W.としては大失敗作だ。

確かにタイラント計画の最終目標は圧倒的な戦闘能力・暴力性・生命力・知能を持った兵士を作ることだった。しかし、これは理想であって、実際にあつてはならないことだ。

何せ、兵器ではなく兵士ならば、感情を持つことにより、奥底に野心を秘める、戦争への嫌悪を覚える、無償の愛を覚える、主人への離反や裏切りを覚える、そして正当な自由を覚える。それだけの下らない可能性が始めるのだ。そんな不安定な兵器があつていいわけがないだろう。B・O・W.には一切必要のないことだ。

まあ、それを言ってしまうえば私も同様の大失敗作となる。私を完全に制御出来た者は最初からこの世にいないのだからな。

とりあえず、今回の実験結果を省みて、シソハープとハーブティールは封印することに決めた。仮に今のプロトタイラントと同じものを100体製造したとしよう。それらが学び、憂い、叛逆すればタイラントらをトップとした国が出来上がり兼ねない。そうなれば人間を原料として量産されるタイラントが人間を確保して次々と製造され、すぐにタイラントと人間の戦争が勃発することになるであろう。流石にそんなものを私は求めていない。B・O・W.は兵器であらねばならぬのだ。

既にシソハーブの実物は消費し、植えていた土壌を焼いてから、数段強化した枯葉剤を散布して根の一部ですら残らないように徹底的に抹消した。フォーアイズにはタイラントの国などという面白そうなことを伝えれば、実際にやりかねないため、拡張性がないクセにアムブレラやテロ組織に渡ると、間違いなくロクなことにならないと、それもまた事実の嘘を伝え、ただの実験のひとつと認識させておいた。

すぐに彼女の目を引くため、このアークレイ研究所で私が襲撃してから研究を続け、未だに完成していない研究内容を伝えると、彼女はそちらの方に興味が移ったため、もう掘り返されることもないであろう。

さて、幸いにも始祖ウイルスは、アフリカのあの場所でしか今のところは生育出来ず、それを除けばオリジナルは私の中にしか存在しない。ましてや、その始祖ウイルスをラクーンシティ原産のハーブに振じ込むような真似をする人間がいるわけもないことが救いか。

……なぜ、私はハーブで世界の危機を考えなければならぬのだろうか？

女王ヒルの手記 7

1998年7月13日

私は元々、アークレイ研究所ではアンブレラ幹部施設強襲用のB・O・Wの製造と、今している研究の完成を目標にしていた。今日はそれが完成した記念すべき日である。

それというのはTーウィルスに対する特効薬の開発だ。

一応、既存のアンブレラ製のワクチンはほぼ100%に近い確率でTーウィルスを抑制することが出来るが、完全にウィルスを死滅させるには至らない。そのため、一定以上の段階まで感染が進んでいる人間には意味がない上、接種後も濃厚なTーウィルスを受けると活性死者化してしまう。それでは全くもって話にならない。

文字通り、接種した直後に体内のTーウィルスを全て死滅させ、永続的な感染予防が可能なほどの性能が必要だ。また、TーウィルスベースのB・O・Wや、イレギュラーミュータントに接種させれば、瞬時に即死させられるほど強い効果と即効性がなければならぬ。

この特効薬の合成に使うものは3つ。

まず、ハチの毒から生成できる”Vーポイズン”。これはプラント42の花粉からTーウィルスの二次感染を起こしたミツバチ——ワスプとその巣が寄宿舎にある。ワスプはウィルスの影響から巨大化、凶暴化し、毒性も高まっているため、うつつけであろう。それか私の麻酔液から生成できる物質でも可能だ。

次にTーウィルスに感染した生物の血液”Tーブラッド”。正直、これはどこにでも血袋が徘徊しており、天井や床にまでこびりついているので考える必要はない。

開発が難航したのはその2つと合成する薬品だ。これの組成を1ヶ月以上、トライアル&エラーを繰り返した果てにようやく満足の行く物が完成したのである。ちなみにそれは——この手記に記載しようとしたが、拾われた時を考えると止めておくか。まあ、

今さらということは何めないがな。

しかし、そもそもTーウィルスを誰が作ったと思っている。実はまだ最初の4匹のヒルのうちの1匹だった私の体内で、Tーウィルスの原型に変質したのだぞ。故に作り方も壊し方も誰よりもよく知っているのだ。何が、”Tーウィルスは、私が引き継ぎますよ”だウィリアムめ……。

そのため、3つ目の薬品の開発に難航していた理由は別にある。当然だが、生物兵器とは購入者が感染しないように確かなワクチンか、特效薬があつてこそ。そして、一度体内に投与され、役目を果たしたこの特效薬は、成分が合成時の物質から完全に変質するため、原料を特定するのは投与前の特效薬を解析しなければまず不可能。更に投与した者とは別の生物の体内に入ると、効力を発揮せずにアポトーシスにより自壊するように設定してあるため、投与者以外に効果を及ぼすこともない。

要するに私が自ら投与さえすれば、何人解剖しようともこの特效薬の組成が解ることは決してなくなるわけだ。これをラクションシテイで市民に使い、私が特效薬を与えたことを強調しつつ救出すればよい広告塔になる。完全なTーウィルスの耐性が欲しい小心者な国の代表や富豪は多額だろうと購入するだろうな。

兎も角、これでアークレイ研究所でやるべき事は全てクリアした。後は予備も含めて特效薬を1000本ほど製造し、現在進行中の実験を全て終わらせるだけだ。



1998年7月20日

またひとつ、有意義な実験が終了したので書き残す事にする。

これを語るにはまず、感染あるいは感染症について理解がなければならぬだろう。そもそも感染症とは、異種生物が生体内に使用し、一定の病変を惹起する場合を感染という。感染症は、感染経路および宿主と病原体の相互関係から成り立つのである。そして、感染の種類は――。

・水平感染

独立した個体から個体へと感染が波及する場合

例：

ヒトからヒトへの伝播（飛沫感染・経口感染・接触感染・経皮感染）
媒介動物による感染

・垂直感染

母親から子どもへ、胎内あるいは産道で感乗が波及する場合（経母乳感染を含む）

例：

胎内感染Ⅱ風疹ウイルスによる先天性風疹症候群、トキソプラズマ感染

産道感染Ⅱ新生児ヘルペスは産道での接触

・不顕性感染

病原体の菌力を上回ることで感染しても発病しない状態

例：

サイトメガロウイルス（ヘルペスウイルスの一種）

ポリオウイルス

・潜伏感染

免疫応答によって抗体ができた結果、病原体が体内で封じ込められ

たまま生き続ける

例：

単純ヘルペスウイルス

番状癒疹ウイルス

・日和見感染

健康人には感染症を起こしえないような病原性のきわめて弱い菌により起こされる感染症

例：

ウイルス（単純ヘルペス、サイトメガロなど）

原虫（トキソプラズマなど）

真菌（カンジダ、アスペルギルスなど）

結核菌

その他（緑色菌、サルモネラなど）

・混合感染

遺伝的に異なる2種またはそれ以上の病原体が同時に同一細胞に感染する状態

例：

インフルエンザウイルス

——簡単にまとめれば上記の6種類がある。まあ、今さら書くような事でもないがな。Tーウイルスはもっぱら水平感染だ。日和見感染以外の感染はしなくもないが、Tーウイルスが強過ぎるために滅多に起きることはない。その滅多というのが、遺伝的に異なる2種またはそれ以上の病原体が同時に同一細胞に感染する混合感染のことだ。Tーウイルスが別の何かと混合感染を引き起こすことで、Tーウイルス自体が変異を起こし、Tーウイルスの更なる変異ウイルスが誕生することもあるのである。もっぱら、Tーウイルスに欲しい特性を与える場合は、この手段が取られることが多く、アンブレラでもさされていることだろう。

しかし、ひとまず混合感染は置いておき、私は母親から子どもへ、胎内あるいは産道で感乗が波及する垂直感染に着目する。

それを踏まえて、アークレイ研究所に来てから、活性死者が条件次第でV—ACTにより、クリムゾン・ヘッドとは別の存在になることがわかった。名称については、アンブレラの電子掲示板で安価を募集したところ”リツカー”になったので、そのまま名称として使うことにした。

リツカーはT—ウイルスによって活性死者となった人間が、クリムゾン・ヘッドとは別の方向性で、V—ACTによる突然変異を起こしたのがリツカーである。同じく、V—ACTによって変異するクリムゾン・ヘッドとの違いは”充分な栄養を摂取するという内的要因による変異”がリツカーであり”攻撃や創傷、長時間の飢餓などの外的要因による変異”がクリムゾン・ヘッドである。

特徴としては、腐敗した肉体は皮膚と共に消え去り、脳が剥き出しになるが、強靱な筋肉が形成され、巨大で鋭い爪が生える。肥大化した脳は外部に露出し、足の進化により天井や壁を這うことが可能。知能はゾンビのそれと変わらず、本能に準じて捕食行動を行うが、状況によってはクリムゾン・ヘッドよりも俊敏である。そして、肥大化した脳に押し潰される形で視覚を失っているが、その分聴覚に優れるのだ。正直、クリムゾン・ヘッドより遥かに面白い変化に感じた。まあ、仮にリツカーが大量に生まれるような状況があれば、人為的に作らない限りは街でアウトブレイクが起きているレベルだろうから、早々お目には掛かれまい。

そして、そんなリツカーから、発想を得て思ったのだが――。

垂直感染を使い、妊娠した女性を活性死者に変え、妊娠した活性死者に十分な栄養を補給することでリツカーへと変異した場合、妊娠した状態のリツカーで育った胎児は一体どのようなものだろうか？

本来、通常の胎児はT—ウイルスに耐えきれないのだが、その辺りは10人に1人いるT—ウイルスに抗体を持つ母親ならば、胎児は同じくT—ウイルスの抗体を持つ可能性が高い。また、先に受精卵を多少調整した上で、胎児にリツカーになれるだけのV—ACTを投与しておけば、リツカーの胎内でも育まれるのではないかと考えた。

そして、T—ウイルスの抗体を持つ雌の研究員に調整した受精卵を

着床させ、直ぐに高濃度のT—ウイルスを注射して活性死者にすると共に飼育室で母体の栄養状態を良好に保ち続け、数日後に母体へV—ACTを投与することでリツカーへの変異を起こさせた。それが約1ヶ月前の話である。

しかし、正直、一番大変だったのが、リツカーの栄養管理だ。母体と子のV—ACTを安定させるためにも良好な栄養状態を維持しなければならなかったため、1ヶ月以上もの間維持をするには、とんでもない量の餌がいる。

そう言えば”ネプチューン”という名の鮫のB・O・W. が寄宿舎の地下にある大水槽にいたことを思い出し、それを解体して餌にした。大きな個体が1体と、小さな個体が2体いたが、リツカーの食欲に合わせて喰わせていたら食べ尽くしてしまった。お陰で、あの大水槽は今空っぽである。まあ正直、水棲生物のB・O・W. の開発など、まだ早過ぎるぐらいの段階だと個人的には思っているのでそれは別にいい。

しかし、リツカーの栄養維持はそれで足りなかったのである。元々が良好な栄養状態を維持したことで変異した個体だけあって、腹立たしい程の餌が必要であった。

そのため、苦渋の決断の末、ここまで来て乗り掛かった船を降りるのは癪だったので、私は”ヨーン”を絞めて餌にした。センチユリオンと同様に珍しく巨大化した変異体だったので何かの実験に使うとしていたが、まあ巨大化しただけの変異体ならセンチユリオンで間に合っている上、毒が強化されたというわけでもなかったもので、仕方なく餌にしたのである。

そして、ネプチューンたちとヨーンの犠牲という結果的にとんでもなくハイコストの実験にはなったが、リツカーの胎内で胎児は人間の10倍以上の速度ですくすくと成長していったため、私は何が出てくるのかを実に楽しみにしていたのだ。

そして、遂に今日。子供が誕生した。その姿は、まるで生皮を剥がしたかのような怪物そのものな外見で、人間だった頃の面影すら残していないリツカーとは違う。

5歳ほどの女兒とほぼ変わらない姿で産まれたそれは、両足部が手掌部と全く同じような作りをしており、膝関節の伸展角度が260度以上確認でき、股関節の伸展も明らかに人間の参考可動域を遙かに越えている。更に全身が血のように赤い肌をし、赤い瞳をしており、白に近い銀髪をしている。また、額に角のような突起が2本あり、腕にも同様のものが幾つか並んでいる。なんだが、見た目だけならば東洋の伝承に出てくる”鬼”の雌個体のように思える。

リツカーは産んだ子を直ぐに補食しようとしたため、仕方なく私が刺殺した。子供は直ぐに天井にジャンプして、足部の指で電灯を掴むとぶら下がっていたため、ひとまずはこの飼育室よりも頑丈な部屋を一時的な飼育室代わりにして、輸送するコンテナを製作するか。

キメラ α は私が試作しても知能の向上はなかったが、紛れもなくベースは人間そのものでありながら、生まれつきのクリーチャーとして製造された彼女は、どれほど知能があるのか実に楽しみなものだ。

このリツカーの突然変異体は”吊るさペンデッド”と名付けよう。

さて、これでアークレイ研究所で行っていた実験は全て片付いた。特にアンブレラからの動きは何もなく終えたが、2ヶ月という防衛期間も過ぎたため、もう私の片割れに義理立てする必要もないだろう。よってアークレイ山からの脱出を主目的とし、私が研究していた痕跡は可能な限り消去しておこう。何名か残った研究員は……フォーアイズに渡せば勝手に消費するか。私の研究の端で、色々作っていた様子のアイツも喜ぶだろうから丁度いいな。

アークレイ山は封鎖されてはいるが、この一帯は広大過ぎるため、脱出方法などいくらでもあるだろう。問題はどのB・O・W.をどのように持って行くかだな。兎も角、サスペンデッドの成長が楽しみでならない。

P・S.

名乗り出たので、フォーアイズにサスペンデッドの管理を任せただが、注意しておいたにも関わらず、新しい飼育室の換気ダクトに鉄

格子をして鉄条網を張らなかつたため、サスペンデッドが逃げ出した。

キレそう



「な、なんてことなの……!?!」

アンブレラ幹部養成所を一通り探索を終えた二人の男女のうち、かなり若い方な上に童顔で背の低い女性——レベツカ・チエンバースは、ホールに落ちていたため何気なく手に取り、読んだ手記の内容に驚愕していた。

隣にいる手錠を腕につけて首から認識票ドックタグを下げた右腕に刺青を入れて紺のタンクトップ姿の猟銃を持った若い男性——ビリー・コーエンも同様に顔をしかめている。

「なんだこりゃ、まるで妄想を書き連ねたノートだな……ゾンビと化け物どもが徘徊するのを見てなきや信じなかつただろうよ」

それは1998年5月5日から1998年7月20日まで、毎日几帳面に掛かれた日記と研究記録の結果のみを簡単にまとめた手記に他ならない。

何故か1998年6月25日から6月29日までの4日間の部分が破り採られ、1998年7月5日の内容もインクで塗り潰されてい

るため、読むことは出来なかったが、それでも数々の非道極まりない実験を、このアンブレラ幹部養成所の近くにあるというアークレイ研究所で、アンブレラの人間で人体実験を行っていたということが一目瞭然の内容であった。その上、ラクーンシティにバイオテロを仕掛ける計画までが書かれている。

また、手記には表紙に”ジャクリン・マーカス”という名が書かれており、筆圧がよく整った文字をしており、かなり字の上手い者が書いたことが伺える。また、中身の文字とも筆跡が一致するため、同一の人物が書いた物であろう。

「ウウ——」

「……？　どうかしたのか？」

すると、ビリーの着ているジーンズの革ベルトを小さな少女が手で引く。それは全身が真っ赤な肌をした”7歳”程の少女にしか見えない何かであった。

レベツカとビリーの二人が、このアンブレラ幹部養成所で発見し、その時に彼女は何かから脅えるようにクローゼットの中で隠れていた。それからは、最初に彼女を発見したビリーになつており、彼から片時も離れようとしない。

二人とも彼女が人間ではない何かであることは理解しているが、放つては置けなかったため、こうして連れて歩いているのだ。

しかし、保護されているだけと思えば、全くそんなことはない。可愛らしい外観に反して、少女は凄まじく伸びる上に貫通力が異様に高い舌を持ち、ゾンビやB. O. W. が二人を攻撃しようとするときそれを舌で攻撃していたため、かなり助かっていた。

「アアア——!？」

「一体どうしたんだ？」

そんな少女は突然取り乱した様子でビリーを引っ張ろうとする。その理由がわからず、二人はハテナを浮かべていた。

仮にこのとき少女が、二人が感じ取れない何かに恐れていたということに気がついて速やかにホールから立ち去れば、また違った結果となっていたかもしれない。

『見イツケタア……』

二人のいる真上の天井から聞こえてきたそれは言語ではあつた。しかし、二人がこれまでに耳にした男性からも、女性からも遥かに掛け離れ、決して人間が出せるようなものではない声であつた。

「ア……アア——」

少女がビリーの足に身を寄せたため、彼はようやく少女が酷く震えていることに気がついた。それと共に、最初に発見した時にクローゼットのの中に隠れていた理由は、この声の主から逃げるためだつたと気がつく。

そして、二人は頭上を見上げた。

「何あれ……」

「おいおい、嘘だろ……」

天井に虫のように四肢を全て使つて張り付いていたモノは、黒緑色の体色で頭部と背中が百合の花のように割れ、背中の割れ目から生やした触手を絶えず蠢かせている人型をした巨大なヒルであつた。

これまでも人型に集まつたヒルである擬態マーカスを何体も倒してきた彼らであつたが、それより遥かにおぞましく強靱で、全く別の存在と切り切れてしまえる程にソレは異形である。

そして、ソレは天井からホールの中央へと、音もなく跳ね飛ぶように二足歩行で降り立つ。

直立したソレは3m以上も身長があり、手足もそれに準じて明らかに強靱なもので、これまでの擬態マーカスとは異なり、手足に骨でも入っているかのようにふらつきもなく立っていた。

『3日……3日ダ。オ前ヲ探スノニ3日ヲ要シタノダ。ソノ間、脱出ノ準備ハ全テ”フォーアイズ”ニ任セテイル。オ陰テ不安テ仕方ガナイ』

「話してる……」

「俺は幻覚でも見てんのか……」

異形のヒルは二人に構うことなく、一步踏み出しながら少女に問い

掛ける。

『“サスペンデッド”、才前ハ私ノモノ私ノ研究ダ。手ヲ焼カセルナ』

「ウ……ウウウ——！」

『ホウ……恐怖ヲ覚エル機能ガアルノカ！ キヒヒヒヒ！ 実ニ……
実ニ興味深イ！』

そして、明らかに恐れた様子を見せ、ビリーの背に隠れて震える少女に対して、異形のヒルは興奮した様子で更に一歩足を踏み出す。その形相は二人さえも忌避と恐怖を覚える程であった。

そんな中、サスペンデッドという単語に思考を向けたレベツカは、頭の中である答えが閃き、異形のヒルの見えない位置で握っていた手記を胸の前に掲げ、“ジャクリーン・マーカス”という名と異形のヒルを交互に見た。

「アイツまさか……この日記の——！」

『日記イ……？』

初めてレベツカ言葉に反応したヒルの怪物はそう言うと、自分の腰部を手で触った直後、驚いたようにそこに目を向けて固まる。そして、レベツカが持つ手記に目を向けてから、再び腰部に目をやると最後にまたレベツカの手にある手記を見た。

そして、ヒルの怪物は大きく小刻みに痙攣するように全身を震わせ、表情のない体で全身から怒りを含んだ感情を表しているように思える。

そして、ビリーは猟銃を構え、レベツカはハンドガンを構え、ヒルの怪物を狙う。すると、ヒルの怪物は背中から何本もの触手を生やすと巨大な咆哮を上げ——。

『1ページ目ニ中ヲ覗クナト書イタダロウガア!?』

異形のヒル——ジャクリーンは、二人がこれまで見てきた擬態マーカスとは比べることさえ烏滸がましい程の瞬発力と速度で迫り、それに反応した二人の銃口からマズルフラッシュの炎を上げた。

女王ヒル ジャクリーン

女王ヒル——ジャクリーンが15 m程の距離を駆け出したと共に、まず放たれたレベツカのハンドガンの弾がジャクリーンの胴体に当たる。更に続け様に放たれたビリーの猟銃から無数の散弾が拡散し、胴体や頭部に命中する。

しかし、一切減速することなく、ジャクリーンは向かってきたため、ビリーは猟銃から2発目の散弾を放ち、今度は銃口の1 m程手前で女王ヒルの頭部を撃ち抜いた。

流石に頭部へ至近距離からの散弾を受けたことにより、ジャクリーンは衝撃で行動が止められ、頭部が後方に傾くと同時に二三歩後ろに後退する。

いい一撃を当ててやったと、結果にビリーは満足し——傾いていたジャクリーンの頭部が元の位置に戻ると共に、女王ヒルの胴体と頭部の様子を認識すると、目を見開いて思わず声を漏らした。

「おいおい、化け物かよ……」

ジャクリーンの頭部と胴体には無数の散弾とハンドガンの弾頭が、深くとも精々5 m程でその強靱なゴムのようでしなやかな軟体の肌にてめり込んでいたのである。

そして、ジャクリーンが力むような動作を取ると、表面に埋まっていた弾丸が内側から押し出され、ボロボロと床に落ちていく。それが終わった後の女王ヒルの表面には、的屋にあるような安物のエアガンで発泡スチロールを射ったときに出来るような穴が無数に空いただけで、全くダメージになっっている様子はなかった。

更に表面が一時的にヒルに戻ってから再結合すると、その穴さえも無かったかのように滑らかな表面に戻る。

「下がってビリー——」

レベツカのその言葉に、啞然としていたビリーが、まだ彼の背に隠れている赤い少女を片手で抱き上げると、そのまま飛び退く。

その後、液体が並々と入り、飲み口から火の着いた布が覗く瓶がジャクリーンの足元で割れる。

『オ、オオ……!?!』

「ヒルなら火にも弱いでしょう!?!」

実際、その通りらしく、ジャクリーンは火炎瓶により下半身が燃え上がり、それに苦悶するような声を上げていた。

「まだっ!」

そして、ジャクリーンが悶絶している最中、レベツカは次の火炎瓶に火を着けると、更に女王ヒルの胴体へと投擲する。それは弧を描いて飛び、女王ヒルへと殺到したが、直前にジャクリーンの腕に掴まれて不発した。

「なっ!?!」

更にジャクリーンは全身から体液を分泌させ、下半身と床に着いた炎をたちどころに消してしまふ。

『木造ノ建物内テ炎ヲ使ウナ』

二人に向けて、肩を疎めるような動作をしながら、ジャクリーンはそう言うのと火炎瓶の布を取り、中身の燃料を頭頂部の口に瓶を傾けて流し込んでしまった。空き瓶に戻ったそれは床に優しく置かれ、コツンという反響音が嫌に大きく響き渡る。

そして、直ぐにジャクリーンは動き出し、片腕を宙に構えてレベツカに向けると動きを止め——その後、手の中から一匹のヒルが弾丸のように凄まじい速度で発射され、レベツカの胸部に激突した。

「——ツ!?!」

ハンマーで殴られたような衝撃がレベツカを襲い、肺から空気が吐き出されると共に後ろに倒れ込む。更にレベツカの胸部に放たれたヒルが体内に入り込もうともがいていたが、S・T・A・R・S・で正式採用されている防弾チョッキを着ていたため、喰い破ることは叶わなかったらしい。

「レベツカ——」

レベツカが撃たれたことで、ビリーがそちらに気を取られ、悲痛な叫びを上げる。しかし、その時間を待つほど、ジャクリーンは戦いを

楽しむ存在ではない。

「しま——ガッ!？」

ハツとしてビリーがジャクリーンの方を見ると、既に目の前まで来ており、彼の胴を女王ヒルの腕が水平に襲い、体を弾き飛ばされた。壁まで吹き飛ばされたビリーは背中から激突し、肺の中の空気を全て吐き出す。

なんとか、ビリーが痛みを堪えつつ立ち上がろうとすると、彼に向けて既にジャクリーンは腕を構え、ヒルの発射体勢を取っていた。

レベツカと違い、ビリーは防弾チョッキは着ていない。その状態でジャクリーンのヒルをマトモに受ければ、只では済まないであろう。しかし、既に現在の二人は一時的にとはいえ戦闘を続行出来る状態ではなく、止められる状態でも避けられる状態でもない。

そして、ジャクリーンからヒルが発射され——。

「アアアア——!!」

『又……?』

その直前に、ビリーが吹き飛ばされたところで佇んでいた赤い少女が、斜め下の位置からジャクリーンが構えている片腕を目掛けて舌を伸ばしたことで、女王ヒルの射線が逸れて攻撃が中断される。

それだけでなく、赤い少女の舌はジャクリーンの間で言えば二の腕に当たる部分を完全に貫いており、傷口から明らかに人間のものではない鮮やか過ぎる色をした体液が溢れた。

『ホウ、コレハコレハ……大シタ威力ダナ。中々、狙イモ悪クナイ』

すると自身の腕に突き刺さる舌を見ながら、ジャクリーンは興味深そうに貫いた舌と、赤い少女が舌を伸ばしている様子を交互に見ながらそんなことを呟く。

『ダガ、次ガナイゾ?』

そんな問い掛けをジャクリーンが赤い少女に対して行った直後——レベツカから火炎瓶が飛んで来ていることに目を向けた女王ヒルがもう片方の手で火炎瓶を掴もうと手を伸ばす。その間に赤い少女は女王ヒルの腕から舌を抜いた。

『ダカラ火気ハ——』

その言葉はキャッチする直前の空中で、火炎瓶が発砲音と共に粉々に爆発し、四散することで中身がジャクリーンの全身に振り掛かったことにより止められた。

「その澄まし顔が気に入らねえ」

見ればビリーが構えたハンドガンの銃口から細い煙が立ち上っており、それを認識した直後、ジャクリーンは上半身を中心に全身が燃え上がった。

『ガアアアアア——!?!』

やはり炎はこれまでの擬態マーカスと同じく有効らしく、ジャクリーンの硬度がありつつも柔軟な肉体にも明らかにダメージを与えている。

しかし、全身から分泌液を出すという消火手段を持ったため、長時間の効果は見込めず、怯みつつも徐々に立ち上る火の手が小さくなって行く中、ビリーが叫んだ。

「足だ！ 小さいの！」

「——!?!」

その言葉によって赤い少女はジャクリーンの右足の大腿部を舌で貫く。銃弾は通さないが、何故か彼女の攻撃は有効らしく、それによってほんの少しだけ女王ヒルの体勢が右に傾く。

「うおおおおお!!」

そして、指示を出した直後にビリーはジャクリーンに向かって駆け出すと、懐からナイフを取り出し、そのまま女王ヒルの胸に目掛けて突き刺すと共に全力でタックルを行った。

『!?!』

(やはりコイツの体は……防弾には優れているが、防刃はほとんどない!)

赤い少女の舌が貫いたときからビリーはそうなのではないかと考えていたが、柄までナイフが深々と突き刺さり、炎と唐突なナイフで怯んだことで、タックルによって突き飛ばされ、2〜3m後方に後退したジャクリーンを見てビリーはそう考えていた。

そして、短い時間の中で相棒と呼べるだけの数奇な運命を共にして

いるレベツカに、ビリーは声を張り上げる。

「レベツカー！」

「あれね！」

その促しによって、レベツカはハンドガンを構え――。

丁度、ジャクリーンの真上にあり、女王ヒルの倍以上大きさのある巨大なシャンデリアを吊るしている一本の鎖に目掛けて射撃した。

『

キンツと金属と金属がぶつかる小さな音が聞こえた直後、何か引きちぎれる異音を頭上から聞いたジャクリーンが上を見上げた直後、女王ヒルは大量の氷柱が生えたような鋭利なシャンデリアにより全身を刺し貫かれながら押し潰される。

ジャクリーンの背中の中から伸びる触手は暫く蠢いていたが、最後には力なく倒れ、女王ヒルは床に伏したまま動かなくなった。

「やった……?」

「ああ……勝ったようだな」

「ウウウ……」

「……………よくやったな小さいの」

「アアア――」

勝利を喜び合い、ビリーに褒められつつ撫でられた赤い少女は嬉しそうに目を細め、彼にすり寄っていた。とんでもない怪物を倒してしまったと達成感や放心感を味わいつつ、次はこのアンブレラ幹部養成所の奥に進もうと考え――。

ホール内に、一体これまで何処にそれだけの数がいたのか、全身を黒い装備で身を包み、アサルトライフルかサブマシンガンで武装した集団が雪崩れ込んできた。

「な、何よ!?!」

「なんだ!?!」

ジャクリーンを倒した直後、と言うこともあり、完全に気を抜いて

いた二人は完全武装した集団に敵う筈もなく組伏せられる。更に赤い少女も口を塞がれて縛られ、ホール内は完全に制圧された。その数は優に30人前後はいる。

そして、彼らの装備の背には赤と白の二色で描かれたアンブレラ社のロゴマークが刻まれていた。

「班長。確保しました」

その中で、ひとりの隊長格の男がトランシーバーで誰かと会話している。そして、その内容がまとまったようで、隊長格の男は隊員に指示を送る。

「戦闘データは十分とのことだ。S・T・A・R・Sの女は引き続き拘束し、男は殺す。残りの2体は研究所に直接輸送する」

直ぐに指示に従い、二人を押しさえつける人員と隊長以外の黒ずくめの集団は動き出し、ジャクリーンの周囲と赤い少女の周囲に集まる。

まず、ビリーへと隊長は持っているサブマシンガンの銃口を向け――次の瞬間、ホール内に乾いた1発の銃声が響き渡る。

直ぐに空になった藁藁が床に落ち、硬く小さな金属を虚しく響かせた。



「よしっ！ よしっ！ 道理で一班と二班が壊滅したわけだ……」 三班の投入を踏み切ったのは正解だったな！」

アンブレラ幹部養成所の奥にある研究所の区画で、アンブレラ幹部養成所内全体を監視できる監視部屋にて、二人の男がモニターを見つめていた。

片方は歓喜の震えを抑えられない様子で立ち上がって叫んでいる。白衣を着た金髪の男性。手元にマイクを持っており、部隊に指示を出している様子が伺える。

そして、もう片方はそれと反対に冷静な様子でモニターのうち、シャンデリアに潰されているB・O・Wを映し続けているものを、座ったまま何をするわけでもなくただじつと眺めている短めの金髪をした男だった。

「わかるだろアルバート！ あのヒルのB・O・Wは既存のB・O・Wの能力を遥かに超えている！ 言語能力を持ち、火が着けば消火する危機回避能力も持ち合わせ、タイラント並みに強靱な体を持ち、天井を伝って移動すら出来る！ 仮に量産が可能になれば、タイラントすら必要なくなるぞ！ これだけでも養成所再利用計画をしようとした価値はあつたんだ！ 流星はマークス博士だな……！」

白衣着た男性——ウイリアム・バーキンは興奮冷め止まぬと言った様子であり、既にヒルのB・O・Wを自身の研究に役立てることを夢想しているように見えた。

「フフ……それにあれだけ強靱で利口なB・O・Wなら”G”にも適応するかも知れない……！」

「ウイリアム。今すぐ兵を下げる。全滅するぞ」

サングラスを掛けた金髪の男——アルバート・ウエスカーは真剣な表情でそう呟く。更に彼はサングラスを取ると、まるでこれから更に起こる事を眺めるように、頬杖を突いてモニターに映るヒルのB・O・Wから目を離さずにいる。そんな彼の表情は何処か愉しげに見えた。

「誘い込まれた……あるいはパンドラの箱に手を掛けたのはこちらだ……アレは今の我々の手に負える相手ではない」

「何を——」

ウイリアムが、その言葉の続きを話そうとした時に、丁度モニター

から銃声が響いたため、彼は嬉々とした表情でそちらに目を向けた。



ホール内にいる隊長に発砲された筈のビリーと、その近くで組伏せられているレベツカは驚いた表情をしていた。感染対策のマスクをしているため、表情は伺えないが、この場にいる全ての隊員も似たような顔をしている事だろう。

何故ならビリーにサブマシンガンを向けていた隊長の頭部が弾け飛び、力なく床に叩き付けられたのだから。

そして、銃声が上がった方向を見れば、倒したと思っていた筈のジャクリーンの腕が真っ直ぐに隊長の頭があった方向へと伸び、更に腕の中からショットガンが生え、掌から銃身が顔を除かせていた。

その銃口から立ち上る細い煙を見れば、何が起きたのかは明白だろう。しかし、特にアンブレラに属する彼らの驚愕は想像を絶する。

”人間の銃器を使うB・O・W。”など存在しない筈なのだから。

『アンブレラアアア……!!』

そして、底冷えするような人間とは決して言えないあの声が頭頂部の口から再び漏れ、その場にいる者に恐怖を植え付ける。

「コイツまだ生き——」

最もジャクリーンの近くにおり、サブマシンガンを持った隊員が銃を構えようとするが、その前に女王ヒルの腕が、その隊員の顔に向き、暗い銃口を見据えた。

「あ——」

そして、ついさつき、薬莖が落ちたということはポンプアクションが既に回転しているということを示しており、何が起こるか気づいて声を上げたが、一切躊躇なく発射された散弾は隊員の頭を容易に跡形もなく吹き飛ばす。

更に、即座にハンドグリップがジャクリーンの片腕の中で往復するとポンプアクションが回転し、薬莖が腕の中から排出され、次に近い隊員へと銃口を向けて即座に発射する。B・O・Wの凄まじい怪力により、一切発射後の反動をもともしないため、ポンプアクションから狙いを定めて発射までの時間が人間には不可能なレベルで恐ろしく速い。

「う、撃て！ 撃てええ！」

隊員らは3人射殺されたところで、ようやく現実味を帯びて我に返り、レベツカとビリーを抑えている者以外のほぼ全ての隊員が、まだシャンデリアの下敷きになっているジャクリーンへ向けて一斉に支給されているサブマシンガンを放ち、蜂の巣と化す。

『アンブレラアアアア——……!!!』

しかし、どれだけ撃とうとも決してジャクリーンは怯むことすらなく、身に受けたサブマシンガンの銃弾を次々と体外に排出しつつ、自身の背に突き刺さるシャンデリアを片腕で支え、それごと徐々に立ち上がった。

その間にもショットガンを内蔵した片腕は射撃とポンプアクションを繰り返し、3人の隊員を仕留める。

「くっ……くそっ!? まるで効いてない!? これでも食らえ！」

B級パニック映画からそのまま現れたかのような存在による恐怖

に堪えきれず、ひとりの隊員がグレネードのピンを抜いて投擲し——背中から伸びるジャクリーンの触手に掴まれ、そのままボールのように投げ返された。

「えっ——？」

自身が投げたグレネードでひとりの隊員が吹き飛び、更にその間に2人の隊員がショットガンで撃たれた。そして、ショットガンの八発の装填数を迎え、リロードしなければならなくなった為か、ショットガンが腕の中から排出され、直後に代わりとばかりにカスタムハンドガンの銃口が掌から覗く。

「うっ……!?!」

「足があ!?!」

そして、ベリーとレベツカを拘束していた隊員の防弾チョッキやマスクで覆われていない手足の血管や神経が集中している場所を的確に射撃しつつ、地面に散乱している殺した隊員が用いていたサブマシンガンを手でベリーへと弾き飛ばし、更にレベツカに掌からカスタムハンドガンをヒルの飛ばしたときよりもやや遅く射出する。

「——!」

これを好機と見たベリーはサブマシンガンを、レベツカはカスタムハンドガンを拾い上げて、それまで自身を拘束していたジャクリーンに撃たれた隊員を撃ち倒す。

そして、赤い少女を拘束していた隊員に放って倒すと赤い少女を救出し、被弾をしないように3人でホールにある柱の影に隠れた。

その間に、尚も隊員からのサブマシンガンによる掃射を一身に受けながらも、両手を使ってシャンデリアを浮かせて立ち上がると共に、体に突き刺さった幾つもの部分を勢いよく引き抜く。

そして、体から引き抜いたシャンデリアを少し高く掲げると、隊員の一人に向かって投げつけた。

「えっ……ぎゃああああ!!?!」

その隊員はジャクリーンのようにシャンデリアに全身を串刺しにされ、断末魔を上げながら息絶える。

それに目を向けることすらしないジャクリーンは、人間が首を鳴ら

すような動作をした後、背中の触手で近くのサブマシンガンを2丁引き寄せると、両腕で呑み込むように装着して構え、更に幾つかのマガジンを背中の触手で拾った。

サブマシンガンを撃つてくる隊員に対し、ジャクリーンは両腕に繋がれた2丁のサブマシンガンで応戦し、2つの銃口から激しく断続的なマズルフラッシュが繰り返される。

それが始まると、隊員はこれまでよりも遥かに凄まじい速度で消えて行った。何せ、ジャクリーンが放つサブマシンガンは人間とは違い、一切の反動による手振れがないため、異様に正確かつ、女王ヒルが行動を阻害するために手足か、一定以上は防弾のしようがない首筋のみを狙っている。その上、物陰に隠れた隊員には、近くの死体からグレネードを触手で拾い上げて投擲して炙り出し、逃げたところに掃射を掛けて殺す。恐ろしいほど効率的に命が刈り取られていく反面、グレネードを投げれば凄まじい反応速度で投げ返される上、女王ヒルには隊員側のサブマシンガンは全くの無力と言っている。

『アンブレラアアアアア——……!!!』

そして、明らかな怨讐を込めて女王ヒルは吼える。その光景を柱の影から見守るしかない二人は、アンブレラの部隊が、絶対に呼び起こしてはいけない悪魔を相手にしたということを感じていた。

時間にして、最初にジャクリーンが隊長の頭を吹き飛ばしてから約1分ほど。女王ヒルのサブマシンガンによる掃射は最初に集めたサブマシンガンの弾倉まで使い切ったことで一旦止まり、背中の触手を伸ばしてサブマシンガンの弾倉を探し始めた。

そして、ホールにつきさつきまで30人ほどいた隊員の残り人数は3名である。

「ひ、ひいひい……!!!?」

するとひとりの悲鳴を皮切りに、3人は役目も何もかもを全て投げ捨ててひとつの扉に向かって一目散に走って行く。ジャクリーンは既に弾倉を見つけて再装填を終えた2丁のサブマシンガンを彼らの

背に向けたが、扉が唐突に開き、入って来た人物を見た女王ヒルは、サブマシンガンの銃口を上に向けて攻撃を止めた。

最後に残った3名の隊員が向かったその扉を頭を下げ潜るようにホールに入つて来た者は、250cm以上の背があり、黒いトレンチコートと帽子を纏った大男である。

それを見た3名は唾然とした様子で立ち止まり、ひとりが口を開く。

「た、タイラント……なんでこんな——」

大男——タイラントと呼ばれたB・O・Wの手には、館の仕掛けのひとつにあった騎士甲冑が握っていたトウーハンデッドソードの柄が片手で握り締められていた。

「——！」

そして、タイラントはトウーハンデッドソードを凄まじい腕力と多少の技量を感じさせる振り方で、豪快に水平に薙ぐ。それにより、2名の隊員の上半身を通り抜け、一拍置いてから2名の隊員は胴体から泣き別れになり即死する。

「あ、ああ……ああ——」

残り1名の隊員はタイラントから少しでも距離を取ろうと後ずさったが、続けざまに縦に繰り出されたトウーハンデッドソードの一閃により、三人目の隊員は正中線をなぞるように、体を縦に真っ二つに切断された。

そして、タイラントは切り捨てた死体を目に映すこともなくジャクリーンの前までやって来ると、一旦トウーハンデッドソードを床に置き、胸ポケットから手帳とペンを取り出して待つ。

『ナンダ、仕掛ケノ剣ヲ回収シテキタノカ?』

ジャクリーンはそう呟きながら、2丁のサブマシンガンを腕から床に落とすと、最初に使っていたショットガンを拾い上げる。そして、おもむろ徐にショットガンの弾を取り出すと装填を始めた。

するとタイラントは手帳にペンで文字を書き、ジャクリーンへと見せる。

《剣はいいですね。近くにいる敵を簡単に一度で倒せますし、銃器と

違って悪戯に弾を使う事ありません。持つておいて損はないと思
いました。移動にかき張りますかね?》

『ソウカ。父ノ”ヘソクリ”ヲ回収シテイルヨウダシ、他ハナニモ言
ワンサ』

見ればタイラントの背には一時的に床に置いてある物と、同じ
トウーハンデッドソードは5本束ねて背負われていた。

更にタイラントには余りに小さいため、ウエストポーチのようにな
りつつ、片方の肩についたリュックからは、入り切らなかつたのか、金
の延べ棒がハミ出ている。

《それに》

そこまで書いたところで、両手足をジャクリーンに撃ち抜かれた
が、致命傷は免れた1名の隊員が這って逃げようとしている姿に目を
向ける。

ジャクリーンはなんの躊躇もなく、シヨットガンをその隊員へ向け
たが、タイラントはそれを手で制す。その際に小さく笑みを浮かべた
ように見え、手帳とペンを胸ポケットに仕舞うと、床に置いたトウー
ハンデッドソードを拾い上げた。

そのまま、その隊員の背後に向かったタイラントは、隊員の背中を
軽く片足で踏んで移動できなくする。

「た……助け……たっ——ぎひい!？」

最後にトウーハンデッドソード両手で構え、下向きに切っ先を向け
ると力の限り振り上げ、真上からギロチンのように首を切断する。そ
して、奇妙な断末魔を最期に一度大きく体が跳ねると2度と動かなく
なつた。

それを終えると、タイラントは服に付いたポーチからやや硬質の布
を取り出し、トウーハンデッドソードの血を拭うとポーチに布を戻
す。そして、胸ポケットから再び手帳とペンを取り出すと、書いた文
をジャクリーンへと見せる。

《殺した手応えがある武器の方が好みです》

『ソウカ、マア、才前ガソウ言ウナラ好キナモノヲ見ツケレテヨカツタ
ナ。凶暴性ハ変ワツテナイヨウデ何ヨリダ』

するとジャクリーンは、自身の胴体にショットガンを当てると、ショットガンは泥濘ぬかるんだ沼に沈むようにぐじゅぐじゅと音を立てながら体内に収納された。どうやら、何も無い場所から銃を取り出していたのはこういう仕掛けらしい。

それを終わるとジャクリーンはサブマシンガンをひとつ拾い上げ——その途端、女王ヒルの全身が蠢蠢き、これまでの怪物のような姿から、スーツ姿のとある老人——肖像画と同じジェームス・マーカスの姿へと変貌を遂げた。

「触手……？ 爪……？ 舌……？」

そして、わざわざ呆れたような様子で大袈裟に肩を竦めて首を振って見せると、ホール内の天井に設置された監視カメラのひとつに頭を向けて、また言葉を吐く。

「B. O. W. に使わせれば、銃の方がずっと強いに決まっているだろう？」

それだけ言い終わると老人は歯を見せて笑い、サブマシンガンを構えると監視カメラを発砲して破壊し、更にホール内にある全ての監視カメラにも同様に破壊した。

「やて……」

ゴトリとサブマシンガンを床に投げ捨てたときの反響音が酷く大きく木霊する。更にいつの間にか、その手にはビリーが女王ヒルに突き刺したナイフが握られている。

「大方、わかったかね？」 アンブレラ」という企業の実体が」

アンブレラの隊員の鮮血で真っ赤に染まりきったホールの中央に立ち、タイラントを伴う老人——ジェームス・マーカスは、そのナイフを物陰に身を潜めるビリーとレベツカの近くに放りつつ声を掛ける。

二人は警戒を強めながら、それぞれサブマシンガンとカスタムハンドガンを向け、マーカスと対峙した。

それに対して、タイラントが剣を構えて前に出ようとしたが、マーカスは手で制して止めた。するとレベツカの方から口を開く。

「あなたはジェームス・マーカスじゃなくて、ジャクリーン・マーカス

でしよう……?」

「クククツ……最初は君らを殺すつもりだったが、気が変わったよ」

レベツカの問いにそう言うと、ジェームス・マークス——に擬態したジャクリーンは少し嬉しげな表情を浮かべ、ビリーを見つめた。

「君は囚人か、軍人かと思ひ。何処かのタイミシングで投入された烏合の衆のアンブレラ^U バイオハザード^B 対策部隊^Sの生き残りかと考えたが、そのわりには妙に骨がある。加えて、あの忌々しいロゴも見当たらない」

「……………」

ビリーはそれに答えないが、特に気にせずジャクリーンはレベツカへと視線を向ける。

「無論、そちらのお嬢さんも違うと見える。そも奴らは、ビリー君を殺そうとしていた。敵の敵は味方とまでは言えんが、殺す必要もない。生かした方がアンブレラの不利益になる。アンブレラではない者が、アンブレラに立ち向かうことを止めるような真似はしないさ」

「……随分お喋りなのね」

「父譲りの癖みたいなものさ」

そう返したジャクリーンはくつくつと笑い、最後にビリーに隠れている赤い少女——サスペンデッドへ目を向ける。

「まあ、私の製造したサスペンデッドの評価もそれなりに出来た。こちらもこれからは少し潜伏する為、身軽な方がいい。その子はくれてやろう。細やかなプレゼントというものだ」

「——！ 気に入らねえな。コイツの命を玩具のように……!」

「ほうほう、そこまで君が愛着を持っていてくれるならば、そのサスペンデッドも冥利に尽きるだろう」

明らかにサスペンデッドをモノ扱いしているジャクリーンにビリーが声を上げると、ジャクリーンは興味深そうにそう返し、更に口を開いた。

「その者の価値とは、他者にどう扱われ思われているかによって全てが決まる。私にとっては好奇心で生み出したB・O・W。以外の価値は一切ないが、ビリー君にとって、人間のように思われ、家族や友

人のように大切に思っていてくれるのなら、それはとても幸せなことだろう。私もかつてはそうであったように」

「コイツ……!」

突如として、どの口が言うのかとばかりに博愛や無償の愛を語るジャクリーンにビリーはより怒りを向ける。

しかし、日記の内容を思い返し、その所々に人間らしさがあるとも感じていたレベツカは口を開く。

「お父さん——マークス博士の復讐……それがあなたの目的なのね？」

「左様。故にあのような企業とオズウエル・E・スペンサーを野放しには出来ん。何もかも全てを捧げ、この身を使い潰してでも必ずや滅ぼして見せるさ」

「——!? だとしたら尚更そんなやり方じゃ——」
「くだらん」

嗜めようとしたレベツカの言葉をジャクリーンは途中で遮る。

「仮にだ。君たちがここで見て、感じた全てを、如何に真実を語った所で、そんな与太話を信じる者が何処にいる？ あのアンブレラが生活基盤と化している街で誰が耳を貸すというのだ？ それともアンブレラにでも訴えるか？ ちなみにだが……アンブレラは現時点でアメリカ政府との癒着もあるぞ？ 少なくともアンブレラとアメリカ政府、ついでにラクーンシティ。全てを一度に相手にするだけの手段と考えが君にあるかね？」

「そ、それは……」

「止めろレベツカ。コイツはもう、ほとんど死兵だ。言って止まるよ
うな奴じゃない」

そもそも価値観が違い過ぎる。今の姿形は人間とよく似ているが、その中身はさつきまでの怪物の姿とそう変わらないであろう。

「さあ、私の手記を返して貰おうか。言った通り、君らが何を語ろうともアンブレラに揉み消されるため、私にとっては取るに足らん事だが……それだけはアンブレラに渡ると少し面倒だ」

話は終わつたとばかりにそう言つて、ジャクリーンはレベツカに手

を向ける。すると片腕だけが女王ヒルの姿に変異し、10 m以上伸びてレベツカの目の前で止まり、不揃いで歪ながら指のような機能を持つ掌を向けた。

「……………わかったわ」

ここで渋って、事を構えれば殺されるのは間違いなくこちら側のため、レベツカはその異形の手に手記を渡した。

「ありがとう。ちなみにラクーンシティの襲撃は、下調べやこちらの基盤も固めなければならぬため、私の予定では来年度以降だね。遅くとも20世紀のうちには遂げたいところだ」

直ぐにジャクリンは手を縮めてジエームス・マーカスの腕に戻し、手記を捲って内容を確かめてから、擬態で作ったスーツのポケットに入れる。

「まあ、それなりに楽しめた。故に君らがラクーンシティに近付かない事を祈るよ」

それだけ言うと、ジャクリンはタイラントと共に踵を返してホールから去って行く。

そのときに、同伴していたタイラントが自身の帽子を取って、こちらに会釈した姿が酷く印象に残った。

赤いオリビア

「全滅……だと……？」

破壊されて砂嵐だけが映るようになったホールを映す画面を唾然としつつ、放心した様子でウイリアム・バーキンはそう呟いた。

「ば、馬鹿な……主力ではない急拵えの部隊にせよ、本社のアンブレラ^s。保安警察部隊^sだったんだぞ?! それがこんなにもアツサリと……ここ、このままでは私のアンブレラでの立場が——」

「美しい……」

ウイリアムが悲壮な表情をしていると、隣のアルバート・ウエスカーがポツリと言葉を溢した。

「剣を扱い、筆談を行うタイラントだと……？ まさか、複数持っているということは刃毀れによる劣化を考えて予備を持つ知能を有しているというのか……？ あれこそ完璧な兵士ではないか……」

誰に言うわけでもなく、独り言を呟くアルバートは多少陶醉したような様子も見え隠れしており、普段そのような姿を見せない友人の様子にウイリアムは驚いた表情を浮かべる。

「ああ、悪い……まあ、お前の立場は問題ないだろう。今の一部始終は録画してある。それを本社に提出すれば、10年近く放置された施設で、タイラントをも超える謎のB・O・Wに部隊を壊滅させられたと理解し、流石に誰かを吊し上げることも出来まい」

「そ、そうか……そうだな。機密保持のためにこの施設を爆破すれば問題はない筈だ」

アルバートはウイリアムにそう言って、落ち着かせた後、少しだけ眉を潜めて落胆した表情を浮かべつつ立ち上がり、置いていたサンダラスを掛けた。

「この辺りが潮時だな。此度のT-ウイルス漏れと、それを本社の部隊ですら終息できなかった。アンブレラはもう終わりだ」

「裏切るのか!？」

それに対して、ウィリアムはアルバートが裏切ることに対してと言うよりも、今この時点で裏切ることには驚いたと言った様子を見せる。

「私は嫌だ！ まだ、Gが完成していない！」

ウィリアムの叫ぶような声を聞きつつも、アルバートはエレベーターへと向かい、行き先ボタンを押しつつ彼に答える。

「好きにしろ。俺はこれからアークレイに行き、予定通り
S.^スT. A.^{ター} R. S.^スでB. O. W. のテストを行う。あの化け物が
マーカス博士の忘れ形見だというのはならば、その日記を拾ったレベツ
カには私のことを知られているかも知れんが……まあ、その辺りは上
手く立ち回るさ……お前も上手くやれよ」

「……………ああ」

そうして、エレベーターの扉が閉まる。これが、アンブレラ幹部養成所からの付き合いであり、互いにそれなりに気の置けない関係の二人の最後の会話であった。

実際、後世でアルバート・ウエスカーという孤高の男の生涯を見ると、友と呼べる存在はウィリアム・バーキンただひとりだったのかもしれない。



全てが終わり、朝陽を眺めたビリーが地面に大の字で寝転がりつつ

思っていたのは、生き残りアンブレラ幹部養成所を脱出した喜びと、”あつちのヒル野郎は大したことなかったな”という若干の落胆である。まあ、後者の比較対象は、ホールで交戦したジャクリンという名の女王ヒル自身が日記で、進化の袋小路に自ら入っていったんだとボロクソに扱き下ろしていた個体のため、それも仕方ないことであらう。

「ミアアアア——」

すると寝転がったビリーの様子を見てか、赤い少女もその隣で寝転がって見せる。その動作が酷く可愛らしく、ビリーは少しだけ頬を緩めた。

そして、赤い少女を見ていたことで、これからどうするのかということ进行、ジャクリンが言ったあの言葉を思い出す。

『その者の価値とは、他者にどう扱われ思われているかによつて全てが決まる。私にとっては好奇心で生み出したB・O・W以外の価値は一切ないが、ビリー君によつて、人間のように思われ、家族や友人のように大切に思っていてくれるのなら、それはとても幸せなことだろう』

とても癪ではあるが、その通りだとビリーは考える。実際、このまま彼女をアメリカ政府にでも突き出せば、実験動物や、アンブレラのサンプル以上の価値がないまま、一生を終えるのが関の山であらう。

ビリーは立ち上がり、隣にいるレベッカに向き合った。

「なあ、レベッカ。俺は別にどうなつてもいいが……コイツはどうにかからないか？」

これからレベッカは今いる丘からも見える洋館に向かうということとを聞かされていたがそう言った。それほどまでに赤い少女のことが心配なのであらう。

するとレベッカはビリーから認識票ドックタグを取り、ビリー・コーエンは死んだということとを彼に伝える。そして、笑顔になると赤い少女に目を向けてから彼に目を移す。

「私にはまだ任務があつて、アンブレラからその娘を守れないと思う。だから……その娘の事をどうかお願い」

「……………ああ」

「ウウウ？」

何もわかっていない様子で、立ち上がってビリーに触れている赤い少女は首を傾げている。

そして、何故か口を開いた。舌を伸ばす相手がいなくてもそうしたことに二人が疑問を抱いると、赤い少女の舌が動き出す。

「びりい……………ればか……………」

「しゃべった!？」

「……………ツ!？」

それはアンブレラ幹部養成所で見つけてから、脱出するまで赤い少女が唸り声以外に初めて放った明確な言葉であった。それに加えて、稚拙ではあるが、二人の名前を言葉にしていた。

「レベツカ! 私レベツカよ!？」

「ればか……………?」

「レベツカ!」

「ればつか……………!」

「そう、レベツカ!」

「ればつか!」

レベツカが自身の名前を言いながら嬉しそうに笑うと、それに釣られてか笑顔になり、言葉を繰り返す赤い少女。その姿はどう見ても化け物ではなく、ただの少女でしかなかった。

「ねえ、ビリー? この娘に名前を付けてあげたら?」

「びりい?」

「俺が……………?」

ビリーはレベツカの提案に驚いたが、首を傾げて彼の名前を口に出す赤い少女を見ると、名前は必要なものだと思えるようになる。

「なら——」

そして、ビリーは赤い少女の前に出ると少し考えた後でポツリと言葉を吐く。

「お前は“オリビア”だ」

オリビアとは日本ではナデシコと言った方が有名な花の名である。ピンク、白、赤、紫などの色があり、花言葉は大胆・純愛・貞節などがある。ビリーという男から出た名前としては、笑えてしまえるほど洒落た名前であろう。

「そっか、よかったね！ オリビアちゃん！」

「おりいあ……？」

「オ・リ・ビ・ア」

「おりいびあー」

「オリビア！」

「おりいびいあっ！」

「うん、言えたわね！ 可愛い！」

「ウウウ——……」

赤い少女——オリビアに彼女自身の名前を言わせたレベツカは、オリビアを抱き締めて撫でる。

そして、暫く撫でた後、レベツカは最後にビリーに確りと向き合うと、敬礼をして見送る。ビリーは晴れやかな表情でそれに返すと、オリビアを連れてアークレイの森の中へ消えて行った。



アークレイ山中の小川に近い場所で、無人の大型のキャンピング

カーを見付けたのはビリーとオリビアにとって幸いだった。

持ち主にとっては不幸だったであろうが、ゾンビに襲われたのか、他の二次感染した生物に襲われたのかしており、キャンピングカーの周りをユラユラと徘徊する1体の老年の男性のゾンビしかいなかったため、それを倒してキャンピングカーを頂いた。そのゾンビは運転席にあった免許証と同じ顔をしていたが、最早どちらも彼には必要のない物であろう。

更にキャンピングカーひとつで、半ば世捨て人のような生活をしてきたのか、ただ偏屈だったのか、銀行に口座を作ったりはしておらず、かなりの金額がキャンピングカー内にあった。

加えて、もうすぐ21世紀だが、ハンドガンが1丁とその銃弾が200発。そして、ベトナム戦争で有名なウインチェスターM70狙撃銃が2丁とその銃弾が900発ほど保管されていた。彼の中ではまだベトナム戦争が続いていたのだろうか。

「びりい——？」

奪うような形となるのは心苦しいが、自身は既に死亡した身の上、今はオリビアもいる。ひとまず、キャンピングカーを入手し仮住まいとすることにビリーは決めた。



「べっと——ふかふか、おりびあ——わたし、びりい——すき」
「上手いな……」

3日後。ビリーはラクーンシティから離れ過ぎず、近過ぎないと言った距離にある森林や河川の近くにキャンピングカーを停めて、オリビアに言葉を教えつつ過ごしていた。

と言うのも彼は、近い内にラクーンシティがジャクリーンの手によ

り、アンブレラ幹部養成所とは比べ物にならない規模のバイオテロが引き起こされることを知ってしまったている。

今の彼が出来ることなど高が知れているが、それでもそれらをそれを知って何もしないでいれるほど、彼は非情にも悪人にもなり切れなかつたため、こうして事の発生を見守っている。せめて、今度こそはひとりでも多く助けられればという思いからだ。

「びりい——おりびあ——すぎっ。」

「……ああ、好きだぞ」

そして、オリビアと言えば、既に三語文を言える程に発話能力が向上していた。これは既に2〜3歳程の発達を遂げていることを意味しており、人間発達学に照らし合わせれば、爆発的な勢いで知能面で成長していることに他ならなかつた。仮にジャクリーンがそれを実験で知れば、愛着を持っていたのは彼女だつたかも知れないであろう。

しかし、そのようなものとは無縁であり、今年で26歳だが、暫く戦争に駆り出されていたビリーには預り知らぬところであつた。

「びりい——おくさん——いない？」

「……………」

そして、澄んだ目をしてビリーを見上げるオリビアから放たれた、一切悪意の無い言葉に彼は思わず閉口する。それは戸籍上は死刑囚として死んでいる彼には、少なくともアメリカ国内では無縁のことであらう。

婚期だのなんだのにこだわるようなビリーではないが、面と向かつて言われると、細やかな平穏な暮らしと言うものからは、随分と遠ざかつてしまったことに彼は何とも言えない気分になつた。

「こいびと——いない？」

そして、オリビアは案外鋭いのか、無言の間を肯定と受け取つたようで、奥さんから恋人へと質問の範囲を狭めた。

ビリーは戦争に行く前は、ガールフレンドぐらいいいたが、互いに大して想つてはいなかつたため、戦争に行く前に別れたことを思い浮かべたが、そのようなことをオリビアに説明しても伝わらないと考え

「たため、”恋人もいない”とだけ簡潔に伝えた。

「なら——おりびあ——なる！」

するとオリビアは名前の通り、花が咲くような無邪気な笑みを浮かべて、そんなことを言い始める。それに少しだけ目を丸くして驚いたビリーだったが、直ぐに親戚の小さな子供もたまにこういうことを言うことがあると微笑ましい者を見る目が変わる。

「……………せめてレベツカぐらい大きくなったらな」

「うん——やくそくっ！」

子供らしい大人になれば自然と忘れるような小さく儂い約束。ビリーはそう思いながら、少しだけ困ったような優しげな顔でそう返した。

ただ、ビリーは気づいておくべきだったかもしれない。ジャクリーンの日記でオリビアは産まれたときには5歳程と記載されていたにも関わらず、その3日後にビリーらが見つけたときには7歳程の少女の姿であり、今は8歳程まで成長していることを。



「はんだヨー！」

アンブレラ幹部養成所での数奇な事件から、1ヶ月と少しの時間が

経った頃。キャンピングカー内のキッチンに当たるスペースに掛かったカレンダーには「1998年の8月」と示されている。

そして、キッチンでは「赤い女性」がフライパンとフライ返し片手にやや舌足らずな口調でそう言う。

赤い女性が持つフライパンの上には、適度に焼けたベーコンエッグが乗っており、赤い女性は片方のお皿に多めに盛り付けた。そして、それが終わった直後にトースターから食パンが飛び出し、コーヒーの完成を告げる音がコーヒーマーカーから小さく響く。

「……………」

その声とやや騒がしい朝の様子に起こされて、キャンピングカー内に備えられたベッドで眠っていたビリーが起床し、寝惚け眼を擦る。

そして、ビリーは立ち上がると、キッチンスペースへと向かい、そこに隣接された食事スペースの横に立つ。その前に何気無く、赤い女性の後ろ姿を見た。

「…………… ビリーどうしたの?」

赤い女性は流し台にフライパンなどを置いたところで、直ぐに視線に気付いて振り返る。

その容姿は膝まで伸びた白に近い銀髪に、非常に整った顔立ちをしており、ビリーですらグラフィア雑誌でしか見たことがない程、抜群に豊満なスタイルをしており、出るところは出て引き締まるところは引き締まり、ただ細いのではなく限界まで絞った鋼のような筋肉をしており、肉体美に溢れつつも人間からは若干外れているように見えた。

また、全身の肌が鮮やかなまでに赤く、それ以上に瞳も赤いが、その目には丸いレンズの入った眼鏡が掛けられており、眼鏡の奥のルビーのような瞳が、不思議そうにビリーを見つめている。

そして、料理のためか長い銀髪はポニーテールに縛られており、更にエプロンをしているが、8月も下旬の陽気のためかタンクトップにホットパンツというかなりラフな格好であり、彼女のアメリカのグラビアモデルも顔負けな肢体が溢れんばかりに強調されていた。

彼女の背の高さは額に2つだけ小さくちよこんと付いた鬼のような角を覗けば175cmほどで、身長が180cm程のビリーと比べ

ると少しだけ低い、同じ女性のレベツカは160cm程なので差は歴然だろう。

「冷めるヨ?」

「ああ、ありがとう……」オリビア」

「うんっ!」

赤い女性——オリビアは嬉しそうに少女の姿をしていた頃と変わらない弾んだ声で返事をした。オリビアは短期間で急激な成長を遂げ、20代前半程の容姿になると完全に成長が止まり、今の姿へと変貌したのである。非常に長い髪はその証であろう。

ちなみに眼鏡に関しては、アンブレラ幹部養成所にいた頃はビリーに掴まれていることが多かったように、リツカーの特性か退化はせずとも、生まれつきかなり目が悪い為である。よって度の強い眼鏡にしている。

そして、ビリーが手を合わせて、いつものように神への食前の祈りを捧げると、それと同じくオリビアも手を合わせて祈りを捧げている。

ジャクリンによる神への冒涇の果てに産まれた彼女がそうしていることに不思議な感覚を覚えつつも、ビリーはジャクリンがあるときに言った言葉を思い出した。

『まあ、私の製造したサスペンデッドの評価もそれなりに出来た。こちらもこれからは少し潜伏する為、身軽な方がいい。その子はくれてやろう。細やかなプレゼントというものだ』

”アイツ、ひよつとして戦闘中にこれを見越して厄介払いをしたのではないか?”とビリーは決して嫌な訳ではないが、何とも言えない気分になりつつ、科学者というよりも魔女なのではないかと考え始める。

そんなことを考え、ビリーの好みに合わせてほどよく半熟にされたベーコンエッグを食べていると、向かいに座って笑みを浮かべているオリビアが唐突に彼の手に自身の手を絡ませてきた。

「どう、ビリイ？」

するとオリビアはビリーの手を取ると小さかった頃と何者変わった。ない無垢な笑みを浮かべると、心の底から嬉しそうな声色で口を開いた。

「私、レベツカより大きくなったヨ？」

ちなみに、オリビアという花の中でも、赤いオリビアの花言葉は”純粋で燃えるような愛”である。

洋館事件 前

「ゾンビだらけで本当に嫌な場所ね……ヤになっちゃうわ」

ラクーンシテイに近いアークレイ山中に佇む洋館。昼間でも暗い森の中に建つ館内を探索しながらS・T・A・R・S.のアルファチームの隊員の女性——ジル・バレンタインは溜め息混じりにそんなことを呟いた。

「ジル、気を緩めるな……ゾンビや犬だけでも限らない」

「わかってるわよ。いい加減、シャワーでも浴びたい気分だわ」

「さつき、バスタブで入浴していたゾンビならいたな」

「止めてよ。思い出して気分悪くなるじゃない……」

そんなジルに返答しつつも、ブラックジョークを飛ばすのは、ジルと同じS・T・A・R・S.のアルファチームの隊員の男性——クリス・レッドフィールドである。

二人は互いに互いをカバーし合いながら、確実な足取りでこのゾンビが溢れる古びた洋館の中を探索していた。

S・T・A・R・S.とは“Special Tactics and Rescue Service”の略であり、ラクーン市警^Dの管轄下にある特殊戦術及び救助を目的とする特殊部隊である。ラクーンシテイそのものを作ったと言っても過言ではない“製薬企業アンブレラ”の援助を受け、ラクーンシテイで発足した“明るいラクーン21計画”の一環として、1996年にラクーン市警察内部に創設された精鋭部隊だ。

メンバーは、毎年増加傾向にある都市型テロ、多様化する組織犯罪、数々の緊急事態などに即時対応できるエリート集団として、軍や民間を問わずスカウトで集められたスペシャリストだけで構成されている。

そして、今回のS・T・A・R・S.の任務は、アークレイ山地で頻発していた猟奇殺人事件の捜査にブラヴォーチームが投入された。

S・T・A・R・Sは6人編成で2チームあり、先に投入されたブラヴオーチームは隊長のエンリコ・マリーニ。隊員のケネス・J・サリバン、リチャード・エイケン、フォレスト・スパイヤー、エドワード・デューイ、レベッカ・チエンバースの6人だったが、その捜査中に音信不通となったブラヴオーチームを捜索するために投入された6人編成のチームがアルファチームである。

アルファチームの隊長はアルバート・ウエスカー。そして、隊員はクリス・レッドフィールド、バリー・バートン、ジョセフ・フロスト、ジル・バレンタイン、ブラッド・ヴィッカーズの6名。

しかし、ブラヴオーチームの捜索に来たアルファチームが洋館の近くへヘリコプターで着陸したところ、ゾンビ犬と形容できる存在の襲撃により、隊長のウエスカーの指示で命辛々、洋館に逃げ込んだため、既に部隊としては機能していないであろう。ジルとクリスが2人共館に入ることが出来たのは奇跡と言えるだろう。

S・T・A・R・S。全体で見ると、フォレスト・スパイヤー、ケネス・J・サリバン、ジョセフ・フロストの3名は既に死亡を確認している。また、エンリコ・マリーニ、アルバート・ウエスカー、バリー・バートン、リチャード・エイケン、エドワード・デューイ、レベッカ・チエンバースの6名は行方不明だ。

残るブラッド・ヴィッカーズは今も無線で生存者が居るかどうか定期的に呼び掛けながら上空をヘリコプターでホバリングを続けているが、クリスが唯一持つ無線は壊れており、音声の受信しか出来ないため、ブラッドの焦りと悲痛さが伝わるばかりである。

「——リチャード！」

「ジル、クリス！ よかった、生きていたのか！」

「あなたたちは？」

「ああ、アルファチームのクリスだ」

そして、洋館の2階にある図書館にジルとクリスが入ると、そこには行方不明だったリチャード・エイケン、レベッカ・チエンバースの姿があった。

リチャードはカスタムショットガンを持っている青年である。ジ

ルとクリスのようにレベッカとコンビになっていたようだ。

「そのだな……」

「はい?」

クリスはやや困惑したような表情でレベッカの装備を見る。

レベッカは18歳という若さで大学を卒業してS・T・A・R・S・に入り、つい2日前までは覚束ない新米という様子だった彼女であったが、何故か大きめのリュックサックを前面に背負っていた。

そして、S・T・A・R・S・では支給されていないサブマシンガンを構え、腰の右にはカスタムハンドガンが収まったホルスターを装備し、左にはマグナムが収まったホルスターを装備している。更に予備か生存者に渡すためか、背中には3丁のサブマシンガンをストックしており、あえて開けられている様子のリュックサックスの口からは、リュックサックが膨らみ切るほど大量の黒々としたサブマシンガンの弾倉がチラチラと顔を覗かせている。

「ああ、これはアンブレラ幹部養成所で拾ったものです。どうぞ」
そう言うとレベッカはサブマシンガンを一丁ずつクリスとジルに渡し、リュックサックから幾つか弾倉も取り出して渡す。

「それから、全てをお話します——」

そして、レベッカはクリスとジルにブラヴオーチームが降下してから、自身がこれまで経験した全てのことを話した。

エドワード・デューイは黄道列車で死んだこと。アンブレラ幹部養成所でのこと。ジャクリーン・マークスという怪物と日記に記載されていたアンブレラの実態のこと。

そして、アルファチームの隊長であるアルバート・ウエスカーが、アンブレラの闇に深く関わる人物だということが何よりもの衝撃であろう。

「ウエスカー隊長がそんな……本当にそのジャクリーンっていう怪物が正しいの?」

「自分以外が読まない日記に嘘を書く意味もないですよ」

また、この洋館にS・T・A・R・S・が投入される前に、ジャクリーンはB・O・W・の戦闘データの回収をしようとすることをア

ンブレラが考えていること。その場合、自らの私設部隊よりも外部の別組織を利用してデータを収集出来た方が被害が少ない上、B. O. W. との戦闘経験のない者によるデータが取れると日記に書いており、レベツカ自身も読んだときに非常に驚いたことも伝えた。

「S. T. A. R. S. はそもそもがアンブレラの出資で出来た部隊だったな……まさか、最初からこのために……?」

「俺たちはモルモットだったってことかよっ!」

「ねえ、何かしらこれ?」

ひとまずの情報共有を終えたところで、ジルが図書室の隅にポツンと置かれていた小さめのジュラルミンケースのようなものを見つけて持つてくる。

これまで武器や弾薬を洋館内での現地調達で済ませていた彼らは、少しだけ警戒しつつもそれを開く。

そして、開けたジュラルミンケースの中には——何故か可愛らしいプラスチックの包装紙に包まれたキャンディが沢山詰まっており、1枚の手紙が折り畳まれて入っている。

「この字は……ジャクリーンの字です!」

手紙を見たレベツカが真っ先に声を上げたため、全員は手紙の内容に目を通した。

.....

やあ、これを読んでいるであろう自覚あるいは無自覚のアンブレラの尖兵諸君。まずは手短に挨拶をしておこう。

固い前口上は抜きにして、この箱を開けることが出来たということは、館の内部まで探索できたということだろう。結構結構、それだけでも優秀なようで何よりだ。

しかし、B級映画からそのまま飛び出してきたようなゾンビ共や、知能の低い二次感染の個体との戦闘も飽きていた頃ではないか?・

私が起きたときに父が設計したプレイグクローラーが、あちらの施設とその周辺で大量発生していたため、良かれと思い、少し調整した

個体をほんの”80体”ほど、前もってこの屋敷に休眠状態で置いておくことにした。そして、休眠状態のプレイグクローラーの起動スィッチは”この手紙が入っていた箱を開ける”ことだ。故に返品は出来ない。

惰眠を貪り、腹を空かせたプレイグクローラーが新鮮な食事に我先にと殺到し、君らへ新たな刺激を与えることは間違いない。失敗作とはいえ、是非とも少しばかり、B・O・Wの片鱗を味わってくれたまえよ。

それから、話によれば今年太平洋を挟んだ日本では寅年なるものらしい。それにちなんで虎のようなモノを君らに残しておくことにした。とは言え、流石にラクーンシティ動物園まで行くわけにも行かず、そもそもあそこにいるのはライオンだ。

という訳で別のトラを用意することにした。君らはトラカミキリという昆虫を知っているだろうか？ 体長15〜25mm。日本全国、中国、朝鮮半島、台湾、ロシアの一部などに棲息しているカミキリムシだ。特徴としては、蜂に擬態した姿だろう。一見するとスズメバチとカミキリムシを合わせたような奇妙な姿に驚く筈だ。

散歩をしていると洋館の木材置き場にあつた輸入木材にくつついて密入国しているトラカミキリを見つけたので、アメリカの国家企業たるアンブレラ流のおもてなしを存分にしておいた。”ダンプリングタイガー”と名付けたそれは、知能の欠片もない失敗作だが、戦闘力と生命力だけならば、タイラントに勝るとも劣らず、中々に愛嬌のあるB・O・Wに仕上がったと私は思っている。とつくりと楽しんでくれたまえ。

P・S・

これと同じ機能を持った箱が屋敷の各所に置いてある。プレイグクローラーの解放は1回目だけのため、最早ただのお菓子箱だ。これはキャンディ入りだが、他の箱にはそれ以外におやつになりそうなものを詰めているので糖分の補給にでも使ってくれ。ただの食べ物なので感染などは気にしないでいい。私の手作りだぞ。

.....

「……………なによ、このアンブレラに対する皮肉と悪意に満ちた手紙は？」

ジルは怪訝な表情を浮かべて手紙から顔を上げる。他の面々も何とも言えない表情をしていた。その上、箱に詰まっているキャンディはこれを書いた者の手作りらしい。

「やっぱりジャクリーンが書いたものです……」

「レベツカが言っていた——アンブレラの創設者のひとりのジエームズ・マーカスの記憶と思考を持ったアンブレラに復讐を誓っている怪物の研究者で、1体で30人の武装したアンブレラの特殊部隊を壊滅させて、喋る人型のヒルのことか……眉唾物過ぎてまだ信じれないな……」

いざ言葉にしてみるとより凄まじいとも言いたげな様子の子のりチャードであったが、それ以上なにか言うこともレベツカを疑うこともない。

「プレイグクローラーというのは？」

「両手が大きな鎌になっている2mぐらいの虫です。マーカス博士が最初期に作った生物兵器だそうですね。燃やすか頭を狙ってください」

「そ、そんなものが80体もこの屋敷にいるの!? それにこの箱を開けたことが起動スイッチになるって——」

そこまでジルが言ったところで、洋館全体が少しだけ揺れる。それと共にどこかで激しい爆発音が響き渡り、それをここにいる全員が耳にした。

「どうやら……相当アグレッシブな奴みたいだな。ジャクリーンという奴は！」

そして、クリスが叫ぶと共に図書館の入り口の扉が激しく音を立てて破壊され、破片が彼らの足元まで飛ぶ。

そして、扉の前に立っていたのは、すがたかたちが人間とは似ても似つかない異形の怪物であった。

「な、なにアレ……?」

「特徴からすると……あの化け物が”ダンプリングタイガー”って奴のようだな」

それは3 m程の巨体をして2足歩行で歩くスズメバチのような黄色と黒の斑まだら模様をした何かであった。蜂にしては妙に長い触角と、歩行に使う2本の脚以外の4本の腕がカマキリの鎌状になっていることが特徴であろう。

何故か1本の腕の根本に可愛らしいピンク色のリボンが巻かれているが、それでこの凶悪過ぎる見た目の怪物が、可愛く見える訳もなく、むしろ不気味さを際立てていた。

更に怪物は、体に纏わせるように周囲にワспが張り付くか、飛び回るかしており、蜂のような巨大な怪物に大量の蜂が取り付く様は極めて異様である。

『!!』

怪物——ダンプリングタイガーは金切り声のような人間のそれではない咆哮を上げると、一步一步踏み締めて彼らに向かって歩いてくる。

それに真つ先に反応したのはレベツカであった。

「やあっ!」

『』

レベツカが投げつけた火炎瓶により火だるまに変わるダンプリングタイガー。明らかに炎が全身に灯っているが、然程ダメージを受けているようには見えず、こちらに向かう足も止まっていない。

しかし、周囲にいたワспはほぼ全て燃え尽き、ダンプリングタイガーの剥き出しの外観が露になった。

「なら——!」

更にレベツカがダンプリングタイガーに向けてサブマシンガンを放つ。それに続いて、クリスとジルもサブマシンガンを放ち、リチャードもカスタムショットガンで攻撃を仕掛ける。

「おいおい……マジかよ!」

しかし、リチャードは悲鳴に近い声を上げる。何せ、4人全員の銃

弾はダンプリングタイガーに命中し、体から体液を所々から溢れさせているが、異常に外骨格が硬いのか余りダメージになっていないように見えたからだ。

「これならどう!？」

『!?!』

するとレベツカはサブマシンガンで攻撃を止め、腰のホルスターからマグナムを抜き出す。それで的確にダンプリングタイガーの頭を撃ち抜いた。

ダンプリングタイガーの風穴の空いた頭部が宙を舞い、床に落ちてべちゃりと濡れた音を響かせる。頭部を失ったダンプリングタイガーは、その場で膝をついた。

「やったか!？」

クリスはそう叫んだが、ダンプリングタイガーの千切れた首の断面が、体液で泡立つと共に徐々に新たな頭部が形成されていることに気が付き、目を見開いて驚く。

「不死身か……!?!」

「わかりませんが、今のうちに逃げましょう!」

レベツカの言葉により全員が動き、体の再生のために行動が停止しているダンプリングタイガーの横をすり抜けて、図書室を後にした。

その途中、ジルがレベツカに声を掛ける、

「凄いわねレベツカ!…こんなに冷静で……見違えたわ」

「いえ——」

レベツカはどこか遠くを見るような目になり、小さく溜め息を漏らしてから呟く。

「ジャクリーンの方がもつとずつと強くて怖かったので……」

本当にジャクリーンという奴はどういう奴なんだと、3人の中でのジャクリーン像は全く結ばれることはなかった。



「サブマシンガンがなかったらマズかったな……」

「でも弾も無限ではないから考えて使わなきゃね」

案の定、廊下やホールにいつの間にか沸いていたプレイグクローラーを4人で片付けながら、洋館に仕掛けられた仕掛けの謎解きをしつつ探索している最中、ポツリとそんなことをクリスは呟いた。

如何にB・O・W. と言えど、3人からの確に頭部へのサブマシンガンを受け、近づけばリチャードからカスタムショットガンをお見舞いされて頭を吹き飛ばされるのでは、ただの害虫駆除もいいところであつた。ようやくS・T・A・R・S. が部隊として機能し始めたと言つたところだろうか。

『!!』

「また、虎野郎か！」

「相手をするだけ弾の無駄ね！ 逃げるわよ！」

「またかよ！ 邪魔な奴だな！」

すると進行方向から2足歩行する巨大なトラカミキリ——ダンプリングタイガーが現れたことで彼らは一旦撤退する。

このようにダンプリングタイガーは洋館内を徘徊しており、鉢合わせれば襲い掛かってくるため、逃げながら洋館を探索しているのである。

「あつ!? 赤い奴よ！」

しかし、不幸なことにダンプリングタイガーの目の前でゾンビの死体が復活し、赤く鋭利な爪を持つクリムゾン・ヘッドへと変貌した。

それにレベツカは声を上げ、こちらに真っ直ぐ走って向かって来るであろうクリムゾン・ヘッドにサブマシンガンに向け——。

『!』

『!?!』

ダンプリングタイガーがクリムゾン・ヘッドを背中から2本の鎌状の腕で拘束したため、レベツカは驚きつつも攻撃を止めた。

すぐにそのままダンプリングタイガーはクリムゾン・ヘッドを引き寄せて自分側に身体を向けさせると、残り2本の鎌状の腕で脇腹を振り子のようなリズムで交互に連続で突き刺す。

「えげつねえ……」

思わず4人は足を止めて異様な光景を見ていると、胴体を何度も刺し貫かれて動かなくなったクリムゾン・ヘッドをダンプリングタイガーは抱えながら、クリムゾン・ヘッドの腕と顎で肉を抉り、団子状に丸め始めている行動を目にする。

ダンプリング「団子を作る虎……それでダンプリングタイガーか……」
タイガー「そう言えばスズメバチは肉団子を作りますからね……」

ジャクリーンの無邪気で小癪なネーミングセンスに一同は顔をひきつらせつつ、ダンプリングタイガーは動きを止めてクリムゾン・ヘッドを肉団子にすることに夢中で、こちらにまるで興味を示さなくなったため、すぐにその場から離れた。

「そう言えばなんだが……」

クリスはダンプリングタイガーから逃げている途中で、通路に人と爬虫類を掛け合わせたような外見で、両手が鋭利な鉤爪になっている生物兵器——が何故か何もしていないにも関わらず、死んでいる様子をチラリと見た。

「あれはなんなんだ……?」

「ハンター……だと思えますけど、ダンプリングタイガーとプレイグクローラーに襲われていますね」

「まあ、同士討ちしてくれる分にはいいな！ アンブレラの奴らがバカで助かったぜ！」

「アンブレラ幹部養成所では、プレイグクローラーがハンターを襲うようなことはなかったんだけどなあ……」

レベッカはポツリとそう呟いたが、今は考えても仕方がないので、ハンターが全滅するまで、利用できるものは利用することにし、それ以上言及することはなかった。



「なんだアイツは……？」

洋館の地下——アークレイ研究所内にある監視室で、館内の各地に設置された監視カメラが映すモニターを確認しながら金髪の男性——アルバート・ウエスカーは歯軋りをする。

ウエスカーはアンブレラ社から離反する前に、S. T. A. R. S. を洋館に投入し、ハンターやタイラントのB. O. W. による対B. O. W. 用に訓練されていない部隊との戦闘データの回収をする実地試験を行おうとしていた。

あわよくばアークレイ研究所を占拠している者の壊滅や、毎日のようにアンブレラの社内電子掲示板に上げられていたその研究記録のより深いモノも狙っていたのである。

しかし、いざアークレイ研究所に来てみれば、既に施設内はもぬけの殻。それどころかアークレイが研究していた個体はほとんど実験に消費されていたようで、研究所としての機能はほとんど麻痺しきつた上に機材も物理的に破壊され、徹底的に証拠の隠滅を図られていた。それに加えて、研究記録もほぼ全て抹消済みで、生存者の研究員の1人すら存在しない有り様だ。

それだけならば始めから期待は余りしていなかったため、ウエスカーとしては問題なかった。しかし、モニターに映り、今現実として行われていることが彼の表情を曇らせている。

『!!!』

そこには洋館かアークレイ研究所のウェスカーが気付かなかった何処かに隠されていた蜂のような未知のB・O・W。が、彼がS・T・A・R・S。へと仕向けたハンター達が次々と喰い殺される光景であった。

洋館の庭で3体のハンターが蜂のようなB・O・W。に襲い掛かるが、爪で刻まれるダメージは、蜂のようなB・O・W。が全身にワспを纏っているせいで、ワспが緩衝材になり全くダメージにならない。

時折、本体に攻撃が届いても、蜂のようなB・O・W。の外骨格が硬過ぎるため、ほとんどダメージにならない。その上、虫がベースのためか、再生能力に長け、与えた側からダメージが回復していく。更に鎌状の腕による攻撃は、殺傷能力が極めて高く、1撃か2撃でハンターは戦闘不能になり、生きていても鎌に仕込まれた毒で確実に死ぬ。

とてもではないが、ハンター程度の量産型B・O・W。に勝てるような相手ではなかった。明らかに蜂のようなB・O・W。の戦闘能力だけはタイラントクラスであろう。

既にその数は10体を軽く超えており、殺したハンター達をどことなく嬉しそうに、わざわざ肉団子へと変えてから自分で食べる様子が繰り返されている。そもそも、巣へと持ち運ぶための習性である筈のため、自身で食べるのならば最初から肉団子にする必要性は一切ないどころか無駄だが、それを理解出来るような知能を蜂のようなB・O・W。は持ち合わせていないと見える。

更に洋館内やアークレイ研究所内に突如として何処からか沸いた開発初期のB・O・W。であるプレイグクローラーなのだが、何故か単純な命令を聞けるように知能の向上がなされているのか、執拗に他のB・O・W。とアンブレラマークを襲うように行動しているため、ハンターと屋外のケルベロスが次々と殺され、館内のアンブレラマークが剥がされて行く。

特にケルベロスに関しては、既に壊滅したも同然であった。そして、単体の性能自体はプレイグクローラーの倍以上にあるはずのハンターも、洋館という閉所の悪条件でプレイグクローラーの数の暴力の前にほとんど成す術がない。そして、倒れたハンターの死体は、何故か蜂のようなB・O・W・が肉団子にして食べている。

一応、B・O・W・同士の戦闘データという極稀なものは取れたが、初期型B・O・W・ VS 最新型B・O・W・の戦闘データという、BどころかC級のモンスターパニック映画でも見せつけられているような余りにも特殊データなぞ一体何に使えるのかという話である。そもそもプレイグクローラーは既に、骨董品を通り越して化石に等しいB・O・W・だ。

例えるならプレイグクローラーはマスケット銃、ハンターはアサルトライフルである。そんな戦闘データなど誰も欲しがらないであろう。

そして、蜂のようなB・O・W・に関しては更に問題だ。何故ならば完全な未知の明らかに制御不能なB・O・W・であり、例えるのなら宇宙人の持つ光線銃のようなもの。こちらはこちらで全くデータにならないのだ。

「フツ………」

「……………」

娘のモイラを人質にされ、仕方なくウエスカーに従っているS・T・A・R・S・のアルファチームの隊員——バリー・バートンがウエスカーの居る監視室の壁に寄り掛かりながら小さく鼻で嗤ったことに対し、ウエスカーは彼に見せないように小さく額に青筋を浮かべた。

(この陰険なやり口と、虫へのこだわり……まさか、マーカスが?)

ひとりだけウエスカーにはこのようなことを行い兼ねない天才に心当たりがあった。ジェームス・マーカス、10年前に自身が殺し、そもそも洋館事件の発端となったであろうB・O・W・を生み出した存在である。

無論、本人ではなく、マーカスを継いだ女王ヒルによる犯行だが、そ

うだとしても女王ヒルは、彼の友人のウィリアム・バーキンがこの期に及んで失態を重ねていなければ、既にアンブレラ幹部養成所の自爆で没している筈だ。

ということは、マーカスはウィリアムに2回殺されたのかと、それが少し可笑しく思い、ウエスカーは笑みを浮かべるが、この用意周到過ぎるやり口は、黄道列車を襲ってアンブレラ幹部養成所とアークレイ研究所を同時に占拠していたようには思えなかった。

何よりもアンブレラ幹部養成所の方には研究記録を抹消した形跡がない。その上、研究はされていたが、そこまで目立ったB・O・W.の開発研究が成されていた様子もなかった。ならば蜂のようなB・O・W.や、知能のあるように見えるプレイグクローラーを造ったのは、アークレイ研究所でと見て妥当だろう。

「……………!? そうか、マーカスの忘れ形見は2体いたのか……………」

つまり、アンブレラ幹部養成所で没した方と、アークレイ研究所から電子掲示板でアンブレラを煽っていた方は別の個体ということだ。

そして、それは既にアークレイ研究所の証拠隠滅を終えて、捕獲されても大きく問題ないB・O・W.を残し、ひたすら時間稼ぎと攪乱を残されたB・O・W.が意図せずに行っているところから、既に逃げ出していると見て間違いないであろう。

「……………アンブレラは終わったな」

業腹だが、ウエスカー自身でも手玉に取られているような相手に、アンブレラ幹部養成所の女王ヒルすら自社の部隊だけで收拾をつけることができなかつたアンブレラが、それ以上の相手かつ明らかにアンブレラへの執拗な嫌がらせを繰り返している存在とマトモにやり合える訳がないと彼は考える。

そして、どのタイミングで何にタイラントをぶつけるべきかと考え、ウエスカーはモニターを眺めながら再び思考するのであった。



「くっ……うっ……」

「エンリコ隊長!？」

「どうしたんですかその怪我は!？」

洋館の敷地内の地下にあつた洞窟を移動中、ブラヴオーチームの隊長であるエンリコ・マリーニに遭遇した。しかし、エンリコに駆け寄つた同じブラヴオーチームのレベツカとリチャードは銃創を負っていることに気づく。

「レベツカ、リチャード……! 生きてい——」

そこまで言つたところで、エンリコはクリスとジルが立つ方に目を向けて、憎悪を浮かべた表情でハンドガンを構える。

「アンブレラの裏切者め……!」

その言葉にクリスとジルはレベツカからウエスカーが裏切者かも知れないということを知かされていたことが脳裏を過る。

そして、この場にいる2人にそれを言つていふということ——その更に後ろに何者が居るのではないかという結論に達し、振り返つてサブマシンガンを構えた。

そこには一瞬だけ銃を持った人影のようなものが見えたが、すぐに何処かへと消えて行つた。すがたかたちは見えなかったが、明らかに洋館にいるクリーチャーではない人間らしい動きにクリスは声を荒げる。

「ウエスカー……! 本当にアイツが……!」

「それよりもエンリコ隊長が酷い怪我だわ。せめて何処かにハーブが

あればいいんだけど……これだと相当数必要ね」

「ああ、それなら山ほど見掛けたぜ！」

リチャードがそう言ったため、クリアリングを行いながらひとま
ず、まだ歩けはするエンリコを連れてハーブがあるという場所へ向か
う。



洞窟を出て直ぐのところにある洋館の庭の一角にそれはあった。

「なにこれスゴい……」

「アンブレラには園芸が趣味の奴でもいたのか？」

そこにあつたのは6×6 m程の面積の畑のうち、半分にだけびっし
りと綺麗に並んで生えた3色の色鮮やかなハーブ畑である。どうや
らもう片方は摘み採ったような形跡が見られるが、半分は残していっ
たらしい。

そして、ハーブ畑の前には簡素な立て札があり、”ご自由にお使い
ください”とジャクリーンとはまた違った筆跡の綺麗な文字で書か
れている。

「きつと天使みたいな奴だったんだろう。今ばかりは感謝だ」

リチャードの軽口を聞きながら、ハーブ畑からハーブを摘み取って
調査し、4人はエンリコの治療を始めた。

洋館事件 後

「いいかお前ら……アンブレラは黒だ。ドス黒過ぎる……表向きには製薬会社として40年以上に渡り、アメリカの国家企業として世界で親しまれているが……そもそもが馬鹿げたウイルスと有機生命体兵器の開発のために創られたんだ——」

現在は洋館1階の食堂。ハーブ畑による治療を終えて、ある程度復活したエンリコ・マリーニは真っ先に生存してここにいるS・T・A・R・S。全員に対し、アンブレラの闇を訴えた。

レベツカ以外はアンブレラ自体に対してはまだ半信半疑だったが、ブラヴォーチームのエンリコがアンブレラ幹部養成所から持ち出した多少の資料を元に語ると、完全に信じるに足る確証を得た様子である。

「そして、S・T・A・R・S。のアルファチームの隊長——アルバート・ウエスカーは最初からアンブレラの人間だ。それもウイルスや生物兵器を研究していた側の……な」

エンリコが全員に見せたやや古ぼけた写真には、白衣を着た金髪の男性が2人と、老人が1人笑顔をを見せて写っている。裏側を見れば、写真に写る者の名前だと思われる”ジェームス、アルバート、ウィリアム”の3人の名前が書かれていた。

「実はこれらの資料の在りかは、アンブレラの創設者の1人のジェームス・マーカスの娘を名乗る”ジャクリン・マーカス”なる奇妙な女が、アンブレラ幹部養成所において、彼女から教えてもらった。他に彼女を見掛けた者はいないか？」

「ああ……」

「ジャクリンねえ……」

エンリコの話聞いたレベツカ以外のS・T・A・R・S。の隊員はレベツカへと目を向ける。そして、レベツカが口を開いた。

「彼女自身が綴った日記の内容を信じるのなら、ジャクリンは

ジエームス・マーカスから直接生まれたB. O. W. です」

「なに——？」

レベツカは更にジャクリーンがアンブレラに対して生物兵器を用いて、父であるジエームス・マーカスの復讐のために全面戦争を仕掛けようとしていること。そして、そのためにアンブレラが世界最悪かつ世界初のウイルス兵器によるバイオハザードを引き起こした事実を作るため、ラクーンシティそのものを犠牲にしようとしていることを告げた。

怪物を造った怪物と、怪物に作られた怪物の喰らい合い。ラクーンシティはその戦場になるというだけの話ではある。しかし、10万人規模の人間が住む街で起こり、質の悪いことに人間がいなければ発生しないのだから始末に負えない。

更にレベツカはジャクリーンと直接話したアンブレラという国家企業の強大さについてもエンリコに語った。

「なんとということだ……」

それだけ言つてエンリコはジャクリーンを責めようとはしなかった。そもそも洋館に隣接されたアークレイ研究所を襲撃したジャクリーンを造つたのはアンブレラ、S. T. A. R. S. を設立して影からこの洋館に送り込んだのもアンブレラ。ジャクリーンが悪魔ならば、アンブレラは魔界そのものである。

もし、対峙すれば間違いなくジャクリーンがラクーンシティを襲撃する前に殺してでも止めるであろうが、ジャクリーンもまた被害者あるいは癌細胞のように増殖し続けるアンブレラが生み出した最後の良心なのかも知れない。

「……とりあえず、この洋館を脱出しないことには何も始まらない。可能ならばアンブレラの研究の証拠を確保しつつ、脱出方法を模索しよう」

「これでS. T. A. R. S. が5人ね」

「まだ、空にいるブラッドも合わせればちょうど6人だな」

『!!!』

「そんなこと言つてたら、虎野郎のお出まじだぜ」

「本当にしつこいですね……！」

S・T・A・R・S・らは尚も徘徊を続けているダンプリングタイガーを切り抜けつつ、まずは研究所の入り口を探すことにしたのであった。



「こ、これは……！」

「紛れもなくウエスカーだな……！」

「アイツ、白衣着てまでグラサン掛けてやがるぜ……！」

洋館の地下深くにあったアークレイ研究所に到達し、尚も続く謎解きをクリアし、執念深いことに研究所にまで侵入してきたダンプリングタイガーをかわしつつ、謎解き用のフィルム映像を見たS・T・A・R・S・らの目に映ったのは“アンブレラの研究員たちと共に映る白衣姿のウエスカー”の姿だった。

最早、ウエスカーがアンブレラと繋がっているどころか、当事者なのは疑いようもないことであろう。

そして、S・T・A・R・S・らは追いかけて来るB・O・W・を倒しつつ、アークレイ研究所の地下深く——タイラントが製造されていた研究室に入ると、そこにはあの男の姿があった。

「ウエスカー……！」

「ようこそ、S. T. A. R. S. の諸君。思った以上に残ってしまつて腹立たしい限りだよ。そして、やはりクリスは残つたか。期待通りだな、私の部下だから当然だが」

そこで彼らを出迎えたのは、忘れもしないこの男——アルバート・ウエスカーである。そして、ウエスカーの部下であつたクリスが前に出て叫ぶ。

「最初から……最初からS. T. A. R. S. を裏切つていたんだな！」

「ああ、この経緯は大方君らが思っている通りだ。だが、こちらも時間が惜しいものでね。片手間で失礼する」

「このゲス野郎……！」

サングラスを掛けた彼は、こちらに目すら向けないまま、化け物——タイラントが入つた培養槽の隣にあるコンソールに何かを入力し続けていた。

「何をしているウエスカー？」

「……………」

「ウエスカー！ コンソールから離れろ！」

「……はあ、バリー」

そして、当然S. T. A. R. S. らはウエスカーへと銃口を向ける。しかし、ウエスカーはそれを気にした様子もなく、相変わらず、コンソールを弄る。そして、何度か警告をされたため、小さく溜め息を吐くと行方不明のS. T. A. R. S. の隊員——バリー・バートンの名を呟く。

「動くな！」

すると、S. T. A. R. S. らの真後ろから彼らが知る声が聞こえ、そちらに振り返ると——そこには彼らにマグナムリボルバーの銃口を向けるバリーの姿があつた。

「バリー!? どうして!?!」

「何をしているんだバリー!?!」

「まさか、バリーもアンブレラの——」

「悪く思わないでやってくれ。彼は娘を人質に取られているんだ」

そう言つてウエスカーは小さく嘲笑いながら、尚もコンソールに向き合い——ふとした瞬間に表情を曇らせ、驚いたように口を開いた。

「なに……?」

そして、S・T・A・R・S。らがバリーと膠着状態にある中、焦るようにコンソールを叩き続けるウエスカーであつたが、やがて手が止まる。

しかし、ウエスカーがコンソールに指を触れずともディスプレイ内で勝手にプログラムが組み上がる様子が見て取れた。

「ありえん……たつた2ヶ月足らずで、あれだけの研究をしながら、プログラムミング技術を覚え、あらかじめ次に操作されたときに自身のプログラムでタイラントを起動するように仕込むなど——」

そして、作業を終えたディスプレイには、ただ一言だけこう文章が表示されていた。

”
》
To Umbrella Welcome to the Hell

次の瞬間、培養槽のガラスを突き破つてT-002型——タイラントが飛び出すと、真つ先に駆け出してウエスカーの首を片腕で掴み上げ、もう片方の爪の並んだ腕で彼の体を刺し貫いた。

「!?!」

声を上げる暇すらなく即死であろう。そのまま、ウエスカーの亡骸をタイラントは遠くに放り捨てると、それに目を向けることもなく、バリーを含むS・T・A・R・S。らを見据えると、飛び掛かるために構え始める。

「させないー」

直ぐに反応したレベッカがホルスターからマグナムを抜き出して放つのと、マグナムリボルバーを構えたバリーがタイラントに向かって発砲するのはほぼ同時だった。

一発を頭部、一発を胸部に受けたタイラントは、即座に横に飛び退

き、他の培養槽の裏に立つことでそれを盾にしている。

「バリー……！」

「すまねえ……！　コイツでウエスカーをぶち抜くべきだったんだ」

「ありがとう！　でも話は後よ！　来るわー！」

タイラントは培養槽と天井の隙間を潜り抜けるように跳ぶと、S・

T・A・R・S・らの頭上から巨大な爪を振り下ろした。

間一髪のところでは全員は飛び込み散らばることで避けたが、彼らにいた金属の床板は、巨大なハンマーで殴り付けたかのようにひしゃげている。

「くっ……!!　映画スターかよコイツは!?!」

リチャードがそう言うのも無理はない。タイラントは自身の弱点である心臓と頭部を両腕で庇いながらも、指の隙間からこちらを覗いて確認し、基本的にジャンプによる長距離の跳躍のみで移動している。

「なんだ……!?!」

そして、更にタイラントは、タイラント用の銃弾さえも容易に弾く培養槽を素手で破壊することで1枚の強化ガラスの板に変え、それを爪のない手で構えて心臓と頭部を守りながら、今までのように戦い始めた。

強化ガラスはタイラントの爪の前には無力だが、マグナム弾程度なら小さなヒビしか付かず、割ればまた別の培養槽を破壊して強化ガラスの盾を作り立ち向かって来る。

ジャクリーンのように銃でも持つていれば、とっくの昔にS・T・

A・R・S・は死傷者が出ているであろう。

とは言え、タイラントにとって災難だったのは、ここにはS・T・A・R・S・らが6人いたことだ。あらゆる方向から繰り出される銃撃を前面のみの盾で十全に防ぐというのは、流石に無理が生じていた。

1〜2人ならいざ知らず、流石に6人から同時あるいは別々で攻撃されれば堪ったものではない。単純なハードウェアの限界ということなのであろう。

そして、合計百数十回に及ぶ銃撃の末、タイラントは膝を折り、床に叩き付けられるように倒れ付したまま、遂には動かなくなつた。

「やったの……?」

「みたいだな……」

「だが、虎のようにまた動かないとも限らない。ブラッドも燃料に猶予がないらしい。証拠の確保は不十分だが……まずは命だ。信号弾は既に見つけてある、ヘリポートから脱出しよう」

エンリコの指示に従い、S. T. A. R. S. らはヘリポートを指した。すると直ぐに機密保持のための自爆装置が起動し、アナウンスによるカウントダウンが始まつた。



ヘリポートに向かう途中で襲い来るB. O. W. を片付けながら、最後にエレベーターでヘリポートに到着しS. T. A. R. S. らは信号弾を放つてブラッドが乗るヘリコプターに合図を送つた。

ひとまずはこれで助かると、思い思いに安堵の様子を浮かべていると、ヘリポートに空いた穴からタイラントが跳躍して現れた。

「タイラントだ!」

「くそっ……! 案の定、追ってきたか!」

そして、タイラントが暴力性に満ち溢れた眼光をし、こちらを襲う

ために動き出そうとした丁度そのとき――。

』!!』

タイラントが通ってきた場所を同じく跳躍して、これまでS・T・A・R・S・らを執拗に追いつけてきたダンプリングタイガーがタイラントの背後に降り立つ。

「嘘でしょう!? ここまでアイツまで!」

「不味いわ……これじゃあ、へりに乗れないわ!」

タイラントがS・T・A・R・S・の隊員へ歩き出す中、ダンプリングタイガーは一旦S・T・A・R・S・の隊員を眺める動作をした。次にタイラントの背を眺め、感情を映さない瞳で少しだけ思考しているように止まる。

そして、ダンプリングタイガーはカチカチと顎を打ち鳴らすと――高い脚力で跳躍し、タイラントへ向けて襲い掛かった。

』!!』

』!!』

「なんだ!? 喧嘩別れか!」

「いや……虎野郎はタイラントの方が俺らよりも旨そうに見えたんだろ!」

タイラントの背中を鎌状の腕で大きく引き裂いたダンプリングタイガー。流石に堪らない様子で怯んだタイラントは、振り返ると同時にダンプリングタイガーの胴体を爪で薙ぐ。それによって、ダンプリングタイガーの胴体に大きな爪痕が刻まれる。

』!!』

しかし、全く怯まないダンプリングタイガーは、タイラントを2本の腕で正面から抱き着くように拘束すると、残り2本の鎌状の腕でタイラントの胴体を交互に連続で突き刺し始める。

その威力は凄まじく、タイラントの鋼のような肉体を容易に刺し貫いた。また、3 m近い体格を持つダンプリングタイガーは、タイラント以上の怪力を持つらしく抜け出すことは不可能であろう。

しかし、アンブレラの究極生命体であるタイラントもそれだけでは終わらない。タイラントはダンプリングタイガーの胴体の下部に刻まれたついさつきつけた傷跡に爪を差し込み、上へ向けてしゃくり上げる。

それにより、ダンプリングタイガーの胸部の外骨格が剥き出しになり、更に斜め後方に抜けた爪により、1本の腕が千切れ飛ぶ。

思わぬ反撃に激昂した様子のダンプリングタイガーは、大顎を開くとタイラントの頭部に齧りつく。ミシミシと異音を響かせた末、遂にタイラントはだらりと体を投げ出したまま動かなくなった。

ダンプリングタイガーはタイラントの亡骸を、喰らうことも肉団子にすることもなく地面に落とすと、S. T. A. R. S. らへと向く。その姿は左の片腕を根本から消失し、胴体前面の外骨格を抉り取られたことで内部が露出しており、その中央で心臓のような器官が拍動する様子がありありと見える。

しかし、それでも尚、おぞましいまでの生命力でそこに存在し、手負いになったことで、却って顕現した悪魔のような風貌は対峙するものを、見ただけで戦意を失わせるには十分過ぎると言えるだろう。

そして、ダンプリングタイガーはそのまま咆哮を上げると、数百どころか、数千に登るほどのこれまで見たことがない、凄まじい数のワンプがダンプリングタイガーの周囲を飛び回りつつ、特に前面の外骨格を覆うように全身にまとわりついた。

「どうやらこれで最後のようだな！」
「ここで倒すわよー！」

クリスとジルを皮切りにS. T. A. R. S. ら6人がダンプリングタイガーに銃口を向け銃撃すると同時に、ダンプリングタイガーは人間のように助走をつけて走ると、数mの距離を一気に詰めてクリ

スに飛び掛かる。

「くっ……！」

クリスはそれを横に飛び込みながら避けつつ、サブマシンガンを連射するが、ワスプの鎧と呼べるような密度と数により、着弾しても撃った分だけが削れるだけで、先にこちらの弾が尽きることは明白と言えよう。

「なんて嫌な防弾チョッキだ!？」

リチャードがアサルトショットガンを放つが、やはりワスプで出来た鎧の一部が犠牲になるだけでダンプリングタイガーには一切のダメージが通っていない。

「罅があかねえ！ ブラッド！ 俺が積み込んだアレを落とせ！」

『待つてくれバリー！ 今やってる！』

そんな中、ダンプリングタイガーのワスプの鎧が蠢くと、数十匹のワスプがヘリポート中に散らばり、S・T・A・R・S・らを襲うために飛び回り始める。

「日頃からどんな発想をしていたらこんな化け物を思い付くんだ!？」

エンリコはそう言いつつも、レベッカから渡されたサブマシンガンで次々と飛び交うワスプに弾を当てて落として行く。他のサブマシンガンを持つ隊員も応戦したため、直ぐに散らばったワスプは片付けられる。

「ダメっ！ 蜂の鎧が厚過ぎて、火炎瓶では燃やしきれないわ！」

レベッカも火炎瓶をダンプリングタイガーに向けて何度か投げたが、燃えた箇所から直ぐにワスプが剥がれ落ち、装甲の層のような役割をする上に一定のペースで補充されるため、ほとんど意味はなかった。

『!!』

「コイツ……!？」

ダンプリングタイガーは一番近くにいるためか、何故かクリスを執拗に狙って攻撃している。クリスは他の隊員の元に行かせないように一撃一撃が当たれば即死しかねないほどの威力を持つ攻撃を紙一重で回避し続けている。

「おい、早くしろブラッド！ クリスが死ぬぞ!？」

『——よし、投下したぞ！ ソイツで吹き飛ばしてやれ!』
するとブラッドの乗るヘリコプターから、四連装のロケットランチャーがヘリポートに投下され、それを直ぐにバリーが受け取ると、ダンプリングタイガーへと向けて構える。

「ソイツから離れるクリス!」

「——ああ!」

クリスが飛び込んでダンプリングタイガーから離れると、その直後に発射されたロケット弾がダンプリングタイガーへと一直線に迫り、その体へと着弾し、大爆発を起こした。

「ざまあみろ! これで……なんだと!？」

しかし、爆炎が晴れた場所には、ワスプの鎧を失っただけで、本体は健在のダンプリングタイガーの姿があった。

「ならもう一発……!」

そして、バリーからロケットランチャーが再び放たれ、ダンプリングタイガーへとロケット弾が殺到する。しかし、ダンプリングタイガーはロケット弾を当たる直前で腕を振ってあらぬ方向へ弾き飛ばしてしまう。

「デタラメ過ぎるだろ……!」

「でも今なら当たるわ!」

『!?!』

ジルがサブマシンガンを剥き出しの心臓部へと放つと、ダンプリングタイガーは少し怯み、明らかにこれまでとは違う反応を見せる。

しかし、直ぐに大量のワスプがダンプリングタイガーへと集まると、再びワスプの鎧と化して全く銃弾が通らなくなった。

「もう一度、ロケットランチャーを撃って蜂を剥がして!」

「おう!」

バリーがロケットランチャーを放つと再びダンプリングタイガーは爆炎に包まれ、体を覆っていたワスプが霧散する。

「今だ! 総攻撃だ!」

『!?!』

エンリコの掛け声で、彼とジルとクリスとレベツカはサブマシンガンを放ち、リチャードはアサルトショットガンを放つ。それはダンプリングタイガーの心臓部へと命中し、少なくともダメージを与えただろう。

するとダンプリングタイガーはこれまでとは若干、質の違う咆哮を上げる。すると、ヘリポートの外壁をよじ登り、10匹近いプレイグクローラーが侵入し、S・T・A・R・S・らへと襲い掛かってきた。

「ゴイツ!? どんだけ呼んだら気が済むんだ!？」

流石にS・T・A・R・S・らのほとんどが、プレイグクローラーの対処に追われる。そのうちにダンプリングタイガーは、全身に三度ワスプの鎧を纏う。

そして、自身もS・T・A・R・S・への攻撃を再開し、ジルに向けて十数mの距離を跳躍により一度で詰め寄ると、その大鎌を振り下ろした。

「ジル!？」

「リチャード!？」

それにジルよりも先に反応したりリチャードがジルを押し退けて庇う。リチャードはダンプリングタイガーの攻撃を肩に受けて弾き飛ばされた。

「リチャード……!?!? よくも!？」

「だ、大丈夫だ……! それよりもアイツを——」

リチャードが持っていたアサルトショットガンを拾い上げたクリスがダンプリングタイガーへと接近し、至近距離で放つ。ワスプの鎧によってダメージは皆無だが、その衝撃で行動を止めることは出来ない。

「退けクリス!？」

バリーの叫びでクリスがその場から飛び退くと、ダンプリングタイガーへと最後のロケットランチャーを放ち、ワスプの鎧を撃ち砕く。

「クリス先輩! これを使ってください!？」

そして、レベツカがダンプリングタイガーの最も近くにいるクリスに向けて、自身のマグナムを投げた。

それをダンプリングタイガーへと飛び込みながら空中で受け取ったクリスは、爆炎が晴れたばかりのダンプリングタイガーの懐へと潜り込み、マグナムを心臓へと直接突きつける。

「終わりだ化け物……！」

そして、マグナムの弾倉が空になるまでダンプリングタイガーの心臓へと放たれ、復讐と狂気の元に生まれた生命へ終止符を打った。

「!? ——!!!?」

度重なるダメージとトドメにより、ダンプリングタイガーは腕を無造作に振り回しながらよろめいて後退し、その場に四つ這いになるように倒れ込む。

しかし、まだ死なずにもがいているため、S・T・A・R・S・らは銃を向けたが、その後ろを見て一様に固まる。

なぜならダンプリングタイガーの肩に完全に死んだと思っていたタイラントの腕が掛けられたからだ。ダンプリングタイガーがタイラントの近くに来たこの瞬間に、高過ぎる生命力で、既に上半身だけの機能すら満足に残っていないほどの損傷を受けているタイラントが再び復活したのである。

そして、タイラントはその大爪でダンプリングタイガーの背中から心臓を貫いた。

傷口から大量の体液が溢れると共に、全身の再生能力が完全に停止し、周囲に幾らか残っていたワスプが蜘蛛の子を散らすように離れて行く。

「……………」
ダンプリングタイガーは完全に生命活動を停止し、2度と動くことはない。

そして、タイラントもまたあの一撃が本当に最期の執念だったのか、ダンプリングタイガーをその腕で貫いたまま、壊れたロボットの

ように停止して、2度と動き出すことはなかった。

そんな狂気の産物でしかない二者を見たクリスは、勝ち残り生き残ったにも関わらず、決して晴れない表情で呟く。

「帰ろう……アンブレラとジャクリンを止めなければならぬ」

それを聞いたS. T. A. R. S. らは思い思いの様子や表情を浮かべながらヘリコプターに乗り込んで行く。

後に洋館事件と呼ばれ、全ての発端の出来事更に原初の出来事となるこの事件は、S. T. A. R. S. の隊員5名を犠牲に終結したのであった。



アルバート・ウエスカーは、ウィリアム・バーキンから手渡された始祖ウイルスがベースで、肉体的に死亡してから70%の確率で復活と共に肉体の強化を、20%で復活のみ、10%でそのまま死亡する効果のある試作品の強化薬による賭けに勝った。

そして、彼は強化された自身の肉体性能に喜びながら自爆のカウンtdownを始めたアークレイ研究所を抜け出し、洋館へと戻り、エントランスから外に出ようとしている。

(許さんぞクリス……セルゲイ……スペンサー……そして、マーカス

……！　まずはアンブレラだ……！)

しかし、ウエスカーが本来入手する予定だったデータがアンブレラのAI——レッドクイーン機密保持のための防衛機能により、入手不可能だったため、ウエスカーの内心は荒んでいた。

道中に襲い来るゾンビや、クリムゾン・ヘッドを倒しつつ、ウエスカーは洋館の廊下を抜け、特徴でもある広いエントランスに出て――

「やあ、アルバート。随分、久しいな」

ひとりの白衣を着た老人——ジェームス・マーカス博士の姿をした何か。そして、この洋館を建築したジョージ・トレヴァーの娘——リサ・トレヴァーが、この屋敷に招かれたときの14歳当時のままの姿で隣にいてウエスカーは訳がわからず絶句する。

マーカス博士はそれを面白く思ったのか、くつくつと笑いつつ小さく指を鳴らす。するとエントランス内に3体のタイラントが現れた。

1体はアンブレラ幹部養成所で見たやや肌が緑掛かっているT-103型と酷似したタイラント。背に剣を装備している。

2体目は黒紫色の肌をして3.5m程の巨大なバンダースナッチのようなタイラント。明らかに量産型の風体ではない。

そして、3体目。胴体の上半身、左肩部、左手の爪部以外の全ての肌がゴールド色をした奇妙なタイラントである。まあ、金色というよりもターメリックライスのような色なのだが、相対的にウエスカーにとってこの個体が1番意味のわからない個体かもしれない。

それら3体のタイラントは全てマーカス博士と、リサ・トレヴァーの背後に立ち、対峙しているウエスカーを見下ろす状態で動きを止め、マーカス博士はどこか面白げに口元を歪める。

「私がとつくに逃げ出していると思っていたか？　それよりも、確かにアークレイ研究所に残したタイラントのプログラムに細工をし、君を一度殺した筈なのだが……なぜまだ生きているのかね？」

ウエスカーは自身でもここまでやるのかと呆れるほど陰湿かつ用

意周到な徹底振りに冷や汗を流し始め、まずはこの窮地をどう切り抜けるか考えるのであった。

洋館脱出

「お前は……なんだ？ マーカスではない筈だ」

「私がおかかか？」

ウエスカーはマーカス博士のすがたかたちをしている存在が、真つ先に交戦し始めることはしなかったため、その質問を投げ掛ける。

「ふむ……説明し難いが、他ならぬアルバートは知っておくべきだろう。よろしい、私は——」

「ジャクリーン、顔違うよ？」

すると隣にいるリサ・トレヴァーから横槍が入り、マーカスを模した存在はそちらの方に向く。そして、やや困ったような表情を浮かべていた。

「リサ——」

「お姉ちゃん！」

「……………お姉ちゃん。わかったから少しだけ待っていて——」

「むー……顔違う！ ジャクリーン返して！」

「はいはい、ただの悪ふざけだよリサ……お姉ちゃん」

マーカスを模した存在は肩を竦めてお手上げと言ったジェスチャーをしてから、リサ・トレヴァーの頭を撫でる。するとマーカス博士だった容姿が、白衣を羽織ったスーツごと全身の表面が捻れるように蠢き、徐々に姿を変えた。

身長は少しだけ低くなり、体の線もより細いものにならなくなって丸みを帯びる。更に骨格だけでなく髪が急速に質を変えながら伸び、新たな顔が形成され、マーカスが着ていた男性モノのスーツはレディーススーツへと変異する。

サイズ以外はほとんど変わらないのは白衣だけだが、よく見ればスーツに付いた名札の名前が変わり、ジェームス・マーカスからジャクリーン・マーカスという女性名に変更されていた。

「まあ、私も最近はこちらの姿の方が馴染んできたところだ」

「ジャクリーン！」

リサ・トレヴァーが、マーカスを横していた存在——ジャクリーンに嬉しげに抱きつき、それをジャクリーンは背中に片手を回してゆっくりと擦っている。

「彼女はアルバートの知るリサ・トレヴァーで間違いないよ。アークレイにいたとき、副次的に知能が回復してね。今ではとても可愛らしい」

ウエスカーはジャクリーンがジェシカ・トレヴァーに似ていると最初は考えたが、それよりも遥かに若くどちらかと言えば、リサ・トレヴァーに近い顔立ちをしていたため、リサが大人へと正しく成長した姿を横していることに気がつく。

「リサの要望の通り、私はジャクリーン・マーカス。一応、君とも面識はある筈だ。尤も、研究室のごちゃごちゃした机上のガラスケース越し。それが飼育室の強化ガラス越しにだけけど、ね」

「……………」

既に答え自体はウエスカーの中で会う前から出されているため、彼は事の成り行きを見守る事にした。

まるで、自身を気の置けない友人か何かのように扱っているようにさえ思えるジャクリーンの姿はウエスカーからしても異様である。

「ふふふ……随分大きくなっただろう？ あの頃の私は手乗りサイズだったからな。そのとき私に付けられた番号は4番だよ」

「——!? T—ウイルスの原型を生み出した個体か!？」

流石のウエスカーも口を開かざるをえなかった。

それはアルバート・ウエスカー、ウイリアム・バーキンが幹部候補生としてアンブレラ幹部養成所に配属されてから直ぐのこと。まだ、ウエスカーがウイリアムの才能の前に、研究者としての道を諦める前の話だ。

あるときにジェームス・マーカスは、始祖ウイルスを4匹のヒルに注入し、それらが学習による知能の発達と、攻撃性の向上が見られ、T—ウイルスの原型が、そのヒルの中で生み出されたのである。

しかし、4匹のヒルは最初に共食いをして、2匹に数を減らしてい

る。そのときに残ったヒルの背に自然塗料で振られていた番号が、1番と4番の個体だ。これは共食いという結果になり、書き残すような事柄でも無かったため、記録には記されていない。そのため、あのときにマーカス博士の助手をしていた者、マーカス自身、そしてヒルしか知り得ないことだった。

ジャクリーンは自身がそのときの4番個体のヒルであると言いたいのだろう。これが本当ならば、彼女こそが、ある意味Tーウィルスの最初の開発者ということになるが、そちらは特に気にした様子はない。

「にわかには信じられんな……」

「死者が再び立ち上がる研究をしていて何を今さら……まあ、実際には活性死者は死してはいないが、それはどうでもいいな」

ジャクリーンは小さく笑いつつ、手を広げて何かを思い出すように遠くを見た。

「10年ともう少しで3ヶ月前のあの日。君とウィリアムは恩師である父を殺した。そして、ウィリアムは父を踏み台に成り上がり、ラクーンシティ地下研究所の所長になる大出世。それに比べて、君は実験部隊の隊長をし、1度死んでアークレイの自爆から逃れようとしている。今のところ、あまり華々しい人生では無さそうだね」

「……………」

ウエスカーは何も言い返さなかったが、内心では”余計なお世話”だと毒突いていた。しかし、それを顔には一切出さない。

「私と……つい2日前に死んだが、もう片方の頭角個体は、父の骸を10年掛けてゆつくりと……その知能、その思考、その記憶、その性格、ジェームス・マーカスという人間が司る全てを喰らい尽くし、自らのモノとした。私はジェームス・マーカスの家族——彼が遺した……たったひとりの愛娘まなむすめだよ」

”まあ、ヒルは両性具有なので私は雌ではないのだがね”とジャクリーンは付け足しつつ、更に口を開く。

「ならば私がスペンサーに復讐しない理由はないだろうか？ その過程でアンブレラを潰し、父を殺した者にも同じ報復を与える。私はその

為だけに今は生きているのだ」

「……………」

ウエスカーは内心で下らないという感覚を覚えつつも、折角の才能をつまらないことで無駄に消費していることへの感嘆に近い感情を持っていた。

「私を侮蔑するかね？ まあ、それもよい。今さら私も止まれぬのである。私はジャクリン・マーカスであり、私はジェームス・マーカスなのだ」

言っている意味が理解出来ない。というよりも人間には理解できる訳がないだろう。ジャクリンは人間には無い感覚を持っているに他ならないからだ。

「父は君を信頼していた」

唐突にジャクリンはそう呟くと更に言葉を続ける。

「ああ、なんと愚かなことだ。死期を早めたのは何よりも、君を疑わなかったこと。それが理由で父は死んだのだ」

「ほう……………」

その言葉にウエスカーはジャクリンを評価し直す。愚かなことを自覚できない者と、愚かなことを自覚しながらもそれを止めない者はまるで話が異なる。無論、後者の方がずっとマシだ。

「だが、それでも父から君への信頼という名の愛が、死んだ瞬間から、全く変わらぬまま私のなかにあるのだよ……………実に度しがたい限りだ。わかるか？ 私のなかに渦巻く君への愛憎が？ 君を見ると感じる父の安心と信頼を……………！ そして、私の憎悪と殺意の形を……………！」

ジャクリンは人間で言えば心臓がある位置に手を置き、その周囲の擬態が解け掛けるほど握り締め、血を吐くような思いの丈を吐き出した。

「私はジャクリン・マーカスだ！ しかし、その元の思考、記憶、思いの全てはジェームス・マーカスのものだ……………！ それ故に私はわからない。己の事のように鮮明な父の記憶がある。父を喰らう前の臃気おぼろげな私の記憶がある。そして、今は思考する頭脳と、海面よりも激しく揺れ動く私自身の感情がある」

擬態が解けた胸部には握り締めたせいで、その部分のヒルが避難したのか、ぽつかりと穴が空き、その中には人間のような心臓はどこにも見られず、湿っぽいがらんだような空間だけが広がっている。

「私がアルバートとウイリアムに抱いている感情は、愛憎、だよ……。家族の次に愛していた……信頼している……！ だからこそ憎い……殺したい……！」

”セルゲイとはまた違った方向に拗らせているな”とウエスカーは、短期間に異常者を立て続けに2人も相手にすることになったことに溜め息を吐きたい気分であった。

「よしよし……」

突如として、リサ・トレヴァーは何を思ったのか、ジャクリーンに抱きつく、その手で彼女の頭部と胸部を慈しむように優しく撫でた。

するとジャクリーンはリサ・トレヴァーを自ら抱き寄せると、強めに抱擁をして、彼女の頭部を顔につけて目を閉じる。

「リサ……リサ……私の家族……」

「うん、いたいのでいたいのでいけ。ジャクリーンは大切な家族。私の妹。大好き」

目蓋を開けたジャクリーンはリサ・トレヴァーと密着するのをどこか名残惜しそうに止めて、ウエスカーと再び向き合う。そのとき既に、ジャクリーンの胸部に空いていた穴は塞がり、いつの間にか擬態し直されていた。

「失礼、少しばかり取り乱した。この感情というものは本当に厄介だ。どんな研究よりも私にとっては難しいかもしれない。未だに振り回されてばかりだからな。まあ、私はまだ生後3ヶ月にも少しだけ満たない生娘なものでな。許してくれ」

「要件はなんだ……？」

”お前のような生娘がいるか”と言いたいウエスカーであったが、少しだけ片眉を潜めて遂にこちらから話を切り出した。ジェームス・マーカス譲りの話の長さをジャクリーンが引き継いでいることに気付いた為である。

「ああ、要するにだな。私は私の意思で紛れもなく君を殺した。しかし、君はこうして生きている。それに対して、どうしたものかと決めかねているところなのだ」

「……………は？」

ついさつきまで、殺す口実を並べているようにしか思えなかったジャクリンの意外な言葉に思わず、ウエスカーもそんな眩きを上げてしまった。

「目には目を、齒に齒を。同害復讐法については知っているだろう？

私はその法が好きだ。何せ、私はただの人間とは到底、比べ物にならないほど強靱で再生力がある体をしており、パーツごとに代えも効くからね。スペンサーとアンブレラ以外には、ポリシーとして極力それを適用したいと思っているのだ。私自身、どうにもやり過ぎる嫌いがあるからね。自分を律することが出来るのは自分のみだ」

それは化け物の思考からは掛け離れた真つ当なルールであった。尤も人間からは大きく外れてはいるが。

「故に死には死を。だから私はアークレイに残したタイラントで確かに君の生命活動を停止させた。しかし、何故か君はこうして甦ってしまった。となると——私からこれ以上は君に報復するわけには行かない」

そう言つてジャクリンは大きく肩を竦めるジェスチャーをして見せた。

「君が真つ先に発砲でもしてくれれば、私は嬉々として君を襲つただがね」

「……………本気で言っているのか？」

「だから、最初に言ったではないか。君が甦つた理由を教えて欲しいと。私がここにいるのは研究者としての純粋な興味だよ」

確かにその通りではあるが、この会話が噛み合わなくなることもマークス譲りだとウエスカーは頭を痛めたような気分になった。

「私は君をまだ殺したい。けれどそれは父のための報復ではなく、私の個人的な恨みだ。そして、父の記憶から未だに君を信頼する私がある。度しがたいだろう？ 私も不思議だ」

二律背反の人間らしい心の所作を、天秤で全く同じだけ乗せて吊り合わせたかのような余りに人間離れた思考にウエスカーは閉口した。

そして、ウエスカーは想う。この“ジャクリン・マーカス”という女は、己がこれまで見てきた愚かで汚い人間達とは、比べることさえ烏滸がましい聡明な怪物だということ。見えている地平がきつと人間よりも高次のモノなのだ。

「おお、そろそろアークレイが吹き飛ぶ時間だね」

マーカス博士が所持していた古ぼけた金の懐中時計で時間を確認したジャクリンはそう言う。ウエスカーとしてもこの場で死ぬ気は更々なかつたため、交戦する時間さえもなくなったのは、会話でこの場を切り抜けたと言つても過言ではない。

ウエスカーがこれまでに、アンブレラに尽くして見てきたB・O・W.の中で、間違いなく最も凶悪な個体が会話のみで片付いてしまったのはなんとも皮肉なものだろう。

「まあ、何れにしても今日のところはここまでか。次の機会があれば、ただのお茶の誘いでも、私が設計したB・O・W.の商談でも、また昔のように私を暗殺して来てもそれ相応に歓迎するよ。私は暫くラクーンシティに滞在する予定のため、用があれば見つけてくれたまえ」

そう言い終えるとジャクリンは「ああ、これはあげよう」と思い出したように懐から取り出して、ウエスカーへ向けて投げ渡したのは、バイクの鍵であった。

更に彼女は洋館の玄関口へと手をかざす。

「館のすぐ外に停めてある助手が乗ってきたバイクのキーだ。1人か2人しか乗れん乗り物などあつても仕方ないからな。森を抜ける足にはなるだろう。なに、映画のように爆弾を仕掛けるような小細工はしていないから安心したまえ」

「……………」

ウエスカーはその言葉にジャクリンらを警戒しつつも正面玄関へと向かう。そして、彼女らが一切動きを見せなかつたため、無事に

到着した彼は、懐から注射器——彼が自身に打った強化蘇生薬の空容器を彼女へと投げた。

若干、注射器の内部に溶液が残っているため、彼女程の研究者ならば解析は容易であろう。

「借りは作らん……」

「ククク……そういうところが、父は君を気に入ったんだろ。無論、私も……ね」

ウエスカーはそれだけ言い残し、ジャクリーンの言葉に返答はせず、ウエスカーは外に出ると、偉く久し振りに感じる陽射しを浴びながら、本当に近くに停まっていたバイクに乗り込み、キーを回すとエンジンが駆動する。

（収穫はあった……）

どのみちアークレイで彼が何をしようとも、データは全てレッドクインに抜き取られた。故にアークレイでデータとしては何も得るものは無かったが、ジャクリーンというこれから台頭するであろう真性の怪物とのパイプを持てただけでもよしとした。



「やはり熱いな……」

私はウエスカーが洋館から出て言ってから、同じように玄関を抜けて外に出た。すると案の定、朝の陽射しに照らされ、熱さと痛みを強

く感じると共に肉体の結合が緩む。

これでも1日15分の日光浴によつて多少は耐性がつき、随分我慢できるようになったのだが、ハッキリ言つて体から立ち上る細い煙を見ていると無駄な努力のようには感じないな。まあ、人間を終わらせるのは諦めと言う。続けることに意味があるであろう。

陽射しの届かないアークレイの深い森に入ろうと、リサとタイラントたちを連れて十数m移動し木陰に入る。

そして、私が館に振り返つて数秒後、派手に音と爆炎を上げながら洋館は吹き飛んだ。

正確にはアークレイ研究所が自爆した余波が洋館にまで及んでいるというのが正しいため、爆風に洋館の内部を晒された後、その爆風が外にまで広がつたというのが正しい。

「きゃっ!?!」

「やはり軽いな……」

体重が200kg以上ある上、爆風に備えて踏ん張っていた私とタイラントたちとは異なり、体重50kgもない上に私の回りをくるくる回つていたため、吹き飛ばされ掛けたリサを掴んで止める。

「えへへ、ありがとうジャクリーン!」

「はいはい……世話の焼ける姉だ」

「むー……」

そう言うとりサが頬を膨らませ始めたので、微笑ましく思いつつ頬を指でつついていると、前方の森の中からぬるりとセンチュリオンが現れた。

センチュリオンの背には、大量の小型金属コンテナや衝撃吸収材を巻かれた研究機材が固定されて積まれており、さながらムカデの引つ越し屋さんと言つた若干メルヘンチックな様相になっている。

「終わったみたいね。ここから17km行つたところに丁度いい廃墟があるから、そこを目指しましょう」

するとセンチュリオンの上に乗っていた女性——フォーアイズがそこから降りてきて声を掛けて来た。このとんでもない脱出方法を考えたのは他ならぬフォーアイズだ。

まず、センチュリオンに機材を運ばせてラクーンシティの方向にある誰も訪れないような何の変哲もない工場跡などの地下空間のある廃墟へと向かい、そこを拠点にする。

このときにこれまで製造した全てのカメラαにセンチュリオンを通して指示を出させ、アークレイ山中を封鎖している検問所の内、2ヶ所の大きな検問所を襲撃したまま放置することで、無理矢理アンブレラに処理をさせて時間を稼ぐという寸法である。

最初の拠点は、地下空間を少しだけ改築して、センチュリオン、ジャバウオック、ゴールドタイラントを休眠状態で保存しておく。

それから一旦、T-001——プロトタイラントトリサは留守番をさせ、残りのフォーアイズと私でラクーンシティに入り、拠点にしても問題なさそうな場所を見つけ、そこを掌握したところで、プロトタイラントトリサを秘密裏に招き入れ、可能ならば最初の拠点に残した3体のB・O・Wを物資が何かに偽装して搬入するという手筈だ。

正直、脱出が徒歩な点以外は非常に理に適った計画であったため、フォーアイズを2度見したというか、腐つても元U・S・Sでウィルス分野でも天才といえるだけの才能を持つことを実験以外では、初めてマトモに実感できたような気がするが、口には出さず。

「殺さなくてよかったの？」

「1度は殺したからな。それにアルバートのことは私がよくわかってる。アンブレラから離反するのなら奴は必ず、自らの手でアンブレラの死水を取るだろう。アイツはそういう、どことなく陰湿で小さい男だ。それが少しだけ父に似ている」

フォーアイズがウエスカーを見送ったことについて、そんなことを言ってきたため、父の記憶から思っている通りのことを伝え、最後に私の感想も述べた。

まあ、人間は利益と情でしか動かないが、その点は私もそう変わらない。1度殺した以上は、利益を優先したまです。アルバートなら放っておいても、アンブレラに大打撃を与えてくれることだろう。

「94体のカメラαはどうした？」

「半分に分けてアークレイ山中の2ヶ所の検問所に放っておいたわ。

今頃、U・S・S. はてんやわんやね」

「まあ、商品価値の無いB・O・W. なら妥当な使い方だな。生産性だけは目を見張るモノがあり、母体も他の使い途を試したいと思っていないこともなかったので、少しだけ残念だが……」

そう言うతోフォーアイズはセンチリオンの背に固定されている物の内、人間の半分程度の大きさの金属製でガラス張りの目穴しか無いカプセルを指差した。

そのため、言われた通りにその目穴を覗くと、随分と物理的に小さくなった母体と目が合う。下腹部の状態を確認すると少しも膨らんでおらず、キチンと今は稼働していないということもわかる。この辺りの気配りをサスペンデッドにもして欲しかったところだな。

「そう言うと思つて、母体を持ってきたわ。手足が持ち運びに邪魔だったから取っちゃったけど」

「そうか、気が利くな。それに合理的だ」

「でしよう?」

確かに、製造プラントならばイチイチ拘束するのも面倒なのでこうしてしまうことが最も効率的だな。他に製造プラントを用意する時は最初からこうしてしまう事にしよう。

「他の実験素材は?」

「全部、私の新しいウイルスを投与したわよ? まあ、マーカス博士からしたらどれも大したものじゃないだろうけどね」

「2度と口は聞けないということだな。なら結構だ」

「ウフフ……本当に私、マーカス博士のそう言うところ好きよ。私好みの上司だわ」

私はフォーアイズと話を終えると、爆発でもまだかなり残っており、戦地にある煤けた廃屋のような外観になった洋館——ある意味、アンブレラの始まりの地を見た。

ここでオズウェル・E・スペンサー、エドワード・アシユフォード、ジェームス・マーカスは、始祖ウイルス研究を隠蔽するための製薬会社を興す事を提案し、共同でアンブレラ製薬を設立された。

あの頃は皆、確かに気の置けない友人だった。互いに目的も性格も

まるで違えど、尊重し合い、洋館のインテリアもそれぞれ好きな物を購入して置き、それぞれがそれぞれの趣味で物を見て、笑い合いながら共感したり、貶したりしたものだ。

何が引き金だったのか。エドワードが始祖ウィルスの実験で最も早く死んだことか？ それかスペンサーが神になろうと囚われたことか？ はたまた父——私がヒルを愛し始めたことか？ 全ての気もするが、そうでない気もする。しかし、今となっては知るよしもない。

決して私はアルバートを待つていた訳ではない。この屋敷の最期を見届けたかったのだ。せめて私ぐらいはな……。

そして、そんな儂い思い出の地は、たった今消えた。私は……マーカスとしては、何とも言えない気分だよ。

「壊れちゃったね……お父さんが造ったお家……」

リサのその言葉に屋敷の最期を見て感慨深い感覚に浸っていたのは自分だけではないことに気付く。

「いつか、お父さんとお母さんのお墓参りにまた来ようか。きっと天国で喜んでくれるよ」

「——うんー」

その花が咲くような笑顔を愛おしく思った私はリサを撫でる。それを受け入れている彼女を見つつ、髪を触る手の感触を楽しんでいるうちに、いつの間にか随分とマシな気分になっていた。

「……………行こうか。ここにはもう、古ぼけて色褪せた思い出しかない」

その言葉を最後に我々は陽の光が届かないほど常に暗い、アークレイの森へと入り、私は2度と振り返ることはなかった。



「組織というものは育ち過ぎるとダメになる」

8月の初頭。白衣姿で眼鏡を掛けたオールバックの金髪をした男——グレッグ・ミューラーはどのように呟いていた。持っている書簡に刻まれた印からアンブレラに対しての発言であろう。

「目先の利益に囚われ、大事なものを見失う」

グレッグはラクーンシティのラクーン大学の一角にある研究室におり、そこに置かれた培養槽の近くにある椅子に座って手紙を読んでいる。

「量産だと? ……バカな!」

あるときにその手紙を叩き付けつつ立ち上がると培養槽の前に立って、培養槽へと手を広げた。

「傑作はひとつでいいのだよ……!」

グレッグの目の前にある黄緑色の溶液で満たされた培養槽に入っているものは、黒人がベースと思われる浅黒い肌をしたアンブレラ社の究極のB・O・W。——タイラントであった。

『ソウカ……デハ、”セルゲイ”ニヤラヌト言ウノナラ……ソノ”タイラント”ハ私ガ頂コウ』

グレッグは自身の真上から、彼がこれまでに耳にした男性とも、女性とも遥かに掛け離れ、決して人間が出せるようなものではない声を聞く。

それに驚き、恐る恐る上を見上げるとそこに虫のようにいつの間にか張り付いていたのは、大部分が褪せた緑色で、赤く肉々しい部分を

持つ人型の異形の存在であった。

「な、なんだお前は……!? アンブレラのB. O. W. か!？」

異形のB. O. W. ——女王ヒル ジャクリーンは天井からグレッグの目の前に音もなく降り立つ。そして、触手を無造作に組み合わせたような異様な手で、すぐに彼の首を掴んで持ち上げると宙に浮かせた。

「がっ……あ……!？」

グレッグは首の拘束から逃げようと手足をバタつかせるが、プロトタイラントを容易に振り伏せれる程の怪力を持つジャクリーンに、ただの研究者でしかない彼が抜け出せる筈もない。

『ソノ前ニ君ヲ頂クヨ』

その言葉と共にジャクリーンの全身は大量の触手の塊へと変え、それに呑み込まれたグレッグは、ゆつくりと全身を喰われながらその生涯を終えた。



「兵器というものは力だけでなく、美しく独創的で神々しくなければならぬ」……か」

約一時間後。グレッグ・ミューラーが居た研究室の中で、彼が書き残したと思われる手記を椅子に座って読みながら、そんなことをグレッグと全く同じ声で呟く男性がいた。

それはグレッグと全く同じ容姿をしており、唯一の違いと言えば、フレームが金の眼鏡を掛けていないことであり、彼の眼鏡自体はタイラントのいる培養槽の前に落ちている。

それだけではなく、眼鏡と共にグレッグの歯にあった銀歯等の詰め物も散乱していた。

(それに関しては多少の同感はあるが……高々、自家製タイラント1体を製造し、まだ、未製造のデイルイトというT-ウィルスの特効薬だけでアンブレラを潰すだと？ 敵の正確な戦力も読めず、才能に他のものが伴っていない無能が、アンブレラを相手に出来るわけがないだろう……馬鹿馬鹿しい)

グレッグ・ミューラー——彼にはほぼ完全に擬態したジャクリーン・マーカスは、小さな溜め息を吐いて日記を閉じると、日記を机に戻して立ち上がる。

そして、グレッグに擬態したジャクリーンは培養槽の前に向かうと、床に落ちていた眼鏡を拾い上げて掛け——度の強さに顔をしかめると、胸ポケットに眼鏡を入れ、培養槽に浮かぶタイラントを眺める。(タナトスか……T-002型と発想はそう変わらない時代遅れのB.O.W. に大層な名前を付けたものだ)

その場でジャクリーンは呆れたように肩を竦める。そのとき、タイラント——タナトスの目が開き、ジャクリーンと交わった。

しかし、それは休眠状態のタナトスの何気ない生理行動であり、またタナトス自体に自身の回りで起こったことを人間ほど理解する知能も感情も持ち合わせてはいない。

(尤も、それを差し引いても凄まじく貴重で希少なセルゲイ大佐以外のタイラント素体のオリジナルだ。ありがたく色々と使わせてもらうよ。勿論、君の立場もな……グレッグ・ミューラー)

こうして、ラクーンシティで思いがけない収穫と、ラクーン大学という新たな研究施設を手に入れたジャクリーンは、早速フォーアイズに拠点が入ったことを知らせるのであった。

ラクーンシティ 女王ヒルの手記 8

1998年8月10日

センチュリオンとジャバウォックをラクーンシティの外にある拠点に休眠状態で長期保存し、リサとプロトタイラントとゴールドタイラントをラクーン大学内に運び込んだ。そのため、ようやく再びこのラクーン大学で研究に取り掛かれるようになったので記録を再開することにする。

センチュリオンとジャバウォックに関しては、ラクーンシティに持ち込んでラクーン大学に長期保存しておくには余りに巨大過ぎたため、ひとまずは断念することにした。まあ、襲撃日の1ヶ月程度前に運び込めればいいであろう。急ぐ必要もないだろう。

また、ゴールドタイラントはタナトスと同様に輸送と保管自体は難しくなく、リサはどこにいても特に問題なく、プロトタイラントはラクーン大学の研究区画にいる分には問題はないからな。アンブレラの裏とは無関係のラクーン大学の関係者に見られても、逆に身内は身内で、プロトタイラントは自身が雇い入れた用務員等として、毅然とした態度を示しておけば何も問題はない。秘匿も管理体制も既に徹底しているため、無いとは思いますが、ゴールドタイラントやタナトスを見られたときは私に喰われるか、記憶を抹消されるか選んでもらうことにしよう。

とは言え、このラクーン大学は、幾つか看過しきれない問題点……というよりも制約が大きなモノで2つあるため、アークレイ研究所よりは伸び伸びと研究が出来るような環境ではない。

まず、ひとつ目。私はグレッグ・ミューラーとしてラクーン大学の教員であるため、日中は当たり障りのない研究の傍らで、学生に向けた講義などを行っているため、時間によって行動が制限される。

まあ、講堂は室内のため、締め切れれば陽射しを浴びることはない事と、私自身元々はアンブレラ幹部養成所の所長であり、教鞭を取ることに自体にはさして抵抗がないのが救いだろう。むしろ、性格的に向いているのか、今さら取るに足らないような稚拙な内容にも関わらず、教示するというだけで中々、楽しいものだ。

次にふたつ目。当然だが、特に量産型のB・O・Wの製造は不可能だということだ。いや、設備自体としてはアークレイ研究所には流石に劣るが、決してそちらの面で不可能というわけではない。量産したところで単純にB・O・Wを隠すスペースが無いのである。休眠状態で置いておくにしても、その管理もあるため、そもそもここでは量産化には手を出さない方が吉であろう。

ウィルス研究は通常通り可能なので、フォーアイズには問題ないらしいが、私はどちらかと言えば、B・O・W開発に熱を入れてるので少しだけ残念だな。ちなみにフォーアイズは、ラクーンシティに来てからU・S・Sに再び戻り、グレッグ・ミューラーの元で働くとのこと話を付けに行っており、正式に私の助手としてラクーン大学に配属されることになった。

よくよく考えれば、フォーアイズはアークレイ研究所にはいたが、施設の自爆と共に彼女が居た痕跡は全て吹き飛び、ID類等も使用していなかったため、彼女はアンブレラからすれば1ヶ月と少しの間、消息不明で無断欠勤という状態だったということであろう。ちなみにその期間は全く彼女が使っていない有給扱いだったそう。有給とか効くんだなU・S・S。

そんな奴が、突然フラリと戻ったと思えば、偏屈でタイラントを個人で抱えていることがアンブレラに知れているグレッグ・ミューラーの元へ潜入すると言い始めたのだから、アンブレラとしても好きにしろと言ったところか。これは本人談だが、元々、フォーアイズはU・S・Sでも悪い意味で一目を置かれているらしいからな。何でこんなところは異様に行動的で、抜け目がないんだコイツは。

アンブレラを離反しろとは言ったが、最大限利用し尽くしているため、私としても何か言えることはない。それにしても、

Christine Yamataという本名で呼ぶのはなんだか、フォーアイズと呼び過ぎて違和感を感じるものだ。

とまあ、これまでの比較的どうでもいい経緯はこれぐらいにしておこう。まずは真つ先に解決した事柄について述べよう。

それはアンブレラからT-ウィルスの完全適応者——タナトスの引き渡しを要請されていることだ。その上、それを要請した人物はタイラントでお馴染みのアンブレラの大幹部であるセルゲイ大佐だ。

というのもタナトスを深夜に実際に起動して調べてみれば、黒人男性をベースにしたためなのか、脚力に優れており、セルゲイ大佐を素体にしたタイラントよりも遥かに敏捷性があり、跳躍力に関しては目を疑うレベルである。他にも命令はT-103型と同等程度にはこなすことが可能で、扉を開ける知能も持ち合わせていた。まあ、最高傑作と呼ぶ程ではないにしろ、最初に見て私が酷評したときに思っていたよりは、遥かに高水準に纏まっていたと訂正しておこう。

そして、何故かアンブレラから脱退したにも関わらず、グレッグ・ミューラーはアンブレラにタナトスのデータを渡していたようで、アンブレラにもその完成度と実用性を高く評価され、量産が予定されていた——のだが、それを彼は「傑作はひとつでいい」の一点張りで頑なに拒否したらしい。

ハッキリ言おう。馬鹿なのかコイツは……？ 本気でタナトスだけでアンブレラのB・O・W.をどうにか出来ると思っていたのだろうか？ 確かにタナトスは高水準のタイラントだが、仮にT-103型を3体同時に相手をする事や、完成したネメシスを相手に出来る程の性能がある訳もない。あくまでもタイラントの域を出ない個体なのだ。幾らなんでも過大評価が過ぎる。

それに仮にしびれを切らしたアンブレラがラクーン大学に私設部隊を送り込んでくれば、グレッグ・ミューラーが対処出来る筈もない。人間を暗殺するための部隊の警戒など、それこそタナトスには門外漢だ。

というわけで、私設部隊を今送って来られては流石に面倒になる。というか、ウィリアムに襲撃を掛ける予定の上、セルゲイとラクーン

シテイ内で殺り合うなど正気の沙汰ではない。ラクーン大学からタナトスを奪って潜伏場所を変えることも考えはしたが、それも今さらのため、私はセルゲイと交渉したのである。セルゲイもなしのつづてだったグレッグ・ミューラーが、突然交渉に応じたためか、非常に素直かつ紳士的に交渉は進んだ。まあ、電話越しでだがな。

その結果、素体であるタナトスの引き渡しは一旦停止された。そして、こちらからセルゲイへ引き渡すモノは、まずタナトス素体の組織サンプルと血液の提供。そして、40日の猶予期間内に10体のクローンを製造して引き渡すことを条件にした。ラクーン大学でタイラントの量産は幾つかの原料の入手に特に無理があるが、タナトス素体の体細胞を用いたただのクローンならば期間的にもそう難しい話ではない。

まあ、アンブレラに提供するのはとてつもなく癪であるが、アンブレラに対しては兎も角、セルゲイ・ウラジミールという個人に対しては別だ。向こうは全く認知していないであろうが、私が製造したジャバオツクも元を正せばセルゲイへの借りだ。生憎、それを不意にするような神経を私は持ち合わせていない。ただ、それだけの話だ。



1998年8月13日

ラクーンシティにあるB・O・W・生産工場地帯に近い位置にあるB・O・W・の研究所に2日ほど掛けて潜入した。体を細く伸ばして換気ダクトから施設内に侵入し、目についた職員を喰らって擬態しつつIDを入手すれば、容易く施設中を見て回ることが私にとっては可能であるため、全く難しい話ではない。

尤も、ただの社会科学見学と洒落込むつもりは微塵もない。無論、することはとある試作品の窃盗——いや、むしろ盗掘か。何せそれはラクーンシティにあることをデータ上で知っていたモノだが、B・O・W・未満の失敗作のため、半ば封印されるように置かれている存在だからだ。無論、その設計図もセットで奪った。

まず、施設に侵入後、目的の物を奪取する時間を確保するため、施設内で調整されていた1体のT-103型の脳に直接細工をして暴走させた。その程度ならば事故程度で片付き、セキュリティ上の関係で外部からU・S・S・が駆け付けるまではほぼ無人になるためにやりたい放題である。

また、保管室の周囲の監視カメラは破壊したので映っていないが、犯行は全て擬態したまま行ったため、まずは既に肉体ごとこの世に存在しない職員を疑うだろうな。

そして、運搬に用いた経路は下水道だ。ラクーンシティのアンブレラのウイルス及びB・O・W・関連の施設は、基本的に広大な地下施設のため、下水道の中をくり抜くように存在するので、日中でも陽射しを浴びずに私が入り可能なのである。

その上、下水道というものは人間の生活を支えるために地下にあらねばならず、特に下水道にアンブレラの施設があると言っても過言ではないため、ラクーンシティのそれは地下に張られた蜘蛛の巣の如く極めて広大だ。何かしらの有事の際には下水道から搬入することもあるらしい。構造を覚えた今となっては私の庭のようなものだな。

そんなこんなで、アンブレラの研究施設から目的の物を奪い、収用するための特殊なコンテナに入れて持ち出し、下水道を通ってラクーン大学までコンテナを担いで輸送したのである。

流石にここまでアナログな方法で奪われたとは思えない。何より、

自身の施設でタイラントの事故を起こした上に失敗作の試作品を奪われたとなつては、施設長の首は間違いなく飛ぶ。まあ、それ以前にマトモな企業なら兎も角、組織自体がアングラ組織の代表であり、やたら自尊心や地位欲ばかり高いアンブレラの者共が、組織としての正しい対応をするともあまり思えんがな。要するに高確率で施設内で揉み消されるとも踏んでいる。

そして、予めラクーン大学の使われていない地下区画に作った飼育用兼研究室の培養水槽に運び込み、休眠状態で浮かべたその見た目は、人間程の大きさと球状の肉々しい赤色を帯びた物体であり、そこから無数の細かい触手が覆うように生えているだけの姿という、まるでウィルスをそのまま巨大化させたような奇つ怪な生物であった。

この生物の名は”ニユクス”。アンブレラの試作生物兵器であるが、B・O・W・未満の代物であり、一切の制御が不能のために活動を極限まで落とされたまま、持て余されていた失敗作だ。

ニユクスは触手から他を喰らい同化することで、同化したあらゆる生命体を自身の肉体のパーツとして取り込み、その都度学習し、常に進化し続けることで、臨機応変な対応を取ることにより、これから新たな時代として来るであろう対B・O・W・性能に特化し、正に”夜の女神”の名に相応しい次世代の神話を築く————辺りが売り文句のB・O・W・になる予定だったのであろうな。

だが、それはあまりにアンブレラの手に余った。何せ、技術がないにも関わらず、思いばかりが未来を先行し過ぎていたのである。結果、生まれたB・O・W・未満の何かは、誰の指示どころか、制御さえも受け付けず、一度起動すれば貪食かつ無差別にありとあらゆる生命を喰らい続け、計画もなくブクブクと肥大化し続けるばかりのB・O・W・とすら呼べない謎肉だったのだから。

しかし、その理想については資料を拝見した時点で既に、素晴らしいものであると感じていた。私がこれまでアンブレラが開発したB・O・W・の中でも最高のポテンシャルを秘めていると断言しよう。

そもそも現在のアンブレラのB・O・W・は制御面の安定化を図るため、形態まで人型にこだわるからダメなのだよ。それは人間の遺

伝子を使うなという話ではない。形態の話だ。そもそも、化け物が最初から人間を模したB・O・Wである必要がどこにあるのか。

肉体が人間からより大きく掛け離れ、不定形ならばそれを活用すればいい。手足が足りなければ数を増やせばいい、触手や爪が必要ならそれを生やせばいい、あらゆる環境に順応すればいい。自由自在に肉体が変えられるのなら、機能も変わり、今まで出来なかったことも出来るようになる。

他を取り込み、そのリソースで進化、あるいは自己進化をして常に柔軟な取捨選択をして有り様を変え続ける。それは私が思う究極の生命体に最も近いものだ。全てを常に学び続け、遺伝子レベルで知性を追求し続けるモノこそが、仮に神と人間が呼称する全知全能に最も近い存在になれると言えよう。ゼロから造られ、途方もなく積み上がった知識と生命の塔を見上げた人間がそれを神と呼ぶのだよ。

故に発想としては最高のものであり、Tーウィルスをベースによくもまあ、このような出来損ないの粗大な生ゴミを造ってしまったものだ。なまじそれとなくベースは出来ているだけ、開発者は才能がないということは無かったのであろう。実に勿体ない、もう少し予算と時間を回してやるべきだったな。

ならばジャバウォックを製造したときのように私の挑戦心と、自尊心が騒ぐというものだ。アンブレラの手に余るモノを我が父、ジェームス・マーカスの現し身足るこの私が、ラクーンシティにいる間に完成させてやろうと思いついた訳だ。ここでは襲撃までに1年以上猶予がある予定のため、じっくりと研究してやろう。

というわけで早速――ニユクスを解剖して、隅々まで調べることにした。

当然、そんなことをすれば、このニユクスは使い潰される。しかし、元々このニユクスはB・O・Wとすら呼べない失敗作。このまま改良したところで先は知れているため、B・O・Wの発展と、私の好奇心を満たすための致し方ない犠牲という奴だ。

流石に解剖されると、ニユクスは生意気にも私を逆に取り込もうと

抵抗してきた。しかし、その程度のこととは想定済みで、それを只で受け、取り込まれる私ではない。

結局のところ、Tーウイルスベースの生物兵器が、始祖ウイルスベースの完成した生物兵器を喰らうとどうなるのかということをつつりと教えてやった。結果、始祖ウイルスの毒素がニユクスの全身に回り、触手の1本も動かせないほどに弱り切ったのである。並みの始祖ウイルスベースのB・O・Wなら取り込めたであろうが、生憎私は、体内で始祖ウイルスをTーウイルスへと好きに変異させれる程度に、体内の始祖ウイルスを扱える父の最高傑作のB・O・Wだ。

故にボツリヌス毒素など足元にも及ばぬほどの毒性を秘め、最強クラスの毒素である始祖ウイルスの毒素を体内ならばある程度自由に扱うことが出来る。まあ、自家中毒で死にかねないので用法用量は正しく扱わねばならないがな。そんな私を取り込むなど、出来よう筈もない。こればかりはニユクスにとって相性が悪かったとしか言いようがないな。

そして、既に死に体となったニユクスの中身を全て開き、存分に構成を理解したところでニユクスが死亡し、溶け消えてしまったので、溶けたニユクスの液体はサンプル兼改良個体の製造のために保存しておく。リサにでも飲ませたら能力の向上になるだろうか？　まあ、貴重なサンプルのためそれは保留でいい。

既に私の中にある解剖所見のデータと、研究施設から奪ったニユクスの設計図。これらがあれば次なる改良型ニユクスの製作が可能となる。故に何も問題はないのだ。

さて、元は光るものがあるがよい原種を改良することは、古来より人間が行ってきたこと。すなわち、ニユクスの品種改良の始まりである。



1998年8月16日

とりあえず、新たに製作したニユクス——ニユクス— α 、ニユクス— β 、ニユクス— γ の製造と評価を終えたため、ここに記録する。無論、既に全ての個体は私が直々に廃棄処分済みだ。

ニユクス— α はそもそも以前のニユクスではコアであり、本体でもある球体部分が余りに巨大過ぎたため、10分の1以下に縮小する改良を施した。サッカーボール程度の大きさだな。

その分、攻撃力や侵食能力は比べ物にならないほど弱体化したが、むしろニユクスの機能を考えれば一切、コアを巨大化させるメリットがないため、これは正解であろう。実験後の処分のしやすさや製造のしやすさを考えても妥当だ。他には特に改良を加えていないため、相変わらずただの謎肉であった。

次にニユクス— β 。これから先の実験では以前の改良型——今の場合ならニユクス— α での改良を加えた状態で新たな改良を加えたものとする。

そして、当分これ以降のニユクスに加える改良は”知能を持たせる”ことだ。

一見、難しくない内容に思えるかも知れないが、この難易度は凄まじく高い。というのもそもそもニユクス自体に脳という器官がまず存在しない生命体であるからだ。ニユクスにあるものは、ひとつの原核細胞のようなコアとそれから生える触手のみというとんでもなく単純な生物である。設計図からも製造コストの削減などの理由で、原

核生物辺りを当初は目標にしようとしていたとおぼしき名残が見られる。しかし、ニユクスは歴とした多細胞生物だ。さながら、性質は細菌に近いクラゲのようなものか。説明していても未来を行き過ぎた生命体だな。エイリアンでも作るつもりだったのか。

まあ、理には叶っている。仮に脳がなく知能を持ったニユクスが、相手へと触手を突き刺し、その脳を掌握でき、それを外付けのコンピュータとして知能を使えたのならば、私以上に潜入工作に向けた恐るべきB・O・Wが完成するであろう。いや、記憶ごと即座に入手出来るのなら、尋問の常識すら覆るだろう。

とりあえず、下水道でアンブレラの職員を拉致して、単純に脳髓を摘出した上で処理を施し、それを中心にニユクスーβを製造してみた。成功すればこれが一番手っ取り早く、製造コストも極めて安価で住むであろう。

まあ、ニユクスーγが短期間で既に出来ている辺りから察するであろうが、案の定、実験は失敗した。理由としては、ニユクスは脳髓に定着せずに喰い尽くしてしまったからだ。予想していた結果で、最も濃厚だったため、特に驚きはない。失敗したという事実の意味があるのだからな。

気を取り直して、ニユクスーγ^{ガンマ}。期待させるような言い方であるが、最初に言っておくところからも失敗している。いい線は行っていたと思うのだから。

ニユクスーβの結果から直接人間の脳髓が不可能だったため、人間の脳髓や神経系を形成する遺伝情報をニユクスに組み込むことで、それらを人為的に体内で発生させて、それを自然に使わせるという方法である。ニユクスの性能上は何も問題なく使える筈なのだ。

事実として、ニユクスの内部にキッチンと脳髓が形成され、中に脳髓が浮かんだ赤いガラス玉のような面白い上に、そこから触手が伸びているため、一昔前のB級映画の火星人のような見た目にはフォーアイズと共に笑ったものである。

しかし、ニユクスーγはあるうことか、形成された脳髓を内部で食ってしまったのだ。どうやら根本的にニユクスは人間を食い物と

しか認識していないのであろうか。それならば発生の段階から変える必要があるかもしれない。次なるニユクスー δ に生かすことにしよう。



1998年8月24日

うん、これ無理。

あれからニユクスー δ ^{デルタ}、ニユクスー ϵ ^{イプシロン}、ニユクスー ζ ^{ゼータ}、ニユクスー η ^{イータ}、ニユクスー θ ^{シータ}の5体をアプローチを変えて製造してみたが、全く上手く行ける気配がない。あらゆる工夫を凝らし、如何なる改良を施して、取り付けるあるいは発生させた脳髄自体を貪食して吸収してしまうのだ。つば焼きにして喰らうぞコイツら、私の苦労をなんだと思つてやがる。

発生の段階で躓いているが、そもそも、脳のない生物が、突き刺すだけで他の生物を外付けコンピュータとして知能を取り込むことも余りにオーパーツ過ぎる。非常に残念だが、私をもつても現在設備や技術ではほぼ不可能と言わざるを得ない。もつと大規模な施設と数年の時間があれば可能かも知れないが、ラクーンシティにいる内はそんな猶予も余裕もどこにもないのだ。

故にこのままでは埒が空かないため、妥協と逆転の発想をすること

にし、私は前提として量産のしようもない特注生産個体になってしまうため、コスト面から使わないようにしていた”粘菌”に手を出してニユクスを品種改良することにした。

変形菌とは、変形体とも呼ばれ、栄養体が移動しつつ微生物などを摂食する動物的な性質を持ちながら、小型の子実体を形成し、胞子により繁殖するといった植物的な性質を併せ持つ単細胞生物である。要するに特殊なアメーバの仲間のようなものと思ってくればかまわない。ニユクスに必要なのはその特性のみだ。

例えば粘菌をシャーレで培養し、粘菌を餌場への迷路に入れると、最短経路を探し当て、それに沿って自分の細胞を組織化出来る。要するに粘菌が迷路を解くのだ。このようにときとして、脳を持たない単細胞生物でさえも、ある程度の難しいパズルを解け、知能の代わりとなるのである。

つまり、ニユクスを粘菌そのものに近い形態に変え、人間に類似した情報処理システムに近いコンピュータとして知能を形成すれば、中枢神経などを一切介さずに知能を持たせることがよほど今までの方法よりも現実的なのだ。

そして、粘菌と化して知能を持ったニユクスを生命体へとあらゆる経路で一度投与すれば、それらはニユクスの一部となり、バイオコンピュータかつバイオネットワークの形成を可能にしようという試みである。これで、本来のニユクスからは多少掛け離れたが、ニユクス開発に込められた理想は全てクリア出来る。

生命体の体内に直接的に粘菌という根を張り、全てを取り込みつつ一部にしてしまえばいい。つまりはそういうことである。また、粘菌は元々ニユクスに極めて近いため、取り込まれる確率も極めて低い。

とまあ、このような試みをしようかと語っていると、何故かフォーアイズが異様にやる気を出して、是非やって欲しいと珍しく懇願してきた。そう言えば、コイツはB・O・Wよりもウィルスや細菌の方に興味が強かったことを今更ながら思い出す。まあ、今さらやらないつもりは更々ない。

そして、製造した個体がニユクスイオタし。これはニユクスを従来の

ものから粘菌ベースに変えることにより、単純に粘菌の性質を付与した。性質自体の変更と、菌類との親和性の高さからニユクスーは己を貪食してしまうようなことはなかったため、この時点で半分は成功していると言える。

実際に餌を入れた迷路の容器をニユクスの飼育容器に入れ、どのような反応を見せるか実験したところ、ニユクスは触手を使って最短ルートで迷路を解いて見せたではないか。これによって餌を効率的に取るという知能は有していることを意味する。既に活性死者よりは幾分かマシな知能になったな。

しかし、ここに来ると大きな問題点が出てくる。単純に粘菌をひたすらに拡大して人間一人分の知能を獲得しようとした場合、計算上だとラクーンシティの下水道全てに粘菌を張り巡らせてようやく達するという結果が出たことだ。流石にこれでは運用を考えた場合のB・O・W・としては巨大過ぎて用途が極めて限定される。

まあ、戦略兵器や防衛拠点そのものに張り巡らせて使うならば、これで成功したのではないかと言えなくもないが、出来た人間相当の知能が指示を聞き、制御出来るかと問われれば、まず不可能であろう。可能だったのなら、私は今頃アンブレラの狗となりウィリアムと隣で仲良く研究しているだろうな。

使用後に滅菌作戦が前提のB・O・W・では流石に話にならないため、次に改良を加えてニユクスー^{カッパ}を造った。しかし、これは改良と言うよりも、凝縮という言葉が正しいかもしれない。

そもそも父の実験記録等からでも知つての通り、基本的にB・O・W・には人間の遺伝子情報がほぼ直接的に使われている。それが最も理に叶い、かつ効率的だからであり、ニユクスもそれは同様である。ならば逆にニユクスから人間由来の性染色体を造り出すこともさして難しい話ではなく、尚且つ粘菌由来の特異菌と呼べるほどのサイズまで機能ごと縮小したのだ。

要するに私はニユクスー^{カッパ}を使い、ニユクスー^{カッパ}の性細胞の役割を持つ特異菌のようなものニユクスー^{カッパ}という名を付けた。これによって、ニユクスー^{カッパ}を人間あるいは近似種の卵細胞に受精させるこ

とが可能となった。ここまで改良してしまえば、残念だが、不定形にこだわる意味も薄くなつてしまったため、こちらも妥協して人間ベースにしてしまったのは私の敗北だな。

ただ、これはある一点が非常に危惧されるため、B・O・W・としては余りに著しい欠陥がある。

というのも次なるニユクスー^{ラムタ}ンを受けた受精卵から発生する——ニユクスー^{ラムタ}ンは、当然ながらこれを宿した母体を何よりも真っ先に侵食する。それはニユクスー^{ラムタ}ンと肉体どころか、精神までもが直結するということの意味し、それに耐えうる程の精神抵抗か、ある種の才能と呼べるものがなければ、出産までは漕ぎ着けられないと思われるのだ。

そして、完全に精神がニユクスー^{ラムタ}ンに汚染されれば、母体としての機能不全を起こす上、母体が母ではなく、ただの苗床とニユクスー^{ラムタ}ンに認識されるだろう。そうなれば、ニユクスー^{ラムタ}ンのマトモな発生など望めるわけもなく、最初のニユクスー^{ラムタ}ンにさえ劣るであろうニユクスー^{ラムタ}ンもどきが出来上がるだろうな。

故にアークレイ研究所から持ってきたあの母体にはやるだけ無駄であろう。アレは決して精神面が著しく強靱な個体ではない。

この手の話題になった時にたまに書くが、やはり私が母体になり、受精出来ればそれに越したことはないのだ。私ほど強靱で融通の利く肉体と、生物実験向けの人でなしな精神を持ち合わせた存在は私以外に存在しないであろうからな。

まあ、そんな有り様のため、ひとまずはラクーンシテイでのニユクスーの実験はこの辺りで終了であろう。これ以上の実験は、数百あるいは数千を超える可能性すらある母体を用意して、その中で1〜2体完成すればマシという程度のもの。流石に嫌でも足がつくので、ラクーンシテイではやろうとは思えない。

そんなときにフォーアイズが、「ここで止めるだなんてもったいないわ。それに私、今ちようど排卵周期よ?」などと言いだしたときは私ですら耳を疑ったものだ。

まあ、既に私が製造したTーウィルスの特効薬——傘は要らなくなるといふ名の由来は気に入ったので、グレックにあやかかってデイライトという名称にしよう。そのデイライトをニユクスーえ用に改良した除菌剤は造つてあることは伝えていたため、万が一失敗した場合にフォーアイズを高確率で回収する手筈は整っている。研究助手としては文句なしに優秀のため、ここで消えられると幾らか痛いからな。とりあえず、フォーアイズの要望の通り、彼女の卵細胞とニユクスーえとで人工受精を行い、経過を見守ることにした。



ニユクスーえとそれを受精した母体の経過記録

1998年8月24日

ニユクスーえ：

着床を確認。それ以外の変化はない。

母体：

身体及び精神に変化なし。

1998年8月25日

ニユクス—エ：

超音波検査の結果、既に2〜3cm程の胎児の形成が見られる。形状としては、頭と胴の区別がつくようになり、手足が伸び、目・耳・口の原型も現れている。発達上は人間の胎児そのものだが、現在の成長速度が単純に10倍以上あると思われる。

母体：

脳を含む全身にニユクス—エの粘菌由来のアメーバ——変形体を確認。他に目立った身体的変化はない。精神変化なし。

1998年8月26日

ニユクス—エ：

体長約8cm。手足の指、顔の輪郭、心臓・肝臓・胃腸などを含むの内臓器官が完成。心音も確認済み。完全な人型を形成している。

母体：

前日からの身体変化なし。”見られているような気がする”との訴えはあるが、母体に精神変化なし。

1998年8月27日

ニユクス—エ：

体長約20cm。胎盤が完成。それに伴い、臍帯を通した栄養が開始される。羊水量の増加に伴い、母体の外見が妊娠4ヶ月相当になり、ニユクス—エの発達もそれに準じている。

母体：

体内の変形体によるものか、胎内のニユクス—エによるものかの由来では後者の方がやや強いと思われるが、母体の食欲が増加。それ以外の身体変化なし。”言葉にならない曖昧な声が頭に聞こえる”と訴え、それ以外に精神変化なし。

1998年8月28日

ニユクス—エ：

体長約30cm。妊娠6ヶ月相当。骨格の発達により釣り合いの

取れた体つきになり始めている。排尿も確認。

母体：

身体変化なし。自身の腹部を撫でながら、彼女らしからぬ空笑に近いほどの笑みから何らかの幻聴のような精神影響が示唆される。それ以外の精神変化なし。

1998年8月29日

ニユクスーエ：

体長約35cm。妊娠7ヶ月相当。聴覚が発達に伴い、母体の声や音に反応する様子が見られる。

母体：

身体変化なし。明らかな独語が出現。研究助手の仕事をしつつも、1日中胎内のニユクスーエへと話し掛けている様子が見られる。それ以外の精神変化なし。

1998年8月30日

ニユクスーエ：

体長約45cm。妊娠9ヶ月相当。性器が完成。女性器であり、雌の個体と断定。

母体：

身体変化なし。母体によるとニユクスーエと話し合っており、ニユクスーエが自身で女性になったとのこと。前日からの精神変化なし。

1998年8月31日

ニユクスーエ：

体長約50cm。妊娠10ヶ月相当。骨格、内臓器官、神経などの発育が完成。外見上は同時期の人間の雌個体と差はない。

母体：

身体変化なし。母体によればニユクスーエがまだ胎内に居たいと訴えているらしく、ここから暫く発達を止めて留まるとのこと。前々日からの精神変化なし。



「——ええ、そうよラムダ。でもアナタに研究はまだまだ早いわ。まずは私の胎内から出てくれないとね？　ウッフ……イヤ？　全く甘えん坊さんなんだから……もう」

現在進行形で私の試作B・O・Wであるニクススーンを孕んでいるフォーアイズの下腹部は、臨月ほどにまで膨らんでいる。

そして、一人で非常に楽しいげな様子をしつつ、私の研究助手を続けており、まるで電話をしているように思えるが、どこにも受話器などは見当たらず、私に対しても言っていないため、端から見れば統合失調症に見られる症状のひとつである独語にしか見えない有り様だ。

「——そんなことないわ。外の世界は楽しいわよ。そこにいる私の上司のマーカス博士なんてアナタと同じ素敵なB・O・W。ね。えっ、パパ？　うーん……それなら開発者のマーカス博士がアナタのパパかしら？　雌雄同体だし」

何かとても不穏な方向にフォーアイズの話が進んでいる気がするが、私には彼女が聞こえていると思われるものは一切聞こえないため、どうすることも出来ない。正直、無茶苦茶気が散るので、早いところ出産して欲しいものである。

すると、何を思ったのか、話し合ったのか、フォーアイズが私の元

に寄ってくる、ホルスターからサプレッサーの付いたハンドガンを取り出してこちらにチラつかせてきた。

無論、そんな豆鉄砲では私にダメージにすらならないことはフォーアイズも承知している筈のため、何か別の用途で使う気なのである。

「ウフフ、ちよつと見てて？ この子がマークス博士に見せたいって言ってるわ。スゴいわよ」

そう言うとフォーアイズはハンドガンを取り出し、自分の下顎に銃口を押し当てる。言うまでもなく、拳銃自殺をするときの構えである。

「おい、待て……何をし——」

流石に止めようと、私が咳こうとした言葉は乾いた銃声によって掻き消された。そして、銃弾がフォーアイズの脳幹を貫いたことで、彼女の体は力なく項垂れると背中から地面に叩き付けられる。

「ええ……」

余りに唐突なフォーアイズの自殺に多少動揺つつも、助手を失ったことより、ラクーン大学内で死体の処理が必要になったことを面倒に思っただけ、銃弾が頭蓋骨を突き抜けずに脳内にあるようで、天井に当たらなかっただけマシか等と考えていた。

とりあえず、死体袋代わりになりそうな袋を用意してフォーアイズの体に手を掛け——。

「おはよう、マークス博士」

その瞬間、フォーアイズはむくりと起き上がり、悪戯が成功したとばかりに私に抱き着いてきた。当然、彼女の白衣は彼女自身の血液で真っ赤であり、私の白衣にも色が移るので止めていただきたいものだな。

それよりも最早、考えるまでもなく、フォーアイズが甦ったように見えた仕掛けはわかった。

「ニユクス—の粘菌による再生能力……あるいは君の肉体そのものが変異したのか。少なくとも君の全身に変形体もとい特異菌が広まり過ぎているせいで、既に通常の生物ならば死に至るダメージ程度で

は死ねなくなつたということか」

「ウフフ……」名答、これで私もマーカス博士と同じ化け物ね。もう、この子ったらママのことが好き過ぎて死なせてもくれないのよ？ 本当になんて可愛いのかしら……」

そう言いながら愛おしそうにフォーアイズは自身の膨らんだ腹部を撫でる。それだけなら彼女が美女なことも相まって絵になる筈だが、拳銃自殺による出血のせいで、着ている白衣の前側が前衛的過ぎるデザインのよだれ掛けのように真っ赤に染まっているため、絵面が悪過ぎる。

その上、これまで見てきた血も涙もなく、実験や研究中しか笑わない彼女を知っている身からすると、正直なところこちらの方が不気味で仕方がない。

「家族愛、親子愛……それどころか人間の集団を見ても正直、繁殖地ぐらいにしか思わなかったけれど……。今はこの子が愛しくて堪らないわ！ 母親になるってこんなに素晴らしいことだったのね！」

「私が言えた義理ではないが、それは絶対に母親の感情ではないと思うぞ」

「ならマーカス博士のヒルへの愛情と同じかしら？」

「立派な家族愛だな」

やっただぞ、スペンサー。私の助手が不老不死に到達してしまつたかもしれない。ついでに神からは程遠いが、聖母マリアぐらいにはなつたかもしれない。

そんなことを考えつつ、私から見ても異様なほど強靱極まりない上にギリギリ理解できないレベルの精神をしているフォーアイズに対し、今更ながらとんでもない奴を拾ってしまったのではないかと思いはめるのであった。

管理者と研究助手の日記

4月25日

今日は僕の30歳の誕生日だ。そんな日に赴任初日をあてるなんて、大学の研究室とは違って厳しいね。

5月14日

ようやく処理システムが完成だ。特別なガスを使い、実験体の細胞を分解する。しばらくテストをしてからの実用化だけど、まだ不安定だからね。

5月20日

処理室のチエツク中、いきなりドアが開かなくなった。ものスゴイ臭いの中で一時間も閉じ込められた。カードキーを持っていても故障しちやあ意味がない。まいったよ。

6月7日

最近の処理量は普通じゃない。機械の調子もよくないのにさ。研究所側は全く聞き入れない。くそっ！あのフランケンシュタイン博士め！

7月16日

処理がパンクしている。送られて来る処理用の薬液の品質もひどい。

7月29日

機能は低下しても処理は大量にある。汚染度は上がり、ウイルス抗体も新種には対応しきれない。作業員には感染者も出始めた。ぼくは拳銃を片手に作業している。最後の一発は自殺用だ。泣きたい。このまま死にたくない。死の苦痛を想像すると嫌になる……。

8月15日

昨日来たお偉いさんの博士が置いてった新しいナントカ活性剤が無茶苦茶すげえ。一滴垂らせば酷い品質の処理用の薬液も最初の頃に来てた奴かそれ以上の処理能力に早変わりだ。これなら多少はマシになるかも知れない。

しかし、あの女性の博士は自分の事を少なくとも研究所側の博士たちよりも上って言ってたし、いったいどんぐらいお偉いさんだったんだろう？ 案外、アンブレラ幹部がお忍びで視察に来てたのかもしれない。機材の改良もしてくれて、処理能力も幾らかマシになったし、ホントに頭のいい人ってのはなんでもできるんだなあ。



1998年8月17日

ラクーンシティに来て、下水道を使ってアンブレラの内情を少し調査していたが、これだけは言わせて欲しい。

管理の杜撰ずさんが過ぎるのだよクソアンブレラ共め！

特に所長ウイリアム。お前には散々、管理と徹底した廃棄処理の重要性を口が酸っぱくなるまで説いたつもりだったが、なんだこの体たらくは……。その上、ここはラクーンシティの生活用水に直結するのだからアークレイ山中とは訳が違う。何百倍も処理と二次感染の防止に力を入れねばならない筈だ。

私が各地の処理場にアンブレラの関係者と偽り、処理用の薬液の細胞分解能力を劇的に引き上げる薬品を無償で渡さなければ、年内には極めて高確率で大規模なバイオハザードを引き起こしていただろうな。まあ、ここまでしてやったので、仮に研究所内でTーウィルスの培養液を直接ばら蒔くような真似でもしなければ問題は無かろう。流石に奴らもそこまで馬鹿ではない。

なんだこれ。なんで私は地下研究所を襲撃するためにアンブレラに手を貸しているんだ……。なんだこれ。そもそも管理というものはだな——（ここからは管理の理念と見るに耐えないアンブレラへの罵詈雑言が書き連ねられている）



1998年8月24日

マーカス博士の粘菌ベースのB. O. W. ——ニクスーエの実
検体1号になり、身体と精神の異常を自分で認識し、どこまで思考力
の保持や、精神の変容が起きるか経過観察するそうなので日記に纏め
ることにした。

1998年8月25日

長い夢を見た。私が生まれてからウイルス学や細菌学に興味を持
ち、U. S. S. としてウイルス漏洩事故や実験体の逃亡に投入され
つつ生存者等で実験をして過ごし、今こうしてマーカス博士の助手を
しているまでの経緯を所々穴の空いた映画フィルムで眺めるような
奇妙な夢だった。

しかもその間、暗く狭く窓のない部屋で、私はパイプ椅子に座って
何かを膝に乗せながら見ていたような気がする。しかし、膝に乗せて
いた何かが何なのかはどれだけ思い返してもそこだけ穴が空いたよ
うにわからない。

いや、穴が空いたというより最初から形がないような、形が定まっ
ていない何かのような、そんな何かのような気がする。

1998年8月26日

朝起きて1番に感じた感覚は“誰かに見られている”というもの
だった。

当然、辺りを見回しても人影はどこにもいない。けれど視界の外で
誰かに見られ、意識をそちらに向けると別の場所に移動してまた見て

くるような気味な感覚だ。統合失調症の陽性症状の幻視まで後、少しといったところだろうか？

ああ……なんて素晴らしいのだろう。

1998年8月27日

下らない夢を見た。妙に粘り気のある血肉と大小が可笑しいために人間のそれではない臓物が沢山詰まっている大瓶おおがめを素手で掻き回し続けーる夢だ。その上、大瓶一杯に詰まったそれはまだ生きているらしく、腕を撫でるようにまとわりついてくる。なんでそんなことをしていたのかはわからない。

そして、起きると頭の中に直接、ぐちゃぐちゃと血の滴る生肉を雑に潰すような不明瞭な声が聞こえ、視界の端に何かの影が映り消えていくような奇妙な感覚を覚え、色覚にも変化があったのか景色が常にやや赤身を帯びて見える。

マーカス博士の研究助―手もしていたいから、出来れば色覚異常は止めて欲しい。モニター画面の文字が―見にくくて仕方がないから。

ごめ

1998年8月28日

ラムダが言うことを聞いてくれて、今日の視界はクリア。それどころか視力を上げてくれたからとてもよくモノが見える。

今日の夢は、赤黒い子供のモヤのような形の何かを膝に抱いて、私の過去をままホームビデオのように一緒に観ているものだった。そして、起きればそれが常に視界いて、5歳程のまま子供の知能レベルで私に話し掛け来ている状態だ。

最高に良い傾向、体内と脳にB・O・W. を飼う実験なんて愉しくて仕方がない。とりあえず”ラムダ”と名付けた。今、ラムダは自身がどのような存在なのかを学習しようとしている。また、ラムダに

とつて まま私は”母親”らしい。

家族とか、母親とか、そんなのはどうでも良いけれど、B・O・W.を教育出来ままるなんて、こんな愉しそうな機会はまたとない。本当にマーカス博士には感謝している。

1998年8月29日

凄いい、夢にいるラムダも、現実に見えるラムダも、姿形が幼少期の私そっくりな姿になった。同じ髪、同じ瞳、同じ人種、ニクススーエというB・O・W.は精神影響下ではどんな姿形にさえなれる……だけでなく私の胎内のラムダも同じ形になろうとしているらしい。

ぞんび

ラムダは母親という役割の背を見て、子の役割を全うしようとしている。誰が言ったか、子を愛さない親はいるが、親を愛さなかった子はいないと。それは本能による求愛行為だ。

私もそうだったのだろうか？ いや、そうだったのだろうか。そう言えば夢で見たホームビデオで私は、親に解剖したカラスを見せて機嫌を取ろうとしていた。忘れてたどうでもいい記憶まで遡れるラムダは、本当に良くできたB・O・W.だ。

あんぶれら

ああ、昔に犬を飼ったことはあったけれど、それと同じようにラムダが愛らしい。いや、それ以上だろう。なぜならラムダが死んでしまえばきつと悲しいし、犬のように興味本位で解剖することもたぶんないから。

それにしてもラムダは流石、ジェームズ・マーカスをほぼ完全に模したマーカス博士が造っただけはある。人格や記憶、脳という未だ未開の分野において、あれ以上の天才はいないだろう。言語制御の可能なキメラβ、センチュリオン、ジャバウオックを生み出すだけでもアンブレラ最高技術に匹敵するが、博士はプロトタイプ・ネメシスの改良、リサちゃん、プロトタイラントの改良、サスペンデッドをも製造している。あれらを博士は研究開発による当然の結果のように日

記で纏めているが、日記に省かれている博士の技術による介入が無ければ、ああまではならないだろう。つまり博士は所謂、努力によらない本物の天才なのだ。

たいらんと

まあ、女王ヒルというジャクリーン・マーカス博士そのものが、ジエームズ・マーカス博士開発のオーパーツ染みたB・O・W。だから今更ね。

まま

1998年8月30日

ラムダが私と同じ性別になった。

どうやらお洒落とか、料理とか、そう言う女の子っぽいものを一緒に楽しみたいらしい。正直、私からは縁遠い分野だからマーカス博士にお願いしたお母さんがいいと思ったのだけれどラムダはお気に召さないようね。

あそぼ記録だけは着けてからでないとダメ。これも実験の一環よ。ごめんなさいうんうん、良い子ね。でもちゃんと実験中は身体を使わないって言う私との約束守れて偉いわ。

わたしもお母さんたちみたいになりたいそれはひよつとして、私やマーカス博士みたいな研究者と言うことかしら？ まあ……それってなんて素敵なのかしら。B・O・W。が私と同じ夢を持つたなんて……。なれる？ウフフ、なれるじゃないわ。ならそれを目指さないとね。私……いや、お母さんいっぱい応援するわ。

ありがとう

1998年8月31日

ああ、私のかわいいラムダ！ そうこれがそうなのね……ジエームズ・マーカス博士が、ヒル達に抱いていた愛そのもの！ 下らない生き方をしている生物には、この充実感は理解できないでしょうねラム

ダ。

そうなの？

当然よ。あなたと繋がる充足感を超えるものなんてマークス博士との研究ぐらいだわ。

お父さんおこるよ？

それだけが問題なのよね……。ああ見えて、あのヒトだったら私の知るアンブレラの研究者の中で一番二次感染対策にうるさいし。まあ、ヒルって医療行為で使われる歴史もあるし、本能的に綺麗好きなのかしら？

びーおーだぶりゅーなのにねー

ホント、笑っちゃうわ。私が一番尊敬する博士であり、最も人間から外れた怪物が、アンブレラの誰よりも倫理的だなんてね。

なでて

いいわよ。どう？ そろそろ出たくなっただ？

やだ

そう、お母さんの中がそんなに良いだなんて、本当に愛らしいわ……ああ、私のラムダ……！

1998年9月1日

お母さん、お父さん、だいすき

ラムダ・ヤマタ

女王ヒルの手記 RE:8

1998年8月18日

今日は下水道でハンターγを研究しているアンブレラのDr.ローガン・カーライルという男に接触した。無論、グレッグ・ミューラーとしてだが、日記に書き忘れていただけで何も今日に初めて知った相手と言うわけではない。

私がラクーンシティに来た当初から、下水道を移動していると時々、白いサンショウウオの頭に無理矢理足を生やしたハンターのような何がトコトコ前から歩いて来て、すれ違うことがたまにあったのだが、その飼い主が他でもないローガンだったのだ。てっきり私は、ラクーンシティの下水道に白いワニがいるという都市伝説をアンブレラが広める遊びでもしているのだらうと思っていたが、ハンターγの研究を打ち切られたローガンの涙ぐましい努力の結晶だったらしい。我ながら酷い勘違いであった。

その名は”ハンターγ”。全身が薄いピンク色で両生類らしいぬめりとイボで覆われ、前肢は小さく退化し、鋭い歯とオタマジャクシのような尾びれのあるデザインをしたハンターベースのB. O. W.である。どうやらアンブレラから開発を打ち切られたことで、下水道に研究室を移設して勝手に研究を行うという私も舌を巻くガッツによつてひとまずの実用化に漕ぎ着けていたらしい。

ちなみにDr.ローガンと初めて会った時にふと目に入ったラブレターの覚え写しがこれである――。

『愛しのスイートハート

君たちとこの場所へ逃れてきてから

もう3か月になるね。

研究所で君たちが産声を上げたとき

僕は感動に打ち震えた。

愛らしいフォルム、絶大な破壊力、
そして尽きることを知らない食欲。

ハンターシリーズの最高傑作が誕生したのだと。

けれど上層部は君たちの破棄を僕に命じた。

兵器として、重大な欠点があるからだ。

君たちの欠点…

それは熱への耐性のなさ、そして捕食時に

「急所」をさらけ出してしまいう無防備さだ。

けれどその不完全さこそ、

僕が君たちを愛してやまない理由でもある。

ここで僕と共にさらなる進化の道を辿り、

そしていつか必ずアンブレラに証明して見せよう。

君たちハンターγこそが、

頂点に立つべき存在なのだ…』

色々言いたいことはあるが、これを目にした瞬間、私は親近感と
んだか放っておけない感覚が二乗でムクムクと膨れ上がったため、
D r. ローガンを保護することに決めた。まあ、なんだ…その…
フォーアイズ同様に我が父と同じ人種である。

とは言え、当然ながら才能の方は、我が父には決して及ばないが、
D r. ローガンのハンターγは2日でラクーンシティの下水道の構造
を完全に理解しており、D r. ローガン本人には飼犬のように慣れ
ていたり、既に水棲B. O. W. としてほぼ実用化させている点は
特筆すべきであろう。D r. ローガンに任せておけば、1〜2年後に
は海中散歩をするハンターγを造り出しそうなものだ。

何故、アンブレラは長い目で育てようとするどころか、研究を打ち
切ったのだろうか。私としてはアンブレラはさつさとタイラントな
ぞ捨てて、ハンターの拡張に取り掛かった方がまだマシな結果になる
と考えているのだが…まあ、そんな考えが出来ていればラクーンシ
ティの下水道をハンターγが自由に散歩しているようなことには
なっておるまい。

ああ、D r. ローガンの助手はアンブレラに少し寄り過ぎていたため、不慮の事故で死んでしまった。ハンターγの捕食行動は、見た目にすぐわず素早くダイナミックだったな。

しかし、養成所の付近に発生していた二次感染個体をサンプルとしていくつか捕獲し、休眠させておいたモノを破棄するのも忍びないため各1〜2体ずつだけ一応持ち出して正解だった。まさか、ラーカーがあると言っただけで、あそこまで食い付くとは嬉しい誤算である。どうやらやはり我が父マーカスの名というブランドは、アンブレラの研究者として未だに得難いモノらしく、誇らしい限りだ。

まあ、要するにどうなったかと言えば、D r. ローガンの研究室が私の研究室に程近い、ラクーン大学地下の下水道に移転したということとをここに記しておこう。

蛇足だが、私のヒルとしての姿をD r. ローガンに見せたところ抱き着かれて頬擦りされた。ハンターγほどではないが、とても可愛らしいとのことである。

マジかお前……マジか……。



1998年8月21日

Dr. ローガンとハンターYをこれからどう改良していくか、ひとまずの方向性を2、3日間で話し合った結果、”発電器官”を付けるという方向性で落ち着いた。私としては毒腺の形成を彼に最も勧めていたのだが、発電器官を例に出してしまった私の落ち度であろう。そんな面白そうな発想に彼が飛び付かない理由がなかった。

さて、自然界に存在する著名な発電器官あるいは放電器官を持つ生物はデンキナマズ、デンキウナギ、シビレイの三種類を挙げる。

基本的には大差無いが、とりあえずデンキウナギの放電器官を例に取ると、筋肉で出来た発電器の中で、発電板を直列につなげて発生させている。要するに小学生の頃にやった電池を直列につないで豆電球を点灯させるあの実験を体内で行っているに過ぎない。直流故の瞬間的な放電を可能としていると言える。ニコラ・テスラが生み出す前から生物界では当たり前のことだった事は脱帽せざるをえないだろう。また、自身が感電しない理由は蓄えられた脂肪が絶縁体の役割をしているのだ。

ちなみにデンキウナギの他にも先ほど挙げた例を含む多種多様の発電魚が知られているが、それらの発電の主目的はおもに周辺に電場を作って周囲の様子を探ることにある。デンキウナギだけは他の発電魚よりも強力な電気を起こせるため、捕食と自衛にも電気をを用いることが出来る。

まあ、これ以上デンキウナギについてなぞ日記で語ったところで大して意味はないため、この辺りにしておこう。そして、肝心なデンキウナギだが、ラクーンシティのペットショップで購入出来た。最近のお店はすごい。

とりあえず、デンキウナギは生きたままヒル^私たちが食べることにする。すごいビリビリした。

その甲斐あって、擬態により私の体内にデンキウナギ由来の発電器官を造り出す事が可能となった。人間に擬態できる私からすれば、これぐらい遺伝子情報さえあれば容易い事だ。とは言え、流石に全身の多くの細胞を発電器官に擬態させ続けるのは実用性が無い上に、若干無理をし続けている状態が続いているため普通に辛い。

と言うわけで、発電器官を遺伝子レベルで組み込んだヒルの卵を幾つか産み、それが孵るのを待つことにする。発電器官を持つマーカス博士のヒル——デンキビルの孵化が実に楽しみだ。



1998年8月22日

早くできないかなあ

ニユクス

卵まだかなあ

デンキビル

面白いなあ

黒澤映画



1998年8月23日

さて、瞬ったヒルは中々のものであった。

まず、デンキウナギというよりも、丸々と太ったミミズか何かのようによろにやたら細長く太いたため、ヤツワクガビルを更に巨大化させたような個体に見える。私の元々の品種としては、ヤマビルやチスイビルを良い感じにミックスした雑種なので、なんだか他人のような気がしなくもないが、これもまた私であることは感覚を共有している私が一番よくわかっている。熟^{つく}意味のわからない生態をしているな私は。

測ってみるとなんと一匹の全長約200cm、太さ約15cmとまあデカイ。とは言え、デンキウナギの発電器官は体長の5分の4ほどを占めるため、それもやむ無しであろう。とりあえず、その電撃威力を試すために既に注文していた一頭の豚へ浴びせる事にした。ちなみに今日の私のご飯でもある。美味しく仕留めるべし。

結果は——まあ、大方の予想通りインパクトに欠けるものであった。確かに豚を感電させて昏倒させることは可能であったが、派手に殺すには程遠いどころか、ヒルの方が先に疲労によって電気を出せなくなったため、結局絞め殺したのだ。

とは言え、そもそもデンキウナギの電圧は高くとも800V、電流は1A程度が関の山。しかもこの高電圧は約1000分の1秒程度しか持続しない。明らかな電力不足である。まあ、電圧との兼ね合いもあるが、ヘアードライヤーでさえ10Aは無ければろくに動かないため、少なくとも人間が用いる電気と言うものが如何に規格外なのかはよくわかるであろう。

さて、ならばなぜこのような無駄でしかない実験をしたのか？ それはデンキビル——発電器官を遺伝子情報に持つ始祖ウイルスを作製するために他ならない。そして、このデンキビルを私が再び体内に

取り込み、少しアプローチを変えつつTーウイルスとして抽出することで、極めて強引にTーウイルスの変異ウイルスを精製し——淡い黄色をしたTーウイルスにそっくりなアンプルが出来上がった。

正確にはTーウイルスの変異ウイルスではなく、始祖ウイルスベースのTーウイルスに限り無く近い新種のウイルスである。更に噛み砕いて言えば、Tーウイルスそのものを変異させるのがTーウイルスの変異ウイルス。Tーウイルスの設計図に落書きをして新たな素材を加えて精製するのが私の変異ウイルスである。

アンプルが見たらぶちギレるかも知れない。実際にフォーアイズが、”ズルい！ 私にも作らせて！”等と私に非難轟々であった。うるさい、欲しければお前も始祖ウイルスの現物とその設計図、Tーウイルスの設計図、ジェームズ・マーカス博士の頭脳の4点が体内にあれば誰にでも出来ることだ。

これを”TーRe^レsh^{シェ}ef”と名付けよう。カナン神話における稲妻と悪疫、疫病の神の名だ。要するにブツ射した個体にTーウイルスの効果と共に独自の発電器官の劇的な発達を促すウイルスである。これによつて獲得される発電器官は、Tーウイルス由来の劇的なモノであるため、逸脱した性能が期待出来る筈だ。

フォーアイズは”ひよつとして博士疲れてる?”、プロトタイラントは”そろそろ寝た方がいいですよ?”等と失礼な事を言っていたが、私是一向にニユクスが出来上がらない疲労で可笑しくなつてなどはない。

そんなことは置いておき、空き時間でハンターγの設計図も大きく見直しておいた。

まず、意味を成していない尻尾をヒル由来の吸盤器官にすることで移動手段を増やす、口にも同じくヒル由来の伸縮性を追加する事で、より効率的な捕食を可能とする。それからなんかその小さな翼っぽい退化した腕は本当に翼っぽくしてしまえば良いだろう。そして、手足の爪に特殊な吸盤を備え付ければ室内の機動性は完璧だな。涎も強酸性に出来れば更に捕食が捗る筈だ。

”それは最早ハンターγではないのでは?”と言うDr. ローガン

の最な眩きは最もであるが、ここまで考えてしまえば最早やってしまわない手はない。

このB・O・Wの名はゴエティアに当時する存在にして、26の軍団を率いる序列34番の地獄の大伯爵であり、召喚した者の命令で稲妻・雷を起こすことも出来るという悪魔——”フルフル”という名前にしようと思う。我ながら悪魔的でハンティングな発想だな。

しかし、何故かりさに”危ないよジャクリーン!?”と珍しく血相を変えて非常に真摯な様子で止められたため、仕方なく開発は中止になった。その上、”お姉ちゃんと一緒にちゃんと寝るのっ!”というおまけ付きである。

姉には勝てないため、仕方なく色々諦めてリサに従い、この日記を綴ってから今日は眠るとしよう。

P・S・

作りたかったなあ

フルフル



1998年9月2日

そうだ。ネメシスを強奪しよう。

ラクーン大学の研究室の回転椅子に座り、特に理由もなくしばらくグルグル回っていた私は、色々なことを考えた結果、最終的にそんな事を考え付いた。

フォーアイズには、ニユクスの開発が完全に終了したことで、いっぞやのハンターγ改良計画の時のように可笑しくなってしまったのではないかとラムダ共々心配されたが、実に余計なお世話である。誰がお父さんだコラ。

理由を説明すると、元々、アークレイの情報であったのだが、眉唾物と捉えていた事柄が最近になってどうやら事実だとの裏付けが取れた事及び奇跡的にニユクスγが完成した事が最大の理由だ。

前者の裏付け以前に、世界中に点在するタイラント研究所にて、ネメシスシリーズの幾つかの個体に培養過程で自我が芽生え始め、複数の実験体がアンブレラの施設から脱走を企てていたらしいと言うこと自体は、アークレイでアクセス出来る資料の中でも閲覧は出来た。しかし、本当に眉唾物の話であり、私自身がいることや、改良型プロトタイプ・ネメシスを使ったキメラβ、ジャバウオック、プロトタイラント等を実際に製造していなければ信じなかったであろう。

まあ、そして如何にしてそんな話の裏付けを取ったのかと問われれば、私は誰にでも簡単に成り代われるB・O・Wのため、ラクーンシティ地下研究所に潜り込んでアンブレラの内部情報を漁るなど朝飯前だ。それによれば、ラクーンシティから数百kmほど離れた別の都市部にあるタイラント研究所に、“4体”ものそう言ったバグを引き起こしたネメシスらが保管されているとのことだ。その脱走を謀ったネメシスたちは、一体一体が余りにもハイコストなため、処分することも出来ず、一先ずはサンプルとして一点に集めつつ凍結処理されて保存しているとのこと。まあ、最もな理由と言える。

しかし、ハッキリ言ってラムダーγが居なければ、今回の計画をそもそも立案しようとは思わなかった。まず、タイラント研究所襲撃かつネメシス強奪に辺り大きな問題が四つほどある。

ひとつは、対処しなければならぬ純粋な戦力。多数のタイラントの他、ハンター等のB・O・Wに加え、在中しているB・O・W。鎮圧用の警備兵と、襲撃によって投入されるアンブレラ保安警察及び掃除屋ことアンブレラ証拠隠滅部隊が投入されることは間違いないであろう。機密の関係で、アンブレラバイオハザード対策部隊や、警察は出てこないであろうことだけでも幾らかマシか。まあ、そうは言ったが、正直これに関しては私とジャバウオックがいる以上大した問題ではない。私が作ったネメシスとも言える対タイラント用タイラントであるジャバウオックと、この私というB・O・Wの戦闘能力を舐めて貰っては困る。殺し切りたくば、英雄かアメリカ軍でも連れてくるんだな。

ふたつは、襲撃方法と退路の確保。生半可な方法ではタイラント研究所を麻痺させることは出来ず、ネメシスが奪われたとなればアンブレラは草の根を上げてでも探し出そうとする筈であるため、退路の確保も重要であろう。とは言え、多少強引だが、これも不可能な話ではない。要するにアンブレラ側に強奪されたと思わせなければいいのだ。

みつつは、タイラント研究所は都市部にあるにも関わらず、内部にアークレイのような自爆装置が付いている事だ。設計時期や構造も近いため、恐らくはアークレイと同様のものが置かれている可能性が高い。となると完全にオフラインな上、自爆機構の電源も独立しているため、難攻不落と言えるかも知れない。しかし、これは自爆機構のスイッチが置かれた部屋さえ抑えてしまえば、然したる問題ではない。私という個にして群れを存分に発揮し、初動で制圧してしまえば良いのだ。幸い既に施設の図面も入手しているため、大まかな位置は把握している。

よつつは……というよりこれが最大の問題点のため、襲撃を断念していたのだが、4体もの脱走を企てたネメシスを覚醒した状態で運ぶ事になるのがほぼ不可能な点である。流石にこれは私でも4体のネメシスに暴れられれば、物理的に運搬どころではない。まあ、私製のプロトタイプ・ネメシスを打ち込めば可能かも知れないが、その時点

で純粋なネメシスではなくなる上、流石に既にネメシスに寄生されている個体に新たにネメシスを寄生させるのはリスクが高過ぎる上、予想も出来ない。しかし、ニユクス―エが居ればネメシスたちを頭脳を無傷で説得あるいは洗脳出来るため、これをクリア出来てしまうのだ。

ならば……最早、決行しない理由はないだろう。ラクーンシティ地下研究所襲撃の予習にもなるため、ちょうど良い。それに世界へのジャバウオックという兵器の御披露目と、ニユクス―エの稼働データの収集も出来る。また、あわよくば、リサにあつたプロトタイプ・ネメシスではない本物のNE―α型や、自立寄生型のNE―β型を手に入れたいという思惑もある。

期間はそうだな。準備期間とネメシスらをラクーンシティに運び込む期間も含めて”20日”もあれば足りるだろう。大学はグレッグ・ミューラーの有給が死ぬほど溜まっているらしいので、それも消化してしまおう。あるいは遅れた夏休みや、研究目的でも何でもいい。

リサは……プロトタイラントに留守番を頼めばいいか。我ながらとんでもない文書だな。ああ、別にDr.ローガンを当てにしてもいいか。ふむ、どうやら私の無意識の信用度はDr.ローガンよりもプロトタイラントの方が上らしい。やはり、彼を作った例の始祖は世に出してはいけない代物だな。

P. S.

この計画をフォーアイズに聞かせたところ、”マーカス博士大好き！ 愛してるわアナタ！ たぶん！”と大変気色悪く曖昧な返答を頂いた。図に乗るなぶん殴るぞ。私にだって配偶者を選ぶ権利ぐらいある。



「ジャクリーン遅いなあ……」

タナトスが安置されているグレッグ・ミューラーの地下研究室にあるソファアーに寝そべり、クッションを胸に抱きながら足をパタパタと動かしているリサ・トレヴァーはそんなことを呟いた。

時を遡ること20日ほど前、ジャクリーン・マーカスを名乗るリサにとつての妹は、仕事で少し離れなければならなくなったため、渋々リサは了承したのである。

リサの名誉のために言っておくと、決してソファアの横の机に置いてあるゲームボーイと、ポケットモンスター赤・緑なるものに釣られたからというわけでないであろう。

流石にリサが幼いとは言っても、20日でポケオンをしゃぶりつくしたのか、やることがない様子である。

とは言え、リサにとつて待つことは慣れっこなため、これぐらいの孤独は寂しくもなんともないのであった。帰って来ると言うただそれだけで彼女は嬉しいのである。

「――！」

すると地下研究室に置かれた電話機が鳴り響き、それに反応してリサは身体を起こすと跳ねるように受話器を取り、笑みを浮かべて声を張り上げた。

「ジャクリーン!？」

『……ああ、私だよ姉さん。だが、”どちら様ですか?”が先だろうか?』

「えへへ……ジャクリーン！ 怪我してない？ もう帰ってくるの？」

『そうだな。仕事は終わったから明日には帰るよ。少し友達も増えたからね』

「そっかー！ 待ってるねっ！」

『ああ、夜は暖かくして眠るんだぞ？』

「えへっ、大丈夫！ リサ風邪引いたことないもん！」

『そうか、それは何よりだな』

ジャクリーンが言う友達がどんなものかは、リサにとって重要ではなく、ただ純粹に妹の帰りを待つ。その後、姉妹の会話は少しだけ他愛もない会話を続けた後に終わる。

「♪」

受話器を電話機に戻したりリサは、どこかで聞いたことのあるような音楽を調子外れに口ずさみながら、部屋に置かれた1998年版のカレンダーの前まで来きた。

そして、近くにあった赤ペンを手に取り、キャップを開けると――。

「えへへ……楽しみー！」

明日――1998年”9月24日”に花丸を付けたのであった。

タイラント研究所襲撃 その1

「なあ、最近トイレがよく故障しないか？」

”使用禁止”と書かれた貼り紙が貼られた隅の個室を眺めつつ、用を足しながらそう呟いたのは、このタイラント研究所に勤めている武装した警備兵の男であった。

そんな彼と同じようにただの製薬会社にしては物々しい服装をして、小便器に並んで用を足している同僚の男は小首を傾げつつ呟く。
「そういえば、地下6階と地下7階のトイレにもこんな貼り紙してあったな」

「地下9階と、地下8階にもな」

「まあ、職員数の割には無駄に個室が多いから特に気にならないが……確かに多いかも知れん」

隣にいる同僚はそう呟きながら何気なく個室に目を移す。そこには10近い数の個室が並んでおり、公に出来ないような施設にしては確かに多過ぎると言えるであろう。

警備兵の男は、外面だけ充実させたいという施設長の虚栄心が見え透けるようでなんとも言えない気分になるが、そんな中、ポツリと隣にいる同僚が呟いた。

「なあ、ところでお前は……アンブレラは好きか？ ”忠誠”を誓っているか？」

「なんだ藪から棒に……」

そう言いつつも警備兵の男は少し思案する。そして、なんでもないような様子で言葉を返した。

「忠誠とかはどうでもいいが、金払いは兎に角良い。そこは気に入っているな」

「ははは、そうか」

「え……？」

すると同僚の男は冗談を浮かべたような笑みのまま——掌に生えたシヨットガンの銃口を男に向けると共に即座に発砲する。

男の頭は風船のように弾け飛ぶと共に、同僚の男のよく撓たわむ腕から薬莖が排出され、それから直ぐに頭部を失った男の身体が、虚しくよく磨かれた床タイルに転がった。

「では死ね」

既に殺し終えたタイミングでそんな言葉を放つ同僚の男。そして、直ぐにその身体は粘性の高い液体が混ざるように変化し、別の形を取る。

「やてさて……」

変化——擬態が終わるとそこには、大学卒業時代の頃の美男子であったマーカス博士を彷彿とさせる“美女”が居た。彼の妹や姉だと言われれば万人は信じてしまうであろう。

また、白いローブのような衣服を纏っており、人間離れた彼女の美貌を引き立てていると言える。

「リサはこの姿、余りお気に召さないようだが、これこそ私だ」

誰に言うわけでもなく、そう呟いた女性——ジャクリーン・マーカスは少しトイレの鏡に自身の姿を映し、身嗜みを整えるように擬態の細部を調整していた。

その間に使用禁止の貼り紙がしてあった個室から周囲へと広がるように、下水管から便器を通してわらわらと大量のヒルが次々と溢れ出る。更に換気ダクトからもヒルが濁流のように零れ落ち、この空間を瞬く間に湿っぽく蠢くようなヒルの巢へと変えてしまう。

「空気と水を拒めぬ以上、どうあっても我々ヒルを止めることはできん」

そして、ヒルの巢から“擬態マーカス”あるいは“人型ヒル”と呼ばれるヒルが集合し、攻撃形態の人型になったそれらが、無数に起き上がり、操り人間のような奇妙な歩き方をしながらフロア全体へと広がっていく。

直ぐに悲鳴や銃声が聞こえ、それは別の階層からも聞こえることをジャクリーンは、感覚器で感じ取っていた。

「こんなものか」

人型ヒルたちが全て出て行つた後、化粧のように暫く弄つていた擬態に納得がいったのか、靴音を響かせながらジャクリーンは向かう。

すると直ぐに人型ヒルに半分ほど喰われている白衣姿の人間が目に入ったが、特に気にせず彼女は素通りする。

α-7-B・O・W・ 保管庫と書かれたプレートが貼つてある倉庫の前で立ち止まり、その扉を開けて中に入ると、中に安置された幾つものコンテナを眺めた。

コンテナの目穴には、ハンターの試作品やリッカーや二次感染個体などのB・O・W・ が休眠状態で置かれており、積み重ねられたコンテナのそれぞれにB・O・W・ が入っているならば相当な数と言えるであろう。

そして、その中でもかなり新しく置かれたと思われるそれを眺める。

「人を隠すなら人の中、B・O・W・ を隠すならB・O・W・ の中とは皮肉なものだね」

それには”試験用旧式改良型B・O・W・ ”と刻まれており、中には多数の人型の何かが身体を縮めるように休眠状態で置かれていた。

「さあ、では早速試験を始めようか？」

ジャクリーンの手で金属扉が開け放たれ、彼女は鳴き声のようで歌のようでもある音を放つ。

するとたちどころにそのコンテナ内のB・O・W・ たちは覚醒し、外に出ると彼女の前に立ち並ぶ。

それらは180cm近い背丈でよく発達した成人男性のような体格をしながら、身の丈以上の長さの折り畳み可能な10本の背中の腕を持つジャクリーン開発のB・O・W・ —— ”キメラβ” 11体であった。

そして、それらは彼女の一声で一斉に動き出し、彼女の背後で隊列を組むように整列する。

「では行くようか諸君」

ジャクリーンはそのまま、キメラβたちを背後に従えてタイラン

ト研究所の広い廊下を練り歩く。

すると直ぐに前方で起こる断続的な銃声に気付き、然も当たり前のように分岐路を選び、そちらへ向かって行った。

「クソツ!?」 どの部署から沸いたこの化け物どもは!?!」

「無駄に頑丈で——ひぎやああ!!?!」

「ば、爆発しただど?!」 接近戦は危険——なんだ!?!」

すると流石にそこにいた十数体の人型ヒルだけでは、三十人以上いる警備兵を殺し切るには至らなかつたようで、銃器の前に人型ヒルたちから死亡……と言うよりも擬態が維持できない程のダメージを受け、弾け飛んでヒルを拡散させているモノが現れている。

そして、そんな比較的善戦している警備兵らの前に現れた白いローブを身に纏う美女と、その背後に並ぶ明らかにマツシブな体格をしたキメラのような何かの群れ。これに驚かない訳はないであろう。

「こんばんはアンブレラの尖兵ども。さあ、精々忠誠を示したまえよ」

その言葉と共に、11体のキメラβたちはギチギチと顎を鳴らしながらそれぞれ別の手近な警備兵らに襲い掛かる。

当然、倍以上の数の有利がある警備兵らは、近寄って来るキメラβをそれぞれアサルトライフルやサブマシンガンなどの銃器で迎撃した。

しかし、キメラβらは6本の多腕で頭部と胴体を覆った上、残る4本の腕を別の脚のように使うことで銃弾を身に受けつつも被害を減らし、射線から離脱しつつ進む事で更に被弾を押しさえつつ突進して来る。

元々の身体能力の高さから20〜30mほどの距離を数秒と掛からずに詰め、真つ先に警備兵の元へ到達したキメラβはそれぞれ左右2本の腕をしゃくりあげるように放つ。

「——があ?!」

研ぎ澄まされた爪を持つ両手は、容易く防弾チョッキごと警備兵の胴体を背中まで貫通し、身体ごと宙に浮かせる。

『——!』

そして、死体を投げ捨てるに残る8本の腕を駆使し、あろうことかこの警備兵が構えていたアサルトライフルや、装備していたホルスターからハンドガンを抜き放つと、近くの警備兵を銃撃した。

「そんな馬鹿——」

驚きのままに一体のキメラβに銃撃された最初の警備兵の胴を中心に、技量は余り感じさせず、乱射と言っても差し支えない量の銃弾が放たれ、防弾チョッキが無意味なほど撃ち込まれた後に事切れる。

直ぐに弾切れを確認したそのキメラβは、手近な死体を盾にしつつ遮蔽物を縫うように移動し、新たな弾倉や銃器や手榴弾を見つけると10本の多腕で拾い上げ、警備兵らの挙動をじっと見据えつつ、ロードや銃器の切り替えを交えつつ警備兵らと交戦する。

銃を使うB・O・W。この時点で警備兵の数の有利性は消えたと言っても過言ではない。人間より、速く、硬く、強く、しなやかで強靱な生物が銃を用いるとなれば、並みの人間に勝てる道理など無いのだから。

更に警備兵らを見て徐々に”銃の扱いを覚えた”のか、乱射気味だった銃撃は、ある程度落ち着いて確実に殺すために放つようになる。

その光景はB・O・W。と言うよりも無敵の”兵士”として余りにも完成していた。

「一応、カタログを説明しておこう」

残る警備兵の人数が半数を切り、双方で銃声が響き渡り続ける中、往來のど真ん中をゆったりと歩いているジャクリーンは警備兵らに語り掛ける。

無論、彼女も時折流れ弾に被弾しているが、まるで受け付けているような様子はなく、幽鬼や悪魔のような類いに警備兵らからは見えたものであろう。

「それらはキメラβ。タイラント素体の遺伝子情報を用いた受精卵に、二次感染の変異体の大百足のセンチオンの遺伝子と、君らが先ほど戦ったヒルの遺伝子を加えることで生まれ、キメラに比べて劇

的な身体能力の強化を図ったB・O・Wのキメラαに、私が改良したプロトタイプ・ネメシスを注入し、知能の向上を追加したB・O・Wだよ」

既にキメラβによって、警備兵の数はキメラβ達を下回るが、キメラβは一体足りとも数を減らすどころか元より硬い外殻と危機回避能力によって致命傷を負うことはない。

「そして、ネメシスが銃火器を扱えるように、このキメラβたちには銃や手榴弾の扱いを覚えさせている」

”とは言え、やはり付け焼き刃だったから、本場の君たちでたった今学習しているのだよ”と言いつつ、ジャクリンは笑みを溢す。

そして、僅か3名となった警備兵の一人が、腕をバネのようにして跳躍してきたキメラβに刺し貫かれた。

「あ……死ね化け物!」

しかし、その警備兵はそれでは終わらず、手榴弾のピンを抜くとキメラβに抱き着き、もろとも爆ぜる。

爆炎が晴れると、多腕でガードはしていたキメラβであったが、至近距離からの爆発には耐えられなかったようで、半数以上の腕が吹き飛んでいた。

「おお、君はいい忠誠だったな。中々、アンブレラポイント高いぞ。しかし……寄生体ネメシスの再生能力と、昆虫由来の再生能力を持ち合わせている故、倒すなら即死させねば苦労するよ?」

直後、キメラβの多腕の根本が泡立つように蠢くと共に、失う前と全く同様の腕が生え直す。それは自動小銃程度では打倒しようもない兵器であること意味しているであろう。

「キメラとは名付けているが、寄生体ネメシスベースのB・O・Wでもあるのだよ」

そして、遂に警備兵は最後の一人となったところでジャクリンが手を掲げ、静止の合図を出す。

すると直ぐにキメラβらは攻撃を止め、彼女の背後に整列して並んだが、それらの多腕には警備兵たちが用いた銃器とその弾薬、手榴弾、大型ナイフなどが握られており、B・O・Wとしては余りにも

異様であった。

「あつ……ひい……ああ……!?!」

「どうだね? まあ、キメラβは今のところ商品として扱う予定はない。精々、ハンター以上タイラント未満程度の私の可愛いB.O.W. 達だよ」

既に戦意を喪失し、床に倒れて恐怖から動けずにいる最後の警備兵にジャクリーンは軽やかな足取りで詰め寄る。

そして、警備兵に片腕を向けると、その掌からショットガンの銃口が伸び、それを額に突きつけた。

「冥土の土産に覚えておけ。私はジェームス・マーカスの愛娘。ジャクリーン・マーカスだ」

一度のマズルフラッシュの後、額をスイカのように割られた最後の警備兵は項垂れるように事切れる。

そして、ジャクリーンは彼の遺品をまさぐり、銃器や弾薬を取り出すと近くのキメラβに渡し、それを皮切りに他のキメラβらも残っていた武器を回収していた。

「さて……おお、これでゆっくりとネメシスを探せるな。陽動の甲斐があつたというものだね」

すると人型ヒルの一体が、白衣姿の人間の死体を引き摺りながら不規則な歩行で歩いて来るのを目にし、ジャクリーンは嬉しげに目を細める。

それはこのタイラント研究所の所長の死体であり、その胸にはIDカードが付いている。この施設の自爆装置の起動にはこの所長が持つIDカードによる承認が必要なため、これがなければ自爆することは出来なくなるのだ。

「あーん」

そして、たった今、所長のIDカードはジャクリーンの体内に収まった。

つまりこのタイラント研究所を自爆させるには、無数に沸く人型ヒ

ルと、11体のキメラβを捌きつつ、女王ヒルを殺す必要があるのだ。

すると彼女は感覚をある程度共有する他のヒルの現在地に目を向け、概ね全九階層のこのタイラント研究所の6〜9階層にあたる下層部分のほぼ全域に少なくとも人型ヒルが行き渡っていることを知る。また、中層に近づくほどアンブレラ側が抗戦できており、6階層ではほぼ拮抗している。

ちなみに彼女が直接警備兵を排除し、制圧したこの9階層には、タイラントの研究に直接関係する区画は何もないが、施設を運用する上で重要な設備がほぼ集約されており、この階層を奪い取ったということとは、施設機能を掌握したにも等しかった。

「最下層は完全に制圧。中央制御室も我々の支配下に置き、地下列車区画も制圧済み。後はネメシスを探しつつ、”上”のフォーアイズらと合流するだけか——」

そうジャクリーンが呟いた直後、施設全体が僅かな揺れに見舞われる。

その事態に大方の見当は付いているのか、彼女は小さく笑みを浮かべながら肩を竦めると、キメラβ達を引き連れて何処かへと向かうのであった。



「さあ、臨床実験を開始する」

それらはアンブレラの貨物エレベーターでタイラント研究所の地下エントランスまで運ばれて来た大型トラックのコンテナから姿を現した。

片方は全身を覆う青黒いローブを纏った妊婦の女性なのだが、もう片方がアンブレラらにとっては問題であろう。

『……………』

それはタイラントよりも二回りは巨大な3・5mほどの背丈をし、灰色の肌に黒紫色の血管が浮き出て、肥大化した隻腕を持つB・O・W・——量産型タイラントのバンダースナッチに似た何かであった。

しかし、施設下層にて突如鳴り響いた襲撃とB・O・W・の暴走を告げるアラートに右往左往するばかりの上層の職員達はそれを目にし、外部のアンブレラ支部や本部からの増援や誰かが鎮圧用に試作タイラントを起動したモノだと考えていたのだ。

そのため、アンブレラらにとっては完全に寝耳に水であった。まさか、アンブレラ以外で製造されたタイラントを1体だけを引き連れ、真つ正面からアンブレラに殴り込みを掛けてくるような余りにも無謀で現実味がない事態など想像出来よう筈もないのだから。

「ジャバウオック」

『……………』

そして、隣の女性にジャバウオックと名前を呼ばれたそれは、運ばれて来たトラックをあるうことか容易く掴み上げると、それをエントランスへ向かって放り投げた。

施設へ直撃の後、女性がペンのようなスイッチを押し込むと、トラックは大爆発を起こし、一部の研究区画ごとエントランスを消し飛ばす。どうやらかなりの量の爆薬が積まれていたらしい。

暫く爆炎に一带が包まれた光景を見届けたジャバウオックは、ある程度火の手が収まったところで歩いて内部へ向かう。

その頃には事態を察知した上層の警備兵が全壊したエントランスの奥の通路に集結しており、銃器に加えてロケットランチャーを持ち

込んでいる者も見られる。

そして、それを視認したジャバウオックの頭部と肥大化した腕部を除いて、全身が泡立つようにヒルが浮き出ると女王ヒルのような肉体が形成され、片腕が不揃いな五指の百合の花のような触手と化する。

「撃てえー！」

号令の後、横殴りの銃弾の嵐とロケット弾がジャバウオックを襲う。

しかし、ジャバウオックはタイラントらしく銃弾を一切意に介さず、向かってきたロケット弾を枝分かれさせた触手で受け止めると、明後日の方向へ投げ捨てて無力化する。

「た、弾が効かない!？」

的のようにロケット弾以外の銃弾を受けるジャバウオックの身体は、只でさえ強靱なタイラントを素体に、頭部と肥大化した腕以外の全身を異常に硬く弾性に富む女王ヒルの再生装甲とでも言うべきものが覆っていた。

最早、自動小銃程度の銃器ではダメージにすらならず、更にある程度のダメージならば再生装甲とネメシスの再生力がカバーし、ロケット弾は受け流しているため、幾ら撃ち込まれようとも無敵の化け物かのように一歩一歩足を踏み締め続ける。

警備兵らはB・O・Wを始めとしたタイラントやネメシスの存在を知らない訳ではないため、かえって明らかにそれ以上の怪物に對峙した事を悟り、多大な恐怖と混乱を巻き起こしていた。

『スペンサアアア……!!』

依然として銃弾を受けながらジャバウオックは、底冷えするような咆哮を行うと腕を伸ばして床を掴む。更に触手を弓のように引き絞ったまま腕を縮め、それだけで前方に20〜30m以上瞬時に前進していた。

そして、警備兵らの中央に飛び込んだジャバウオックは、そのままの勢いで横薙ぎに触手を放つ。

それは最早、触手と言うよりも20m近いブレードと化し、通路という閉所で放たれた事も相まって、展開していた警備兵らの肉体ごと通り過ぎたあらゆるものを引き裂き粉碎する。

「ぎひい——!?!」

そもそも大幅に身体機能が強化されたクリムゾンヘッドですら胴ごと真つ二つに出来る代物を、人間に対して向けてしまえばどうなるかなど語るまでもないであろう。

警備兵らは半ば壊滅し、触手が通り過ぎた場所には、バラバラになつた人体の残骸が転がるばかりであつた。

「ひっ……来る——あ」

辛うじて当たらなかつた警備兵の眼前に開かれたジャバウオツクの掌が迫る。

そして、断末魔すら上げさせずにスツポリと身体を包むと、そのまま握り潰してしまった。

「て、てて、撤退!! 撤退イイイ!?!」

「ああ、凄い……これで商品未満の試作B・O・W。なのだから博士はイカれてる」

そんなことを呟く全身を隠した妊婦のフォーアイズは、蜘蛛の子を散らすように逃げ出す警備兵の背にアサルトライフルを撃ち込む。

そもそもB・O・W。とは、敵に与える道徳的嫌悪と恐怖、完結した戦闘能力、そして何よりもハードウェアとしての安定した運用などの完成度が求められ、現在開発済みのジャクリン製B・O・W。はその全てをアンブレラを凌駕するレベルでクリアしていた。

しかし、ジャクリンはそれらに加えて、安定した商品価値に拘り、高過ぎないほどの性能と高いコストパフォーマンスを実現させようとしているため、試作品の域を出ない。

すなわち、ジャクリンにとつての試作品とは、持てる技術をコストを度外視して詰め込んだハイエンドB・O・W。の事を指す。

「表層は概ね制圧、続いて二層。ええと……ここか。その床ぶち抜け」
『スペインサア……』

粗方、警備兵を掃討し終えたフォーアイズは、この施設の図面を思

い出しつつ、ジャバウオックに指令を与える。

それによつて振りかぶられたジャバウオックの拳は、分厚いコンクリートと鉄筋の床を発泡スチロールか何かのように破碎し、そのまま真下の階層へと降りた。

そして、土埃が晴れるとそこには大量のカプセルが並んでおり、その中には爬虫類のようなB・O・W。——ハンターが並んでいる。

「ありがとう」

『非常事態発生、第一種バイオハザード警戒体制発令。非常事態につき、一層及び地上までの全隔壁を緊急閉鎖します。繰り返します——非常事態発生』

「——あら、なんて私たちにグッドなタイミング。博士は既に制御を奪い取ったのね」

するとそんなアナウンスが入り、フォーアイズらが二層に降りた直後のタイミングのため、ジャクリーンが狙って行ったものであるとフォーアイズは確信した。

そもそもこのタイラント研究所は1～9階層であり、1～3階層の上層、4～6階層の中層、7～9階層の下層の三層大きくに別れている。

上層は唯一地上への出入口が置かれ、量産型B・O・W。開発が行われている区画。中層はタイラント研究が行われている区画。下層は施設の中枢部が置かれた区画。

そのため、出入口の最上層と、施設自体の維持や制御に関わる最下層に同時に攻撃を仕掛け、タイラント研究所を上下から挟み込むように陥落させるといのが、この襲撃作戦の全容だ。余ほどに己らのB・O・W。に自信がなければ成し得ない作戦であり、同時に戦闘員兼研究者としてのフォーアイズを信用している故でもあることが伺えるであろう。

「それより……お待ちかねの実験の時間だ……。さあ、やって私の可愛いラムダ……！」

「うん、お母さん！」

すると二度声を上げたフォーアイズのローブの裾から細長く赤珊瑚

瑚のように強い赤をした触手が大量に生えると、瞬く間にハンターが入ったそれぞれのカプセルまで到達する。

そして、ガラスを突き破ると、それぞれのハンターの身体に突き刺さった。

「どう？　出来そうかしら？」

「もちろん！」

すると瞬く間に触手のような何かを刺されたハンターらの身体に赤い血管が浮き出た。

そして、それらが目を開くと瞳孔が赤く染まり切っており、カプセルを破壊して脱出したハンターらはフォーアイズの周囲に集まり、それに彼女は酷く感銘を受けた様子で身を震わせる。

「ああ……素敵よラム——」

「今だ撃てえ！　撃て撃てええ！」

すると室内に雪崩れ込んできた警備兵や銃を持つ研究員らが、脇目もくれずにフォーアイズ目掛けて一斉に銃撃した。

元保安警察として凄まじい反応速度を見せた彼女は、即座にアサルトライフルを投げ捨てると、自身の腹を手で庇いながら屈むと己の背を盾にして弾を受ける。

少しの間、掃射を受け、それはジャバウオックが肥大化した手を間に振り下ろして盾にしたことで終わりを告げたが、それまでに彼女の両腕と片足は吹き飛び、無数の銃弾が背部の全身に突き刺さり、己の血に濡れた床に転がっていた。

アンブレラらは未知のタイラントの操作者を仕留めたことを確信し——即座に彼女の手足が生え直し、一部剥き出しとなっていた脳も再び元通りの組織で覆われる。

「殺す……」

そして、憎悪に顔を歪めてポツリと呟いた彼女は、ローブの裾から部屋中に伸びていた触手が再び動き出すと、それらの先端をアンブレラらへと向けた。

「ウフフ……アハハハ！　アツハツハツハツ！　いいわ……いいわい

「いいいいわラムダあ！ 私の可愛いラムダ!? 見せて……もつともつともつとお母さんにちょうだい!!」

直ぐに恍惚の表情に顔を歪めたフォーアイズは、アンブレラらが蠢く触手に次々と貫かれて絡め取られる様を眺め、高らかに叫ぶのであった。

タイラント研究所襲撃 その2

「くそっ!? 他フロアは!? 他支部からの援軍はどうなっている!?!」

現在、タイラント研究所の5階層では、警備兵らと研究者に加え、三十体余りのハンター及び7体の量産型タイラント¹と2体の試作タイラント³によつて辛うじて襲撃者たちに対応していた。

5階層はこのタイラント研究所のB・O・W・開発区画の中核であり、通信状況からそれ以外の階層は全て壊滅しているため、襲撃に際して凶らずも事実上の最終防衛ラインとなつている。

アンブレラにとつては過剰なまでの戦力を投入していることにより、下層から上がってくる人型のヒルのようなB・O・W・は押し返すことができ、これまで進行を全く寄せ付けないでいた。

『サア、残りハココダケダ——』

しかし、まるで地獄から這い上がつて来たかのようにソレがやつて来たことで戦局は一変する。

『援軍ノ前ニ貴様ヲハ滅ブ。故ニ心置キ無ク忠誠ヲ証明シテ見セロ』

下層から登つてきた言葉を話すソレは、3mはある体躯を持つ人型のヒルのようなB・O・W・を超えた何かである。そして、ヒルはキメラベースと思われるB・O・W・が11体のみを引き連れ、堂々と真つ正面から襲い掛かつて来たのだ。

当然、数多のハンターが突撃し、人間が銃撃をしたが、ハンターのようなB・O・W・らはその10本の多腕にそれぞれ銃器を中心とした武器を持ち、ハンターの以上の身体能力を生かして徹底的に抗戦して来る。

『——!』

キメラら——キメラβには個性があるらしく、そのうち一体を例

に取ると、二挺のポンプアクションショットガンと、6本の大型ナイフを手に持ち、明らかに他のキメラβよりも間合いが近く好戦的である。

ハンターにはその大振りな爪をわざと誘って避け、カウンターにショットガンを叩き込み、足りなければナイフで急所を突き穿つ。

人間相手はそもそも自身の異様な再生能力と、ハンターの倍以上の速さを生かして、床と壁を二次元的に駆けることで多少の被弾はものともせずにナイフで喉笛や急所を斬り裂く。あるいはナイフを投げるか、ショットガンで身体を吹き飛ばしていた。

他のキメラβにも拳銃、機関銃、長距離武器、手榴弾など様々な特色がそれぞれに現れているが、何れもアンブレラ側には”B.O.W・特殊部隊”であり、”最高の兵士”と言えるであろう異様な存在であり、人型のヒル——女王ヒルジャクリーンにとっては個性がある時点で失敗作以外の何物でもない。

『後、3体ダ』

そして、気づけば既に女王ヒルの足元や後方には、2体の試作品タイラントと4体の量産型タイラントが無惨なまでに破壊されるか、眠るように事切れて転がっていた。

「な、なんだ……なんなのだあの化け物は!？」

『人様ニ随分ナ挨拶デハナイカ』

このタイラント研究所の副所長をしている男の叫びにジャクリンは、そんな言葉を返す。

その間にも残る3体の量産型タイラントは、ジャクリンに向かって襲い来る。しかし、元より対B.O.W.戦をそこまで想定していないタイラントではあまりに遅かった。

『玩具ダナ』

ジャクリンは片手に持つ奇妙な形をしたやや大型の白い拳銃——アンブルシューターを構えた。それは特殊な弾薬を打ち出すための圧縮ガス銃であり、単純な銃としての性能は豆鉄砲のようなもので

ある。

しかし、放たれた麻醉弾のような銃弾が向かってくる先頭の量産型タイラントの首筋に命中した直後、量産型タイラントは明らかに異様な取り乱し方を見せた後、地面に崩れ落ちて二度と動かなくなった。

ジャクリーンはそれに目もくれず、単発装填らしいアンプルシューターをリロードし、再び放たれたそれは眉間に吸い込まれるように突き刺さる。

アンプルシューターの弾薬に詰まっている物は、ジャクリーンが開発したTーウィルスに対する特效薬——デイライトである。その効力は絶大で、事実タイラントさえも瞬殺しており、アンブレラが持つ如何なる物よりも即効性と効果があることを証明していた。

2体目の量産型タイラントが倒れるとほぼ同時に3体目の最後の量産型タイラントがジャクリーンに接近し、その豪腕を振るう。装甲車でさえ一撃でお釈迦にしかねないそれは壮絶な威力であろう。

しかし、あろうことかジャクリーンはそれを片腕で受け止める。流石に衝撃は殺し切れず、一步大きく後退したが、それで踏み留まると共に背の触手を大きく蠢かせた。

『喜べ、貴様ラノ目ノ前ニイルノハ結果ダ。貴様ラガ選ンダ結果ナノダ……アンブレラアアアア——……!!!』

女王ヒルという怪物は底冷えする慟哭を発しながらアンプルシューターを床に落とし、両手で量産型タイラントの両腕を掴む。

量産型タイラントは手を振り払おうともがくが、一回り以上ある体格差と力があるようには思えない外見に似つかわしくない怪力により全く抜け出せず、鋼のような肉と骨が軋む異音が響く。

『!?!』
そして、最後には量産型タイラントの腕をただの腕力で握り潰してしまつた。

あらぬ方向へ曲がつた量産型タイラントの両腕から手を変え、ジャクリーンはその頭部を驚掴みにする。

『クククッ……B. O. W. トB. O. W. ニヨル戦争。コレコソ新タナル時代ダ』

そのまま掴む力を強め続けながら量産型タイラントを宙に持ち上げ、その足が地面から離れた頃に怪力に耐えられなくなったその頭蓋が砕け、糸の切れた操り人形のようにタイラントというアンブレラの最高傑作は事切れる。

「ヒイ……!?!」

そんな量産型タイラントの死骸をジャクリーンは、副所長の目の前に投げ飛ばした。30m程前に捨てられたそれは、無くなった頭部と潰された両腕から溢れ出た血で床を濡らす。

ジャクリーンによってタイラントは全滅。そして、副所長が辺りを見回せば、既にカメラβによりハンターと銃を持つ人間は跡形もなく壊滅している。

既に副所長を数えた数名の研究者しか残ってはおらず、いつの間にか研究区画の最奥まで追い詰められていた。

「な、何が目的だ?! お前はいつたいたい!」

『語ル時ハ当ニ過ギタガ……強イテ分カリヤスク言エバ、我ガ望ミハ貴様ラガ等シク脳漿ヲブチマケル事ダ』

「助け——」

その言葉と共に最早放心していた研究者の一人にジャクリーンの触手が跳び、頭蓋骨ごと脳髓に穴を開ける。そして、びちびちとその中身が床に飛び散った。

それ共にカメラβたちが残る研究者に飛び掛かる。当然、ハンターすらまるで相手にならないB・O・W。にただの健康な人間でしかない研究者たちが相手になる筈もなく、虐殺と言っても差し支えないだろう。

『後、1人ダ』

気がつけば放心状態の副所長の数m手前にジャクリーンは佇んでおり、いつの間にか拾い直していたアンブルシューターを百合の花弁のような手で遊ばせていた。

『ドウシタ? 殺シテシマウゾ?』

峙するジャクリーンはやや落胆した態度になったように見えた。

『……マア、目的ノ物ハココノ区画ノ奥力。ソレダケデモ良シト——』
そこまで呟いたところで、肉が抉れる音が響き渡った。

「ひ——ぎゃあああ!!」

すると目の前で、ネメシスによつて副所長が刺し貫かれており、ジャクリーンは閉口する。

そのまま、部屋の隅まで投げ捨てられた副所長は腹に大穴を開けて完全に事切れており、少なくとも二度と自然に動く事はなかった。

『己デ御セス、壊セモシナイ物ヲ造ルナド烏澁ガマシイトハ思ワンカネ……?』

その一部始終を眺め、最早、誰に言うわけでもなくポツリと呟いたジャクリーンは、アンプルシューターを仕舞いつつ小さく溜め息を漏らす。

その直後、ジャクリーンを見据えたネメシスが数本の触手を銚のよう放った事で、数m伸びたそれは彼女の肩口や大腿部を貫通して止まった。

それに対してジャクリーンは、損傷部に力を込めて抜けなくしつつ、表面だけを無数のヒルに変異させ、触手へ一斉に吸血と補食を繰り返すと共に、背中から二十以上の触手を展開する。

直接接触手を喰われるネメシス寄生体は堪ったものではないであろう。

『■■■■——!?!? ■■■■——!?!?』

『生憎ダガ、可愛ゲモナイ貴様ニ手加減ナドハセンゾ。無数ノ蛭ニ触手ヲ差シ込ムナド愚カナコトダ』

その言葉と共にジャクリーンの背から全ての触手がネメシスに殺到し、全身を刺し貫く。

そして、触手でネメシスを手繰り寄せながら拳のように片腕の触手をまとめ、走り出すと力の限りネメシスを殴り付けた。

しかし、腐つてもタイラントを超えたB・O・W。全身の損傷を一切意に介さず、大木のような足でジャクリーン目掛けて蹴りを放ち、互いの拳と足はそれぞれすり抜けて命中する。

結果、ジャクリーンはくの字に身体を仰け反らせながら数歩後退すると共に怯んだことで触手が回収され、ネメシスは大きく一步後退すると膝を突いた。

『暴走状態ノ”ネメシス”相手二ハ僅カニ純粹ナ”力”デハ負ケテイルカ……』

互いに巨体のため、後退によって数m出来た間隔は自身の後退距離の方が多い事からそう評価したジャクリーン。

しかし、何処と無く興味深そうな様子の彼女は、首を鳴らすように異形の頭部を回しつつ、片腕の中から気に入って持ち歩いているポンプアクション式のショットガンの銃口を覗かせた。

『フム……。失敗作トハ言エ、少シハ楽シメ——』

その言葉の途中——彼方から飛来してきたロケット弾が起き上がり掛けのネメシスに直撃し、爆炎と共に真後ろの壁にネメシスの巨体を叩き付ける。

数mの距離で起こっているため、ジャクリーンも僅かに爆風を浴びるが、元より直撃しなければ飛ぶような重量ではない事と、かなり驚いている事により、その場で固まるばかりであった。

『エ……？』

更に間髪入れずにもう一発ロケット弾がネメシス命中し、その爆発でネメシス寄生体の触手の一部と、ネメシスの組織の一部が吹き飛ぶ様子が目に入る。

そして、ジャクリーンが視線をロケット弾が飛んで来た自身の斜め後方に目を向けると——。

『——！』

一体のキメラ β が武骨なデザインの重火器——”ネメシス用ロケットランチャー”をその多腕で構えており、再装填を急いでいる姿があった。

ネメシス用武装。その正式採用されたロケットランチャーモデルであり、ネメシスを極秘研究している以上、この階層の何処かにあつ

たらしいそれを目敏く見つけて来たらしい。

ジャクリーンも探そうとはしていたが、殲滅してからのつもりだったため、寝耳に水であり、直感的に悪い予感を覚えた彼女は制止させようと動く。

『オイ、オ前何渡シテ、イヤ君タチ、少シ待——』

『……!!』

『!!』

『——』

しかし、キメラβらは既に行動しているためか、主人に手傷を負わされた事に憤慨しているのか、ジャクリーンの制止の言葉を遮り、キメラβの内の三体がジャクリーンより少しだけ前に出て——その多腕に一門の”ネメシス用ガトリングガン”が構えられ、既にゆつくりと銃身が回転していた。

直後、ダウンしているネメシス目掛け、凄まじい轟音と共に三方向からガトリングガンの集中豪雨が降り注ぎ、研究区画の一角ごとネメシスを削って行く。

更に残る七体のキメラβらもいつの間にか集まり、それぞれが持つ銃器でネメシスを銃撃し、まるで真昼のようなマズルフラッシュがジャクリーンの視覚を染める。

『ウワァ……』

そして、20〜30秒ほど経過し、全てが終わった頃には、安物のミキサーに掛けたミートパイのようになったネメシスだったものが、穴だらけの地面にこびりつくばかりであった。

無言でジャクリーンは女王ヒルとしての形態を解き、これまで擬態していた女性の姿になるが、その表情は絶妙に苦虫を噛み潰したような半笑いを浮かべており、やや口を端をひくつかせている。

『君たち……』

ジャクリーンがポツリと呟く中、そんな彼女の回りをキメラβたちは、SPが何かのように固めて辺りへの警戒を強めていた。

現にネメシスに殺された事で今更ながら活性死者として立ち上がった副所長だったモノの頭部が即座に吹き飛んでいる。

他で発生した活性死者も頭部を的確に破壊し、それから学んだように先に死体の頭部を踏み潰して破壊しておく様子すらある。作業的に一撃で軽々と粉碎していく様は最早関心すら覚えるであろう。

「やはり商品にするには賢過ぎるなあ……」

”弱点という弱点もないしなあ……”等と呟きつつ、ジャクリーンは上層階のフォーアイズらの到着を待ちながら目的のバグを起こしたネメシスたちと、NE- α 型とNE- β 型の確認と回収作業を進めるのであった。

スペンサー記念病院

「撃てっ！ 撃てえ！ 何としてもこの場で仕留めろッ!! そうすれば本部部隊が——」

研究施設を完全制圧する少し前、タイラント研究所の4階層。

その階層にある数回建てのビルが収まるような巨大なラボラトリー区画内にて、肉体でもあるヒルの装甲に覆われた大型のタイラント——ジャバウオックは前のみを見据え、ただ前進していた。

『スペンサーアアア……!』

即席の防衛ラインのようなバリケードに沿って、様々な場所にいる数十人の武装警備兵や研究者たちからどれだけ銃弾の豪雨を全身に浴びようと、手榴弾やロケット弾の爆発を受けようとも一歩一歩着実に踏み締めるその歩みは決して止まらない。

ジャバウオックの全てを司るネメシス寄生体は、キメラ α 達のそれとは格が違う。何せ女王ヒルであるジャクリーン自身の頭角個体の遺伝子を基礎に持つからだ。

すなわち、完全な”上位個体”である。

「どうして止まらない!? 高々、出来損ないのタイラント1体だぞ!」
”出来損ない”——研究者の1人が言い放ったその言葉もまた間違っていない。

明らかに量産型タイラントの失敗作であるバンダースナッチベースのタイラントであり、人間への擬態を含めた完璧な兵士を造り出すというタイラントのコンセプトとは端から違っているからだ。しかも明らかにB・O・W.としては完成しているように見えるため、尚更であろう。

何よりもタイラントが完璧な兵士ならば、ネメシス寄生体とヒルの

再生能力に、タイラントの頑強さが加えられたジャバウオックは、正に”不死の怪物”であった。

ジャバウオックが侵入時と比べてロケット弾を避けなくなったのは、ジャバウオック自身が捕食者としての位置を見誤っていたからに他ならない。

確かにタイラントと言えども銃弾を浴び続ければ、当然に膝を突く。過度な爆発を受け続ければ、死に絶えるのが道理。

しかし、ジャバウオックの身体は浴びせられる銃弾を内部まではまるで通さず、ロケット弾を受けようとも幾らか表面のヒルで出来た装甲が剥がれるだけ。何より与えられるダメージよりも肉体の再生速度の方が遥かに速かった。

ジャバウオックに対し、銃器を捨てて即席の火炎瓶や火炎放射器を作り挑もうとする愚か者はおらず、地下深くのこの場所に日の光が届く筈もない。

故にこれはジャクリーンが想定した仕様通りの性能と戦果であった。

そもそもジャバウオックは言ってしまうえば、タイラントを頭角^{ペイ}個体^スにし、女王ヒルを纏うと言う余りにも単純極まりないコンセプトのB・O・Wである。

そのため、弱点を突かれさえしなければ、一切隙のない仕上がりになっており、紛れもないハイエンドなタイラントとしてあまりに完成していたのだ。

更に一度、フォーアイズが受傷したため、自ら判断して前衛に出ており、自身が全ての攻撃を受け止める事を誰に言われるまでもなくしており、他のタイラントやロケットランチャーを持つ相手を優先的に無力化してもいた。

「タイラントが……ッ!?!」

ジャバウオックに迫るタイラントは、その伸縮自在の剛腕で絡め取るように捕らえ、異常な腕力で上半身ごと握り潰されている。ハードウェアとしての動きしか出来ないアンブレラのタイラントにとって、ジャバウオックはあまりにも相手が悪かったと言える。

紛れもない暴力の権化でありながらも要人を護るSPのようであり、その知能は女王ヒルの遺伝子を持つことで、ただ命令に従うだけの通常のネメシスよりも上である事が伺えるだろう。

『アンブレラアアアアア——…!!!』

つまり間違いなく、目の前のそれは現時点でこの世界に存在し、ワ
ンオフで換えの効かない最高ダイラントの兵士であった。



『いんばんはー!』

ソレが目の前に姿を現したのは余りに唐突だった。

白昼夢から覚めた微睡みのように穏やかで歪んだ景色の中、アジア系のハーフに思える小さな少女の輪郭だけが、まるで浮き出ていると錯覚するほど酷くはつきりと像を結んでいる。

無邪気で屈託のない笑顔と少女らしい和やかな雰囲気は、その場を共有するだけであらゆるモノから牙を抜いてしまうように思えるが、彼——彼らは湿った視線を少女に向けるばかりだった。

『へえ……”ほか”のとはやっぱりちがうんだあ……』

少女の形をした何かは、これまでとは違う値踏みするような笑みを小さく浮かべると、椅子に座るようにひよいと腰掛ける。

するとそこにはいつの間にかトレンチコートのような防護服を着た大男——T-103が両手を添えて椅子代わりになっていた。

しかし、そんな量産型タイラントの表皮には、やや光沢を帯びた黄と赤の血管のような何かが多数走行しており、その瞳は色と光のないモノではなく、赤々とした異様な輝きを宿している。

更にそんな少女の背後で控えるように次々と他の量産型タイラントや、数多のハンター、研究員や警備員や清掃員等の様々な格好をした人間が並び立つように次々と現れた。

そして、それらの存在は共通して表皮に血管のような何かが走行し、赤い輝きを帯びた瞳をして、時折小さく左右に揺れる程度の動きしか見せず、さながら幽鬼の群れのように思えた事だろう。

『人形さんはもうたくさんだし——じゃあ、ともだちになろう？』

無邪気に笑う少女は小さく指を鳴らし、よく通る音を響かせる。

すると無機質な景色は彼らのよく知る研究所の培養槽が立ち並ぶ光景に変わり、働く昆虫のような研究員の往来が繰り返された。

そして、そんな忌むべき景色は、ひとりの研究員がまるで風船のように破裂した事で連鎖的に全ての研究員が白衣を着た血染みに変わり、床にぶちまけられる。

更に研究所の培養槽がひび割れた後、砂のように崩れ去ると共に、研究所という空間がシュレッダーに入れた紙を思わせるほど粉々に掻き消えた。

『——約束するよ』

最後に彼らの前に広がった景色は、陽の当たるところにでもあるような一面の草原であったが、彼らの誰もが未だ見たことないそれは、ま

るで何物にも縛られる事のない世界であった。



「ああ、夜は暖かくして眠るんだぞ？」

広大な草原ばかりが広がる国道にて、ジャクリーンは通話をしていました。見れば彼女の隣に聳える電信柱の電話線に配線と受話器が繋がれている。

更に近くの路肩で3輪の40tトレーラーが停泊しており、簡素な外装の巨大なコンテナが佇んでいた。

「——そうか、それは何よりだな」

それを最後にジャクリーンは通話を終えると、片手を触手に変えて電話線に接続した配線に触れると共に回収をする。

そして、トレーラーへと向かうと、彼女の位置からは見えなかった車体の裏に回り込む。

「そろそろ休憩はいいかね？ 明日までにラクーンへ戻らねばならぬのだ」

『……………』

そこには青々とした草原を眺めている拘束衣を纏った怪物——ネメシスの姿があった。どうやらジャクリーンらがタイラント研究所から強奪した4体のネメシスの内の1体らしい。

声を掛けられたネメシスがジャクリーンの方に顔を向けると、その足元にいた彼女の助手であるフォーアイズが口を開いた。

「ママ、もう少しだけ見させてあげてよ？ 他の子はまんぞくしたみたいだけど、この子はまだ見たいんだって」

しかし、その声色は幼げでやや舌足らずに思え、見ればフォーアイズの表情も普段の彼女ならばまずしないような屈託のない笑みを浮かべていた。彼女を知るものが見れば、不気味にさえ思えるだろう。

「そうか、それは無粋だったな……。それは良いが、ママは止めろ」

「うふふ、照れているのね。ア・ナ・タ——じゃあ、パパー」

「それはもつと止めろ」

「もう、お父さんったら照れ屋なんだからねえ——ねー」

人格が切り替わるように言動と態度が異なり、会話をしている様子を見せるフォーアイズにジャクリーンは溜め息を落とす。

「ラムダ、それでタイラント研究所の方はどうなっている？」

「んー……はんぶん以上やられたかな。のこってるのはびーおーだぶりゅーぐらい？」

フォーアイズの腹にいるB・O・W——ラムダ・ヤマタは目を細めつつそう答える。また、彼女はここではない遠くを眺めていた。

それを聞いたジャクリーンは小さく肩を竦める。

「ふむ……ラムダが吸収した奴らは60〜70%近く壊滅したか。UmbrelialTrashshweeperアンブレラ証拠隠滅部隊を投入せず、アンブレラ保安警察だけでよくやるものだな」

「どうしてアンブレラ証拠隠滅部隊を出して来なかったのかしら？」

「奴らここまでの事をされて、まだ穏便に事を済ませたいのだろう。或いは内部の武装蜂起程度に考えているのだろうか」

”少なくとも自らにバイオテロを仕掛けて来る者がいるなど端から考えてはいないさ”とジャクリーンは続け、小さく鼻で嗤う。

「全く……お蔭で研究所からの逃走は余りにも簡単だったな。出て行って下さいと言っていた様なものだ」

「それは博士がラクーンと同じように前もって下水道の全てを把握して逃走経路を確保し、ラムダが掌握した量産型タイラントを何体か下

水道に放って攪乱したせいでしょう？」

フォーアイズの眩きにジャクリーンは言葉を返さず、掌を開くとそれをフォーアイズとネメシスの前に掲げるように見せた。

それを行うジャクリーンの表情は、酷く嬉しげで裂けんばかりに口の端を伸ばして笑っていることが見て取れるだろう。

「さて……この辺りが潮時だな」

「だいじょーぶ？ 私がやろうか？」

「気遣いは嬉しいが、流石の私もこれを譲ってやるほど気前は良くはないものでね。何より杜撰なアンブレラどもに教えてやらねばならない」

ジャクリーンが片目を瞑ると、彼女の脳裏にヒル人間の視点でモノを見ている光景が映る。

そして、その目の前には物々しいまで嚴重にされた鍵穴があり、それに何の躊躇もなく彼女は鍵を差し込んだ――。

「諸君、徹底した廃棄処理とはこうするのだよ」

その直後、フォーアイズが眺めていた方向の遥か彼方に爆炎による火柱が見え、直ぐにそれは大きなキノコ雲を形成し、それは立ち上ると共に快晴の青空にただ浮かぶばかりだった。



1998年9月24日



ラクーンシティのスタジアムで暴動事件があった翌日の正午。
ラクーンシティ内にあるスペンサー記念病院の医局は、血と硝煙の
臭いで満ちた惨たらしい光景が広がっていた。

医局では、デスクを無造作に退かしてスペースが作られ、その壁際に医師たちや他部門の役職者らが並べられて、武装した二足歩行の昆虫たちと日系人の妊婦が見張るといふ異様な光景が広がっている。

そして、医局の中央では既に二十数名の武装した人間と数名の医師の死体が転がっており、武装した人間の装備からこの病院と秘密裏に隣接するアンブレラ施設から来た事を示唆していた。

そこには二人の生者だけが残っており、片方は片腕からショットガンが生えて半ば一体化している白衣姿の女。もう片方はその女の前に跪く中年男性——医師のナサニエル・バードだけである。

「待て!? わ、私を殺せばワクチンは永遠に闇の中だ！ それでもいいのか!？」

「ああ、それならば一向に構わない。貴様程度に造れる物をこの私が造れない筈が無かるう?。」

女はくつくつと笑い、茶化すように肩を竦めて見せた。

他の死体から察するにアンブレラの警備兵及びアンブレラに与していた医師たちと、目の前の異形たちとの戦闘の一部始終を見せ付けられているであろう無辜の医師たち多くは、目を背けつつもただ眺めるばかりであった。

女——ジャクリーン・マーカスと名乗る明らかに人間ではない何かは、このバード医師の近くに転がる院長の死体に対し、既に生きていた頃に拷問紛いの事を終えている。

それにより、奇病——ゾンビウイルスであるT-ウイルスや、この病院と物理的にすら繋がっているアンブレラの実態について、全て各々の口から吐かせていた。そのため、そもそもこの事態はアンブレラが引き起こした事であり、彼女に殺された者はそうしたアンブレラ直属の者や、黙殺して支援ながら甘い汁を啜っていた者である。

彼らは元々素行も極めて悪い者が多かったが、その中でも最後まで何故か残されたバードに感しては、マイケル・ウォーレン市長やブライアン・アイアンズ署長と共に”恒例のお楽しみ”の内容まで全て赤裸々に吐かされたため、同情や哀悼の念すら他の医療従事者達からは全く感じられない始末であった。

「それにしても貴様ら揃いも揃って情報管理が手温過ぎる。傘の下と言うのはそれほどまでに人間を無能に変えるのかね？　なあ、バードくん？」

「うっ……」

元々、ラクーンシティにバイオテロを仕掛ける予定であった彼女は、計画の段階で生存者の確保の観点から”病院”を、脱出経路の関係から”警察署”の二点を押さえるつもりであった。そのため、既にこのスペンサー記念病院のアンブレラに染まった職員をリストアップしていた故に起こせた凶行である。

尤もスタジアムでの暴動事件という名の近年類を見ない異様な流血騒動と、この病院ですら理事長命令による治療方法の無い奇病の無償受け入れという異常事態が起こっているが故の凶行とも言える。

「欲しいものはなんだ!?　かつ、金か……?　金だな!?　幾らでも用意してやる!　おまつ、君もアンブレラを裏切っ……見切りを付けた質なのだろう!?　ならば私と同じだ!　私のワクチンと君ならアンブレラを倒せ——」

その直後、女はバードの片足の大腿へショットガンの銃口を向けると、一切躊躇なく発砲した。

「うわああああああ!!!」

「たかが足を撃たれた程度で喚くな人間。そこのフォーアイズなら全身を撃ち抜かれようと笑って見せるぞ?　それで、誰がアンブレラだと……?　面白い冗談だ。もう一度、言ってみろ」

ジャクリーンは床であらゆる液を垂れ流しながら悶えるバードを小さく嗤っていたが、突如その表情を歪ませ、銃を持っていない方の片腕で胸ぐらを掴み上げる。

「最低限の忠誠すら尽くせぬ傘にすぎることしか出来ないアンブレラ崩れの寄生虫風情が……。貴様には精々野垂れ死ぬのが似合いだ」

「か、ひっ……ま、待って、全部私が悪かったから——」

その言葉の直後、異形の触手と化したジャクリーンの片方の腕が急激に伸長し、バードは医局の窓に向かって勢いよく叩き付けらようとし——その直前で行動が止まり、自身の方へバードを引き寄せた。

「ふむ……。私の剥き出しの感情としては貴様をこのまま窓の外へ投げ捨てたいところだが、生憎そういうわけにはいかない。では助けてやろう」

「……あ……あつ、ありがとうござつ……ひつ——」

「その足、痛かっただろう?」

「ひぎやああああアあ!!」

その言葉と共にジャクリンは自身が撃ったバードの片足を根本から引きちぎり、その断面に触手を這わせて傷口を喰らうと血を凝固させて止血する。

そして、白目を剥いて泡を吹いている彼を他所に、近くにあったロッカーに触手を伸ばして留め具ごと引き千切った。

最後に”後はブライアン・アイアンズとアンブレラの研究者がひとり欲しいところか……”等と呟きつつ彼をロッカーに入れ、出口を下に向けて置くとその上にジャクリンが座る。

「さて……」

ジャクリンという異形の怪物は慣れた様子でショットガンを体内に収納すると、両腕を触手から白魚のような手に戻し、身体の血濡れた汚れを払って居住まいを正す。

「院内消毒も終えたところで、改めて自己紹介を。私は製薬企業アンブレラの創始者の一人——ジェームス・マーカスだ。ジャクリン・マーカスでも構わない。好きに呼びたまえ。先んじて諸君が奇病と呼ぶ感染者を治療方法すら無いにも関わらず、無限に無償受け入れるという理事長命令だけは止めさせて貰った。まあ、認識はこの病院を占拠したテロリストで構わんよ」

医師らに向き合うと、ジャクリンは恭しく頭を下げた。「以後、君ら医師、他の医療スタッフ及び患者全ては人質として扱い、私が統括する。そして、私の目的は一人でも多く人命を救助し、勝手にバイオテロを引き起こしたアンブレラ告発の生き証人として、証言台に立てる状態でこのラクーンシティから脱出させる事だ。無論、諸君らもその中に含まれているぞ」

その様子はこれまでの凄惨な行動とは打って変わり、酷く知性的か

つ紳士的に映るだろう。しかし、その発言内容はこれまでの行動と余りにも乖離しており、その意図を汲み取ることも信用を置くことも出来よう筈もない。

「そこで、まず諸君らにはふたつの選択肢がある」

そんな中、ジャクリーンは指を2本立て、医療スタッフらに問い掛けた。

「ひとつはこのスペンサー記念病院をB・O・W.により武装占拠したテロリスト、すなわち私に服従する事だ。ちなみにバードとやらが言っていた未完成のワクチンとやらより、既に試験も終えた実用段階のワクチンが私の元にある。一瓶で30人、今の手持ちで900人分ほどだな。まず、私はこれを諸君らに無償で提供しよう」

医局はざわめく。医療従事者らも現在起きている明らかに人為的な異常事態を理解しており、つい先程まで殺された面々が人間を何とも思わない悪魔のような存在であった事を悟る。

しかし、だからと言って目の前の本物の悪魔の話を端から信じることも出来ないであろう。とは言え、既に人智を超えた状況に医療従事者らの反応は半々と言ったところであった。

「もうひとつはコイツらと同じく、白い床を赤く塗り替えるかだ」

尤もその言葉と共に片足が異形化し、足元にある死体のひとつの頭部が踏み砕かれ、その中身を撒き散らすまではの話であろう。

「忠誠は問わん。求めるのは服従だ。服従は規律を生み、規律は力となり、その力が全ての源となる。それをどう使うかは諸君らに一任しよう。さあ、好きな方を選びたまえ」

医局のざわめきは止み、張り詰めた空気が流れ、広がる血潮と脳漿が酷く鮮やかに映る。

圧倒的な武力と自身を含む異形の怪物の集団に異論を唱えられる者など居るわけもないだろう。

「よろしい……私に異論を唱える輩は居ないようだな？ ならば私は人間諸君らの保護と適切な予防と治療を行い、何もかも全てを殺して

でも一人でも多くの人命を救う事を我が父に誓おう」

そう言い放ったジャクリーンは妊婦の助手——フォーアイズを呼び付けると、その体内から1Lほどの容量の大きなバイアル瓶を取り出し、それをフォーアイズの眼前に掲げる。

「——！」

その様子を見たフォーアイズは幽霊でも見たかのように目を丸くして驚いていた。

「フォーアイズ、Tーウィルスの感染疑いが無いかつ立位歩行の困難な全患者に対し、優先的に”VAT”^{バット}を投与しろ」

「いいの？」

「有事の際だ。今使わずしていつ使う？ 患者への使用判断及びこの院内の全権はお前に一任する。臨時、医院長だな」

「えへっ、うふふふ……ふふ……！ 博士……愛してるわあ……！」

「……ひとりも殺すなよ？」

「そんな勿体ないことしないわ」

青い液体が並々と詰まったバイアル瓶をジャクリーンから受け取ったフォーアイズは、自前の金属製の動物用注射器を取り出すと、それにバイアル瓶の中身を入れ、鮮やかな青色を恍惚とした表情で眺めていた。

流石にその様子に一抹の不安を覚えて釘を刺したようだが、イマイチ信用に欠ける返答にジャクリーンは目頭を押さえる。

「それより、ネメシスたちラクーンシテイ^外郊外の拠点に置いてきちやっつて良かったの？ これ以上ない即戦力だったんじゃないのかしら？」

「いや……折角、窮屈な檻から出られたのに今度は地獄の釜に飛び込む事もなからう。何よりこれは我々のエゴだ」

「ふーん……まあ、何でもいいけれど。博士はこれから」

「これから私は脱出地点への入り口兼籠城拠点兼避難場所として警察署を掌握する。穏便に済めばそれに越したことはないが……プレイグクローラーまみれにして、ダンプリングタイガーとTー002まで配置した洋館を正攻法で脱出したとかいう例の”S.T.A.R.

S. ” たちと最悪の場合は戦闘になるかも知れん

「凄いわよね、彼ら。ウルフパックと殺り合ったらどつちが生き残るかしら？」

「お前がいたら反則だろうに……。兎に角、先にラクーン大学でT-001とリサとDr. ローガンとタナトスと合流し、残りのワクチンを補充してから向かう。戦力的には大した問題では無かろうが、72時間私から連絡が無かった場合、病院を破棄し、院内の生き残りだけで脱出しろ。そのためにジャバウオックとキメラβは全てそちらに預ける」

「そんなにしなくても私とラムダだけで十分よ——じゅうぶんよ」

愛おしそうに自らの腹部を撫でながらやや幼げな口調で言葉を繰り返すフォーアイズを眺めつつ、ナサニエル・バードが入ったロツカーを軽々と肩に担いだジャクリーンは肩を竦める。

「ラムダの能力は取り込めるB. O. W. などが存在する事前提の受け身の能力だ。何も対象が居なかった場合、数百人の人間を護衛しての脱出は困難だろう。ラムダに侵食されれば常人の脳は耐えられないしな。そのための最低限度の護衛要員が居るに越したことはないと思うがね？」

反乱の抑止にもなる。それに警察署は警官の協力を仰げるさ」

「……博士ってアンブレラから出来たとは思えないぐらい慎重よねえ」

「アイツらが可笑しいんだアイツらが……。それと途中でケンド銃砲店に寄る。新しい銃を幾つか発注しててな。どうなっているが知らんが、店が残っていれば受け取りに行く」

それだけ言うとロツカーを担いだまま、ジャクリーンは医局を後にしたが、出入り口で一度止まると医療スタッフらの方に身体を向ける。

「それでは諸君、良い悪魔を存分に味わいたまえ」

” それを努々忘れるな ”、それだけ告げた人の形をした悪魔は硬い

足音を響かせながら病院を後にするのであった。

ラクーンシティ警察署

「邪魔をする」

ケンド銃砲店の店主——ロバート・ケンドは奇妙な客を前に目を丸くする。

大きく厚手の日傘を持ち、金髪をした白衣姿の美女。出で立ちと漂わせる微かな薬品の香りからも明らかにラクーンシティに多い研究職に従事している事がわかり、少なくとも銃器に用があるようには思えなかった。

それに今ラクーンシティではスタジアムの暴動騒ぎから始まったゾンビが溢れる状況により、未曾有の事態となっており、尚の事異様さが勝るであろう。

「ラクーン大学のグレッグ・ミューラーからの遣いだ。発注していた銃器と弾を受け取りに来た」

「ああ、大学の先生か……」

ラクーン大学という言葉と大学教諭のグレッグ・ミューラーの免許証を提示された事で、ロバートは我に返る。

ラクーン大学から直々に大口の注文が入っており、新旧問わず幾つもの銃器や大量の弾薬が注文され、銃器の性能の歴史研究兼展示用という尤もらしい理由だったため、首は傾げつつもロバートは全て用意をしていた。

「これでいいだろうか？ 手早く引き渡してくれ」

カウンターに小切手が置かれ、そこには本来の金額よりもかなり色がついている事が見て取れる。

ぶつきらぼうながら取り引きは十二分に行っているようだが、ロバートは難色を示す。

「悪いんだが……。こんな状況で研究用の銃器なんて売ってる場合じゃないだろ？ 金はいい、アンタも護身用の何かだけ持ってって帰ってくれ」

「……………ふむ、まるで無償で銃器を提供しているような口振りだな」
「そうだ。街の人に渡してるぜ。何より身の安全を守らなきゃならねえからな」

「直ぐに止めろ、これから益々街の状況が悪くなって行く。焼け石に水だ」

女性はロバートの人としては余りに正しい言葉と行いに眉を潜めると、強い口調でそう言い放った。

そして、彼を非難するように睨むと指でカウンターを静かに叩きながら更に言葉を続ける。

「まさか……私の銃器まで渡したわけでは無かろうな？ それならこちらも相応の対応をさせて貰うぞ」

「まだ渡してはいないが……頼む、帰ってくれ。今、そんなことをしている余裕はないんだ」

それを聞いた女性は小さく溜め息を吐き、視線を下げる。

「そうか、それは残念だ。とても残念だよ。君の行いは人としては正しかった」

「何を——」

そう言うとな彼女はカウンターを叩いていた指を持ち上げ、その指先をロバートへと向け——。

「パパ……………」

それと彼の娘である少女が店内の奥から出て来たのはほぼ同時であつた。

「エマ、どうしたんだい？」

「ママがおかしいの……………」

「……………ほう」

エマの様子を見詰めた女性は、面白そうに口を歪める。そして、少女に詰め寄るとしやがみ込んで目線の高さを合わせる。

「どう可笑しいのだね？ 私は半分ぐらいは医者のようなものだ。言ってみなさい」

「医者だったのか!？」

「えっと、あのね——」

少女は彼女なりに母親の状態について告げ、それを女性は相槌を交えて聞き、聞き終えたところで少女の額を触る。

「……………」

「なるほど……君、熱があるね。頭がクラクラしたり、身体が重いなんて思うことはないかな？」

「あるよ……」

「眼振、高熱、目眩、身体の怠さ……。間違いない、T—ウイルスの感染の前駆症状だ」

「なんて言った……？」

「聞く限り噛まれてもしたか、この娘も……君の妻も今そちら中を練り歩いている活性死者もといゾンビになるぞ？　そこそこの抗体はあるようだが、この娘は数日、妻の方は持って後数時間と言ったところか」

「なっ……!?!　そんな馬鹿なことがあつて——」

「馬鹿も杓子もあるか。これは漫画でもゲームでもなく現実だよ。さしてさて店主……ひとつ交渉と行こうじゃないか」

すると女性は手の甲を掲げるとマジシャンのように二本の金属製のインジェクターを取り出して見せ、それをクルクルと手の中で回した。

「そして、なんとも数奇な事に特效薬がここにある。しかし、私がこれを二人に打ってやる義理は特にはない」

「……………本当に家内とエマが治るのか……？」

「ああ、我が父に誓おう。確か、ロバート・ケンドだったな」

するとその言葉と共に女性の背から大量の触手が伸び、瞬時にロバートの全身に巻き付き、彼の動きを完全に止め、エマは目を丸くするばかりである。

「——化け物!？」

「さあ、ロバート。すぐに決めろ。この場で善人として私に刺殺され、妻子を私に奪われるか……。それとも悪魔に魂を売って二人に薬を

与え、この店の残り全ての銃器と弾薬を警察署に運ぶ手伝いをするかのどちらかだ」

「警察署だと……？　なんたつてお前がそんなところに……」

「これから必要になるからだよ。とは言え、この一本は試供品にしよるか」

更にそのままロバートを浮かせ、歩いてケンド銃砲店から彼ら家族の自宅に入り、直ぐに寝かされている彼の妻の前までやって来た。

ロバートの妻は酷く荒い呼吸をしており、全身から脂汗を流し、時折うわ言のように何かを呟くばかりで明らかに普通の様子ではない。

「やめろ！　俺の妻に——」

「黙れ、治療の妨げになる」

「——!?!」

女性の形をした怪物は、ロバートの口を触手で塞ぐと、手にしていた片方の注射器を慣れた手付きで彼の妻に薬剤を注入する。

すると刺して直ぐに荒い呼吸は和らぎ、悪夢にうなされ続けていたような様子が嘘のように立ち所に消え、静かに寝息を立てるばかりになった。

「効果、即効性共に問題なし。流星はジエームス・マーカス私だな」

それを見てから何故か怪物はロバートを妻の方に押し出しつつ解放する。

直ぐに彼は妻の名を叫びながら彼女に縋りついて体調を確認し、嘘のように容態が安定している事に気づいて愕然とした様子になった。

「さて、効果の程は理解したかね？　だが、それは試供品だから——娘の分はないぞ？」

その言葉を聞いたロバートはほぼ反射的に寝室で飾ってあった猟銃を取り、2発のショットシェルを装填すると怪物の方へ銃口を向ける。

「なんだ？　そんな玩具でこの私に立ち向かうというのは余りにも愚行と言わざるを得ないぞ、人間」

「なっ、何が目的なんだお前は!?!」

「さつき言っただろうに……。とは言え、少し状況が変わったな。こ

の場で善人として私に惨殺され、妻子を私に奪われるか。それとも悪魔に魂を売って娘に薬を与え、この店の残り全ての銃器と弾薬を警察署に運ぶ手伝いをするかのどちらかだよ」

その後、人の形を保っていた怪物の姿が崩れ、両手足が木の幹のように太く3 m程の巨体を持ち、辛うじて人型でしかない異型へと変貌した。

『サア、選べ……今スグニダ……』

頭部についたユリのような口の端を三日月のように歪めて笑う怪物の姿は、現実感がまるでなく、何よりもそれ以上におぞましい何かであった。



1998年8月12日

フォーアイズ主導で共同開発を開始することにした。

この世の終わりのような文面であるが、アークレイに居た頃から再三せがまれており、その度にそれとなく回避していたのだが、遂にアイツが痺れを切らしたので仕方なくである。というか、そうしないとそろそろアイツが爆発しかねん。無論、パンデミック的な意味で。

まあ、フォーアイズに多くは一任するため、私は片手間に出来るので方向修正さえ間違えなければ問題なろう。なまじ研究者としてはマーカス博士として見ても凄まじく優秀なだけに扱いに困るのだ。

我が子とは己の分身であるため、共感性が著しく低い俗にサイコパス等と呼ばれる者も多くは可愛がる。故にこういう奴は子供でも出来たら落ち着く——いや、コイツに限っては嬉々として赤子を解体するか、ウイルスに罹患させている情景しか思い浮かばんな。

さて、そんなこんなで二人で議論しつつ決めた研究テーマは”認知機能を損なわずに痛みを取り去り、一時的に超人的な身体機能を手にする薬品”である。

要するにモルヒネとアドレナリンの良い部分だけ抽出し、Tーウイルスの本来の用途に振り掛けた夢のような物体に手を出す事にしたのだ。まあ、年単位で完成せず、長期的に見た目標なので丁度いい。仮に直ぐ完成してしまえば、フォーアイズが嬉々としてラクーンシティにばら撒いている絵面しか思い浮かばないので、妥当な采配であろう。

まあ、私としてもそう言った薬剤があれば大ヒット商品間違い無しなため、欲しくないかと問われれば嘘になるため丁度いいな。

そして、早速笑顔のフォーアイズが私の元を持って来たモノは——前に私が血眼でサスペンデッドを探していた時、コイツがアークレイに残った職員を消費して実験して認め^{したた}たという”人体に対するVーACT”の論文であった。

それを見た瞬間、表紙だけ眺めてページを開かずとも私は大方察した。どうやらフォーアイズは端からモルヒネやアドレナリンの要素の欠片すら使う気は無いらしい。Tーウイルス一本のストロングスタイルである。もう、いつそ清々しいほどだな。

活性死者に対するVーACTの有効性は今更語るまでもないが、論文によれば要するにコイツはどこまで人間を半殺しにすればVーACTが作用するのかを検証していたらしい。この一冊のために”27人”の人間を犠牲にしたと考えると、私ですら資源の無駄と言わざるを得ないだろう。

ははは、コイツめ。これがやりたくて故意にサスペンデッドを逃したな……？ アークレイ脱出前に時間があれば間違はなくこのような実験の許可は出さなかったのは明白だろう。まあ、それを問い詰めるところで”使ったものは仕方ない”等と開き直るのがフォーアイズなので、私もこれ以上言及はしないさ。キレそう。

要するに今回の共同開発に置いてフォーアイズは、Tーウイルスの変異種であるVーACTが活性死者をクリムゾン・ヘッドへと変貌させるように、人間を瀕死にし、意識を保ったまま無理矢理VーACTを作用させようということだ。

かなり強引ではあるが理には叶っている。それにアルバートから渡されたインジェクターの残液を解析したところ、VーACT由来の組成が確認出来たため、確かに殺した彼が蘇生したのはそんな絡繰りだった。ならばこの私がそれを超えたものを造れないなどありえない。

まあ、私の構想とは全く違うが、これはこれで面白そうなので、アークレイから運んで来たクリムゾン・ヘッド・プロト1を用いた研究許可を出すことにした。倫理観は違えども結局のところ、我々は同じ穴の貉なのであろう。何はともあれ、何かを求め、足掻くものはどうにも惹かれる。

さて、明日の準備もあるため、今日のところはこの辺りにしておこう。



1998年8月20日

被検体は下水道や地下研究所周辺でアンブレラを捕獲。

フランク・ジュニア

男性、40歳、82kg。試薬投与後、クリムゾン・ヘッド化。即時終了。検死の結果、仮死成分の毒性が強過ぎたためと推測。毒素を半量に変更。

ウォーレン・ラッセル

男性、33歳、47kg。試薬投与後、クリムゾン・ヘッド化。即時終了。追試験の必要性あり。

アイク・ブリッツズ

男性、56歳、69kg。試薬投与後、成功。検査後に終了。解剖の結果、身体構造は人間寄りだが、筋量や骨密度の増加が顕著。成分分析結果の値も基準値を大きく超える値あり。毒性を戻した追試験の必要性あり。

ジェシカ・ハリス

女性、28歳、42kg。試薬投与後、クリムゾン・ヘッド化。即時終了。追試験の必要性あり。

マイケル・モナハン

男性、24歳、53kg。試薬投与後、クリムゾン・ヘッド化。即時終了。追試験の必要性あり。

シーラ・デイヴィス

女性、64歳、89kg。試薬投与後、成功。検査後に終了。試薬量調整の後、追試験の必要性あり。

ナンシー・マイナー

女性、29歳、41kg。減薬して投与後、成功。検査後に終了。追試験の必要性あり。

バリー・グロス

男性、45歳、93kg。試薬半量投与後、意識覚醒せず。追加投

与で成功。対象の体重により、投薬量の調整の必要性があると推測。なるほど盲点だった。

フレディ・ハーディ

アドニ・リクター

バツジ・ランドール

エリオット・ヘフアーナン

ジヨナサン・ヒラー

投薬量の確認後、終了。およその投薬量は以下の通り。

60 k g 以上 Ⅱ 基準量

40 k g 以上 60 k g 未満 Ⅱ 約 2 / 3 量

20 k g 以上 40 k g 未満 Ⅱ 約 1 / 2 量

20 k g 未満 Ⅱ 不明

このまま投薬量だけ設定すれば一応完成したと言えなくもないが……薬剤の安定性を上げよう。流石にアンブレラでもない子供の被検体を用意する事は憚られたため、子供に対する反応及び投薬量が不明な上、今完成すればフォーアイズが別の研究に手を出しそうだからな。ニユクス開発の合間のいい暇潰しになった。

P. S.

被検体は全て D r. ローガンのマイスイートハートが美味しくい
たできました



1998年9月1日

悲報と呼ぶべきか、吉報と呼ぶべきか。フォーアイズと共同開発していた”認知機能を損なわずに痛みを取り去り、一時的に超人的な身体機能を手にする薬品”あるいは”医療用Tーウイルス試作品”が完成してしまった。しかも臨床の結果、安定性もあるようで、フォーアイズらしからぬ割りとマトモな仕上がりである。

真の意味での蘇生薬であるこれはVATと名付けた。人間に後ろ暗い翼を与えるには妥当な名であろう。

効果としては毒素で宿主の意識を奪いつつ仮死状態にし、休眠期に入らせると同時にVーACTによる体組織の再構築が始まり、その際に細胞を活性化させ、体組織自身の改造を行う。要するに生きているなら一度殺し、死にたてならばそのまま全身の改造を行い、クリムゾン・ヘッドと同等の身体機能を与えて蘇生させる代物だ。ウエスカーのモノより遥かに効果を弱めて副作用も薄くしたため、直ちに身体への悪影響は確認されていない。正常に作用すれば効果は一律で死亡者や認知機能及び知能低下を引き起こした被検体も無し。母数は多くないが、安定性もある。

まあ、流石に長い目で見れば副作用が確認出来るとは思われるが、生きるか死ぬかの二択を迫られた場合の最終手段として打つ強化蘇生剤だ。服薬する側もそれぐらいのリスクは承知の上だろう。

それにVATを打てばVーACTもといTーウイルスの変異種に罹患し、肉体自体に直接作用するため、生涯一度しかVATの効果を受けることは出来ない。フォーアイズは出来に満足している様子だが、そこまですべて得られる力がクリムゾン・ヘッドと同等の身体能力というのは余りにも心許ないのだ。

人間は脆い。人間の愛と悪意から生まれた怪物であり、生まれながらタイラントを超える肉体を持つ私はその事をよく知っている。故に多少身体機能が向上したところでそれは付け焼き刃であり、B.

O・W・を相手にするなら最低でもハンターを腕力のみで捻じ伏せれる程度の性能を出せねば話にもならない。

ついでに言えば当然ながら”一時的”という制約を守っていないため、これは商品にはならない。とは言え、ラクーンシテイの脱出の際には使う事があるかも知れないため、幾らか持つておく事にしよう。病院などの施設で高齢者や怪我人や病人などの動けない人間を無理矢理動けるようにする最終手段として使えるだろう。

まあ、そのような博打をしないで済むように様々な運搬及び脱出方法の構想をしているため、それらが全て使えなくなるような緊急事態にならないければ使うことはない。保険のそのまた保険と言ったところだ。

さて、ラクーン大学でやれることも粗方やり尽くしてしまったかもしれない。やはりもっと安定して被検体を購入し、B・O・W・の実験場と専用の研究施設が欲しいところだ。まさかアークレイが恋しくなる日が来るとはな。

P・S・

このイス、スゴいぐるぐる回るな
今、気づいた



「ジャクリン……。また、得体の知れないモノを作って……」

現在、黄道特急事件と洋館事件を生き延びた女——レベッカ・チェンバースは見覚えのある日記を読み進めている途中でそんな言葉を呟く。

そして、向かいのソファ―に面白くなさ気に座り、頬杖を突きながら明後日の方向を見ている女——ジャクリン・マークスは口を尖らせた。

「お前は私の保護者が何かか？」

現在、ジャクリンはラクーンシティ警察署の応接間におり、ジャクリンとレベッカが向かい合うソファ―にて話し合っており、レベッカ側はレベッカ・チェンバースとエンリコ・マリーニの二人、ジャクリン側にはジャクリンのみが居る。

こうなっている理由はジャクリンが自身とタイラントによってコンテナに詰まった大量の武器、弾薬、保存食などの物資を運びつつ、ロバート・ケンドとその家族を始めとした数十名の避難者を引き連れて警察署にやって来た為であった。

状況が状況だったため、無下にするわけにも行かずにその場は穏便に受け入れ、事情をよく知るS・T・A・R・S。らが慎重に事情聴取と言う名の尋問をしているところなのだ。

「このVATというものはラクーン大学にあるんですか？」

「ほとんどスペンサー記念病院に置いて来た。フォーアイズと一緒にな」

「なっ……。なんでそんな酷いことしたんですか!？」

「緊急事態だ。今使わずしていつ使う？」

「そもそも開発も使用もしないでください！ フォーアイズさんも……。一番ひとりにしちやいけないタイプの方じゃないですか!」

「綺麗事で地獄から人が救えるか。私はどんな手段を用いても一人でも多くラクーンシティから証言可能な状態の人間を脱出させるぞ？」

後者についてはノーコメントだ」

「エンリコ隊長！ これ以上間違わせない為にもこの人に協力しま

しよう！」

「いや、だがな……」

(レベッカ、ジャクリーンの側に寄り過ぎてはいないか……?)

完全に中立の視点を失っているレベッカに、隊員の減少によって S・T・A・R・S の隊長となり、現在臨時で警官らを纏めている エンリコは慎重な姿勢のために難色を示す。

既に警察署は警察というよりも陸の孤島かつアンブレラに対する自警団と化しており、ラクーンシティからの脱出までの身の振り方を考えねばならない事は明白なため、組織として一挙一動に注意を払わねば民間人ごと壊滅しかねないのだ。

そして、目の前の存在は容易にそれが出来るだけの不明な力を持つ。それだけでも細心の注意を払う理由は十分だろう。

また、S・T・A・R・S らの印象としては、洋館に大量のプレイグクローラーを放ち、体感としてはタイラントよりも苦戦したダンプリングタイガーを造ったイカれた科学者という認識なことも理由にある。

とは言え、エンリコとしてはジャクリーンに対してかなり好意的な印象を抱いていた。

と言うのも S・T・A・R・S で唯一直接交戦したレベッカとは違い、彼からすると同様の姿でアンブレラ幹部養成所にてマーカス博士の娘のジャクリーン・マーカスとして出会っており、アンブレラの実態を赤裸々に語り、ハンターなどの注意すべき B・O・W について教わり、武器と弾薬、トドメに手土産とばかりに様々な証拠資料まで手渡してくれたため、至れり尽くせりと言ったところである。

そのため、エンリコとしてはこの最悪の感染災害を引き起こした首謀者や元凶でない裏付けさえ取れば、信用に値すると考えていた。

「この私が……！ 首謀者か……！」

今回の事件について聞き取りをしていたところ、暗に首謀者だと疑われている事に気が付いたジャクリーンは珍しく声を荒らげている。それどころか怒りの余り握り締めた片腕の擬態が解け掛かっており、指が開き掛けの花の蕾のようになった事にエンリコは目を見開いて

よ。ちなみに陸生プラナリアの一分類群であるコウガイビル類の遺伝子が、この私に組み込まれていたという事を先日ラクーン大学で発見した時は大層驚いたな」

「全然ヒルじやないじやないですか」

「まあ、父も色々試していたのだろう。その私からTーウィルスが生まれるとは皮肉と言えるかも知れん」

「そもそもTーウィルスというものは何なんですか？ 流石にあなたの日記からではわかりませんし」

「聞きたいか？ まあ、凡百の頭では理解すら出来ぬだろうが、掻い摘んで教えてやっても構わんぞ」

「なら……是非お願いします」

「いいだろう。礼儀のある人間は好きだよ」

すると何故かジャクリーンによるTーウィルスが何かという講習会が始まる。

とんでもなく話が脱線しているが、アンブレラ創設者のひとりであり、Tーウィルス開発者の化身からの直接の話ということもあり、エンリコは会話の流れを止めずにレベツカと話を聞くことにした。

(……………何がなんだかさっぱり分からん)

十数分後――。

案の定、元兵士であり畑違いのエンリコには意味の分からない言葉の羅列としか捉えられず、これで掻い摘んで話しているという事が嘘としか思えない。

「なるほど……」

しかし、それとは真逆にレベツカはジャクリーンの講義を熱心にメモ帳へと書き写しながら聞いていた。

ちなみにレベツカが主にジャクリーンから事情聴取をしている理由は、単純に唯一顔を合わせて交戦したからという訳だけではなく、そもそも18歳で大学の学士課程を優秀な成績で卒業した才女であり、化学関係の知識がズバ抜けて豊富で、薬品の精製・調合のエキス

パートとしてS・T・A・R・Sに招集されている。

「……………ふむ。君、中々に我々の側として天賦の才があるね。流石に完成していたブランドンや、私の知るウィリアム程ではないが、少なくともアルバートよりは才能あるよ」

「比べられても全然嬉しくない……………」

「とても褒めているつもりさ。良ければ私の研究助手にならないかね？ フォーアイズも大いに喜ぶだろう」

「絶対にイヤー！」

「これは手厳しい」

そのため、異常なレベルの頭脳を持ち主であるジャクリンとも対等に話が出来るのではないかという思惑があり、実際それは成功していた。

明らかにこれまでよりもジャクリンの機嫌が良くなっている事が、ブラックジョークを交え始めた事からもわかる。

「いやはや、しかし、君は凄まじいね。私の片割れが起こした黄道特急事件と、私が起こしたアークレイ研究所襲撃いや洋館事件と言った方が分かりやすいか。それらを生き延びた上で、今や生地獄のラクーンシティにおり、私の目の前にこうして居るとは因果なものだ……………。相当サディストな神に祝福されていると見える」

「あなたにあんなこと言われなければラクーンシティに留まっていま
せんでしたよ」

「ククク……………違いない。なら君には知る権利があるろう。信賞必罰、特に相応の成果を出した者には相応の栄光が与えられて然るべきだと私は考えていてね。これは私の愚かな片割れを手厚く終わらせてくれた事への褒賞と純粋な称賛だ。では……………一度しか言わんぞ？」

すると気を良くしたのか、ジャクリンはエンリコにとっては最早謎の単語の羅列と化した言葉を吐き始める。

「えっ……………ッ——！」

遂に説明を放棄したとしか思えない様子にエンリコは固まるが、レベツカはそれとは対象的に酷く驚いた様子で一瞬固まった。

しかし、次の瞬間には動き出し、一心不乱にジャクリンが話す言

葉の羅列をメモ帳に書き記しており、それがそれほどまで重要なのかとエンリコは目を見開く。

2〜3分も掛からずにそれは終わり、書き写したメモ帳を眺めながら僅かに震えているレベツカが酷く印象に残るだろう。

「それはいつたい……………」

「Tーウイルスのワクチン兼特效薬の塩基配列や成分表や製造方法など…………。つまり、ジャクリーンの記事内で”デイライト”と呼ばれているモノの作り方です…………」

「は……………」

「これで私は商売道具をひとつ失ったが、君は晴れてラクーンシティの英雄のひとりだ。デイライトの開発者を名乗るといい。必ず生きて記憶を持ち帰りたまえ」

それは裏付けどころの話ではなかった。この騒動の根源そのものに最も密接に関わり、考えてすら居なかった決定打であった。

同時に興味を持ち、好意を向けた対象に著しく甘くなるジエームス・マーカス博士の性格が滲み出ているとも言えよう。

「それを今作れるのか!？」

「む、ムリです…………。これを作るには少なくともラクーン大学やペンサー記念病院並みの施設が必要——」

「ぱんぱかぱーん」

すると調子外れな声と共にジャクリーンの掌から生えるように小さなバイアル瓶がひとつ現れ、それが机に置かれる。

みればその瓶には”デイライト”と書かれた吹き出し枠のラベルが貼られ、それがデフォルメされたヒルのキャラクターのようなもののシールが言っているように繋がっている。加えて瓶の蓋の上部には”デカデカと”JM”と見覚えのあるイニシャルが刻印されていた。

更にその隣に同じ大きさのバイアル瓶が置かれ、更に隣や上にバイアル瓶が置かれると言った様子が暫く繰り返される。

そして、バイアル瓶が5段の積み木のピラミッドのように置かれ、15本のバイアル瓶が三角形に置かれたところで更にジャクリーンは、数本の金属製のインジェクターと、消毒液と書かれた瓶を隣に並

べた。

「二瓶で30人分。これだけで450人分のデイトライトがここにあるという訳だ」

エンリコは明らかに駆け引き前提の用意の良さに顔を引きつらせ、レベツカはT―ウイルスの特効薬というオーパーツ染みた物体が想像絶するサイズまで縮小化されているという事実にも固まる。

「正直、デイトライトの方はまだまだ幾らでもあるんだが、使い捨て注射器が全く用意出来なかったから使い回せ。どうせT―ウイルスより危険なウイルスや菌なぞラクーンシテイには居はしないから問題なかろう？」

「待て、使う体で話を進め——」

「エンリコ隊長……。これ、全部本物だったなら……！」

「くっ……！」

”使わない手はない”つまりはそういう事である。無辜の命と倫理観やプライドに近い高潔な善性を天秤に掛けられたのならば、拒否をする選択肢はない。

「ラクーンシテイ場において敵の敵は味方。それでいいだろう。我々はホームグラウンドが違う以上、水に流せとまでは言わないが……少なくともアンブレラに叛逆しながら生きてラクーンシテイから一人でも多くの人間を生還させるといふ目的は同じ筈だ」

計画は預かり知らぬところで勝手に起動した上、被害者と化したジャクリーンではあったが、既に生存者を抱き込む算段を整え、順調にそれは役目を果たしていると言える。

「精々、こちらを上手く使ってくれ。我々もそのようにする。無論、外に出た瞬間にドンパチ殺り合うような無礼も無しだ。これについて異論はないな？」

「………わかった。最大限協力しよう」

「ああ、よしなに頼むよ。では特別ゲストを招待しよう。話は着いたぞ、先に入って来い」

その言葉と共にジャクリーン側の扉が開き、扉を屈んで潜り、トレンチコート姿のタイラント——T―001が部屋に入ってきて来る。

「これがアンブレラの最新型のタイラントか……」

「本当に人みたいですね……」

「……………まあ、そんなところだ。コイツはチェンバース君が知っているように言葉が通じる上、筆談も出来る」

《孤児院に居たところを捕まえました。キャサリン・ウォレンという方も保護したので、エントランスホールの方に通しました》

「キャサリン・ウォレン……？ ああ、市長のマイケル・ウォレンの娘か。何故それがアレと一緒に——ああ、なるほど……全くいい趣味だな」

T-001はメモ帳をジャクリンへ見せつつ対話しているテーブルの隣まで来ると、肩に担いでいる麻袋をそっとテーブルに置く。

明らかに人の形に膨らんでいる麻袋は中身が元気に藻掻いている様子が見て取れるだろう。

「新種のゾンビか何かか……？」

「まあ、似たようなものだ。より質が悪いというか、業が深い点を除けばな。では我らがラクーンシティのヒーローのご登場だ」

軽口を叩きながらジャクリンが麻袋を開けて頭だけ出すと、そこにはラクーンシティ警察署の署長であるブライアン・アイアンズの姿があった。

「離せ!? 離せえ! タイラントがツ……高々、生物兵器の分際で!

使えん豚共があツ!」

「何処にも居ないと思ったらそんなところに居たのか……!」

ブライアンはバイオハザードが発生後、直ぐに署内を攪乱し、銃や弾薬を散り散りにして雲隠れしていたのだが、どうやらジャクリン側が発見していたらしい。

エンリコが警察らを纏める事になった元凶であり、彼としても鉛玉を撃ち込みたい衝動に駆られたが、目の前で笑みを浮かべているジャクリンが先にブライアンの頭を掴む。

「やあ、ブライアン・アイアンズ警察署長殿。ご機嫌麗しゅう存じます」

「誰だお前はツ!」

「ところで、あなたにピツタリの物がある。鏡と言う物なんだがね？
古くは、紀元前7500年前と言われているチャタル・ヒユユク遺跡からも黒曜石を磨いた石板の鏡が出土しているらしい。そんなにも前から人間は自らを顧みる事が出来たというのは素晴らしい事だとは思わないかな？」

「手を離せ！ この私を誰だと——グがああ！」

「な、何をしてるんですかッ！」
すると彼を掴んでいたジャクリーンの顔よりの指にブライアンは噛み付く。直ぐにレベルツカが引き剥がそうとするがまるで剥がせる様子はない。

仮にただの人間ならば噛み千切れる程の力を加えていることは彼の表情から明白であり、笑みを浮かべていたジャクリーンの表情が即座に曇る。

「今すぐに離してください！ あなたのためですよ!？」

「!!!」

「なんなのだこれは……。こんなものを君たちは上司にしていたのかね？」

「……していたではなく、従わざるを得なかったんだ。そこは間違えないでくれ」

「……………話にもならんな」

「ぐぷっ!？」

ジャクリーンは噛まれている指を伸ばしてブライアンの喉の奥まで侵入し、嘔吐反射を無理矢理引き出す事で手を引き戻す。

「うわあ…………」

その際、噛まれて喉元に押し込んだ指の部分を非常に嫌そうに眺める様が妙に印象的だった。

「何か口に詰めるものないか？ 人間が噛まれたら大変だ。私のヒルを詰めるのはちよつと生理的に受け付けない」

「タオルとダクトテープならありますよ？」

「でかした。よしっ…………おらっ、噛め。暴れるな、暴れるな」

「——!——!——!」

「よし」

「いいですね」

(……いや、何も言うまい)

何故かジャクリーンの助手のようになってるレベツカにエンリコは一抹の不安を覚えるが、その事はラクーンシティ脱出まで胸に仕舞っておく事にしたのだった。

「さて……。少々のアクセシデントはあったが、改めて紹介しようか」
すると何故かジャクリーンはソファアに座り直して居住まいを直す。

今更ブライアンをS・T・A・R・S・に紹介する意味があるのかとエンリコとレベツカが首を傾げていると、T-001が入って来た扉から更にひとり人物が現れ——それを認識すること同時にエンリコはホルスターからハンドガンを抜き放つ。

それにジャクリーンも反応し、彼女の片腕が花が咲くように開くと”限定仕様明らかに改造されたモーゼルC96”の銃口と銃身が姿を表し、エンリコを牽制する。

「先程の盟約を反故にするな。私とて君らを撃ちたくはない」

「どうして……?」

「なぜコイツがココに!?!」

「私としても彼が居るのは予想外だったのだがね。まあ、君らも知つての通りだとは思うが——」

その人物は銃を突きつけられていようと特に気にした様子はなく、ゆっくりとした足取りでジャクリーンの背後に控えるように立つ。

「ジエームス・私マーカスの弟子のひとりの”アルバート・ウエスカー”だ」

黒衣を身に纏い、サングラスを掛けている元S・T・A・R・S・隊長にして裏切り者のその男——アルバート・ウエスカーは口元を歪ませて不敵に笑った。

片割れの教え子

『やあ、アルバート。随分、久しいな』

洋館で対峙した者——ジャクリーン・マーカスを名乗るB・O・W・についてアルバート・ウエスカーは思考していた。

そもそもジャクリーンはアンブレラの要点だったアークレイ研究所を襲撃して容易く制圧して接收、少なくともタイラントと互角の性能の昆虫型B・O・W・と兵士レベルのタイラントを開発し、独自でタイラントのプログラミング及びコンピュータのハッキングをやつて退ける。それら全てを3ヶ月足らずで行っているような真正の怪物である。^{モンスター}

ウエスカーは元々は研究畑の人間であったが、ウイリアム・バーキンの才能の前に研究者としての道を諦めており、ジェームス・マーカスはそのウイリアムが嫉妬した程の別次元の才能を持ち、それは天才が万人から天才と呼ばれる所以であろう。

(あれは間違いなく……ジェームス・マーカス……。いや、それ以上の何かだ)

そして、アンブレラ創設者のひとりの化身にして、ジェームス・マーカスの思考を持ちながらジャクリーン・マーカスという個人でもあるB・O・W・にそれは確かに引き継がれていることを彼は確信していた。

これがウイリアムならばそのようなものを認めはしなかっただろう。しかし、一度挫折を知っている彼だからこそ理解し、確信する。

肉体と精神はマーカス博士を遥かに凌駕し、彼の頭脳を持つ本物の怪物の存在を。

(面白い……！)

ならば本人がウエスカー自身に愛憎を向けている事を告白したようにその最大の弱点は、人間不信な割に信頼した対象には偏愛を向けるジェームス・マーカスという人間の性格そのものであろう。

実際、研究者としては世界最高峰だった残りのアンブレラ創設者のエドワード・アシユフオードとオズウエル・E・スペンサーよりも更に上の次元の頭脳をしていたマーカス博士へそれが致命的な付け入る隙となり、暗殺されたのだ。

しかし、今度はタイラントを凌ぐほどの肉体と、マーカス博士と似て非なる怪物の精神が伴っている。単に殺すと考えた場合、アンブレラを倒すに匹敵するかそれ以上に厄介な手合である事は間違いないだろう。

更にラクーンシティに行くと言うことは、十中八九ウエスカーをそうしたようにウイリアム・バーキンを事実として殺すと言うこと。ウエスカーとしてはウイリアムをアンブレラを離叛した自身が所属しているアンブレラのライバル組織“H・C・F.”に取り込みたい思惑もあるため、特大の障害でもある。

(許さんぞ無能どもめ……！)

H・C・F.のメンバーとなったウエスカーであったが、ジャクリーンのアンブレラへの間接的な嫌がらせの数々かつ、アンブレラ幹部のセルゲイ・ウラジミールの根回しから制御コンピュータ”レツド・クイーン”に妨害され、洋館事件の際にタイラントを始めとする十分なサンプルを持ち帰れなかった。

そのため、H・C・F.の人間からは無能という彼にとって不名誉極まりないレッテルを貼られる羽目になってしまっており、汚名を雪いで権力を得るためにもウイリアムのG-ウイルスを彼は狙っていたのだ。

ウイリアムの状況が芳しくなく、またラクーンシティで猟奇事件が発生した時点で人員を送る予定であったのだが、彼はある言葉を思い出す。

『まあ、何れにしても今日のところはここまでか。次の機会があれば、ただのお茶の誘いでも、私が設計したB・O・W.の商談でも、また昔のように私を暗殺して来てもそれ相応に歓迎するよ。私は暫くラクーンシティに滞在する予定のため、用があれば見つけてくれたま

え』

洋館を脱出する際にジャクリン・マークスから言われた言葉をウエスカーは極めて重要視していた。無論、特に”B・O・W”の商談”という単語である。

つまりジャクリンは今後、彼女が開発したB・O・W”を国、組織、個人に売る予定があるということに他ならず、他に全く彼女についての情報は出ていないため、それを知るのは現状において彼女の一派と彼のみだというところまで予測していた。

彼女がB・O・W”を世界に売り始めれば瞬くに世界最高最悪の死の商人へと昇華するのは時間の問題と言え、ウエスカーには2つの選択肢があつた。

ひとつは当初の目的の通りG―ウイルスを入手し、可能ならばウィリアムも確保すること。もうひとつはジャクリンとの繋がりを強固にし、B・O・W”の商談を成立させること。特に後者はB・O・W”によるバイオテロや戦争が起こるであろう未来を見据えた場合の先行投資としては極めて有用であろう。

とは言え、ウィリアムとジャクリンを直接引き合わせると彼女がウィリアムを殺すため、同時に両方を取ることは出来ない。

(ならマークスにG―ウイルスを取らせればいい……)

そして、それらを天秤に掛けたウエスカーはそのような結論を出した。

自身がジャクリンの元に出向き、ラクーンシティ最大の地下研究施設であり、ウィリアムとG―ウイルスのある”NEST”へと誘導。ウィリアムをウエスカーが押さえて脱出し、G―ウイルスはジャクリンに取らせる。

単純にH・C・F”での権力を強めるために欲しいため、ウィリアムさえ確保出来ればG―ウイルスは半分不要。ジャクリンがG―ウイルスを入手して脱出すれば、ジェームス・マークスの性格から考

えてそれを彼が入手する算段は幾らでもあった。

幸いにもラクーンシティにいるジャクリーンを見つけるのはそう難しくはない。と言うのもマーカス博士が満足するであろう程の研究施設がラクーンシティには、点在するアンブレラ地下研究所か、スペンサー記念病院か、ラクーン大学しか存在しないためだ。

彼女が常軌を逸した擬態能力を持つ事を加味してもアンブレラ地下研究所はアークレイの時とは違い、潜伏には全く向いていないため、選択肢はスペンサー記念病院か、ラクーン大学に絞られるが、それらの人員を調べたところ、元アンブレラ研究員崩れのグレッグ・ミューラーという男の動きが丁度洋館事件の直後から明らかに奇妙な事に目を付ける。

元々、元アンブレラ研究員らしく明らかに研究用の何かしらを搬入していたのだが、その量や種類がB・O・Wの製造に必要なモノを中心に更に増えた上、何故か大学内でのグレッグという男の評価が急激に変わったらしい。

具体的に言えば、元々は生徒のほとんどを見下し、講義も着いて来れるものだけに教えているというより見せびらかしているような様だったのだが、講義の質が向上して非常にわかりやすくなったり、生徒の相談にも当然のように乗って事細かにアドバイスしたり、日常的に講義室を締め切って日傘を常備するようになったり、進路にアンブレラ関連の企業や研究所を選ぶ事に対して敵意を向けるレベルで叱咤したりである。

後、規律にやたらうるさくなった。

最早、かつてマーカス博士の片腕だったウエスカーからすればわざとやっているのではないかと考えるレベルであるが、またとない好機である事も明白。

ならば彼が彼女に直接接触を図る事に二の足を踏む事はないだろう。

まあ、かつてマーカス側のNo. 2と3だった彼がマーカス博士を殺してスペンサー側に着いてからの十年間は、到底満足出来るものではなく、アンブレラを倒す理由のひとつにもなっている。

そのため、基本的に悪辣な性分かつ色々な感情な成り行きはありつつも自身を極めて優遇していたジェームス・マーカスという人間に対し、彼は珍しくそこまでの嫌悪感等は抱いてはいなかったという理由もある。

それから彼はどのタイミングでラクーンシティに入ろうかと考えていたところ、ラクーンシティでバイオハザードが発生したという事実を知り、慌ててラクーン入りして今に至るのだ。

ラクーン大学に行けば留守番のリサ・トレヴァーやT-001に出迎えられ、Dr. ローガンからハンターγのデータや卵を貰い、バイオハザードの原因がウィリアムがU. S. S. に襲撃されたためと言う事を知り、事実上のウィリアムの死を知る等の事があったが、それはまた別の機会に語ることになるかも知れない。

ジャクリーンには商談を盾に接触する事でリスクを削ぎ、ジャクリーンとしても一人でも多く戦力が欲しかったところのため、若干驚きと懸念の表情を浮かべつつも受け入れた事で、今のところ彼にとって有利な展開に進んでいた。

そして、ラクーン大学に帰って来るなり、直ぐに警察署を籠城拠点と定め、一夜と一日間が経過した肝心のジャクリーンはと言えば――

「なに？ 子供が熱……？ その子は既にデイルイトを接種した筈………うん、ただの風邪だねコレ。暖かくして寝せておきなさい」

「インスリンを置いて来た……？ 馬鹿が、命の次には大事だろうが。今体内で精製――手持ちのモノで代替品を用意してやるから少し待て」

「吐き気がするほど頭痛がする……？ 私は内科医でも精神科医でもないのだぞ……。アセトアミノフェンを注射してやるからこっちに来い」

「ジャクリーン！」

「ジャクリーンあそぼー！」

「ジャクリーンあそんでー！」

「私はマーカス博士だ。遊ばない」

「ジャクリーンすなおじやない！」

「ジャクリーンのケチ！」

「ジャクリーンひどーい！」

「マーカス博士だ。引き続きリサお姉さんに遊んでもらいなさい、チビっ子ども」

「ジャクリーンのぬめぬめー！」

「しみったれー！」

「ぬるぬるー！」

「塩かけるぞジャクリーン！」

『シダトクソガキドモ……！ マーカス博士……！』

「ジャクリーンおこったー！」

「にげろー！」

「きゃー！」

日中は署内の避難者のケアを行い、夜間は周辺のゾンビを潰して回りつつ生存者の救出活動を行っており、ラクーンシティ警察署内の避難者や警察から割りと慕われていた。

尚、最後の子供たちの中にはリサ・トレヴァー本人が混じっている。

(ジェームス・マーカスとは違い過ぎているな……)

基本的に人嫌いながら組織を統率していたマーカス博士と同じだが、ジャクリーンの方は明らかに社会的であり、口は良くはないが共感性は高く、凡そ人間らしいと言える倫理観を持っているように思えた。

「ジャクリーン！ 怪我人の止血帯が足りなくて……！」

「……今、体内で血液凝固剤を作ってるからそれを傷口に塗って上から何か貼り付けておけ」

「えっ、ヒルジンとは真逆のものまで精製出来るんですか!？」

「レベッカ君……。出来ないと思うなら何故私に聞いたのだね？」

ジャクリーンとウエスカートを監視するという名目でジャクリーンに着いている期待のニューフェイスことレベッカ・チェンバースは、直ぐに急増する避難者の対応に掛り切りになり、最早ただの助手と化している。

また、時々場を離れているためほとんど監視になっではおらず、ウエスカールが野放しにされている理由も彼が生存者を殺すか有事以外で見捨てた場合、責任をもって始末する等と約束したためであった。

「全く……分泌液が枯れる。最新式の警察無線などというクソほど修理し難いモノを……。というか手榴弾でも投げ込んだだろうコレ……オシヤカなんてレベルじゃないぞ……」

「マークス博士、なんとかかなりそうか？」

「アンブレラの天才が何故天才と呼ばれると思う？ 研究が出来るからではなく、研究”も”出来るからなのだよ。それが幹部になれる最低条件でもある。夜までにはラクションシティ内なら届くように復旧してみせるさ」

そして、ジャクリーンは現在、ブライアン・アイアンズが真っ先に破壊した警察無線を修理しており、その修理をS. T. A. R. S. 隊員で洋館事件ではヘリコプターを操縦しており、通信機器の扱いに長けるブラッド・ヴィツカースが手伝い、ウエスカールは近くで壁を背にしてそれを眺めていた。

壊滅的な状態の警察無線を確認してから夜のうちに街中の電気屋や機器から部品を引っ抜き、それで修理しているらしい。背中から伸ばされた大量の触手の先にそれぞれ工具を握っており、人間には到底不可能な速度で修理している様は余りにシニールであろう。

「……………」

仮にジャクリーン・マークスという個人がただの悪党ならばこうはなっていないであろう。そして、それは少なくともウエスカールがよく知るような薄汚い人間のそれではない。

そもそもウエスカールならば邪魔になるため、生存者は殺す事を選ん

だであろうが、彼女はよりリスクも難易度も高く確実性もない方を取った。それほどまでに人間の力を信じているという辺りで既にマーカス博士とは異なるだろう。

暫くすると修理部品が足りなくなったらしく、ジャクリオンはブラッドに声を掛けて一旦離席したため、ウエスカーもその後には続き、そのタイミングで思い出したかのように戻って来たレベッカも合流する。

そのため、ジャクリオンを先頭にそのやや後ろをウエスカーとレベッカが歩いているという珍妙な光景になっていた。

『キユー』

「あれ？ 何をしてるんですか？」

署内にあるアークレイの洋館並みに意味の分からないギミックや機械類から使わないであろう電子基盤や部品を集めていると、ジャクリオンのヒルが身体の細い部分を伸縮させて器用にそこそこの速度で移動している姿が目に入る。

その背中にはハンドガン弾が入った赤いパッケージの弾薬箱がちよこんと乗っており、またもや極めてシユールな光景であった。

「私のヒルでアイアンズ署長が署内中に散らした弾薬を回収しているところだよ。よくもまあ短期間でこれだけ署内を掻き乱せたものだ……」

「ククク……。薄汚い肥えた鼠らしい小賢しさだな」

そんな会話をしているとハンドガンの弾を運んでいたヒルがひよいと持ち上げられる。

「ぐにぐにだー！」

『キユー？ キユー………』

ヒルは避難者の子供に抱えられており、笑顔でいっぱいな様子の子供はヒルの上下を掴むと勢い良くひっぱり始めた。

ヒルはさながらグミとゴムを合わせたような様子で軽く3倍近くまでとても良く伸び、それは子供を喜ばせる。

「何だこれすげー！」

「私も触るー！」

『キュー……』

「ごらっ、イジメちゃ駄目ですよ！」

「まあ、別に子供の力でどうこう出来る強度はしていない。愉快的気分ではないがな」

子供に囲まれ始め、乗られて平たく押し潰れたところで、レベツカにヒルは回収され、一旦彼女のポーチの中に収まった。

「全くもう……」

『キュー』

「……いや、レベツカ君がいいのなら別にいいのだが……」

何事もなかったかのようにヒルを自身のポーチに収めたレベツカに若干引いた様子のジャクリーンであるが、そんな彼女を尻目にレベツカは近くの棚の上にいた別のヒルに目を向ける。

「あっちの子は？」

『Z z z……』

そこには少し身体を伸ばしたままとぐろを巻いて眠っている様子のジャクリーンのヒルの姿があった。

静かに身体が上下している様子からどうやら眠っているのであろう。

「やはり交代で睡眠を取ったりしているのですね。凄い規律の——」

「いや、あれは単にサボっているんだ。レベツカ君も知つての通り、私のヒルは無数にいるのだからたまにそういう個体も出て来るだろう」

「ええ……」

「……ふむ」

ジャクリーンも一枚岩ではないらしい。益々、意味の分からない生き物である。

「めっ、規律を取るのだ」

『キュー……』

ジャクリーンが“めっ”をするとサボっていたヒルは起きて渋々といった様子で鳴き、そのまま署内の探索に戻って行く。

「こういう奴は戦闘時などで無ければ言っただけなら聞かんな。全く……」

「……ジャクリーンもキューって言うんですか？」

「言うわけが無いだろう。馬鹿にしているのか？」

”馬鹿にしているのはお前の生物としての生態だろう”と、奇しくもウエスカーとレベツカは同じ事を考えていた。

「じゃあ、あなたにとつてヒルはどういうものなんですか……？」

「うん……？ うん、そうだな……。あまり深く考えた事はなかったが、感覚はわかるが離れた自分の一部で、結合すれば感覚は統合され、別に壊されたからと言って痛くもない。多少減ったところで痛くも痒くもないがな。まあ、減った事は直ぐにわかるのたが……」

ジャクリーン自身も自分自身の身体についてあまり深く感覚的には捉えては居ないようで、彼女にしては珍しく首を傾げる。

「うーん………強いて言えばだな……」

真面目に自身の身体及びヒルと似たような関係にある何かが他に存在しないかジャクリーンは考える。

するとラクーン大学では夜間以外は研究室に缶詰めなりサが構って欲しくて絡んで来るため、彼女の気を紛らわす為に映画やらアニメやらのビデオを何十本も借り、研究の傍ら横目で自身も見ていた事を思い出す。

そして、疑問符を浮かべたような様子のままその記憶の中で辛うじて似ているような何かを思い浮かべた。

「フアンネル……？」

「なんですかそれ……？」

『キュー』

”コイツの生体調査だけで論文が発表出来そうだな”等とウエスカーが考えていると、それに答えるようにレベツカのポーチにいるヒルが鳴いたのであった。

アンブレラのB・O・Wに対する防衛術

やあ、ラクーン市警の諸君。ラクーンシティ警察署での臨時講義にお集まり頂き結構結構。私がかつてアンブレラを創設した3人のひとり——ジエームス・マーカスだ。気軽にマーカス博士と呼ぶがいい。

元アンブレラかつ創設者ではあるが、約十年前にアンブレラとそこの馬鹿弟子などによって一度殺されていてね。少なくともアンブレラとは殺された報復を行って行っている程度に敵対しているから私自身は君らを裏切るような心配は無いさ。

さて、前置きはこれぐらいにしてまず君たちをここに集めた理由を述べよう。それはこのラクーンシティで何が起きたのか、そして活性死者もとい君たちがゾンビと呼ぶ存在とB・O・Wと呼ばれる怪物達の大まかな概要を伝えるためだね。

まずは前者から話して行こう。不確定情報が混ざるため、若干の推測を含んでいる事は先に理解してくれたまえ。

このラクーンシティで何が起きたのか、結論から言ってしまうえば大規模な生物兵器のウイルス漏れ、パンデミックかつバイオハザードだ。

そして、漏れたウイルスはT—ウイルスと呼ばれるものであり、こちらも極限まで詳細を省くとゾンビと生物兵器の怪物を作るウイルスであり、それを研究している研究施設がこのラクーンシティの地下に幾つも点在している。そのひとつから大規模なウイルス漏れが起り、ネズミ等の小動物を媒介にしてラクーンシティ中に広がったというのが今回の事件の全容だろう。

さて、本題だ。まず手始めにゾンビと君たちが呼び、ラクーンシティを徘徊しているあれらについて話すでしょう。とりあえず、この日記を流すので各自軽く目を通したまえ。

それは私が生まれた研究施設の近くで発見した日記で、人間がゾン

ゾンビになるまでを主観で書かれた面白い資料だ。私は”かゆうま日記”と呼んでいる。

かゆうま日記のようにT―ウィルスは感染した時点から自我を失いつつ段階的に人間をゾンビに変え、あるいはゾンビに深く噛まれるなどして一度に大量のT―ウィルスが体内に入ることによって短期間でゾンビを作り出すものだということだ。

学術上は活性死者だが、ゾンビになった人間は自我を失い”食べる”という最も単純な本能にのみ支配される。一度こうなってしまうば今のところ治療方法は存在しない。この私がないと言っているんだ。例え生前にどんなものが相手だとしても絶対に躊躇するんじゃないぞ？

ゾンビの動きは緩慢で逃げることは容易いが、痛覚反応がほぼなく、痛みというものを感じないため、通常ならば致命的な外傷を受けようとも関係なく襲い掛かって来る。また、食糧を目の前にすれば多少機敏に動く程度のこととして来る。

そのため、手足を撃つ程度の生半可な攻撃ではゾンビを止めることは出来ない。それどころか一度組み伏せられてしまえば、向こうは肉体の枷がないのでそのまま頂かれてしまうだろう。

運が良ければ喰い付かれている最中にゾンビに変わって死ぬるが、諸君らにはT―ウィルス抗体であるデイルイトを既に打っているの、身体中を喰われて大量出血で死ぬまで自我を保ったままになる。それが嫌ならば先程言ったように躊躇せずにやる事だね。

さて、では本講義の”アンブレラのB・O・W. に対する防衛術”として、ゾンビへの対策を説明しよう。まあ、厳密には活性死者はB・O・W. ではないのだが、そのところは置いておくべきだな。

ゾンビはまず前提として極めて近くまで近寄らなければ動きが遅い。そして、自我はないとはいえ、当たり前だが生物ではあるため、頭部もとい脳が弱点だ。そのため、遠距離から頭部を的確に銃撃する事が最も効果的と言えるだろう。それから常に声を出しているので音を聴くことも重要だな。

銃がなくどうしても近接で対応しなければならぬ時は下顎を潰

せ。そうすれば少なくとも噛み殺される事は無くなるだろう。組み付かれた時に自身から引き剥がすだけならば首をナイフ等で突き刺して脱出するのが効果的だ。首は神経や気道があるため、強い衝撃と共に攻撃すれば流石にゾンビと言えども幾らか怯みはする。

ゾンビの面倒さは他にもあり、まるで死んだふりをしているように地べたで伸びたまま動かなくなっている事もある。近付けば再び動き出すため、足の方から近付いて蹴って生死を確認するか、頭に鉛玉をプレゼントしてやるのがいいだろう。

理解出来たかね？ くだらんミスや無知で命を散らしたくなければ頭に叩き込むがいい。

では本題のB・O・Wの説明とその対策に入るとしよう。B・

O・W正式には有機^{Bio}生命体兵器^{Organic Weapon}。簡単に言えばTーウイルスなどをを用いて人工的に作られた怪物の事だ。

この私も半分はB・O・Wと言えるだろう。もう半分は父であるジェームス・マーカスの偏愛と怨念と言ったところか。まあ、私レベルのB・O・Wはアンブレラに存在しないため、その辺りは安心してくれたまえ。

代表的な注意すべきB・O・Wとしては――。

- ・ケルベロス
- ・リツカー
- ・ハンター
- ・タイラント

――その4体だな。まあ、ケルベロスは私とは違う意味で半分B・O・Wであり、リツカーは今のところはイレギュラーミュータントなのだが、将来的にはB・O・Wとして使われると思われるため、こちらで説明しておこう。

ケルベロス――。

ギリシャ神話の地獄の番犬の名を語っては入るが、実際には軍用犬のドーベルマンの犬種にTーウイルスを注入して感染させただけというとてもシンプルなB・O・Wだ。

また、これに関してはドーベルマンだけでなく単純にあらゆる犬が

T―ウイルスに感染しただけでどんな個体も言わばゾンビ犬となるため、避難者が連れて来た犬にもデイライトを打っているのはそういう意味があるのだよ。室内で元気に走り回って避難者をドッグフード代わりにでもされたら堪らんからな。

ケルベロスあるいはゾンビ犬の最大の特徴は、ゾンビとは違い身体能力が全く落ちず、筋力や俊敏性が強化され、凶暴性を保ちながら群れで行動する本能が残っている事だ。まあ、その代わりに制御面に関してはゾンビと変わらんがな。

つまり恐れを知らない犬が集団で襲い掛かって来ると考えて問題ない。人間は単純な身体能力では大型犬どころか中型犬にも劣ると言われているため、その脅威度は計り知れないだろう。

まあ、とは言え結局のところゾンビな犬でしかないために荒い呼吸を常にしているので、前提としてゾンビ以上に音を聴く事が大事だろう。要するになんかハアハアしてる声が聴こえたら何処かしらに居ると思え。

対処方法としては単純に銃撃だな。基本的にケルベロスはゾンビ以上に肉体の劣化が激しいために身体の耐久が低い。また、危険回避をするような知能はないので見掛けたら頭部と言わず、全身に弾を浴びせれば直ぐに倒せる筈だ。

ハッキリ言って他に対処方法はない。閃光手榴弾を使うと一定時間ほぼ無力化出来る程度だな。大人しく弾を当てる。警官なのだからエイムを頑張れ。

リツカー――。

リツカーはゾンビが食糧を摂取し続け生き延びた結果、突然変異を起こして生まれたイレギュラーミュータントだ。イレギュラーミュータントとはウイルスの二次感染などといった外的要因で突然変異した個体のため、厳密には今のところB・O・Wではないが、その異様さは筆舌に尽くし難い。

辛うじてかつて人間であったことはわかるが、骨格が変形して四足歩行となり、ヤモリのように壁や天井に張りつき、全身が剥き出しの筋肉に覆われる発達が見られる。脳髓が露出して眼窩部までせり出

した事で押し潰れる形で視覚を失っているが、代償に聴覚が発達しており、極めて小さな音にも反応する。攻撃としては巨大な鉤爪で引き裂き、伸縮する舌を槍のように突き出して人体を貫通させる事さえ可能だ。

まあ、リツカーに関しては説明や私の描いた図よりも実際に目にした方がよくわかるが、人間が初見で対処するにはやや厳しいのでな。その奇異さだけでも伝わればいい。

何せ、ゾンビが良い栄養状態を維持し続けるという都市がTーウィルスで壊滅でもしていなければまずお目に掛かれない個体だ。そろそろ沸き始めても何も可笑しくはないだろう。アンブレラはさっさと壊滅した方がいいな。

リツカーの高い移動能力のため、署内の換気ダクトには私のヒルが敷き詰めてあり、窓という窓を塞いだのもそれが理由だ。避難者の区画に入られたら堪らん。今後同規模のバイオテロが起こるとすればリツカーの出現までが災害時の壁となりそうだ。

対処方法としてはほぼ聴力だけで反応するため、音を出さずにいればやり過ぎす事も可能だ。直接接触すれば流石に反応するがな。それを逆手に取って、忍び足で近付いて至近距離からショットガンでもお見舞いすれば楽に倒せるだろう。反面、脳髓が剥き出しの割にそこまで弱点でもなく、単純に火力で押し切った方がいいため、ハンドガンでは若干火力不足なので気を付ける。

……………脂質のない赤身肉で旨いんだよなあ、リツカー。

蛇足だが、イレギュラーミュータントではゾンビの肉を食べたカラスが二次感染を引き起こしてヒツチコツクの鳥のようになつたクロウや、Tーウィルスを血液を通して接触したノミが巨大化したドレインデイモスやらブレインサツカーがいるが、前者は屋外で集団で襲われなければ素手でもどうにかかなり、後者は巣に近付きさえしなければ特に問題はない。

まあ、ドレインデイモスに関しては組み付いて卵を口腔から体内に植え付けて来るので、万が一植え付けられたら卵下しのためにハーブを使用する事だな。この植物万能過ぎるだろ。柿の100万倍ぐら

い医者いらずだな。

そうだ。そのT-001がラクーン大学で栽培していたハーブを大量に用意しているので、各自好きに持って行くといい。そのまま、スプレー、タブレットの3タイプを用意しているからな。

なんだねレベツカくん？ 粉末タイプは無いのかだと？ お前、戦闘中に肺や気管支にでも入ってみろ。一卷の終わりだぞ？ 欲しければ自分で加工しなさい。

閑話休題。失敬、本題に戻ろう。

ハンター――。

人間をベースに他の生物の遺伝子を組み込み創り出されたB.O.W.であり、猿人類に爬虫類を混ぜたような外見をしている。敏捷性が高く、全身が鱗に覆われているためにそれなりの耐久があり、他の固体と連携して両手の鉤爪で獲物を狩る姿が狩人という名の由来にもなっている。うむ、よく描けた。大体こんな感じだ。

それだけでなく扉の開閉をし、簡単な命令ならば遂行可能な知能を持つため、B.O.W.としては既に完成していると言っても過言ではないであろう。そのため、改良モデルも既に試作されているな。

……ああ、改良モデルと言えば、この署内の地下の下水道区画にこのDr.ローガンがアンブレラから離れて勝手に研究開発しているハンターγというハンターの水棲モデルが20〜30体放たれているので、下水道にはあまり近付かないようにしたまえ。まあ、どのみちそんなところに用はなからうが、万が一相対した場合は”ローガン”と連呼するとその間は襲われなくなるので覚えておくといい。

むしろ、下水道から上がってくるゾンビ等を勝手に処理しているので、署内の安全性を上げることには貢献していると言えるな。ハンターγはラクーンシティの下水道を完全に把握しているため、これぐらいはお手の物だろう。

しかし、今回のアンブレラが起こした事件のせいで、開発が打ち切られたハンターγが有能だった事が確認出来たとは、皮肉としか言いようがないな。おつと話が脱線したな。

対処方法としては威力の高い銃火器で徹底的に戦う他ないな。ハ

ンターに関してはB・O・W・として余りに完成している。自信がなければ交戦経験のあるS・T・A・R・S・や我々に任せろ。命を捨てるぐらいならば時には逃げる事もまた勇気だ。

タイラント——。

先に言っておくが、これに関しては悪いことは言わん。必ず発見次第S・T・A・R・S・か我々に押し付けろ。決して戦おうとはするんじゃないぞ。

タイラントは暴君の名を冠するアンブレラ究極の生命体にして、最高の兵士をコンセプトに製造されたB・O・W・だ。これに比べればこれまでのB・O・W・やイレギュラーミュータントは全て玩具のようなものだよ。

既存の生物を遥かに超越した戦闘能力、異常極まりない生命力、心無い暴力性。それら全てを人型に詰め込んだ生物兵器であり、軍が相手にするようなレベルの代物だ。

今、アンブレラで正式採用されているのは量産型タイラントであるT-103と、ネメシスの2タイプと思っている。T-103は君らにハーブティーを配ったそのT-001とほぼ同じ外見だ。ネメシスは現像した写真があるのでそれを回すとしよう。

特にT-103は外見が人間に近いだけに脅威性が分かり難いと思うので、こちらに署内にあったブロンズ像を用意した。では、やってしまいなさい。

——はい、この通りT-001がブロンズ像の頭部を片手で掴んで力を加えただけで潰れ、殴れば容易く胴を粉碎する。更に……このようにハンドガンのような生半可な銃弾程度ならばその鋼のような筋繊維の前にマトモなダメージにすらならない。

これがタイラント、アンブレラ究極のB・O・W・の力さ。更に言えば中途半端に倒してしまうと、生命の危機への防御反応により肉体のリミッターが外れて暴走状態となり、ふた回りは性能が引き上がる。そうなる最早、手のつけようがないだろう。

まあ、そのタイラントが所内にはT-001、T-002、タナトスの3体がいる。何れも旧形のタイラントだが、彼らが警察署周辺の

掃討をしてきているため、その能力は君らも知るところだ。

もう一度言うが、タイラントに関してはず見次第討伐経験のあるS・T・A・R・S。か我々に対処させろ。下手に常人が挑もうとも悪戯に犠牲を生むだけだからね。

とまあ、今日の講義はこれぐらいか。これから間違いなくアンブレラは生存者の掃討に掛かって来る。ひとりでも多くの人命を生かすためにもB・O・W。やアンブレラの正規部隊との戦闘は避けられないだろう。諸君らの健闘を——ん？ 何かな？

ああ、確か君はケビン・ライマン君だったな。

31歳。射撃大会で好成績を残し、射撃の腕は署内No.1と言われている程度には有能。しかし、大雑把で楽天的な性格故に遅刻や欠勤が多いなど勤務態度に若干の問題があり、S・T・A・R・Sの試験にも2回落ちているとの事。

何か私に入り用かね？ 銃器ならば好きなものを持って行くと——んう？ 私が覚えていることが意外かね？

ここに来た時点で、避難者と諸君らの名前とプロフィールぐらいは覚えて把握しているよ。そちらの方が効率的だからね。

………ほう、ほう………なるほど。自身にもハンターやタイラントを相手取らせて欲しいと？ ふむ、まあ能力上は問題はないだろうし、私は問題ないのだが。

まあ、人間は10人に1人の割合でT-ウィルスの抗体を持ち、そうでなくともウィルスの効きやすさにも個人差があるため、間違いなくその辺りもS・T・A・R・Sの審査基準になっていただろう。なあ、アルバート？ 違うか？ フフフ………だろうなあ。

ならば今となつてはその基準値もデイトライトでクリアしているだろう。さて、では良いかエンリコ君？ 今更だが、いや今だからこそ必要でもあるだろう……ああ、それがいい。良い選択だ。

良からうライマン君。君は今日からS・T・A・R・Sだ。その腕を存分に振るうといい。

まあ、私は部外者だが、折角だから餞別をやろう。よいしょつと………ほら”SV-98”だ。最新のロシア連邦軍製、ボルトアクシヨ

ン方式の軍用狙撃銃だよ。それならハンターやタイラントをぶち抜くには十分だろう。精々、頑張りたまえ。

なんだね？ 鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をして？ なに、セルゲイからタナトスのクローンの報酬に貰ったモノのひとつだ。それは兎も角、私が使う分と、アルバートに渡したモノを含めて後、4丁あるから気にするな。

……さて、何も期待しているのはライマン君だけではない。

” 忠誠 ” は ” 服従 ” を生み

” 服従 ” は ” 規律 ” を生む

” 規律 ” は力となり

その力が全ての源となる

忠誠とは私に捧げるものではない。諸君らが個々で持つ警官としての矜持、無辜の人々を護るという覚悟、悪に屈しないという善性。それら全てを正義と言い、己の弛まぬ志にこそ忠誠を尽くすのだ。

故に私が期待しているのは諸君らひとりひとりだ。私に無い輝きを持つ君ら全てだ。

さあ、より多くの人々を救おうじゃないか……。

傭兵たち

1998年9月1日

六ヶ月の特殊訓練を終えた。体の方もようやく勘を取り戻してきたようだ。

私は有能な兵士だったが、謂れのない容疑で銃殺が決まった。拷問され自白を強要されたのだ。

銃殺を待つ朝。それは唐突に訪れた。奇跡だった。企業が私を拾い、生きるチャンスを与えてくれたのだ。

1998年9月15日

私はバカンスを切り上げて本部に戻った。私の所属部隊であるU・B・C・S.に出動要請があったようだ。

アンブレラは企業テロや要人誘拐に対抗するため独自部隊を所有しているが裏の商品が起こす問題を専門に処理する掃除婦も飼っている。

私の所属はその後者の部隊だ。

1998年9月23日

今日、アンブレラの裏の商品を製造している工場のひとつが人の手で吹き飛んだらしい。

私のような末端には事態の重要性はあまり分からないが、上の人間の慌てようからかなりマズいようだ。

その上、ラクーンシティでも問題が起きているようで、作戦がやや前倒され、2日後には私の隊を含めたU・B・C・S.の派遣が決まっている。

輸送へりで市中心部へ一個中隊が投入されるらしく、過剰なのは

ないかと思えないが、仕事は仕事だ。

1998年9月26日

日付が変わり、ようやく落ち着けた。

しかし、地獄にいないことには変わり無い。狂っている。この街に自然の摂理などは存在しない。死してなお飢える者どもが生ける者の生肉を狙っている。

私は銃殺を選ぶべきだったかも知れない。少なくともこの警察署の外に比べれば収容所は天国だった。いや、署内もまた地獄なのだろう。

アンブレラの創設者を名乗るあの悪魔の領域は、地獄の中で嘘のように平穏で酷く現実感がない。今も外で蠢きながらゾンビを蹴散らして喰らい歩いている人ではない何かの群れがあんなにも恐ろしい。あんなものを生み出したアンブレラは正気なのだろうか？ 私はいつまで悪夢を見るのだろうか？



U. B. C. S. |。 Umbrella Bio Hazard Countermeasure Service
それはアンブレラ バイオハザード 対策部 隊の略

であり、部隊編制の大部分が傭兵や罪人等で占められた非正規部隊である。

役割としてはアンブレラの自社開発したウイルスやクリーチャーなどによる災害・事件・事故を処理し、更にアンブレラに対する企業テロなどに対処させる名目で組織され、緊急事態が発生した場合には汚染地域へ真っ先に派遣される部隊だ。

開発中のB・O・Wがフィールドテストの最中に暴走して研究員に多数の死傷者が出たり、施設や実験機材が破壊される事件が多々発生したため、制御不能に陥ったB・O・Wを鎮圧するべく同部隊の設立が計画されたというのが経緯であり、U・S・Sとはライバル関係に当たる。

実際に生存者や目撃者などの身柄確保、証拠類の隠滅なども任務としており、B・O・Wの暴走による被害もU・B・C・Sの活躍で減少し、アンブレラの秘匿をする役割をしていた。

そのため、ラクーンシティにU・B・C・Sが投入されるのもまた自然と言え、その数も一個中隊規模であり、輸送へりによつて市中心部へ一個小隊約30名編制の計四個小隊の120名が投入されたのだ。

しかし、ラクーンシティへ投入された部隊は、任務の内容から危険性が非常に高い事が予め予想されていたため、大量の活性死者やB・O・Wなどの戦闘データを得るための部隊であり、隊員の大半は服役中の戦争犯罪者や重罪を犯して無期懲役か死刑判決を受けた元軍人、亡命軍人、元ゲリラ兵などといった者たちで構成されており、贖罪を不問を条件に傭兵として組織している。

つまりは120名にも及ぶ使い捨てのモルモット部隊であった。

そのため、名目上は市民救出を任務として1998年9月25日の薄暮にラクーンシティの中心部へとU・B・C・Sが投入されたが、当然人間が最も多い場所は最も活性死者とリッカーが蔓延る危険地帯であり、結果は火を見るよりも明らかだろう。

そして、そんなU・B・C・Sらは現在――。

「理解出来たかね？　つまりアンブレラにとって君らは使い捨ての消耗品。ただの地獄への試金石。初めから救助も生還も期待されていないどころか、生き残れば確実に抹消されるだろう」

多数の生き残りがラクーン市警^Rや戦える民間人ら^Pによって救助され、その全員が警察署のエントランスに集められて、事実上ラクーン市警を纏めているふてぶてしい態度の女にアンブレラと今回投入されたU・B・C・S.の実態について説明されていた。

元々は純粋なアンブレラではなく、贖罪不問の傭兵として今回の作戦に参加していたU・B・C・S.らの反応は事実を受け止められずに呆然とするか、酷く怒りながら狼狽するかのふたつに別れている。

「そもそもなんだこの出来損ないの遠足の枝折^{しおり}は？　たったこれだけの説明でアンブレラは120人もモルモットにしたのか……資源の無駄と言う他ないな」

彼女——アンブレラ創設者のひとり^をを名乗るジャクリン・マークスは、U・B・C・S.らから受け取っていた作戦指示書を失笑と共に床へ投げ捨てる。

UBCSエコーチーム

エコーチームは市街地を掃討し、生存している民間人を時計塔内部に避難させることが第一目的である。

民間人はアンブレラ系列の従業員を優先して救助すること（褒賞あり）。

活性死者（汚染死亡後のゾンビと呼ばれる存在）は耐久力が高く、機能停止に追い込むのは難しい。充分警戒せよ。

作戦エリアからの撤退

1：撤退は作戦終了、もしくはは任務の
続行不可能により行う。

2：郊外に待機中の大型ヘリコプターを

時計塔正面の庭に誘導する。

3：時計塔の鐘の音を合図とし本作戦の

終了、もしくは失敗による中止を

市街で作戦中の全部隊に伝達する。

「なんだこれ……。ゾンビの事も他のB. O. W. だのイレギュラー
ミュータントの事もまるで書いて……」

救助したU. B. C. S. とジャクリーンが話し合うとの事で、彼
女を心配して護衛兼R. P. D. 代表の一人としてここにいるマー
ビン・ブラナーに作戦指示書が目に入り、彼女が警官へ向けて講義し
た内容とのあまりもの乖離に思わず眩かれた独り言が酷く木霊する。

ちなみに護衛を買って出た者は、S. T. A. R. S. らや戦える
民間人を含めてかなりの数いたが、それらを彼女は交渉の邪魔になる
として拒否し、代表として近くに居たマービンを引き連れ、後はアル
バート・ウエスカーとT-001の3人と1体のみがジャクリーン側
に居た。

「生き残った小隊長は4名中で君だけか。運が良かったな。金に眩ん
だか、命と誇りを天秤に掛けて誇りを捨てた者にしては……だが」

「ああ……U. B. C. S. 小隊長のミハイル・ヴィクトールだ」

U. B. C. S. で他の小隊長が全て殉職したため、生き残りを纏
める事になり、今こうして交渉の席にも着いているロシア系の男性の
ミハイル・ヴィクトールが答える。

彼は目の前の白衣姿の女の異様な態度に多少眉が動いているが、特
に目立った外傷はなく、ゾンビの群れやイレギュラーミュータントを
切り抜けて来た手練だと言う事が分かるだろう。

ちなみに投入されたU. B. C. S. ら120名の中で、救出され
てエントランスにいる者は68名。かなり大規模にラクーン市警と
ジャクリーンによる救出活動が行われたため、ここに居ない者の生存
は絶望的と言える。

ヘリコプターからの降下から2時間程度も立たず、U. B. C.

S. はほぼ半壊していた。

しかし、そんな彼らとは言え、扱い方に秀でた者達がアサルトライフルやサブマシンガンを始めとした火器や装備で固めているため、仮に交渉が決裂すれば強大な敵となるのは間違いないが、彼女の態度は尊大かつ嫌悪感が見え隠れし、彼らをまるで敵になるとは考えていないようにさえ思えるだろう。

「U. B. C. S. はこの私の指揮下に入り、ラクーン市警と行動を共にして暫くは民間人の救出に当たって貰う。元々の作戦通りなのだから問題は無かろう？ 尤も……アンブレラへと義理立てをしたい等とこの期に及んで言うのなら話は別——」

「ふ、ふざけんな！ こんなんだったらムシヨの方がマシだ！ こんなん聞いてな——」

『「ゴノ場デ殺スゾ……人ノ話ヲ遮ルナ」
「ひッ……!?!」

投入からラクーンシティ警察署に避難してくるまでで恐慌状態に近いのか、刑務所に入るような人間性故か、ジャクリーンの決定に一人のU. B. C. S. 隊員が声を上げたが、彼女の喉から出た男とも女とも付かず異様で人間味のない声色で半ば脅迫されて沈黙する。

罪人崩ればかりの今のU. B. C. S. らが警察署内で行儀がいののは、小隊長のミハイルが生き残っている事と、交渉相手のジャクリーンが端々で明らかに人間ではない様子がチラついている恐怖もあるのだろう。

まあ、一番の要因は彼女の背後に控えている身の丈2.5m以上の大男であるT-001が、”ネメシス用ガトリングガン”を片腕に担いでいる事の強い抑止力であろう。誰であろうと少なくとも言葉が通じる程度の正気な相手が、このように露骨な武力を誇示していれば、慎重かつ正気にもなるというものだ。

「悪いな……少し時間をくれ。部下たちと話を付けなければならん」
「もちろん構わないよ。私とてわざわざ骨を折って助けた者を相手に署内を戦場にしたい訳では無い」

ミハイルは一旦交渉の席を立ち、U. B. C. S. らの元へと向か

う。

その背を見送ったジャクリーンは少し天井を見詰めた後、U・B・C・S. らの方へ声を掛けた。

「ニコライ・ジノビエフはいるか？ U・B・C・S. D小隊B分隊長のニコライ・ジノビエフだ」

それはU・B・C・S. 隊員の名指しの指名であった。

まさか、ラクーン市警に陣取っている明らかに堅気ではなく、人間かも怪しい者に関係がある者が自らの部隊にいるとは思わず、U・B・C・S. らの視線が一箇所に集中し、それによって仕方ないと言った様子でロシア系の男がジャクリーンの前まで来る。

「私だが……？」

「君がそうか。君、アンブレラ幹部のセルゲイ・ウラジミールからグレッジ・ミューラーというラクーン大学教授の救出任務を受けているね？」

「なんのことだ？」

「おや？ U・B・C・S. や生存者を殺して回る監視員としてではなく、個人的な依頼だったのかね？ それなら悪いことを聞いたな」
「……………」

その言葉にニコライは表情を消して押し黙る。

監視員とはTーウィルスやB・O・W. などによる事件の記録を取り、更にアンブレラに関しての証拠隠滅として裏で行動する者たちである。投入されたU・B・C・S. らの中や、陸路で十数名が少なくともラクーンシティに侵入しており、ジャクリーンは前提としてニコライが監視員であると断定している様子であろう。

ニコライは明らかに自身の素性が筒抜けだと言う事に、内心これまでアンブレラで活動して来た中で最も驚愕し、尚且つ冷や汗とも脂汗とも付かぬものを全身から吹き出していた。

(マズい……)

何せ、ニコライはU・B・C・S. 延いては監視員として極めて優秀であり、それ故にアンブレラのあらゆる情報を知らされてもいるため、今の状態が何れ程危険な状態なのか理解しているからだ。

まず、この得体の知れない怪物はアンブレラ創設者のひとりを名乗っているが、再稼働予定だったアークレイ山中のアンブレラ幹部養成所にて、ジエームス・マークス博士に擬態出来る未知のB・O・W。が、一個小隊規模のアンブレラ保安警察を銃器によって3分足らずで壊滅させる一部始終を映像を資料として見た事がある。

その際、U・S・S.の装備をまるで受け付けておらず、最低でも分隊支援火器レベルの代物でもなければ相手にすらならないと考え、仮に目の前に居るのがソレならば残るU・B・C・S.全員で掛かっても倒し切れるか怪しいだろう。その上、明らかに人並み外れた知性があり、個としても出し抜けるのか既に怪しい。未知のB・O・W.だとまだ断定は出来ないが、樂觀出来るような状態でもない。

更に怪物の背後で控えるT-001。明らかに人間用ではないガトリングガンで武装したT-103以降のモデルのタイラントであり、武器を扱える辺りからニコライでも知らされていないレベルの極秘か開発段階のタイラントである事が明白である。

少なくとも最新鋭のタイラントを真っ向から相手に出来るような戦力は、それこそアメリカ軍レベルのものだ。当然今のU・B・C・S.には余りに荷が重い。

「やあ、元気そうだな。ニコライ」
「……………」

そして、名前や能力を知る程度で大した関係も無かったが、さもかつて交友でもあったかのようにニコライへ声を掛けて来た金髪のオールバックにサングラスを掛けた男——アルバート・ウェスカーがトドメである。

明らかに嫌がらせのために柄にもなく笑みを浮かべている彼は、アンブレラの離叛者であり、アンブレラ幹部並みの能力はあったのだが、何かとアンブレラ内で疎まれたり恨まれる事が多く、昇進街道から外れていた人間だった。

アークレイ山中での事件を期にアンブレラのライバル組織のH・C・F.に流れた筈のウェスカーだが、何故かこんなところに居るこ

とがそもそも謎であり、またその戦闘能力はニコライをして常人離れしていると言わざるを得ないレベルである。

少なくともニコライにとってマトモに相手をしたような連中ではない事は確かであった。

また、監視員についても簡潔かつU・B・C・S・らに聞こえるように語られているせいで、彼には最早後が無い。

「良かったな。君が救出する予定のグレッグ・ミューラーなら——ここにいるよ?」

「な……」

次の瞬間、ニコライの目の前でジャクリーンの姿が蠢くと、グレッグ・ミューラーという男そのものになり、姿だけでなく声までそれに変化している。

そのまま、ジャクリーンはニコライの間近まで近づくと更に言葉を続けた。

「グレッグ・ミューラー本人なら8月の初頭には既に死んでいる。中は兎も角、身体はとも美味であったぞ。まあ、残念ながら君の救出任務は最初から頓挫していたわけだが」

そして、その場で再びジャクリーン・マーカスという女の姿へと戻る。

「そもそも元のグレッグ・ミューラーがタナトスの取り引きに応じると思うかね? プライドと我欲ばかりが先行した実にアンブレラらしい男だったからね。とは言え、ラクーンシティに潜伏中に折角の隠れ蓑を抹殺対象にでも指定されたら堪らん。こちらとしても妥協した苦肉の判断だ。それが今となつては色々都合がいいのは皮肉というか、情けは人の為ならずと言うべきか……」

聞いても居ないことをジャクリーンは話しつつ、懐から何かを取り出して見せる。それは何の変哲もない小切手とペンであった。

「兎も角、君の人となりはセルゲイから聞いている。仕事熱心で任務達成率も高く、報酬次第で……少々の無理もしてくれりとかなかにか」

そして、小切手に数字を記入し、それをニコライへと渡すと彼から

離れて元いたところで再び向き合う。

渡された小切手を彼は眺め——そこに記されていた異様な金額に生唾を呑み込んだ。

「依頼はふたつ。ひとつは生存者をなるべく殺さない事。もうひとつは……方法は問わん。君以外の監視員を可能な限り皆殺しにしてくれ」

「なんだと……?」

それはニコライは元々アンブレラに対し、自分の持つ情報の価値を高めて報酬を吊り上げるために他の監視員を殺して回ろうしていたため、奇跡的に渡りに船であった。

「ラクーンシティ内の監視員を殺して回れ。あれらは居るだけで任務として生存者を殺し回るだろうからな。百害あつて一利なしだ。そもそも可能なら私が殺つていたが、流石にそこまでは手が回らないのでね。訳は後で話すとして、今は口を挟んでくれるなよブラナー君?」

「警官としては見過ごせないが……。博士がそう言うなら……。そうなんだろうな」

マービンにそう言って話を付けると、ジャクリーンはまたニコライに向き合う。

「君にも分かるだろう? この有様ではアンブレラはそう遠くない内にどのみち潰れる。それなら君としてはアンブレラや私から搾取出来るだけ搾取して新たな仕事場を見つけるのが賢い選択だろう。まあ、退職金と思えば悪くない話だと思うがね?」

「ふむ……」

ニコライは考え込む。

元々は小規模なウィルス漏れや暴走したB・O・Wの処理だったが、アークレイからラクーンシティと凄まじい速度で被害が拡大しているのは火を見るよりも明らかであり、アンブレラに先が無いことは彼も理解し、そのためアンブレラを売るところまで考えているところであった。

しかし、生存者の殺害を縛られれば、結果的にアンブレラに渡す情

報が減り、報酬金が減る事に繋がるため、それに彼は難色を示す。

とは言え、依頼内容と不釣り合いなほど小切手に提示されている金額が高く、それを捨て置くのは勿体無いと彼が感じるレベルのため、素直に従うにしても折衷案を提示したいところであり――。

「ああ、そうそう――それは前金だ。達成すればその3倍出そう」

「――!? 止め、ニコライ!? やめ――」

次の瞬間、ニコライはホルスターからハンドガンを抜き放ち、銃声と同時に集まっているU. B. C. S. らから少し離れていた隊員の頭部に風穴が空いた。

撃たれた者は声を上げていた様子だったがまるで関係なく撃ち抜かれ、事切れた肉体はそのままエントランスの石造りの床に打ち付けられるように倒れ込む。

「金は命より重い。君を見てるとよく分かるね」

「ククク……思わぬ臨時収入だ。まずは一人だな」

そんな会話をしたジャクリーンは再びマービンの方に顔を向ける。

「確かに歴史を紐解いても間違はなく金は命より重いが、それは命が軽いという事とイコールではない。命は決して軽くはないのだ。そこを履き違えてはいけないね。この場では奇しくも金より命が重い。だから金で生存者の安全がより保証されるならそれに越したことはないだろう。むしろ、彼を抱き込むだけで邪魔な監視員の処理までしてくれるのだから儲けものだ」

「本当に口が上手いな博士は……」

警官としては間違っているが、生存者を助ける手段としてはこれ以上なく正しい手段であり、甘言と自らが汚れ仕事と憎まれ役を引き受けている上、ついでに横目で見えていた小切手に書かれていた莫大な金額故にマービンはそれ以上の口を開けなかった。

「マーカス博士、期待している。俺は常に契約を守る」

「忌々しくも頼もしい限りだ。その調子で出来れば君以外一人残らず頼むよ。さてさて……少しばかり強引な交渉をしようか」

ジャクリーンが話していた監視員だったとは言え、隊員が殺された事で明らかにU・B・C・S.らの反応が険悪なモノに変わり、こちらに銃口を向けている者も居る始末だ。

「下手に出ていればこれか……。せめてジノビエフ君ぐらい仕事に誠実ならばそれだけで良いものを……」

ジャクリーンはそれを一瞥して哀れみと侮蔑に近い視線を送ると、深い溜め息を吐き、T-001から数十kgはあるであろうネメシス用ガトリングガンを受け取るとU・B・C・S.らの方へゆっくりと歩いて行く。

そして、一步一步踏み締めるごとに彼女の擬態が解けて行き、全身の皮膚が触手とヒルへと置き換わって行き、それらが意思を持つように蠢いた。

「うわあああああ!?!」

「馬鹿がツ!! 止めろー!」

明らかに化け物へと変態していくジャクリーンへ向け、恐慌状態になったU・B・C・S. 隊員数名がアサルトライフルを始めとした火器を放つが、それはまるで意に介さず全てをその身体で受け止め、変わらぬ歩調で歩み続ける。

ミハイルとミハイルの隊だった者たちが攻撃を加えた者たちを抑え込んだが、そのうちに通気口やエントランスの扉という扉、下水道への出入り口などあらゆる穴という穴からヒルが雪崩込み、それらがそれぞれ触手の塊となり人型を取る。

また、幾らかのヒルは怪物の方へと伸び、その身を捧げて同化し、瞬間に怪物の身体が修復され、まるで無傷な姿を維持し続けた。

「忠誠」は「服従」ヲ生み」

女性だったフォルムが縦に細く長く伸び、手足と胴が不自然に伸長され、樹の幹のように太くなると共に身の丈が3m程まで拡大する。

また、人肌の色を保っていた配色が青黒くとも黒緑とも見えるように変わって行き、それと共に全身の質感がゴムのように湿り気のある

モノへと変わった。

「服従ハ規律を生ム」

そして、手足が触手で指のような機能を持ち、人間のようだった顔が沈み込むように消えると頭部が咲き、背中を中心に生え出た数多の触手が蠢く。

ゾンビなど比ではなく、様々なB・O・Wを知るニコライから見ても震えを覚えるほど異質な真性の怪物が顕現し、その片腕はネメシス用ガトリングガンが一体化しており、生物兵器という名を体現した存在と化す。

「規律はカトナリ、ソのカガ全ての源トナル」

怪物よりも遥かに小さく華奢だが、更に生理的な嫌悪感を覚える醜悪さを持つ大量の人型ヒルは、器用に壁と天井を伝って広がって行く。

途中で事切れている監視員の死骸が攫われ、ヒルの波みに取り込まれると貪り喰われて消え、仕上げと言わんばかりに壁と天井を数百体の人型ヒルが埋め尽くし、瞬く間にエントランスを黒々とした様相へと変えた。

「美しい……」

白いエントランスホールが黒く蠢くものに塗り潰され、蠢動する体内のように変わった様を眺めながらポツリとウエスカーは芸術品を目にしたかのような言葉を呟く。

それとは対象的に冒濺的なまでのB・O・Wとしての正しい在り方と悪夢のような景色と蠢く異音に加え、戦ったところで虐殺にしかならないであろう戦力差を見せ付けられ、U・B・C・Sらは完全に戦意を失う。

『生憎、見テノ通り』手足ハ足りテイルノダガ……少々人間ヲ助け

ルニハ不向キナ風体ナモノデネ。サア、生キタケレバコノ私ニ”服従
”シタマエ……』

それは最も動物的な規律と原始的な恐怖によるただ絶望的な”力
”そのものであつた。

LITTLE ESCAPE

ジル・バレンタインにとって、アークレイ山地猟奇殺人事件あるいは洋館事件と呼ばれるモノの記憶は悪夢以外の何物でもなかった。

人だったものが人を喰らい、有り得ない怪物達が闊歩し、彼女を殺すためだけに襲い掛かって来るこの世の終わりを煮詰めたかのようなそれが、悍ましく醜悪で現実離れしていた事は間違いない。

PTSDとまでは行かないまでも自身がゾンビになるような夢や、あの洋館で何らかの行き違いによって死ぬもしもの可能性を見るような悪夢を度々彼女は経験し、この2ヶ月間苛まれていた。

洋館事件から命からがら生還してから待っていたのは、警察署長のブライアン・アイアンズを始めとしたラクーンシティの上層部とアンブレラによる徹底的な揉み消しと監視であり、それに異議を唱えるような場さえなく、仮に何らかを訴えれば精神病院の閉鎖病棟にでも送り込まれていたであろう。あるいは文字通りに消されていたかだ。

ラクーンシティという街はそれほどまでにアンブレラに染まり、また腐り切っており、概ね展開はレベツカが対峙していたという”ジャクリーン・マーカス”が言っていた通りになったと言ってもいい。

アンブレラ幹部養成所にて彼女とエンリコ隊長が会った時に彼女は、”証拠はラクーンシティ郊外に隠した方が後々のためだぞ?”などと言っていたらしく、ラクーンシティに戻る前に一応そうして置いた事が功を奏した事も皮肉と言う他ないだろう。洋館事件で受けた仕打ちの4割程は彼女によって間接的に受けたものだと言うのに。

「ダメね……」

ジルはマンションの一室である自宅の洗面台の前で深い溜め息と共にそう零す。

彼女はアイアンズ署長によって停職処分を受けていたが、ラクーンシティ郊外で猟奇事件が起きた時点で既に行動しており、ラクーンシティスタジアムでの暴動騒ぎで洋館事件の再来を確信すると共にそ

れから丸2日間は個人で救助活動に当たっており、流石に限界が来たので一旦寝るために帰って来ていたのだ。

つまり彼女は少なくとも”2日半以上”警察署に近付いておらず、今どうなってるのかは分からない状態である。

とは言え、避難所になつて居るのには分らない状態である。警察署は元々極めて強固であり、洋館事件を共に生き抜いたS. T. A. R. S. や同僚のラクーン市警の面々もいるため、内部から崩壊でもしない限りは持ち堪えているだろうと考えていた。

(署の様子も気になるわね……)

とは言え、警察署がどうなっているのかも気になるところ。信頼はしているとは言え、真性のクズであるアイアンズ署長などは何を仕出かしているかわかったものではない。翌々考えれば今更停職どころの騒ぎではないだろう。

そのため、ジルは身支度を整えるとハンドガンと幾ばくかの弾丸を手にし、自宅の外へと出るとマンションの廊下を歩く。

その間にも銃声や爆音、悲鳴や怒号、そしてサイレンの音が街の何処かで上がり、自身らを含めた生存者が抵抗しているであろうその音に表情を険しくする。

そして、彼女がマンションの外に出て人工的な明かりに照らされる夜の街並みを目に入れたその直後だった。

「スタアアアズ……！」

底冷えするような低い音とも声とも取れるものが響き、反射的にジルがそちらの方に目を向ける。

彼女の十数m先の場所に居たそれは、洋館事件の時に対峙したT1002タイラントを更に醜悪にし、全身をトレンチコートに近い黒い拘束衣で覆った大男のような怪物であった。

その身長240cm近く、洋館のタイラントとは20cmほど低く見えるが、人工的な衣服を身に纏い、肌が裂けて何かの触手が内側から露出したような外見はそれだけでおぞましい何かであろう。

「スタアアズ……」

また、それは明らかに何かの意志を持って言語を話しており、何故かジルが所属するS・T・A・R・Sの事を言っているのは明白で、そのまま歩いて彼女との距離を詰めてくる。

そして、その手にはマトモな人間が扱えないサイズの”ガトリングガン”が握られており、当然ながらジルはそれから逃げ出し、暗い路地裏に入ると道なりに駆けて行く。

「なんなのあれ……！」

明らかにただのタイラントではなく、アンブレラの新型であることは明白だろう。その上、それが自身を含めたS・T・A・R・Sを狙っている可能性が高い事も分かった。

一刻も早くこの事をS・T・A・R・Sの面々に伝えるべく彼女は路地を直走る。

「……ア……アア……」

「……………」

途中でレベツカが言っていた人型ヒルが道なりにいたゾンビを捕食している姿が目に入り、その異質さと生理的嫌悪感に顔をしかめた。

救助活動を始めてからというもの日没を過ぎると珍しくなくなっ
てしまった光景である。

人型ヒルたちの本体——女王ヒルであるジャクリン・マークスは、夜間のみラクーンシティのメインストリートのほぼ全域にそれらを放っており、ゾンビやイレギュラーミュータントを駆逐する事で間接的に生存者の助けとなっていた。

その上、人型ヒルは生存者へ攻撃を一切加えず、それどころか生存者の近くにいる感染生物を優先して狙っている節まであるために認めたくはないが、彼女個人の救助活動よりも余程に生存者のためになっ
ている事は明白である。

しかし、ジャクリンはレベツカに対してラクーンシティでバイオテロを仕掛ける事を示唆しており、宣言した期限より凄まじく早く行
われているとも考えられ、マッチポンプをしているだけとも言えてし

まうのだ。

そこまで彼女が考えたところで、裏路地の開けた場所に到達し——
数体のゾンビ犬が群れている姿を確認し、その一体と目があった。

「あ……」

彼女の脳裏にはS・T・A・R・Sのアルファチームで武器の整備を担当していたジョセフ・フロストが、ゾンビ犬に喰い殺されるのをただ眺める事しか出来なかった景色が浮かぶ。

それは僅かながら致命的な隙となり、相手側に先の行動を許した。

「——」

一体のゾンビ犬が吠えようと他の個体もジルに気付き、即座に標的を定めたそれらは彼女へと向かって駆け出す。

彼女はハンドガンを構えて発砲するが、最初に飛び掛かって来た個体を撃ち落したただけで無情にもそれ以外の個体には致命傷になる程ではない。

「——」

「っ……!?!」

そうしている間に他の個体が再び飛び掛かり、彼女が反射的に腕で顔を覆い——その直後、ジルへと飛び掛かって来ていたゾンビ犬とその群れに何かが飛来し、諸共を巻き込んだ爆発を起こす。

「うぐう……!?!」

明らかに不自然な爆発による爆風にジルは吹き飛ばされ、広場の無機質で汚れた壁に打ち付けられた。

痛みに悶えながら身体を起こしつつ爆発が起きた場所を見ると、そこには僅かに原型を留めるか、燃えた肉片と化したゾンビ犬があり、黒煙が立ち昇るばかりである。

「いったい何が——」

「スタアアアズ……!」

ジルが困惑していると、あのおぞましい声が再び彼女の耳に入り、弾けるように立ち昇る黒煙の先を見据えると、黒煙の中からあの異質

なタイラントが歩いて来ていた。どうやら彼女が逃げて行こうとした先に既に居たらしい。

その長く重厚な腕には、それと同等かそれ以上に巨大な”ロケットランチャー”が今度は装備されており、あの爆発はこのタイラントによつて引き起こされた事が分かるだろう。

(私を狙って……!?)

それがゾンビ犬ではなく、ジルを狙った攻撃であり、タイラントが発したと考ええると、洋館事件の全てを知るS・T・A・R・S.の面々を混乱に乗じて抹殺しに来た事は明白である。

しかし、洋館事件で倒したタイラントは明らかに目の前のそれよりも旧式であり、更に装備のあるS・T・A・R・S.が6人掛かりでどうにか撃破出来たため、一人な上にハンドガンしかない彼女ではあまりに絶望的だろう。

「スタアアズ……」

(あ……)

そう考えているうちにタイラントはロケットランチャーをジルへと向ける。

爆風で吹き飛ばされた時に広場の隅に追いやられており、彼女には逃げ場がなく、そのような状態でそれを放たればどうなるかなど火を見るよりも明らかであった。

そして、引き金に指が掛かり――。

「スタアアズ……!」

「!?!」

あの声が響くと共に、真横からのガトリングによる掃射が目の前をタイラントを襲い、瞬く間にそれを怯ませると、ジルが逃げて来た方の路地からも同じタイラントが現れる。

そのタイラントはロケットランチャーを持つタイラントにガトリングを浴びせ続けながら歩き続け、彼女とその間にまで移動して止まった。

そして、それによつてガトリングガンを持つタイラントの方の背を初めて目にし、そこには黒衣でも分かりやすいようにか、白い塗料で大きな文字が不格好に書かれており、それを理解した彼女は目を見開く。

「R. P. D. ですつて……!?!」

R. P. D. — Raccoon Police Department の略であり、すなわちラクーン市警の事である。

要するに何故か、目の前の新型タイラントはラクーン市警を文字通り背負つており、そのためかジルを守るかのようにタイラントと戦つているらしい。

「ガアアアアア……!!」

しかし、ガトリングの掃射を受け続けながらもタイラントは体勢を戻して再びロケットランチャーを構え——今度はその頭部を幾度もライフルで撃ち抜かれ、頭を押さえながら今度こそ膝を突いた。

「相変わらず冴えてるなマーフィー!」

「ハッ、冗談だろカルロス? あんなの目を瞑つても当てれるぜ!」
するとジルとR. P. D. のタイラントが来た路地からU. B. C. S. という文字と、アンブレラ社のロゴマークが入ったベストを着た兵士や傭兵という出で立ちの男性二人が現れる。

片方はアサルトライフルを持ってやや伸びた髪と無精髭が特徴的な男で、片方はキャップを被つてスナイパーライフルを担いだ男であつた。

「今だミートヘッド!」

無精髭の男がR. P. D. タイラント——ミートヘッドと呼んでいるらしいそれに声を掛けると、それはガトリングガンを一旦捨てる。

そして、膝を付いた新型タイラント目掛けて助走を付けながら腕を振りかぶつた。

「スラッアアグ……!」

「アアアア——!?!」

それまでとは違う言葉を吐きながらミートヘッドの剛拳が新型タ

イラントの顔面を捉え、生物同士から出たとは思えない程の轟音と空気の振動を伝える。

更に怯んだ隙にミートヘッドは新型タイラントを抱え上げると、近くのコンクリートの壁に向かって放り投げ、叩き込まれたそれは壁を破碎しながら大の字に倒れた。

「ジル!? よかった……!」

遅れてもう一人男性が現れ、彼はジルに駆け寄ると彼女の安否の確認の後、安堵の息を漏らす。

それはS・T・A・R・S 隊員で、洋館事件ではヘリのパイロットをしていたブラッド・ヴィツカーズであった。

「ブラッド……!?!」

「ジル! よかった……皆ずつと探してたんだ! 大丈夫か!」

”こっちのセリフよ”と声を大にして言いたいジルであったが、怒涛の展開に加えて、アンブレラ社のU・B・C・S やR・P・D. を背負うタイラントが味方しているというあまりにも奇々怪々な状況に目眩すら覚える。

そんな最中、無精髭の男——カルロス・オリヴェイラは無線機を片手にしながら二人に駆け寄ると、ハンドサインでこの場からの移動を促した。

「感動の再会のところ悪いが、話は後だ。博士によるとネメシスは中途半端に致命傷を与えると却って危険らしい。今は逃げるぞ!」

見ればコンクリートの壁をぶち抜いて伸びている新型タイラントだが、少しずつ身体の各部位が再び動き始めており、立ち上がるのも時間の問題だろう。

カルロスの指摘は的を得ていたが、それはそれこれこれである。

「なにが……なにが起きてるのよ……?」

「エスケエエエプ……!」

ジルは促されるままその場から全員で撤退するが、そんな彼女の隣で何やら言っている新型タイラントを横目で眺め、一旦考えることを

放棄しつつそんな言葉を吐くばかりであった。